



CISMOR 国際ワークショップ2006

「ヨーロッパ」という自己理解と
一神教

2006年11月4日・5日

同志社大学
21世紀 COE プログラム
一神教学際研究センター (CISMOR)



同志社大学21世紀COEプログラム

一神教の学際的研究

文明の共存と安全保障の視点から

2006年度 CISMOR国際ワークショップ

「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」

2006年11月4日・5日

目 次	
はじめに	3
2006年度活動報告	4
プログラム	9
招聘者紹介	11
11月4日(土)第1セッション「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」記録	13
ターリク・ラマダーン「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」	14
リズベット・クリストファーセン「『ヨーロッパ』という自己理解へのキリスト教の貢献」	18
アブラハム・ソーテンドルプ「自己理解への葛藤」	22
ハミット・ボザルスラン「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」	25
ディスカッション	28
11月4日(土)第2セッション「ムスリムにとってのヨーロッパ」記録	39
ターリク・ラマダーン「ムスリムにとってのヨーロッパ」	40
コメント・ディスカッション	51
11月5日(土)第3セッション「ヨーロッパにとっての反ユダヤ主義」記録	79
アブラハム・ソーテンドルプ「ヨーロッパにおける反ユダヤ主義—治癒可能な病か?」	80
コメント・ディスカッション	92
11月5日(土)第4セッション「ヨーロッパはなおキリスト教世界なのか?」記録	111
リズベット・クリストファーセン「複数の公共宗教—複雑に絡み合う聖・俗政治とヨーロッパの未来」	112
ハミット・ボザルスラン「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」	123
コメント・ディスカッション	128
2006年度事業推進担当者一覧	151
2006年度共同研究員一覧	152

はじめに

2006年11月4日・5日にかけて開催された同志社大学一神教学際研究センター主催の国際ワークショップ「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」の報告書をお届けします。

イギリスとスペインにおける「テロ」、イギリスのムスリム住民による航空機爆破テロ未遂事件、フランスにおけるムスリム住民による暴動、「ムハンマドの風刺画」事件、そして、ローマ教皇ベネディクト16世によるイスラーム発言が明らかにしているように、EU統合を進めている「ヨーロッパ」にとって、「自らをどのように理解し、規定するのか」という問題は緊急の課題であるということが明らかになってきました。

EUの構成員である個人あるいは国家が、普遍主義的にEUという地域共同体により比重を置いて自己規定を行うのか、あるいは反対に個別主義的に、国民国家により比重を置いて自己規定を行うのかという問題は、EU統合の最初からの重要な問題でした。

しかし近年、個別主義と普遍主義の問題と並んで、「国家を越える地域共同体としてのEUとは何なのか」という「EU理念」それ自体が根本的に問題とされています。このEU理念をめぐる問題は、トルコのEU加盟やEU憲法に「キリスト教の伝統」という文言を含めるかどうかの議論に象徴されるように、「アブラハム宗教」と呼ばれる3つの一神教(キリスト教・イスラーム・ユダヤ教)と深く関わっています。同時に、この問題は「ムハンマドの風刺画」事件に象徴されるように、宗教と反宗教(世俗主義)の共存と対立の問題にも関係しています。

「『ヨーロッパ』という自己理解」がEU諸国にとっての緊急の課題となった原因は、ヨーロッパ諸国におけるムスリム移民とムスリム系市民の増加であることは明らかです。

基本的人権の尊重、民主主義、多文化主義というEUにとっての基本的理念は、「ヨーロッパ」の歴史的伝統を十分に反映したものであるのか。EU理念はイスラームの宗教伝統と共存できるのか。西欧のグローバリズムとイスラームという宗教伝統はどのように関係し、どのように共存できるのかは、EUだけの問題ではなく、今日の世界が直面している最重要の課題でもあります。

今日、イスラーム世界にとってパレスチナ・イスラエル問題は、アメリカに代表されるグローバリズムとイスラーム信仰の対立を象徴する問題です。EUにおけるムスリム移民とムスリム系市民にとっても同様です。とくに第二次世界大戦後のヨーロッパは「ホロコースト」という歴史的トラウマを抱えており、つねにこれを意識しつつ、自己規定を行ってきました。ホロコーストの背景には、ヨーロッパにおける伝統的な「反ユダヤ主義」が存在しています。

一神教学際研究センターは、2003年の設立以来、3つの一神教とその世界について、文明の共存と安全保障の観点から総合的・学際的研究を行なってきました。2006年度の国際ワークショップでは、このような歴史的・政治的・社会的・宗教的・思想的背景をもった「『ヨーロッパ』という自己理解」の問題を、とくに一神教(アブラハム宗教)に焦点を絞って議論を展開しました。

刺激的な議論に満ちたこの国際ワークショップ報告書をお楽しみいただけることを願っています。

2006年度 活動報告

2006年 4月18日－ 7月11日	英語インテンシブ・コース（前期）	6月24日	公開シンポジウム「パレスチナとイスラエルの対話 ―この1年を回顧する―」 パネリスト:エヤル・ベンアリ氏（ヘブライ大学） サイード・ザイダーニー氏（アル・クドゥス大学） ワリード・サーレム氏（パノラマセンター・エルサレム・オフィス） マリオ・シュナイダー氏（ヘブライ大学）
5月6日	特定研究プロジェクト5 2006年度第1回研究会 発表者:オスマン・バカル（マレーシア国際イスラーム大学） 「Modernization and Islam in Malaysia with Special Reference to Mahathir's Islamization Policy and Badawi's Islam Hadhari」	7月8日	公開講演会 発表者:エリ・コーヘン（在日イスラエル大使） 「イスラエル ―民主主義、宗教、そしてイスラエル・日本関係について―」
5月13日	部門研究1 2006年度第1回研究会 発表者:オスマン・バカル「Interfaith Dialogue from Perspective of History of Islamic Civilization」 コメンテーター:手島勲矢（同志社大学） 川端隆史（外務省）	7月8日・ 15日	アラビア語インテンシブ・コース
5月20日	部門研究2 2006年度第1回研究会 発表者:山口 昇（防衛庁防衛研究所）「米軍のトランスフォーメーション:アメリカの軍事戦略は変わったか」 コメンテーター:村田晃嗣（同志社大学）	7月22日	部門研究2 2006年度第2回研究会 発表者:石川 卓（東洋英和女学院大学）「米国の大量破壊兵器不拡散戦略とイランの核開発問題」 コメンテーター:富田健次（同志社大学）
5月23日	特定研究プロジェクト3 2006年度第1回研究会 発表者:オスマン・バカル（マレーシア国際イスラーム大学） 「Islam and Science: An Alternative View of Study of Nature」	7月29日	部門研究1 2006年度第2回研究会 研究会テーマ「キリスト教における世俗化・近代化に対する対応」 発表者:三宅威仁（同志社大学）「プロテスタント（宗教社会学）の立場から」 マイケル・シーゲル（南山大学）「カトリックの立場から」 コメンテーター:市川 裕（東京大学） 中田 考（同志社大学）
5月30日	特定研究プロジェクト2 2006年度第1回研究会 発表者:モハンマド＝カーゼム・ムーサヴィー・ボジュヌールディー（イスラーム大百科事典センター） 「シーア派国家の成立過程:中世イスラーム世界を中心に」 コメンテーター:サーデク・サッジャーディー（イスラーム大百科事典センター）	8月1日	特定研究プロジェクト3 2006年度第2回研究会 発表者:松永俊男（桃山学院大学）「ダーウィニズムと自然神学」 コメンテーター:小原克博（同志社大学）
6月4日	公開シンポジウム テーマセッション1 「一神教としてのユダヤ教・キリスト教・イスラーム ―『原理主義』から見た相互認識―」 発表者:手島勲夫（同志社大学） 小原克博（同志社大学） 中田 孝（同志社大学） コメンテーター:芦名定道（京都大学） テーマセッション2 「『原理主義』の実相 ―中東・アメリカ・EU―」 発表者:臼杵 陽（日本女子大学） 森 孝一（同志社大学） 内藤正典（一橋大学） コメンテーター:手島勲夫（同志社大学）	9月4－ 26日	マレーシア夏期研修プログラム
6月7日	ハートフォード・セミナリー（アメリカ）と学術交流協定締結	10月3日－ 1月16日	英語インテンシブ・コース（後期）
6月11日・ 16日	第2回中東学会世界大会（アンマン・ヨルダン）に参加	10月21日	部門研究1 2006年度第3回研究会 研究会テーマ「ユダヤ世俗主義の原型を探る:宗教と政治の関係」 発表者:河井徳治（大阪産業大学名誉教授） 「スピノザ:西欧思想史に見る異性体 ―その神観と倫理・政治思想―」 飯島昇蔵（早稲田大学）「Machiavelli, Spinoza and Leo Strauss ―Philosophy and Religion―」 コメンテーター:臼杵 陽（日本女子大学） 富沢 克（同志社大学）
6月10日	公開講演会 発表者:勝村弘也（神戸松蔭女子学院大学）「古代エジプトと聖書 ―知恵文学の比較を中心として―」	10月24日	特定研究プロジェクト2 2006年度第2回研究会 発表者:嶋本隆光（大阪外国語大学）「M・モタッハリーの倫理思想」
6月17日	公開講演会 発表者:アッザーム・タミーミー氏（イスラーム政治思想研究所〈ロンドン〉）「中東紛争の根源」		

2006年度 活動報告

10月28日	部門研究2 2006年度第3回研究会 研究会テーマ「『9・11』5周年とイラク戦争の現状」 発表者:宮家邦彦(AOI外交政策研究所)「アメリカ外交と中東情勢」 河野 毅(政策研究大学院大学)「暴力とテロリズム:東南アジアからみた米国の対テロ対策」 コメンテーター:内田優香(民主党) 宮坂直史(防衛大学校) 中田 考(同志社大学)
11月4日-6日	CISMOR国際ワークショップ2006 「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」 4日 第1セッション 公開シンポジウム 「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」 司 会:森 孝一(同志社大学) 講 演:ターリク・ラマダーン(ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク(ブリュッセル)) 「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」 リズベット・クリストファーセン(コペンハーゲン大学) 「『ヨーロッパ』という自己理解へのキリスト教の貢献」 アブラハム・ソーテンドルブ(進歩的ユダヤ教世界連合)「自己理解への葛藤」 ハミット・ボザルスラン(イスラーム・イスラーム社会研究所(フランス)) 「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」 第2セッション 「ムスリムにとってのヨーロッパ」 司 会:中田 考(同志社大学) 発表者:ターリク・ラマダーン(ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク(ブリュッセル)) 「ムスリムにとってのヨーロッパ」 コメンテーター:内藤正典(一橋大学) 5日 第3セッション 「ヨーロッパにとっての反ユダヤ主義」 司 会:手島勲矢(同志社大学) 発表者:アブラハム・ソーテンドルブ(進歩的ユダヤ教世界連合) 「ヨーロッパにおける反ユダヤ主義 ―治療可能な病か?―」 コメンテーター:菅野賢治(東京都立大学) 第4セッション 「ヨーロッパはなおキリスト教世界なのか?」 司 会:小原克博(同志社大学) 発表者:リズベット・クリストファーセン(コペンハーゲン大学) 「複数の公共宗教 ―複雑に絡み合う聖・俗政治とヨーロッパの未来―」 ハミット・ボザルスラン(イスラーム・イスラーム社会研究所(フランス)) 「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」 コメンテーター:中田 考(同志社大学) 6日 エクスカーション

12月2日	部門研究2 2006年度第4回研究会 研究会テーマ「アメリカ中間選挙の分析」 発表者:会田弘継(共同通信社)「米中間選挙を読む ―福音派の動きを軸に―」 村田晃嗣(同志社大学)「中間選挙後のプッシュ外交」 コメンテーター:中山俊宏(津田塾大学) 田原 牧(東京新聞)
12月6日	『2005年度研究成果報告書』発行
12月9日	第2回CISMORユダヤ学会議「ユダヤ学の多様性:取り巻く異文脈との対話」 セッションA 「古代オリエントと聖書」 司会:越後屋 朗(同志社大学) 発表者:山田重郎(筑波大学)「列王記とメソポタミアの歴史文書」 石川 立(同志社大学)「イスラエルによる周辺思想の受容 ―詩編の場合―」 コメンテーター:アダ・タガー・コヘン(同志社大学) 池田 裕(筑波大学名誉教授、中近東文化センター学術局) セッションB 「中世におけるイスラームと聖書」 司会:市川 裕(東京大学) 発表者:中田 考(同志社大学)「イスラームにおける神の言葉としての聖典の意味」 鎌田 繁(東京大学)「イブン・ハズムとユダヤ教」 コメンテーター:中村信博(同志社女子大学) 勝村弘也(神戸松蔭女子学院大学) セッションC 「ユダヤ民族と近代法」 司会:臼杵 陽(日本女子大学) 発表者:石崎嘉彦(摂南大学)「権利と法について ―シュトラウス政治哲学の視点から―」 長尾龍一(日本大学)「戦前期独逸公法学におけるユダヤ人 ―日本公法学との関係で―」 コメンテーター:大塚和夫(東京外国語大学) 柴田寿子(東京大学)
12月11日	公開講演会 発表者:ファイサル・ハサン・トゥラード(駐日サウジアラビア王国大使) 「中東の平和と安定とサウジアラビア王国の役割」
12月16日	部門研究1 2006年度第4回研究会 研究会テーマ「一神教と多神教:インドの《一神教》理解について」 発表者:後藤敏文(東北大学)「古代インド・イランの宗教から見た一神教」 丸井 浩(東京大学)「宗教伝統の権威論証とインド哲学:護教論理と寛容精神」 コメンテーター:澤井義次(天理大学) 中田 考(同志社大学)



2006年度 活動報告

12月18日	特定研究プロジェクト2 2006年度3回研究会 発表者:吉村慎太郎(広島大学)「レザー・シャー独裁と国際関係 ―転換期イランの政治史的考察―」
12月26日	国際シンポジウム「『新中東』の光の下のスナナ派・シーア派関係の未来」
2007年 1月27日	部門研究1、2合同研究会 2006年度第5回研究会(合同研究会) 研究会テーマ「イスラームの現在」 発表者:飯塚正人(東京外国語大学) 中田 考(同志社大学)
2月 2日-3日、 8日-9日、 13日-14日	ヘブライ語インテンシブ・コース
2月24日	カイロ大学オリエント研究所(エジプト)と学術交流協定締結
2月26日	特定研究プロジェクト3 2006年度第3回研究会 発表者:八耳俊文(青山学院女子短期大学) 「近代東アジアが出会ったもう一つの西洋科学:入華プロテスタント宣教師の科学啓蒙活動」
2月28日	『JISMOR(一神教学際研究)3』発行
3月7日	部門研究3 2006年度第1回研究会 発表者:安藤礼二(多摩美術大学) 「大川周明と折口信夫 ―明治期の宗教思想家たちと『一神教』―」 コメンテーター:森 孝一(同志社大学)
3月17日	公開講演会 発表者:吹田 浩(関西大学)「古代エジプト人の神々」
3月12日・ 19日	アラビア語インテンシブ・コース
3月31日	『CISMORユダヤ学会議』報告書第2号発行 バークレー神学大学院連合(アメリカ)と学術交流協定締結

2006年度 CISMOR国際ワークショップ

『ヨーロッパ』という自己理解と一神教

日時:2006年11月4日(土)・5日(日)
会場:同志社大学今出川キャンパス 明德館21番教室、新島会館

プログラム

11月4日(土)

10:00-12:00
第1セッション(公開シンポジウム)
「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」
司 会:森 孝一(同志社大学 一神教学際研究センター長)
講演:ターリク・ラマダーン(ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク(ブリュッセル))
「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」
リズベット・クリストファーセン(コペンハーゲン大学)
「『ヨーロッパ』という自己理解へのキリスト教の貢献」
アブラハム・ソーテンドルプ(進歩的ユダヤ教世界連合)
「自己理解への葛藤」
ハミット・ボザルスラン(イスラーム・イスラーム社会研究所(フランス))
「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」

ディスカッション

14:30-17:30
第2セッション(非公開)
「ムスリムにとってのヨーロッパ」
司 会:中田 考(同志社大学 一神教学際研究センター・幹事)
発表者:ターリク・ラマダーン(ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク(ブリュッセル))
「ムスリムにとってのヨーロッパ」
コメンテーター
内藤 正典(一橋大学)
ディスカッション

18:00-20:00 レセプション

国際ワークショップ 第1セッション(公開シンポジウム)

「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」

司 会: 森 孝 一 (同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター長)

発 表

1. ターリク・ラマダーン
(ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク〈ブリュッセル〉)
「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」
2. リズベット・クリストファーセン
(コペンハーゲン大学)
「『ヨーロッパ』という自己理解へのキリスト教の貢献」
3. アブラハム・ソーテンドルプ
(進歩的ユダヤ教世界連合〈ヨーロッパ地域〉)
「自己理解への葛藤」
4. ハミット・ボザルスラン
(イスラーム・イスラーム社会研究所〈フランス〉)
「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」

ディスカッション



「ヨーロッパ」という自己理解と一神教

ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク(EMN)〈ブリュッセル〉

ターリク・ラマダーン

Tariq Ramadan

ご紹介ありがとうございます。また今回の集まりにお招きいただき、ありがとうございました。日本でセミナーやワークショップに参加するのはこれが初めての体験です。この場に同席する皆さまと共にヨーロッパの現状や情勢について意見交換ができることをとても嬉しく思います。ムスリムをめぐる現実だけでなく、ムスリムの存在を介して明らかになりつつある現実、そうしたヨーロッパの現状が大きな議論を呼んでいます。本日私たちはヨーロッパのアイデンティティ、多元主義、そしてこうした多元主義的社会の行方について話し合うためにここに集っているわけですが、持ち時間が15分しかありませんので、さすがにこの複雑な問題を扱うには無理があります。そこでここでは問題の一部に焦点を当てるにとどめ、発表後の議論や対話の中で、改めて別の角度から問題を掘り下げることにはしたいと思います。

最初に、簡単に状況説明をいたします。数週間前、ローマ教皇がドイツで問題の発言をした直後のことですが、私は、今ヨーロッパは他の文明との対話よりも自らとの内なる対話の方をはるかに必要としているのではないかと、という主旨の論文を書き上げました。今日私たちは、有名な文明衝突論の対極にあるものとして文明の対話ということを口にします。確かにこれは真実であり、様々なレベルでの対話が求められていることに間違いはありません。ですがそこには、ヨーロッパが対話すべき相手は他者、すなわち他者と目される者であるという暗黙の了解なり認識なりがあり、その背景には、ヨーロッパとは何か、どのような存在なのか、そしてヨーロッパは自

己をどのように定義すべきなのかということをヨーロッパ人自身が既に知悉しているかのような思い込みがあります。しかしローマ教皇の発言をめぐる議論の中で、ヨーロッパの歴史的背景、そしてその現状に対する理解をもっと深める必要性が浮き彫りにされたのではないのでしょうか。

昨今こうした対話が求められているのは、先ほどのお話にもありましたように、新たな「レイシズム」という問題が台頭し、ヨーロッパにおけるイスラームの存在が今改めてヨーロッパ人自身の自己認識を脅かしているためです。現在、イスラームの存在をめぐる新たな流れ、新たな疑問、新たな問題、そして非常にセンシティブな新たな議論がわき起こっています。これはヨーロッパのあらゆる国に共通する現実です。フランスの件はご存知でしょうし、最近では英国でもそうした問題がありました。デンマークの一件などは正に典型的なケースですし、スペインもそうです。ヨーロッパのあらゆる国がこの問題を抱えており、私たちは誰なのか、私たちの国の現実とは何なのか、私たちはどこへ向かうのか、という疑問がすべての社会に突きつけられています。

その奥底にあるのはアイデンティティの問題ですが、実はイスラームの存在により、今日、ヨーロッパ諸国が抱える問題の一部が明るみに出ようとしているのです。ローマ教皇の舌禍事件では、ヨーロッパのムスリムだけではなく、多くの人々が、イスラームと暴力、とくに預言者ムハンマドの伝統的教えと暴力を結びつけた法王の発言に反発しました。この事件のことを聞いた直後、私はすぐに問題の

発言を含む講演の全文に目を通し、主たる争点は暴力ではないことに気づきました。主な争点は、ヨーロッパの過去に対するローマ教皇の認識にあったのです。

法王は講演の中で、イスラームを代表する大哲学者、イブン・ハズムの言葉に触れています。確かにイブン・ハズムは偉大な哲学者ではありましたが、その思想はと言えば、イスラームの主流から外れた傍流的なものでした。そうした傍流的立場にあったイブン・ハズムにとっては、確かに信仰と理性の関係は重要事ではありませんでした。法王は、偉大なイスラーム的伝統の主流から外れたハズムの言葉を引用することで、非常に重要なこと、すなわちヨーロッパの過去に対する自らの認識を露呈することになったのです。法王の発言には主に2つのメッセージが込められています。

1つは世俗主義的なヨーロッパ人に向けられたもので、この中で法王は、キリスト教はヨーロッパのアイデンティティの屋台骨を成すものであり、キリスト教のことを忘れては他宗教と対話することはできない、と訴えています。つまりお分かりのように、このメッセージは、キリスト教とは相容れないものとして世俗主義や啓蒙主義を擁護する昨今のヨーロッパの哲学者や思想家に向けられたものなのです。これと同時に法王はヨーロッパのムスリムに向けて、理性を基本とするキリスト教とギリシア的伝統の間には重要な特権的關係があるというメッセージを送り、キリスト教、理性、ギリシア的伝統が特別な関係で結ばれていることを直接、間接に訴えて、イスラームはこうしたヨーロッパのルーツの枠外にあるという考えを示しています。

この2つのメッセージは非常に重要です。なぜならローマ教皇はこの中でヨーロッパの過去とヨーロッパのルーツを再定義するとともに、以前から自分が抱いていたヨーロッパ像を描き出しているからです。ローマ教皇ベネディクト16世は法王就任前、ラツィンガー枢機卿としてトルコをヨーロッパに含めるか否か

の議論に参加し、一貫して参加は認めないという立場を取っていました。トルコはヨーロッパ文化を構成しておらず、その本質はヨーロッパに帰属していないというのがその理由です。そしてトルコのアイデンティティ、文化、宗教の性質そのものを疑問視することにより、当時からすでに、ヨーロッパはキリスト教社会であると発言していたのです。それがキリスト教の現実であると。今回法王は、ドイツの講演で、この考えをギリシア的伝統に結びつけたのです。

では、このディスコース、すなわち暴力をめぐる議論からどのようなことが分かるのでしょうか。確かに、こういう風にも言えるでしょう。ヨーロッパの理性、キリスト教が根深い問題なのだと。その他についてはどうでしょう。いずれにしても法王の発言はヨーロッパのアイデンティティを定義するものとなりました。今日私たちが悩ませているのも正に、イスラームの存在に端を発するこの問題なのです。トルコのEU加盟をめぐる議論に耳を傾け、上層部の発言をたどって行くと、ヨーロッパの奥深くに潜在する問題が改めて浮かび上がります。というのも一部のEUの国會議員や関係者の間で、トルコの加盟を認めることができるかどうか問われているからです。トルコはイスラーム国家であり、一方私たちが相手にしているのはキリスト教のアイデンティティ、キリスト教のグループです。これは今に始まったことではありません。過去にはドイツの代議士や政治家、そしてフランスの前大統領までもが同じ主旨の発言を行っています。トルコ人はヨーロッパ人ではない、トルコはヨーロッパの国ではないと。最近の例では、サルコジ次期フランス大統領候補が、トルコは文化的にも宗教的にもヨーロッパの一員ではないという見解を公にしています。トルコはヨーロッパの理念や人権についてさえ語るべきものを持たず、ヨーロッパの一員となる法的、文化的要件を満たそうとしていない。それというのもトルコがヨーロッパに帰属していないからだ。トルコの伝統や宗教、トルコという国を問題視する発言をする人たちは、フランス、英国はじめすべてのヨーロッ



パ諸国にすでに何百万ものムスリムが存在するという事実を忘れています。トルコの宗教を問題にする人たちは、すでに何百万というヨーロッパ人がイスラームを信仰しており、イスラームがヨーロッパの宗教となっている現実を目を向けていないのです。イスラームはすでにヨーロッパの一宗教となっているのですが、それを認めることには問題が伴います。人々は自分の社会に目を向けず、この現実を恐れているからです。その意味で、この場で考えるべきことが2点あると思います。

イスラームの新たな台頭が新たな懸念を生み出し、この懸念がアイデンティティをめぐる疑問を増大させていますが、こうした事実が新たなイスラームの台頭に伴う主な問題点となっています。今日のムスリムのあり方と一神教の伝統を背景に、今2つの問いかけが急速に浮上しており、歴史的視点から見たヨーロッパのアイデンティティが問われています。私はこの点は実に大切だと思います。1つ目はヨーロッパとは一体何なのか、またその根底には何があるのか、ということで、まず教会と政治の分離、すなわち政教分離という点が問題になりますが、ご存知のようにムスリムは往々にして、イスラームには教会はないという理由でこの点について論じることを避けています。私たちムスリムはそうした枠組みを持たないのです。ですから教会と政治ということではなく、信仰と理性ということを問題にしなければなりません。信仰つまり教義の領域と、理性、すなわち議論や交渉という領域を分離することは可能なのでしょうか。イスラームにはこうした問題にオープンに対応できるのでしょうか。それともイスラームはそもそも本質的にヨーロッパの伝統とは相容れない存在なのでしょうか。

歴史を振り返りますと、こうした議論はいずれも東洋学者(オリエンタリスト)に端を発していることが分かりますが、ムスリムの中にも、イスラームの世界では信仰と理性、教会と政治が分離されていないと考える者もいます。しかしこれは間違いです。こ

のことを理解するには、非常に古い、中世のイスラームの伝統をもう一度見直さなければなりません。イスラームには哲学者がおり、また法体系が存在していました。イスラーム世界でもとりわけ著名な法学者シャーティビーはヨーロッパの人で、理性について考え、教義の領域(Al-Ibadat)と社会問題の領域(al-Muamalat)を区別していました。これは大昔の話ですが、ヨーロッパのムスリムはこの事実を再認識すべきであり、またヨーロッパ人も、イスラームの伝統にも信仰と理性の分離という考え方があったことを理解しなければなりません。この点は実に重要であり、ローマ教皇の発言に対する回答にもなるものです。すなわち、イスラーム世界には積極的に理性を重んじる伝統があり、2つの領域が分離されていたのです。

つまり、世俗主義はイスラームとは全く相容れないということが言われていますが、この概念は実に…今は時間がないのでこれ以上踏み込むことはできませんが、この概念はセンシティブなものです。皆さまにももっと理解を深めていただきたいのですが、この2つの領域の区分ということがとても重要になります。そうは言いましても、このことだけが非常に重要だというわけではありません。なぜなら理性ばかりに重きを置くことは危険を伴うからで、歴史的にも理性と倫理の関係のあり方が常に問われてきました。これは今に始まったことではなく、ムスリムの存在自体がこの問いを投げかけているのであり、こうしたことはユダヤ教の伝統、キリスト教の伝統、イスラームの伝統でも見られました。理性の限界とは何なのか。私たちは理性の名の下で、理性的に可能な何事かを行うことができるのか。それともあることを行うことが理性的なのかどうかということを問うべきなのか。私たちはここで、「良心なき科学は人間の魂を滅ぼす」というフランスの人文主義者、ラブレールの言葉を今一度かみしめるべきでしょう。良心なき科学は人間の終わりを意味しますが、それは科学そのものの終わりでもあり、歴史的

な深い問題です。そして科学と良心、科学と倫理の問題こそ、すべての一神教の伝統が、長い間問い続けてきたことなのではないでしょうか。これは古くから続くヨーロッパの伝統を背景としたものであり、イスラームもそのプロセスの一部であると考えべきなのです。イスラームは決してこのプロセスと無縁な存在ではありません。

最後に3点、現在議論されている問題に関連して指摘しておきたいことがあります。これらは過去から引き継がれてきた問題であり、ここでは3点に焦点を当てたいと思います。ヨーロッパ社会におけるムスリムの存在は今、ある核心的な概念について問いを突きつけています。1つ目は多元主義です。多元主義は現在大きな争点となっています。たとえば言論の自由だとか、言論の自由の限界といったテーマを取り上げる場合、その中心になるのが多元主義という概念です。2番目が中立性ということです。公共領域の中立性とはどういうことでしょうか。最近問題となった事件をざっと見てみますと、公共の場における宗教のあり方、たとえばベール着用のはがきフランスで問題となりましたし、英国でも現在この問題が波紋を呼んでいます。またスイスではミナレットというモスクの尖塔の建築が大きな問題となり、与党である国民党(UDC)が建築に反対する考えを打ち出しています。ミナレットの存在はヨーロッパの、そしてスイスのアイデンティティを揺るがすものだ、というのがその理由です。つまり中立性が問われているわけです。最後が平等な市民権です。と言うのもムスリムであれば未だにマイノリティとしての扱いを受けるわけで、ヨーロッパにはマイノリティの市民権がありません。ではマイノリティであるということは一体どういうことなのでしょうか。これはムスリムの存在に端を発するとともに根の深い問題です。過去にも同じことがありました。1930年代から1940年代にかけて、ユダヤ人の存在が正に同じ問いを投げかけていました。その存在ゆえにヨーロッパで新たな「レイシズム」が台頭す

ることのないよう、十分な警戒が必要です。つまりこれは極めて重要な歴史的問題であると同時に、私たちに突きつけられた現代的問題でもあるのです。またこれは、ムスリムの存在を介して明るみに出たことでもあり、この点についても、一神教の伝統が足並みをそろえて、理性、倫理、多元主義という問題に取り組むべきではないでしょうか。以上です。ありがとうございました。





「ヨーロッパ」という自己理解への キリスト教の貢献

コペンハーゲン大学
リズベット・クリストファーセン
Lisbet Christoffersen

本日はお招きいただきありがとうございます。私にとりまして、日本はもとより、東洋に来るのさえ今回が初めてのことで、本日の会議、セミナーにご招待いただいたことをとても光栄に思います。

さてこれから『「ヨーロッパ」という自己理解へのキリスト教の貢献』として理解される概念を幾つかご紹介するわけですが、ヨーロッパという概念へのキリスト教の貢献を重点的に取り上げてはいるものの、私は、キリスト教の貢献だけが今日のヨーロッパを形成していると言うつもりはありません。歴史的視点から見た場合、キリスト教、イスラーム、ユダヤ教に由来する宗教的概念と、ギリシア的理性、ローマ体制、不可知論的、あるいは無神論的概念、そして人間主義的概念が渾然一体となってヨーロッパという概念を形作っていると言うべきでしょう。その意味で、このように異なる思想の代表者が一堂に会する場を設けてくださったことを、とても嬉しく思います。

歴史的に見ると、キリスト教の教義がギリシア的理性、ならびにローマ体制と結びついてヨーロッパが形成されたのだと言うことができるでしょう。キリスト教史では、聖パウロがヨーロッパに向かい、アテネの広場で議論や説教をしたという話と、ローマで十字架にかけられた聖ペテロがローマ帝国のただ中でキリスト教の教えを広めたという話が伝えられていますが、これらの話はヨーロッパという概念と密接に関わっています。

この2つの逸話こそが、ヨーロッパという概念へのキリスト教の貢献を理解する上での土台となっているのです。歴史をたどると、ヨーロッパという存在

は、古典的理性とキリスト教の教義によってローマ帝国が変容した姿であり、現実にかような変容がどのように生じたかということが公に議論されてきました。またすでにどの原典を聖書、すなわち正規の聖典の一部とみなすべきかという議論が交わされてきましたが、このことから、教会内部で多元性が認められると同時に、受け入れがたい思想が排除されていたことが分かります。そのために教会は排他主義を克服し、ある種の普遍主義を確立しようとしてきました。また大々的な隠蔽を行うことにより、教会の構造を打ち立て、教義の内容を決定するとともに、受け入れがたいキリスト教観を排除しました。今使われている教義は、キリスト教誕生から最初の400年の間に確立されたものなのです。つまりヨーロッパの自己理解に対するキリスト教の最初の貢献とは、キリスト教の教義、ギリシア的理性、そしてローマ帝国を一体化したことだったわけです。

2番目の貢献としては、ローマ体制と一体化することにより、教会が一つの階層的なヨーロッパ秩序を確立しようとしたことがあげられますが、この試みは失敗に終わりました。ローマ帝国がそうだったように、当時、ローマ法もやはり限界を迎えていたからです。とくにヨーロッパの北部、これは今のドイツの中央部に当たりますが、この地域がローマ法が機能する限界でした。しかし教会はその後、徐々にこの限界を乗り越えてゆき、第一千年紀が終わるころには、ドイツ北部、イングランド／スコットランド、そして私の祖国デンマークをはじめとするスカンジナビア諸国の住民はキリスト教に転向していまし

た。グリーンランドから海を隔てた島、アイスランドでは、西暦1000年にアルシングという公の議会の場でキリスト教に改宗することが決定されましたが、その背景には正に、この土地の法の下で共通の宗教的土台が必要であるという認識があったのです。

このようにして教会はローマ帝国を越えて勢力を伸ばして行きますが、ローマ帝国の分裂を防ぐことはできませんでした。教会はやがて、東ローマ帝国と西ローマ帝国、すなわち正教会とカトリック教会という2つの部分に分かれ、後にさらに分裂してゆくことになります。12世紀にはボローニャに近代ヨーロッパ的な大学が誕生しました。これは、この地域、すなわちキリスト教圏であるヨーロッパの法的地基盤に対して、共通の理解を再構築する必要があったためです。学生たちはローマ法に加えて、教会法と自国の法律を学びました。つまり、ローマ法、教会法、各国の法律という、起源の異なる3つの法律を学んでいたわけです。こうした起源はそれぞれが異なる制度的背景と正当性を持つものの、ヨーロッパ地域の法的地基盤にはいずれも等しく関わっているため、この起源を解釈学的に理解することにより、学生たちはこの階層的な分化を克服する術を学んでいたのです。こうして中世時代、「単一の教会の法的、構造的起源は聖職者の世界にしか通用しないため、階層的起源を持つローマ法と多様な起源を持つ各国の法律との一体化が必要だ」という認識が生まれました。これこそが、ヨーロッパの自己理解に対するキリスト教の貢献でした。

16世紀に入って宗教改革が始まると、教会にはヨーロッパを統一する力がないことが一層明白になっていきます。ルターの宗教改革の根底には「万人祭司」論があり、これを中心に階層的な教会の姿が浮き彫りにされたのです。その中で重視されたのは、教会の階層制に対する忠誠心やその制度に由来する正当性ではなく、個人の責任でした。これは自分自身に対する責任だけでなく、家族や集団内の仲間に対する責任のことでもあります。こ

こに至って「ヨーロッパという自己理解へのキリスト教の貢献」の分裂が確定的になります。つまり理性の根本をどこに求めるのかという点に対する認識が分裂したわけです。プロテスタントにとって理性とは、社会の立派な一員として責任を持つこと、すなわち法律家、商人、農夫、家庭の主婦など、それぞれの立場で自分の役割を果たすことと不可分でした。プロテスタントにとっては、聖職者や教会の階層制に組み込まれた指導者は最終的な拠り所になるどころか、宗教的な意味でも理解できるものではなかったのです。カトリック色の強いヨーロッパ南部では、階層制の最上位層に理性の根拠が求められるのが一般的であるのに対し、プロテスタントの勢力が強いヨーロッパ北部では、個人と集団的責任に理性の根拠を置く傾向が今も顕著に見られます。たとえばEUの補完性原理についても、色々な解釈がありますが、国民自身が社会の指導者層に何を任せるかということも含め、できるだけ意志決定をすべきだという解釈もあれば、社会の指導者層が、何を国民の手に委ねるかということを決めるべきだ、とする意見もあります。

さて宗教改革の影響としては、第一にヨーロッパの各地を巻き込んだ宗教戦争があげられます。1648年にはウェストファリア条約が締結されますが、これがヨーロッパに宗教の自由という考え方が誕生するきっかけを作りました。ただし当時の宗教の自由とは、国家単位の自由、すなわち君主が国教を決める自由を意味しており、国民は自分の信仰が認められる国に逃れて行きました。

このとき、カトリック教会がヨーロッパ統一に失敗してから初めて、多元主義という考え方がヨーロッパに登場したのです。この多元主義の根底には様々な宗派の思惑があり、その結果教会が国家のアイデンティティと国家建設に貢献するようになります。階層的理性と個人的理性という区別自体がすでに多元主義的世界観への道を開くものであり、このことは会衆派教会など、宗教改革の流れをくむ



教派ですます顕著になっていきました。ヨーロッパでは普遍主義と排他主義の間に対立がありますが、その原因としてあげられるのは16世紀の宗教戦争と宗教改革です。しかしさらに時代を遡ると国家のルーツもまたその原因になっていることが分かります。一方には、ドイツ、フランス、イタリア、ベネルクスなど、ローマ帝国の伝統を継承する国があり（これらの国はEUの生みの親でもあります）、もう一方にはローマ帝国の流れは受け継がず、個人や国家の責任に重きを置いている国、オランダ、スカンジナビア諸国、英国などがあります。

普遍主義と排他主義の対立は、その土地の法律を国家の建設とその国の宗教的アイデンティティに結びつけることによって解決を見ました。しかしその結果、キリスト教の教義を説くヨーロッパの教会だけではなく、君主や国家までもが他宗教を異端視し、敵対視するようになります。そして17世紀半ばから19世紀半ばに台頭する絶対主義の時代には、他宗派のキリスト教徒が白眼視され、さらに他の一神教信者への執拗な迫害が始まるのです。

キリスト教ヨーロッパでは、中世の十字軍以来、ムスリムとユダヤ教徒に対する迫害や戦争が何度も繰り返されてきました。キリスト教（カトリック）ヨーロッパとムスリム（トルコ人）の戦争は18世紀まで続き、イスラーム軍はウイーンまで進軍しますが、最後には広場の真ん中で撃退されてしまいます。ウイーンを中心部、数百年の間敵対していたイスラーム軍を撃退した場所に、このときの勝利を記念する塔が今も残っています。

これに対してユダヤ教徒は敵ではなく、マイノリティの扱いを受けてきました。ときに嫌われ、ときに容認され、またときに受け入れられることもありましたが、長い間ユダヤ教徒に真の平安が訪れることはありませんでした。ヨーロッパの「寛容」という概念では、厳密にいうならば、他宗教や他宗派の人々にどのように対応するかということが問題なのであって、ムスリムやユダヤ教徒だけでなく、プロテスタントもその対

象となっていました。寛容の概念は、18世紀に、カトリック国であったオーストリア・ハンガリー帝国で生まれました。この考えは、「他宗派の信者は受け入れるべきであるが、国民として平等に扱うことはできない」というもので、シナゴグやミネレット、あるいは他宗派の教会を目立つところに作ることは禁じられていました。今もウイーンを中心部に、同じ敷地内に隣り合わせに建設されたルター派と改革派の教会が残っていますが、ここでは当初、道路に面した入口を設けることは許されていませんでした。ウイーンのカトリック教徒が気軽にプロテスタント教会に入ることがあっては困るからです。つまり危険な存在だとみなされていたわけです。寛容という概念は、他者を受け入れはするけれども、本当の意味では認めないということだったのです。

また「区別」という概念もヨーロッパという自己理解へのキリスト教の貢献とみなすことができます。お聞きになったように、教会史を通してヨーロッパ人は、信仰と理性を区別するよう教えられてきました。また理性の根拠をどこに求めるか—教会の階層制なのか（カトリックの場合）それとも万人祭司制なのか（プロテスタントの場合）—という点についても、区別化が行われています。

ヨーロッパの統一に向けて様々な試みが行われる中で、ヨーロッパの歴史とキリスト教の教義、ローマ体制、ギリシア的理性が合体し、その結果として多様な権力の源が区別化され、さらに教会とローマ帝国、そして教会と君主が区別されるようになります。また啓蒙主義はヨーロッパ人に、宗教と法律を区別することを教えました。つまり西欧の法的思想の大前提となる「法律とモラルの区別」自体がキリスト教の貢献によるものであり、ヨーロッパのアイデンティティを決定づけるものとなったのです。

また聖と俗を区別する必要性もキリスト教に端を発しており、キリスト教の教義にある逸話がその元となっています。聖書によるとローマ皇帝に税金を納めるべきかどうかと尋ねられたイエスは、片方の

面に皇帝の肖像が刻まれた貨幣を見てこう答えたと言われています。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」。

ヨーロッパの歴史では、この話は、何百年にも及ぶ聖と俗の対立、そして聖と俗の境界を定めようとする試みの論証的根拠となっています。これはローマ教皇とローマ皇帝、あるいはローマ教皇と君主との権力闘争のことで、今の時代では宗教の自由という領域と（これは法的には教会の守備範囲になります）、国家、あるいはEUの領域の対立と置き換えることができます。こうした聖と俗の区別というのはキリスト教的概念です。

さらに「世俗主義」という概念もあり、これなどはヨーロッパ理解に対する非常にシビアなキリスト教の貢献だと言えます。基本的に世俗主義とは、聖と俗の区別に対する理解のことであり、俗とは君主の領域、聖とはローマ教皇や教会に仕える聖職者の領域を指します。しかし法王も君主も、つまり聖も俗も、本来は神の庇護下にあるものとみなされていたのです。フランスの啓蒙主義者や人文主義者はこの問題に違った方向から取り組み、聖と俗の区別から神を排除して、代わりにその区別の根拠を個々の人間、すなわち人間主義的思想に求めました。つまり神を排除して、人間を聖と俗の区別の原点に据えたのです。人間と神のどちらを聖と俗の区別の根拠とすべきかという問題は、今もヨーロッパの政界やEU、ならびにその加盟国の中にはっきりと見られます。

ですから思想面に焦点を当てた場合、「ヨーロッパの自己理解に対するキリスト教の貢献とは」という問いへの回答には次のように答えることができるでしょう。ヨーロッパという概念自体のルーツがキリスト教にあり、そこではキリスト教の教義とギリシア的理性とローマ体制が一体化しており、イスラームとユダヤ教は他者、またはマイノリティとしての役割を強いられている。

さらに、統一された階層的秩序と多元性を一体化しようとする試みのルーツも、やはりヨーロッパに

深く根ざしていると言えるでしょう。ヨーロッパには、異なる法的起源を持つものの、ヨーロッパ法のくくりに入る法律（教会法、ローマ法、および土地の法律）を大学で解釈学的に理解してきたという伝統があるからです。

加えて、宗教の自由に対する理解が国家という概念につながり、また寛容の概念がヨーロッパという概念へのキリスト教の貢献に関連しているように、理性の根拠を基本的に階層制に置くかそれとも個人に置くかという議論も、宗教改革に由来するキリスト教的思想にルーツを持っています。

最後に聖と俗の区別とそこから派生した西欧の法的思想ですが、世俗化という概念を理解するには、キリスト教が政治と宗教、法律と教義を区別していることを念頭に置かねばなりません。また皇帝の国と神の王国についても、異なるものではなく、区別すべきものとされています。

こうしたことを考え合わせると、欧州連合条約にキリスト教の継承云々を盛り込むかどうかということは大した問題にはなりません。なぜなら聖と俗の区別、権限の区別という考え方や、理性の本質を制度的、階層的権限ではなく個人の責任に帰するという考え方、様々な法的、政治的、宗教的権力に対応しなければならないという考え方など、現実のヨーロッパに関わるこうした考え方はいずれも、キリスト教的思想にルーツを持つからです。

しかし私たちが今問うべきことは、ヨーロッパの宗教地図が書き換えられている現在、こうした考え方が今後も通用するのだろうか、ということでしょう。ヨーロッパでムスリムやユダヤ教徒の存在感が大きく増してきているということもありますが、それだけではなく、キリスト教徒のあり方も変わりつつあります。というのもキリスト教にルーツを持つ聖と俗の間で新たな対立が台頭しつつあるからです。

この対立については、後ほどまた取り上げたいと思います。ありがとうございました。





自己理解への葛藤

進歩的ユダヤ教世界連合（ヨーロッパ地域）

アブラハム・ソーテンドルプ

Auraham Soetendorp

本日ご参集の皆様一言申し上げたいと思います。私はこの同志社大学でお話する機会を与えられましたことをたいへん光榮に存じます。この大学が素晴らしいところであることはすでに目にしております。この研究センターは、森先生の指導のもと、イスラーム、ユダヤ教、キリスト教の3つの文明の共存を目指す他に類を見ない素晴らしい拠点となっています。また、手島先生にヘブライ語で京都の町を案内していただいたことは、まさに異宗教間、異文化間の協力と言える出来事でした。さらに、このセンターはシリアのシャイフ・アフマド・クフタロウ財団と学術交流提携を結んでいます。その創始者であるシャイフ・アフマド・クフタロウ師の思い出についてもお話ししなければなりません。1990年に私は、ここからさほど遠くない岡山県で開催された異宗教間の協力をテーマとする会議に出席する機会を得ました。シャイフ・クフタロウ師も参加していて、私たちは一緒にクルアーンのテキストについて検討しました。彼との思い出としてその5章32節を引用させていただきます。神は、「こんな事情があったればこそ我らはイスラエルの子らに対して明文の法規を定め、人を殺したとか、あるいは地上で何か悪事をなしたとかいう理由もないのに他人を殺害する者は、全人類を一度に殺したのと同等に見なされ、反対に誰か他人の生命を1つでも救った者はあたかも全人類を一度に救ったのと同等に見なされ」と言いました。さてこの言葉は、ユダヤ教の根源規範であるタルムードに書かれた「1人の人間の命を救うものは全世界を救う」にも通じます。1990年もそして現

在も、あまりにも多くのことが起きて罪のない人々の血がたくさん流れました。これはクルアーンの教えに反するものであり、タルムードにも反します。私たちのどの一神教にも反しています。

私は今日、人は自分のアイデンティティに安心を感じていれば、他人に対してより寛大になれると確信しているユダヤ教徒としてこの場に参加しています。ここにこうしてやって来ましたが、安息日である土曜日に、皆様ご覧のように私はマイクを持っています。これは何を意味するのでしょうか。私が自由主義の進歩的ユダヤ教徒だということを意味します。そして皆様とここで一緒にするためには、マイクを使わなければ私の話を理解していただけないということです。ですから、私は皆様とご一緒にしようと決心したので今この場にいられます。進歩的ユダヤ教徒はユダヤ教徒の大部分を占めており、私たちがこの可能性を育んだのです。このことは、ムスリム社会にも、そして他の社会にとっても手本となるでしょう。人は自分自身のアイデンティティにすっかり安心を感じることができると同時に、それぞれの国の国民であるという意識を十分に持つことができます。

私は安息日にモーセ五書から抜粋した一節を朗読することを習慣としています。ですから今日は「創世記」12章から選んで読んでみます。この章は何について書かれているのでしょうか。一神教の父祖と呼ばれるアブラハムについてです。アブラハムは生まれ故郷のカルデアのウルを離れ外国へ行き、その土地で寄留の他国人となるように命じられました。

アブラハムが寄留者で1人であったとき、主はアブラハムにこう言いました。「あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪うものをわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」。

さて、私はこれまでの人生で呪いも祝福も見えてきたと言わなければなりません。私は1943年、アムステルダムに生まれたので、大人たちは赤ん坊の私を守るために、穴を開けたスーツケースに入れてあちこちへ運ばなければならないという状況でした。そして、オランダに住むドイツ生まれの敬虔なカトリック教徒の女性によって助けられたのです。この話を語ることによって私は、ドイツ人、カトリック教徒、そして十字軍兵士に対するすべての偏見をすでに取り除いています。そして、このこと目撃者となったことは私の人生において極めて大きな意味を持ちます。もちろん危険もありますが、ユダヤ教が今日、世界に、そしてヨーロッパにもたらしている最大の贈り物は希望です。よりよい未来があるという希望、私たちは人間として存在できるのだという希望です。ユダヤ教では、全世界がユダヤ教に改宗すべきだとは決して考えていません。どの宗教も、どの宗教伝統でもそれぞれ貢献できることがあり、諸宗教が力を合わせればよりよい世界を実現できるのです。オランダのムスリム人口は増えているのですから。40年前はほんのわずかであったムスリム系市民は増え続け、現在、オランダの人口1600万人に対して100万人を超える集団となっています。彼らのアイデンティティによる貢献はオランダ社会にとってたいへん重要なことから、これは喜ぶべきことです。そうです。私たちは今、個別主義と普遍主義の境目にいるのです。ですから、例えば新約聖書などの經典で、ユダヤ人の兄弟、イエスもこれについて語っています。

そのくだりは「レビ記」19章に書かれています。まず、「あなた自身を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい(V' ahavta l' reacha kamocha)」という黄金律があります。しかし、さらに読み進んでいくと「寄留の他国人をあなた自身のように愛しなさい。

なぜならあなたたちもエジプトの国においては寄留者だったからである」とあります。発端から、個別主義と普遍主義があったわけです。時には残念ながら敵意に満ちた言葉で強調されませんが、普遍主義的な言葉で強調されることも多いのです。

では、ローマ教皇の発言の話に移りたいと思います。私が所属しているエルサレムの「エリヤ異宗教間研究機関(The Elijah Interfaith Institute)」では、各国から多くの学者が集まり教皇の講話についての声明文を書き上げました。本文は後ほどお配りしますので、ごく短くまとめた要点だけを紹介しておきます。まず1つ目は、論争学文献は非常に難しいということです。なぜなら論争学文献には自らを他者から擁護するための表現も含まれるからです。私たちが異宗教間の問題で前進しようと努めるとき、私たちの論争学文献の内容が無視されるということはありません。これは私たちが他者をどのように見てきたかについて調べるのが、私たちの論争学文献の検討につながるにちがいありません。歴史的背景事情を踏まえうえてそれらを理解する必要があります。こうしたことから、聖書やクルアーンに書かれた難解な文を取り上げ、それらを総合的に研究することが極めて重要だと思います。

ところが、これは簡単ではありません。私は昨年1月にブリュッセルで、今年はスペインのセビリアで開かれた2つの会議に参加しました。このたいへん希望に満ちていると言える会議には、数百人ものラビやイマームたちが中東地域内外から集まりました。時にはたいへん困難を感じることもありましたが、素晴らしい集まりでした。一番素晴らしかったのはどんなときかお分かりですか。それは共に歌い食事をしたときです。私たちはカシェル食品を食べましたが、このユダヤ教の掟にかなった食べ物にはムスリムの参加者にも喜ばれました。また、私たちが歌ったモロッコの歌はユダヤの歌やアラブ系ムスリムの歌で、私たちの心をひとつにしてくれました。しかし、難しいテキストについて検討するときは、議論を戦わせ



るので決して楽ではありませんでした。それでもこれを続けていかなければなりません。

この2番目の部分は教皇ベネディクトについてです。私たちの宗教のどれにも、現在の宗教理念の認識から見れば遺憾に思われるような歴史的一幕があります。歴史の中のある時点で宗教または個人が他の宗教を暴力的に扱ったり、宗教上の見方を政治的権力や軍事的権力と折り合いをつけるのにたいへん苦労しているという経験はどの一神教にもあります。

3つ目のポイントもまた現代の視点から認識することが重要なのですが、それは私たちがサウンドバイトを多用するテレビ時代に生きているということです。サウンドバイトは、ニュースで短く引用される政治家の発言などで、微妙なニュアンスは伝えられません。宗教指導者はこのことを認識する必要があります。尊敬するローマ教皇として例外ではありません。CNNの「60セカンズ」で誤解を生じさせないように正確に今すぐ話をするというのは非常に難しいことです。さて、クリストファーセン先生も欧州憲法条約について話をしてくださったことをたいへん嬉しく思います。時間が少なくなってきましたが、私の経験からこれだけはお話ししておきます。この憲法はフランスとオランダが否決したため、まだどうなるか分かりませんが、憲法を起草する委員会にいたオランダ代表が私にこう言いました。「宗教指導者の方々が私たちに、あなたがたの両方が語っている文脈における宗教の重要性について話してください。なぜなら、キリスト教の支配を懸念してキリスト教に言及しないように求めているからです」。もし一神教のユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムが行動を起こしていたなら、そして、どの一神教の信者も納得できる文言を自ら作り上げていたなら、その文言が憲法に取り入れられていたかもしれません。私たちは期待されているのです。異宗教間活動はもはや非主流の活動ではなく、中心的であり実存的なものになっています。

最後にもう1つお話させていただきます。テオ・ファン・ゴッホ監督の暗殺事件後のオランダの様子についてです。一部の学校、ムスリムの学校はどうなったのでしょうか。政治家や街の人々はどんなことを言いましたか。私はムスリム非難を感じさせる声明を見つけました。反ユダヤ主義と同じくらい胸の悪くなるようなものを感じました。一目瞭然ですが、ヨーロッパの状況は非常に危ういために、一目瞭然さを示す必要があります。それはたいへん重要なことです。ラビとイマームがマルセイユの街を一緒に歩いているのを見れば、社会的な不安があっても、手をつないで歩くこと自体がすでに声明を出していることになります。こうしたことをもっと目に見えるような形で続けていかなければなりません。なぜなら、ご参集の皆様、ヨーロッパそしてヨーロッパの拡大に目を向けると、私たちがテーマとしているすべての問題について語ることができるからです。しかし、こうも言わせてください。祝福もしましょう。ユダヤ民族の撲滅とヨーロッパの道徳心の崩壊が起こった後の1945年に、私たちがヨーロッパで一緒にいるチャンスがあることを誰が信じたのでしょうか。ですから、これを衝突とみなすのではなく、共存のチャンスとしてとらえようではありませんか。このために私は話をし、目で見て、感じているのです。私は希望に満ちています。

「ヨーロッパ」という自己理解と一神教

イスラーム・イスラーム社会研究所〈フランス〉

ハミット・ボザルスラン

Hamit Bozarslan

本日、このシンポジウムに参加する貴重な機会を与えられたことは大きな喜びであります。どうもありがとうございます。これから私がお話しするのは、「ヨーロッパにいる1,000万から1,500万人のムスリムの存在によってもたらされたヨーロッパの変容、つまり、ムスリムがヨーロッパの運命をどのように変えたか、それと同時に、ヨーロッパにおけるムスリムの存在が一宗教としてのイスラームをどのように変えたか」という問題です。

まず、3つの質問とそれに対する答えを手短に説明したいと思います。1つ目の質問は、今日のヨーロッパにおいてムスリムであることはどのような意味を持つのかというものです。その答えは一般に考えられるほど明白ではありません。ムスリムであることは一宗教への帰属と信仰があることを意味することは明らかですが、それだけではありません。ムスリムであることは、様々な背景状況に置かれていることを意味します。背景状況に応じて様々なアイデンティティを示し形成します。ムスリムであることは、社会学上の帰属や、ある階級への帰属である場合もあります。さらには民族的境界、例えば、フランスにおける北アフリカ系住民と非北アフリカ系住民との間の民族的境界、あるいは世代上の境界を意味する場合もあります。いずれにせよムスリムであることは、多義的な複数のアイデンティティや帰属を持つことを意味します。

一例を挙げますと、およそ10年前にフランスで行われた世論調査の結果、少なくとも3人に1人のムスリムが豚肉を食べていることが明らかになりまし

た。現在どうなっているのかは分かりませんが、ムスリムであると同時にイスラームの重要な禁止事項や規定を破っている様子が容易に想像できると思います。またヨーロッパでは、キリスト教徒とムスリムの異宗教間結婚率が高いのです。こうしたことがすべて、背景状況というものが非常に重要であり、ムスリムであることは単に信者であることではないということを意味していますが、この問題については後ほどまたお話しします。というのも、キリスト教社会についても同じことが言えるからです。ヨーロッパのイスラームはヨーロッパの運命を変えていますが、同時に、ヨーロッパも宗教としてのイスラームの運命をある程度変えていると言えます。そして、ヨーロッパのイスラームは現在、おしなべてキリスト教と同じような進化の過程をたどっている、あるいは同じような進化を経験しているようです。

ヨーロッパの宗教について観察している専門家や社会学者はほとんど誰もが、現在の宗教は「アラカルト」のようなものだと言うでしょう。人は、自分の宗教を選び、自分の宗教を語り、自分の宗教に様々な意味を与えるのです。今日のヨーロッパでキリスト教あるいはムスリムであるということは、教義によって定められていることでもなく、単に法廷によって定められていることでもありません。

イスラームはキリスト教と同じ進化の過程をたどっています。多くの人々が個別にイスラームを再解釈しています。人によって、ニューエイジ、霊性、イスラームと組み合わせた仏教などの様々なポストモダンの靈感の源があります。現在のイスラームは全



一般的に混合主義的な宗教です。つまり、ヨーロッパの状況下における混合主義的宗教になっています。だからといってもちろん、イスラームの法学者、ウラマーが独自の定義を持っていないといっているわけではありません。しかし、現在の一般的ムスリムにとってはおしなべて混合主義的宗教であり、日々改革され続けているのです。

次に、2つ目の質問に答えてみようと思います。ヨーロッパにおいてイスラームの問題はなぜそんなに重要なのか、あるいはなぜそんなに危機的なのかという質問です。これには2つの理由が考えられます。まず、ヨーロッパ社会における社会的統合の機構が非常に弱いという理由があります。社会的統合の機構といっても、移民系住民、つまり外国人住民の統合の機構だけを意味しているのではなく、ヨーロッパ社会それ自体の社会的統合も含めています。例えばフランスの場合を見てみましょう。フランスのような国では、国や社会がまだエリート層を統合することができます。ムスリムのエリート層は十分に統合されていますが、一般のムスリムの場合は必ずしもそうではありません。その理由は、必ずしもムスリムであることではなく、社会の主流から取り残された集団、つまり貧困階級に属しているからです。統合の機構から締め出されている集団なのです。

それではフランス型モデルが成功した理由は何だったのでしょうか。20年から25年前には4つの統合の場がありました。第一の統合の場は国民国家でした。フランスの国民国家が国民を統合することができたのです。現在、規範を示す機関としての国家が危機に瀕しています。2つ目は学校です。学校も現在、危機に瀕していますが、20年前は国民が統合される場となりえたのです。3つ目はたいへん矛盾していますが、共産党と労働組合が統合の場となっていました。現在、共産党はほとんど存在していませんし、労働組合は非常に弱くなっています。そしてこれらに代わるものとして、教会が4つ目の統合の場となっていました。

この4つの機関が危機的状況にあるために、私たちにはもはや階級に基づく強固な全体的アイデンティティや葛藤がないのだと思います。私たちにあるのは細分化の進む政治的アイデンティティであり、この細分化された政治的アイデンティティが、区分化された共同体ごとのミクロなレベルのアイデンティティになったのです。細分化されたアイデンティティは、ミクロなレベルの統合の場があることも意味します。そのような場がそれぞれの集団の表情やイデオロギーや価値を創りだしているのです。イスラームはそうした価値の1つとなりました。

では、イスラームの問題がヨーロッパでなぜそんなに危機的なのかという質問に対する2つ目の理由ですが、これについては3人の発表者の方々がすでに触れています。この質問の答えはもちろん中東や世界で起こっている出来事に関係しています。「9.11」事件の発生以前でさえ中東やイスラームといえばテロや暴力、後進性、狂信的行為などが連想されることがあり、民主主義世界として定義づけられているヨーロッパは、外部の敵としての中東からのこうした脅威に脅かされているとみなされていました。

ヨーロッパにおけるこのような感情あるいは主観や認識がある一方で、中東にはまた別の認識や主観があると思います。中東の視点から見れば、西側諸国といえば不公平、攻撃、恨みなどを連想します。文明の衝突ではなくこうした認識の衝突によって、現在、ヨーロッパにおいてイスラームの問題が危機的なものになっているのです。

次に、3つ目の質問に取り組んでみます。ムスリム社会がヨーロッパで展開する価値や戦略、選択肢にはどのようなものがあるかという問題です。この質問に答える前に、私たちには複数の相容れない場があることを説明したいと思います。単一のムスリム社会ではなく、複数のムスリム社会があります。また、多くの新しい現象が見られます。例えば、再改宗の現象、「新生または更生の経験」は頻繁に

起こっています。宗教としてのイスラームに対して急進的な係わり合いを持つ場合もあれば、社会的な帰属としてのイスラームに対してきわめて穏やかな係わり合いを持つ場合もあります。また、厳格主義に基づいて共同体の再福音主義化のようなものや、再イスラーム化といったものが起こる場合もあれば、外的なジハードの掟、つまり「戦い」としてのジハードの掟によってイスラームを定義づける人々がいる場合もあります。ムスリム社会、あるいはムスリム社会の構成員の一部が、ヨーロッパの外やムスリム世界の外、あるいはアフガニスタンやイラクなどのムスリム世界で起こる衝突に巻き込まれることもあります。つまり、多数の選択肢や戦略があるので、単純にムスリムがどうこうするとか、ムスリムがヨーロッパでどうこうすると言うことは不可能です。

現在ヨーロッパでどのような価値や戦略や選択肢が見られるかを探ってみるとしたら、3つの理想的なタイプが考えられると思います。1つ目の理想的なタイプは急進的ですが非暴力的なアイデンティティに基づくムスリムの反応です。風刺漫画に対する反応、ローマ教皇の発言に対する反応、パレスチナ問題をめぐるムスリム世界の連帯といった反応が、アイデンティティに基づく急進的な反応が実際にあることを如実に物語っています。

共同体において価値を形成する2つ目の方策は中流階級の形成だと思われます。実際、多くの場合、アメリカでキリスト教徒共同体が辿ったものと同じ道を、現在ヨーロッパのムスリムが歩んでいるようです。つまり宗教を社会契約とみなしています。それは厳格な契約ですが、広く世俗化された環境における厳格な契約です。そして、宗教で結ばれた共同体を創ろうとしているのです。このような共同体は、閉鎖的な共同体ではなく世界に開かれています。他の共同体や公的領域との相互交流がありますが、同時にある程度の自律性も備えています。

ムスリムの間に価値を創り出す3つ目の方策として改革があります。それはイスラームの改革、さらに

大胆な改革です。現在のヨーロッパにおいて、そしてムスリム世界全体でもおそらくそうだと思いますが、イスラームの一般的な方向性はイスラームの改革だろうというのが私の印象です。その呼び名はさほど重要ではありません。それ以外の概念も見出すことができますが、それでもなお現在ヨーロッパにいる多くのムスリム思想家が、キリスト教やユダヤ教が読解されているようにイスラームを理解し読解しようとしていると思います。イスラームは3つの一神教の1つとなっています。もちろん、イスラームは世界の宗教となっていますが、1つの概念構成体であり社会的要素であるとも認識されています。

イスラームの改革が意味するのは、イスラームが霊的なメッセージとしてだけでなく歴史的に形成された宗教としてもとらえられているということだというのが多くの思想家の考えです。もちろんクルアーンを読むこと、あるいは読み直すことは、クルアーンに変更を加えることではありません。クルアーンは神の言葉として認められているためにそのようなことは不可能です。しかし、クルアーンを読み直すことは、クルアーンを学術的根拠のある書物としては認めないということを意味することになります。クルアーンは霊的な書物と見なされるでしょう。歴史や社会学の書物ではないとみなされるのではなく、再解釈や解釈学の対象として認識されることになります。このことは、クルアーンが単一の価値ではなく複数の価値を持つものであり、相容れない複数の価値を許容するものとして認められることを意味していると思われます。

この傾向は現在のヨーロッパにおいて、そしておそらくムスリム世界全体においても、ムスリムの間で主流となる傾向だと思います。しかしもちろん、ムスリム社会の外で起きる出来事や、中東やムスリム世界で起きる出来事に多くのことが左右されます。イスラームが現在ヨーロッパで経験している変容を理解するうえで、政治的要因も神学上の要因や社会学上の要因と同じくらい重要だと思います。





ディスカッション

司会 森 孝一（同志社大学大学院神学研究科教授 一神教学際研究センター長）

【司会】 それでは早速、パネルディスカッションに移っていききたいと思います。

今、皆さんがお聞きになったように、本当にさまざまな問題があるということが分かりました。ただ、あと残り45分という限られた時間ですので、問題を絞っていくしかないと思います。

私が今、4人の先生がたの発題をお聞きした中では、ムスリムの問題、ヨーロッパにおけるムスリムの問題が、今日のヨーロッパという自己理解にとって最重要であると思います。ボザルスラン先生は、ヨーロッパのムスリムは非常に多様であるが、改革主義的なムスリムが主流になりつつあるのではないかと発言されました。そしてまた、ソーテンドルプ先生は、改革主義という言葉はお遣いになりませんが、進歩的ユダヤ教徒があるように、進歩的ムスリムも可能ではないかというご発言をしてくださったと思います。

ただ、これについては、また異なった理解があるかもしれません。ラマダーン先生は、進歩的ムスリムあるいは改革主義的ムスリムが、今後のヨーロッパでめざされるべきものではないかという考えについて、どのように考えておられるかお聞きしたいと思います。

【ラマダーン】 そうですね、森先生の今のご質問ですが、これは要するに私たちが普段使っている概念をどのように定義するかということだと思います。と言いますのも、私たちは改革主義について議論はするものの、その意味ないし中身については一致した見解を持っていないからです。イスラーム社会の主流となる現実についてですが、ムスリムは原則を忠実に守ろうとする一方で、自分たちを取り巻

く状況に配慮することにも努めています。これはヨーロッパに限らず、国際的に言えることだと思います。問題はその限界で、信仰を守ることと「進化」することを考えた場合、その限界は一体どこにあるのでしょうか。また「改革」という概念でさえ、多くのムスリムは正しく理解していないように思います。ムスリムにとって改革とは他宗教の伝統でしかないため、これをイスラームの伝統にしっかり根付かせることが必要です。またイスラーム法の伝統の中には決して変わらないものがあります。たとえば教義やその実践などはこれから先も決して変わることはないでしょう。その一方で変わるべきものがあることも確かで、私たちは、とくに社会との関係において、このことを見きわめてゆかねばなりません。

ヨーロッパに話を限定するならば、今日、何かをヨーロッパの現実に適応させなければならない、ということが主要なディスコースになっています。問題はどこまでやるかということです。たとえば先ほどクルアーンについてのお話がありましたが、私は改革主義を擁護する立場を取っているものの、その私にとってさえクルアーンは神の言葉そのものであり、そのこと自体の真偽を問うつもりは毛頭ありません。問題になるのは、どのようにすれば、クルアーンというこの聖典が歴史的な意味でも「永遠の言葉」として理解されるようになるだろうかという点です。新たな課題への新たな解決策を模索する上で、改革主義は確かに一つの手がかりになると思います。この点については内部でもムスリムやイスラーム学者を巻き込んだ論争となっていますが、私はこれが現実だと思います。

そこで考えていただきたいのは、これはヨーロッ

パ、すなわちキリスト教的伝統とユダヤ教的伝統と同じ道をたどっているのかということです。またこうした伝統を混同しないよう注意が必要だと思います。ユダヤ教、キリスト教、イスラームには確かに共通点がありますが、それぞれが内抱する伝統は同じものではありません。歴史、コンテキスト、社会、そして進化ということを考慮に入れなければならないということが言われていますが、私は進化しない信仰などありえないと考えています。信仰だけは何があっても不変であるという見解は、あまりに直解主義的な解釈です。信仰とは新たな課題に向き合い、新たな回答を模索しつつ、進化してゆくものなのではないでしょうか。

【司会】 クリストファーセン先生、それからソーテンドルプ先生からも手が挙がっていますが、その前に、今のラマダーンさんのレスポンスに対してボザルスラン先生、何かお考えがあれば聞かせてください。

【ボザルスラン】 実際には、私たちはみな基本的に同じ見解を持っているのではないのでしょうか。ラマダーン先生は宗教の内側から発言をされましたが、私は外側から意見を述べたいと思います。宗教的伝統は社会学の研究対象だからです。もちろんラマダーン先生が内側から見解を述べられ、内側の立場で状況を判断されていることはよく分かりますし、そこに大きな違いがあることは確かですが、それはあくまで立場の違いであって、人間としての見解は全く同じだと思うのです。

改革への動きは3つの宗教それぞれの伝統の中に根を下ろしており、またその宗教同士が合わせ鏡のようにお互いを映し出しているのだと思います。私たちは別々の世界に暮らしているわけではないのですから。たとえば改革主義者、すなわちイスラームの新思想家の1人であるソロウシュ教授は、一般的にイスラームの知見、すなわち宗教的知見というものはある時期に拡大し、このとき同時に

政治および宗教の自由も拡大すると述べています。また逆に宗教的知見が縮小する時期には、やはり政治および宗教の自由も縮小するのです。

おそらく3つの宗教はこの種の進化を経験してきたのではないのでしょうか。たとえば、ユダヤ教徒や米国あるいはヨーロッパの一部の福音主義者よりも、原理主義的組織の方が広い心を持っていたり、進歩的だったりすることもあるのです。

【司会】 それでは、クリストファーセン先生、どうぞ。

【クリストファーセン】 ありがとうございます。森先生のご質問の主旨は、キリスト教内の改革に即した改革をイスラームおよびユダヤ教の世界で実践することがヨーロッパにとっての解決策になるかどうかということだと思いますが、その行き着くところは、ある意味で宗教と世俗とが一体化したライフスタイルになるのではないのでしょうか。つまり、世俗的背景の中で信仰心を持ち続けるということです。

私個人としては、これが解決策になって欲しいと願っていますが、この点に関するローマ教皇の発言を軽く見るべきではないと思います。教皇の発言に対する私の解釈はラマダーン先生と同じだと思いますが、私はこれを手がかりにして、ヨーロッパ史におけるキリスト教という概念について考えてみたいと思います。レーゲンスブルクでの教皇の講演は、カトリック教会の階層的構造こそが(教皇は「キリスト教」と言っていましたがこれは「カトリック教会」だけを指しています)ギリシア的理性と教義の統合を体現したものであり、キリスト教としての信仰のあり方を示しているという主旨だったと理解しています。この講演を通して教皇は、ムスリムの信仰には理性が統合されていないというメッセージをイスラーム世界に向けて送ったのです。またそれと同時に、カトリック教会こそ信仰と理性の理想的な統合を体現したものと断じることによって、ヨーロッパのプロテスタント信者に対し、宗教改革に端を発する個



人主義は、キリスト教の教えとギリシア的理性の理想的な統合にはなりえないというメッセージを送りました。これは教皇の考える理想的な統合がローマ体制に依拠しているためで、カトリック教会はこのローマ体制を再利用したものに他ならないのです。つまり教皇は、信仰を守りながらも、世俗世界の事柄については自分の知識を元に理性的判断を下そうとしているヨーロッパのキリスト教徒、ムスリム、あるいはユダヤ教徒すべてに対し、宗教改革に端を発する思想ではなくカトリックの階層制こそが正しい答えであると宣言したのです。ここで取り上げられているヨーロッパのキリスト教徒というのは、中絶の権利を認め、これを擁護する立場に立つ者や同性愛者同士の結婚を認める者であり、またイタリアのカトリック教徒のように、福祉が不十分であることと、子育てと仕事を両立させたいという理由で、これ以上子どもを作りたがらない者を指します。ローマ教皇はカトリック教会を敬虔なキリスト教徒のための教会として位置づけようとしています。その指針となるのが、いかに理性と信仰を統合するかということなのです。

私がこの点をはっきりさせたいのは、決してカトリック的世界観に異議を唱えるためではなくて、私に分かる範囲で、今のヨーロッパで一体何が起きているのかを見きわめたいという思いからなのです。ヨーロッパでは、世俗主義者、すなわち信仰心などまったく持ち合わせていない人たちとカトリック教会、そして一部のイスラーム強硬派のグループがお互いの立場を受け入れているという現実があります。つまり世俗主義者は「ムスリムはとても攻撃的だ」と言うことにより、またイスラーム原理主義者たちは「世俗主義者は攻撃的だ」と言うことによって、それぞれが自らのポジションを明確化しようとしており、一方カトリック教会は1つの可能性として、第3の道として自らの存在を定めています。つまりそうした闘いの場で後に残るもの、後に残る可能性があるものこそ、森先生が示唆されたポジション、すな

わち理性的な世界観と信仰生活を統合しようとするポジションであり、俗と聖の一体化としてのポジションなのです。

【司会】ありがとうございます。世俗主義の問題については、教皇の発言の中でもヨーロッパは非常に世俗主義的になっているという批判が行われています。これは重要な問題ですので、また後で戻りたいと思います。

その前に、ソーテンドルフ先生、手を挙げておられたと思います。何か質問はありますか。

【ソーテンドルフ】限られた時間でこの問題について述べるのは到底無理な話なのですが、最初に申し上げておきたいのは、たとえば私がユダヤ教と言った場合、それは正統派ユダヤ教と進歩的ユダヤ教の両方を指しているということです。というのも正統派ユダヤ教の場合も律法やテキストの解釈は変化しているからです。一例をあげますと、この章には次のように書かれています。「子どもが親に反抗した場合、親はその子どもを町の門のところに連れて行き、罪を宣告した上で石で打ち据えて殺さなければならない」。正統派ユダヤ教では、最初にこのように定めた上で、ただしその対象となるのは12歳9カ月から13歳までの子どもに限るとしています。13歳になると成人とみなされるからです。そしてこの3カ月の間、まず3人の裁判官が、次いで23人の裁判官、そして最終的には71人の裁判官が子どもに警告を与えなくてはならないと定めています。ですから結局子どもを石で打ち据えて殺すことはないわけです。

これはごく初期の正統派の伝統ですが、次に進歩的ユダヤ教に目を転じてみましょう。これはラマダーン先生のおっしゃったことにも深く関係するのですが、聖典は確かに神の言葉ではありますが、これを文章にしたのは人間です。最近では進歩主義の立場から過去の慣習が見直され、たとえば女性の地

位についても議論されるようになってきました。歴史的事情や、また女性の保護が重視されたという背景もありましたが、今は女性が能力を存分に発揮できる時代です。またここ40年来の改革運動の結果、今やラビ学を学んでいるのは大半が女子学生であり、女性は社会のあらゆる場所に進出するようになりました。こうしたことが現代の時代に起こっているわけで、この事実を受け止めることが大切です。現在ユダヤ教内では正統派と進歩派の間に緊張があります。これはイスラームについても言えることですが、こうした緊張は、破壊行為を伴わないものであれば、良いことだと思います。私たちは違った性格を持つ別々の人間であり、確実な拠り所と自由を必要としているのですから。

人間には両極性があります。そして理念としての両極性は理解できますが、宗教ではこれが問題になることがあります。両極性とは、普遍性と排他性を併せ持つことであり、話し合いを通して互いの接点をさぐり、その範囲内で共存してゆくということでもあります。

次にローマ教皇の問題に移りたいと思います。私は先ほど、イスラーム、ユダヤ教、キリスト教、ヒンズー教、および仏教界の指導者の発言を紹介しました。敢えてヒンズー教と仏教も含めたのは、一神教を越えた視点がとても重要だと考えたからです。さてこの問題には2つの基本的権利が関わっています。1つは表現の自由、言論の自由であり、もう1つは侮辱や迫害から保護される権利、嫌な思いをさせられない権利です。いずれの権利も法律で完全にカバーしきれるものではありません。確かに法律も無関係ではなく、今回のケースで言うならローマ教皇が「侮辱されたのなら裁判を起こせばよい」と言うこともできたわけですし、ムハンマド風刺画問題ならばデンマーク首相が同じことを言ってもよかったわけです。ですが裁判所は絶対的なものではありません。私たちは自分自身の視点からこの問題を検討しなければならないのです。ですから

宗教の内部だけでなく、宗教間、および宗教の枠外で論争を尽くすべきだと思います。私たちが持つディスコースは、現実化することが可能です。私たちはこのディスコースの中で限界点を探り、存分に意見を述べ、奪われることや傷つくことへの恐れを表現しています。このヨーロッパのディスコースがとても大切であると思います。これとは別にもう1つの問題もあります。その問題とは、何人かの方が触れておられましたが、反ユダヤ主義です。反ユダヤ主義をなくすことはできないのでしょうか？そしてイスラーム嫌いを一掃することは？残念ですが、理性だけではこの問題を完全に解決することは無理だと言わねばなりません。これは理性の問題ではないからです。

たとえイスラエルが天使によって統治されていたとしても、反ユダヤ主義がなくなることはないでしょう。ですから政治情勢が決定的な要因であると考えてはいけません。一時的には政治情勢も関係するかもしれませんが、私たちが今このディスコースによって成し遂げようとしているのは、合理的な理由もないのに偏見と憎しみを持つ人たちを融合的社会へと誘い、穏健な多数派という存在を同じ社会に打ち立てることなのです。

【司会】ボザルスラン先生から手が挙がっています。どうぞ。

【ボザルスラン】ありがとうございます。問題となったローマ教皇の講演について、2点申し上げておきたいことがあります。この講演のことを聞いたとき、私は、1980年代と1990年代にイスラームの知識人たちが著した著作のことを思い出しました。この人たちは尊敬すべき立派な知識人で暴力否定の立場を取っている人たちです。その基本的な考え方が述べられている一節をちょっと読ませていただきます。「私たちの聖典と伝統を見れば分かるように、私た





ちは暴力を否定している。私たちが目指すものは調和と平安なのだ。それに引きかえキリスト教の歴史は戦争に血塗られているではないか。第一次世界大戦しかり、第二次世界大戦しかり、そしてホロコーストしかり」。

これらの知識人たちはイスラームにも血塗られた歴史があることをすっかり忘れ去っています。ローマ教皇もこれとまったく同じ過ちを犯しているのではないのでしょうか。つまり私たちの伝統、すなわちキリスト教を基本とする伝統に触れる一方で、イスラームの伝統ではなくその歴史を取り上げてしまった。伝統と伝統、あるいは歴史と歴史を比較するのではなく、キリスト教の伝統と規準をイスラームの歴史と比較してしまったのです。これはとても重大な認識論上の問題であると思います。ですが私もラマダーン先生がおっしゃったように、ローマ教皇はムスリムが暴力的だと言いたかったわけではないと思います。暴力の問題はごくささいなことで、むしろキリスト教をいかに定義するか、再定義するか、そしてキリスト教圏としてのヨーロッパをいかに再定義するかという点が主眼となっていたのではないのでしょうか。暴力をめぐる発言は確かに象徴的な問題になっていますが、主要な点ではありません。

【クリストファーセン】今おっしゃった点については、全員が同じ意見だと思います。教皇の発言の主旨がキリスト教圏としてのヨーロッパを再定義することだった、ということですね。ただ私は教皇の発言にはもう1つの意図があったと考えています。教皇は、規則正しく教会に通い、教会の規範に準じて暮らす少数の敬虔な信者に属するものとしてヨーロッパのキリスト教を再定義しようとしたのではないのでしょうか。そして理性と信仰の統合が可能であることをヨーロッパの世俗社会に体系的に示すための機構として、さらにはキリスト教ヨーロッパ、すなわちヨーロッパという機構の代弁者としてカトリック教会を位置づけようとしたのだと思います。私の見解では、

カトリック教会はもちろん信者の獲得に努めている訳ですが、その一方で教会のルールにきちんと従おうとしない者や、ヨーロッパのプロテスタント圏に属する者を自分たちの代弁者とはみなさず、巧妙に置き去りにしているように思います。

【ソーテンドルプ】私たちはローマ教皇の発言ばかりに氣を取られていますが、同時に一般の人たちの方にも注目すべきだと思います。ラマダーン先生が先ほど発言されたことに対し、人々はどのように反応しているのでしょうか。政教分離は私的領域の宗教の問題だというのなら、公的な領域ではどのような意味を持つのでしょうか。ここでオランダの事例をご紹介したいと思います。かつてオランダでは議会の開会に先立ち、数少ないキリスト教徒、つまりカトリック教徒とプロテスタント教徒のために礼拝を行っていた時期があり、礼拝には首相が出席することもありました。ところが7、8年前にキリスト教の礼拝だけが行われていることに疑問の声があがり、その結果今ではユダヤ教、キリスト教、イスラーム、ヒンズー教、そして人道主義の信奉者のための儀式が行われるようになりました。礼拝というよりも瞑想のようなものですね。ですから6年ほど前からは、議会の開会に先立ち、首相と閣僚、議員、それにあらゆる宗教の関係者が一堂に会し、ムスリムやユダヤ教徒などが共に友愛や寛容といったコンセプトについて考えるようになっています。かつてはそうしたことが教会で行われていました。このようにして突然、オランダの政治の中核で公にスピリチュアルな行事が行われるようになったのです。何しろ議会開会直後には女王の演説があるわけですから。そこで提案なのですが、こうしたことを世界各地の議会でも取り入れてみてはどうでしょうか。たとえばイスラエルの議会で、あるいはパレスチナの議会で、ユダヤ教徒とムスリムとキリスト教徒が一堂に会し、礼拝というか、瞑想のようなことを行う場面を想像してみてください。そうすれば、ローマ教皇の影響力は制限され、独立した世

俗国家で教皇の発言がこれほど注目を浴びることはなくなるでしょう。私たちの力でそうしたことを実現できるのです。

【司会】今、9月に行われたローマ教皇のイスラームについての発言がかなり議論されました。ヨーロッパで非常に問題になっているということが分かりました。しかし、日本のマスコミではほとんど取り上げられていない。言論界でもほとんど取り上げられていない。また、取り上げられているものについて、私は幾つか見ましたが、非常に偏ったものでしかないという印象を持ちました。情報不足、分析不足という印象を持っております。

ちょっと「手前みそ」の宣伝で申し訳ないですが、私もこの問題について発言をしております。そのコメントを一神教学際研究センターのウェブサイトに掲載しております。教皇の発言の背景は何なのか、問題がどこにあるのかということを書いておりますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。

次のテーマに移りたいと思います。それは、今のディスカッションの中にも出てきておりましたけれども、ヨーロッパにおける世俗性という問題です。アメリカとEUを比べた場合、どちらも近代化を遂げた国であるにもかかわらず、アメリカは、今日もなお宗教的社会であり続けているのに対して、ヨーロッパは非常に世俗化が進んでいる。その問題について、ヨーロッパというアイデンティティを考えるうえで、皆さんはどのようにお考えなのか。今日は3つの宗教を代表するような形でここで話していただいているわけですが、いわゆる世俗性、あるいは非宗教的な勢力に対して、一神教として何か共同して発言していくことができるのかどうか。先生がた、何かご意見があればお聞かせ願えればと思います。どなたからでもけっこうです。クリストファーセン先生。

【クリストファーセン】議論の口火を切ることを認めていただき、ありがとうございます。というのも、この

問題については、ぜひともはっきりさせるべき点があるからです。森先生のご質問の主旨はヨーロッパの世俗化についてのことだと思いますが、世俗化について考える際に私が注目するのは、ヨーロッパ人が信仰心を持たず、教会などに通わなくなったという事実です。つまり宗教はもはや個人のアイデンティティになり得ていないということですね。これに対して世俗主義を取り上げる場合は、たいていの学者がそうするように、公の場、社会における宗教機関、法的機関、行政機関の関係に注目します。つまり世俗主義とは神権政治に対立するものとして理解されているわけです。神権政治の場合は法的機関や行政機関よりも宗教機関が力を持っていますから。この2つの概念を区別することが必要であると思います。世俗主義というのは、宗教機関と法的・行政機関を区別するという概念で、たとえば米国など宗教色の強い地域にも当てはまりますが、世俗主義というのはスカンジナビア諸国のように非常に世俗的な社会を指すものだと思います。ありがとうございます。

【司会】今のご発言について、少し再質問したいと思います。私も、世俗化と世俗主義は違うと思います。クリストファーセン先生がおっしゃるように、世俗主義というものが今日のヨーロッパにおいてかなり大きな影響力を持っているというのは現実であると思います。それについてどのようにお考えなのかということについては、いかがでしょうか。

【クリストファーセン】宗教的な世界観はあくまで個人的なものと位置づけ、人間主義的、世俗的世界観の伝統をヨーロッパ人共通のアイデンティティにしようという意図があるのではないのでしょうか。何年か前になりますが、トルコのある裁判について考える会議に出席したことがあります。福祉党(Refah Partisi)をめぐる裁判です。この裁判の争点となったのは、福祉党を禁じることができるかどうかとい



うことで、トルコは結局解党を命じました。争点の1つとなったのは、宗教の自由の名の下に別個の法制度の創設を認めるべきか否かという点でした。世俗的法制度と宗教的法制度というパラレル社会の是非が問われたわけです。会議では、宗教は私的領域にとどめるべきものなのか、それとも法制度や政治に影響を及ぼすことを認めるべきなのかという点が議論され、ある参加者が次のような意見を述べました。猫を片隅に追いやれば、いつか虎に変身するかもしれない。つまり公的領域から完全に宗教を閉め出してしまえば、いずれその宗教は私的領域で力を蓄え、パラレルな社会を作り出してしまおうだろうということです。それよりはむしろ公の領域で宗教を政治的、法的議論に関与させ、オープンに法的、政治的解決策を話し合うようにした方が良いということです。

【ソーテンドルプ】私たちは今日のヨーロッパにおける非常に重要な議論に足を踏み入れていると思います。私たちが今、そして今後、世俗主義をどのように捉え、考えていくのかということですが、わたしはこれは双方向のプロセスだと思っています。イスラムの台頭が、世俗主義に対する共通の理解に異を唱えている、あるいは少なくともそれに疑問を呈していることは明らかだと思います。というのもイスラムと世俗主義は相容れないものだという視点があるからです。

私たちは2つの進化について理解すべきだと思います。1つは世俗主義をイスラムがどのように捉えているかということで、この点はとても重要です。なぜならイスラムの間では、世俗主義は、イスラム国家における歴史的体験を元に、反宗教的あるいは非宗教的なものとして認識され理解されていたからです。またトルコやシリア、あるいはイラクでもそうですが、いわゆる世俗的政府というのは、民主主義を欠いた世俗主義、独裁政治として認識されています。宗教のない状態ですね。

ヨーロッパにやって来た第一世代のイスラムにとっての世俗主義とは、宗教に相対するものであり、自分たちに反するものでした。彼らは世俗主義という概念を常に自分たちを否定する概念とみなし、これを拒絶してきたのです。これに対して今日のヨーロッパに暮らす第二世代以降のイスラムは、全く違った角度から世俗主義を捉えています。つまり自由や中立性など、ヨーロッパ社会にとっての世俗主義の意義という視点から、また古い伝統を踏まえた上でこの概念を再発見し、再検討しようとしているのです。この概念を社会状況にあてはめ、その内側から理解しなくてはならないことが分かってきているのだと思います。

問題となるのは、最近の新たなイスラムの台頭に伴い、ヨーロッパで世俗主義の再定義に向けた議論が再燃し、法律のあり方が見直されているということです。世俗主義的社会、すなわち世俗社会の市民には主に2つのとても重要な権利が認められています。良心の自由と信教の自由です。ところがイスラムをめぐる昨今の情勢を受けて、国家のディスコースの中でこうした前提が見直され、再考され、場合によっては覆されようとしています。たとえばフランスのケースを考えてみましょう。コモン・ローは確かに世俗主義的であり、第一世代のイスラムは世俗主義を否定しました。これに対して新たな第二世代は世俗主義に対しては理解を示したものの、新しい法律に関してはそうではありませんでした。公立学校を対象としたこのような法律は、他にはみられないフランス独特の例外的な対応であり、ほとんどのヨーロッパ諸国はこうしたやり方を疑問視しています。

一方で、たとえばスイスでも第一党であるUDC(国民党)が、モスクを目立たなくするためにスイスの法律を改正しなければならないと訴え、ミネレットの増築を禁止する法案を提出しています。またヨーロッパの国民は、世俗的な法律に従うことを相手に求めています。これは世俗主義を平等に実践すると

ということです。私たちの前には2つの相反する現実があります。ヨーロッパのイスラムは世俗主義の意味について理解を深めていますが、一方イスラムの存在を脅威に感じる側は、その脅威から逃れるためにときとして法律を改正しようとしています。そうすることで世俗主義の意味を変えようとしているのです。たとえば中立性という中心的な概念がありますが、公共の領域における中立性とは何を意味するのでしょうか。それは決してモスクを隠すという意味ではありません。中立性とは、すべての宗教を尊重するということで、これはとても重要です。2番目は多元性です。多元性の定義とその実践が一致しないのであれば、この多元性と言論の自由ということを考えなくてはならないと思います。とくに風刺画問題を機に、言論の自由は絶対であるという意見をよく耳にするようになりましたが、言論の自由は決して絶対的なものではありません。好きなことを何でも言っても良いというのは間違った考えです。現に人種差別的な発言を行っては行けないという規則がありますし、たとえばホロコースト、ユダヤ人抹殺を否定することを禁じている国もあります。フランスもそうです。つまり言論の自由については一部これを制限する法律があるということです。ですがイスラムの問題があるために言論の自由が絶対視され、またイスラムはノーと言い、信仰を守るために新しい法律が必要だと訴えています。実際問題として新しい法律など必要ではなく、また絶対的な言論の自由などというものも存在しません。ですから世俗法を本来あるべき姿で実践するという基本に立ち返り、言論には制約があることを訴えることが必要だと思います。またイスラムには、宗教軽視は世俗社会の風潮であり、自らはそうした風潮から賢く距離を置きつつ、そのような意見があることも受け入れるよう求めるべきでしょう。つまり中庸を心がけ、制約について検討するとともに、すべての宗教が一同に会し、決めつけや反目を避けながら、世俗主義についての理解を深めることが必要になると思います。

【司会】残り5分になってしまいました。最後にそれぞれの先生に2分ずつさしあげたいと思います。ヨーロッパにとっての自己理解ということを考えていくうえで、このディスカッションを行った後に、何がいちばん重要であるとお考えか。それぞれ2分ずつお話ください。それでは、ボザルスラン先生から。

【ボザルスラン】世俗主義、そしてヨーロッパと米国の違いについてのご質問にお答えしたいと思います。まずヨーロッパの経験といっても、これをひとくりにすることはできないと思います。たとえばデンマークやスウェーデンの事例をフランスの事例と比較するのはちょっと無理があるでしょう。つまりヨーロッパは今も非常に多元的であるということです。

第2に、ヨーロッパとアメリカの違いですが、これは私たちが想像するほど重要なことではないと思います。アレクシス・ド・トクヴィルは、ヨーロッパ人はアメリカを自分たちの過去だと考えている、という言葉を残しましたが、これは間違いです。アメリカはヨーロッパの未来なのです。今日ヨーロッパの社会では色々な変化が生じています。これは「アメリカ的な」変化であり、変革です。とくに世俗主義と宗教界の状況に関して言えば、これはとても重要なことだと思います。

3点目ですが、ラマダーン先生とは少し意見が違いますが、私は公共の領域というものは存在しないと考えています。実際に存在するのは様々な空間、すなわち対立の空間、統合の空間、目に見えるものの空間、コミュニティやコミュニティ構造の空間で、こうしたことを総合して、ヨーロッパは過去20年で多くの変化を素早く遂げてきたと言えるのです。ヨーロッパにはキリスト教やイスラムの自治体が存在します。こうした自治体は様々な空間に所属していますが、国の法律にしばられているわけではありません。デジュール(法律上)の問題であると同時に、デファクト(事実上)の問題でもあるからです。ヨーロッパではこのように



多くの変化が生じており、私たちはこれを長期的に見守ってゆかねばなりません。ですが米国とヨーロッパの違いについては、私たちが想像するより理論上の重要度はずっと低いのです。

【司会】では、ソーテンドルプ先生。

【ソーテンドルプ】EUに暮らすユダヤ教徒の人口は100万人を少し上回る程度で、マイノリティ中のマイノリティだと言うことができますが、ユダヤ教徒の歴史と経験は非常に深く、対話を進めてその共有化をはかることがとても大切だと思います。再びスイスの事例を紹介しますと、スイスではシナゴグを市の中心部に建設することが長い間禁止されていました。シナゴグは人目につかない場所にひっそりと建設しなければならず、また「勝利の教会」よりも建物が高くなってはならないとされていたのです。また政教分離が実践されているものの、教会とシナゴグ、またはモスクの分離、政治と宗教的・精神的生活の分離が行われているわけではなく、むしろその重要性がますます高まっていますが、私はこれには賛否両方の意見を持っています。アメリカでは宗教的な原理主義が政治にも介入しようとしています。ヨーロッパでは多元主義と開放性からして、その中道に行く可能性があります。これには吉凶両面があります。

最後に申し上げたいことは、宗教には良い面も悪い面もあるということです。歴史を見ても分かる通り、宗教は数々の暴力行為や戦争を引き起こしてきました。その一方でヒューマニズムと一体化した精神性によってのみきちんとした社会を作り上げることができるのも事実です。ですから内部でもっと対話を重ね、共存の道を探ることが重要になると思います。最後にド・フリース氏のことを紹介して発言を終えたいと思います。ド・フリース氏はオランダ政府の一員として欧州憲法の起草に加わった人物ですが、氏が今何をされているかご存知ですか。

実は現在EUのテロ対策のコーディネーターとして活躍されているのです。そしてその信念というのが、宗教対話と共存、つまり多元的な対話と共存こそがテロ撲滅の最善策であるというもののなのです。世界中の警察が動いても、安全な世界を作ることはできないということです。

【司会】クリストファーセン先生、どうぞ。

【クリストファーセン】この場では意見の一致が多すぎるようですね。というのも今おっしゃったことは私の言いたいことでもあったからです。ヨーロッパ人はある意味、ベルファストでのカトリック教徒とプロテスタント教徒の抗争や、ムスリムとカトリック教徒が対立したボスニア紛争の再来を恐れています。すべての国民が宗教とは無関係に平等に扱われるのではなく、キリスト教徒、ムスリム、ユダヤ教徒として色分けされることを恐れているのです。このような単一の宗教的アイデンティティへの色分けを避ける方法が2つあります。まず宗教的アイデンティティを私的領域に押し込めることが解決策になるということが一部の知識人、政治家、学者の間で主張されています。つまり法的機関、行政機関、教育機関に宗教色を持ち込まないことが政教分離である、という考え方です。

これに対してこれとは正反対のことをすべきだという意見もあります。宗教的アイデンティティを前面に押し出して明確化し、それと同時に理性と信仰の違いを認識した上で、その両方を公の場で概念化すべきだということです。

私自身は後者の意見に加えて、宗教界の内側か外側に関わらず、ヨーロッパ人が人権をベースにした行動規範を持つことが解決策につながると考えています。

【司会】では最後に、ラマダーン先生、お願いします。

【ラマダーン】ヨーロッパについて話し合う中で、また前にアジアと米国についても意見のやりとりがありましたが、私たちがここに集まった理由を考えると、それがとても大切ではないかと思います。ヨーロッパの現実をここから遠く隔たった異国の現実として捉えることもできますが、グローバル化した世界では、実は世界中が同じ体験をしているのであって、ここで起こっていることを見聞きすると、私たちは皆、まったく同じ問題を抱えているのだということが分かります。ここ日本でも、現代社会の問題にいかに向き合うか、そして自分のアイデンティティ、文化、宗教をいかに守るかということが問われています。私たちはみな同じ問題に直面しているのです。そして本日の議論から、2つの主要な道が示されたのではないかと思います。1つは心を閉ざし、自分とは異なる存在に怯えるということ。そしてこのグローバル社会のただ中にある多元的社会には3つの大切なものがあることを理解することです。今日、自分の側の努力が必要だということに気づかなければ、他者と共存することはできません。問題に向き合うためにはまず「知る」ということが必要です。ヨーロッパの人々は、ときとして私の存在に怯えることがあります。私自身が怖いからではなく、自分が何者かということが分からないからです。ですから自分のことが分かっている相手に出会うと怯えてしまうのです。

日本でも自分が何者で、何を望んでいて、どのように問題に対応し、どのような発言をするのかを知ることが重要なことではないでしょうか。自分に自信があれば他者とも堂々と渡り合うことができます。自分を知ることがとても重要です。他者と自分を区別しなければならぬという強迫観念としてアイデンティティを捉えてはいけません。私は複数のアイデンティティを持つことをお勧めしたいと思います。文化的、宗教的アイデンティティは1つだけではなく、幾つも存在するのだということをぜひとも理解すべきでしょう。

最後に研究レベルの取組について。昨今、相互理解の醸成に向けた取組が強化されています。こうした研究者レベルの取組は確かに必要なことですが、これをさらに一般のレベル、草の根レベルで実施することも必要だと思います。人々が協働し、社会のために力を合わせることによって相互理解を深めるという取組がいま求められているのです。ディスコースや理論が変化することはありません。これは草の根レベルの話ですが、自分の国で、異なる背景を持つ人たちと日々どのくらい関わっているかを自問自答してみることが大切だと思います。そうすることが机上の理論ではなく現実の生活において、多元性への道を開くことになるからです。私自身、ヨーロッパで日々様々な人と接していますが、その経験が自分の心や気持ち、精神性、また知識や問題に対する意識的取組に反映されています。ですからヨーロッパの経験を自分とは関係のないものだとして受け止めないでください。これは皆さん自身の存在、そのアイデンティティ、そして未来の中心なるものなのです。ありがとうございました。

【司会】どうもありがとうございました。残念ながら、時間が来てしまいました。もう一度、4人の先生に心からの感謝の拍手を送りたいと思います(拍手)。

国際ワークショップ 第2セッション

「ムスリムにとってのヨーロッパ」

司 会：中 田 考（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター幹事）

発 表

ターリク・ラマダーン

（ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク〈ブリュッセル〉）

「ムスリムにとってのヨーロッパ」

コメンテーター：内 藤 正 典（一橋大学大学院社会学研究科教授）

コメント・ディスカッション



ムスリムにとってのヨーロッパ

ヨーロッパ・ムスリム・ネットワーク(EMN)〈ブリュッセル〉

ターリク・ラマダーン

Tariq Ramadan

ありがとうございます。ここにお招きいただき、ヨーロッパの現実について話し合い、また、日本にいらっしゃる皆さんと意見を分かち合う機会をお与えくださったことに再度感謝いたします。というのも、ここに来て問題についてビジョンをいただくだけでなく、私が思っていることですが、ヨーロッパで体験したことを基に、日本およびアジアで皆さんが取り組んでいることを目にし、意見を分かち合い、私たちの問題に関する傾向や解決策を見つけようとすることは本当に重要だと思うからです。このような理由で、お招きに対し謝意を表します。

私の目的は、問題を検討することですが、話を分かり易くしたいと思いました。私が担当するこのセッションの導入部では、今日のヨーロッパとムスリムについて3点述べます。最初の部分では、ヨーロッパで暮らし今やヨーロッパ人となっている今日のムスリムの責任についてお話しします。2つ目の部分は主に、問題に取り組む際の、ヨーロッパ社会の深く重要な責任についてです。その責任とは、解決策を見出し、破壊的な思惑に陥るようなことが続けば起こり得る分裂の促進を食い止めることです。また、私たちは、その存在、貢献、市民権を構築しつつある何百万人ものヨーロッパ系ムスリムに対する認識を持つ必要もあるのです。つぎに、ともにできること、ともに遂行し促進しなければならないことに関する短い結論を提示します。ですから、私の導入部は3点あります。最初はムスリムが何をすべきか、次がヨーロッパ社会によって何が成されるべきか、もちろん、それはムスリムと協力してのこ

とです。そして結論です。

導入部3点の最初の1点で私が言いたいことは、私たちは新しい現実と携わっていますが、実際は、新しい現実でもあり古い現実でもあるということです。しばしば、私たちはヨーロッパにおける新たなムスリムの存在について語ります。第二次世界大戦後、新たなムスリムの存在を目にするようになったのは事実です。しかし、気を付けなければなりません。この新しいムスリムの存在は、ヨーロッパにはかつて古いムスリムの存在があったということの意味を以て、それは中世にまで遡るものです。私たちが研究している多くの分野でこの古いムスリムの存在が事実であり、事実であったことを理解しておくことは本当に大切なことなのです。法律の分野、哲学の分野、科学の分野などです。イスラームとムスリム、イスラームの伝統とムスリムの哲学者、科学者、思想家たちが、いま私たちが語っているヨーロッパのアイデンティティを構築する一端を担ったということ私たちはしばしば忘れがちです。それを忘れないでいることは大変重要なことです。

私は2つの世界大戦の間と、特に第二次世界大戦後のこの新しいムスリムの存在について話していますが、これはかなり最近の、ほんの一世代前からの現象であり、ヨーロッパへの移住や入植ということについて言えば、本当につい最近のことなのです。私たちが言及しているヨーロッパ系ムスリムはまだ二世です。ただし、英国とフランスではその存在はより古く、ヨーロッパのムスリムの二世だけでなく三世以降、五世でさえ存在します。問題は、彼

らがそのように認識されていないことです。主にフランスで行われている議論は、まるで彼らが外国から来た人々であるかのようです。そして、7月7日以降は英国でも同様で、移民の英国人、移民のフランス人などと呼ばれています。本当の問題は、認識の問題です。四世代の後になっても移民という経歴を付け足さなければならないのであれば、一体何世代すれば真の国民になれるのかと自問せずにはられません。結局のところ、私たちは皆ヨーロッパに移住して来た者たちなのですから。実際は移住によってできた大陸なのです。

通常は、二世代すれば国民となります。しかし、北アフリカ人に関して私たちは未だに彼らが移民であるということをつけ足して語ります。つまり、彼らがまだ異質の者、外国からの者であり、本当のヨーロッパ人ではないと見なされていることを意味します。このような理由で、私はもはや「ヨーロッパにいるムスリム」についてお話ししません。「ヨーロッパ系ムスリムである」というのは、ヨーロッパにいるムスリムではなく、ヨーロッパ人であるムスリムのことです。私は、ヨーロッパ系ムスリムで、ヨーロッパで生まれ育ちました。この違いを理解することは非常に重要です。それは、私は宗教的にはムスリムであり、文化的にはヨーロッパ人、国籍はスイスということで、これは本当に重要なことであり、今やヨーロッパ市民の何百万人がこうなのです。二世代、三世代後にこの新たな現実があり、また、イタリアのように多くのヨーロッパの国々では一世も存在するわけです。私はローマから戻ったところなのですが、例えば私たちが15年、20年前にフランスで体験したことが、イタリアで新たに体験されていて、そこから新たな疑問が出ていることが分かります。彼らが新しいのは、古い社会や国が、存在するこの移住者らを統合しともに暮らすということに関して(イタリアが他国と)同じレベルに至っていないからです。

しかし、この新たな移民の存在に伴い新たな疑問が生じること、それが私の発表の2点目です。例

えば、世俗社会について新たな疑問が生じる、市民権や律法の規則について新たな疑問が生じると、ムスリムの考え方は、ムスリムの学者やコミュニティが聖典を読み直すことでそれに対応するというものです。新たな疑問は、源を新たに読み返すことを意味します。ですから、そこに存在するのは、疑問の対象となっている文脈(背景)と、忠実でありたいという願望の対象となっている文章との間の弁証法的プロセスです。アブラハム宗教に携わる者はみな、新たな疑問に直面すると聖典を読み返します。ユダヤ教徒の人たちもまったく同じですし、キリスト教徒もそうです。そして、ムスリムにとってもそうであり、新たな疑問、新たな読み返し、新たな答えとなり、文章と文脈に対するこの二重理解の間の弁証的プロセスとなるのです。このことが、現在、ムスリムの間で起こっているのです。

まず新しい文脈で暮らせるようになり、将来を築いて行くためには、ヨーロッパ人としての私たちの未来はどうなるのかという疑問があります。そこでこのプロセスとなり、それが非常に重要なことであるということ、ヨーロッパ内の同胞によく知らせる必要があります。これはアジアでもまったく同じです。現状維持というものは存在しないのです。史上のある一瞬の図式を取上げて、彼らが答えであると考えるはいけないのです。それではだめです。物事は動いています。非常に速く動いています。ですから、ムスリムであるヨーロッパ人たちの考え方の中にある声なき革命について語ることに躊躇はありません。彼らは新しい疑問に取り組んでいて、新たな答えを見出す必要があるという意味において、それは声なき「革命」なのです。なぜ「声なき」革命かというと、目に見える革命の場合は、しばしば破壊的な人々がいて、その少数に囚われてしまった結果、変化と新たな答えを持った西洋やヨーロッパのムスリム・コミュニティ内で起こっている主流の動きを見逃してしまっているのです。

3つ目の点もまた非常に重要なのですが、ムスリ



ムによる公的な議論の主流となっている主張、そして、それは今でははっきりとしているのですが、その主張とはヨーロッパが彼らの母国であるということです。私たちの認識では、自分たちが暮らしているのは母国以外のどこでもありません。「ダーハル・ハルム」(Darul harb)や「ダーハル・イスラーム」(Darul Islam)ということは、話の流れによっては出てくる場合もありますが、それはムスリム・コミュニティの周辺部でのことです。現実には、主流のムスリム指導者、組織、そして一般市民でさえもが、自分たちがフランス人、英国人、イタリア人、スペイン人、そしてヨーロッパ人であるという認識があります。ですから、ヨーロッパはムスリムである市民大半の母国となりつつあり、そして母国であるわけです。新たな移民の波は今もそしてこれからも続くでしょうが、これが大多数のムスリムに関する事実であるということを理解しておく必要があります。

ヨーロッパ人である人々がいて、同時に移民が移住してきていること、そして、そこには2つの考え方があるということを理解するのはとても重要なことです。ムスリムの大多数にとって、ヨーロッパは母国なのです。これらヨーロッパを母国とするムスリムたち、ヨーロッパ系ムスリムらが、新しい移民を統合して行くプロセスで一役買えるということを理解しなければなりません。これは自然で前向きな考え方です。ムスリムを使って移民として新たに移住して来るムスリムたちを歓迎するのです。

しかし、別の考え方も可能で、それは恐怖を感じたり、懸念があるときに利用されるのですが、居住者や市民に疑惑を生じさせるために移民を利用するというものです。例えばフランスのある病院で、また別の事例ではイタリア、そしてスイスでのことです。新たな移民である女性が男性の医師に診てもらおうことを拒否したのです。するとその男性医師は反発したのです。この例を使って、「ほら、ムスリムたちは私たちの価値観を受け入れないのだ」と言うわけです。というのも私たちの価値観では、医

者や医療に関しては男女を問わず受け入れるということになっているからだ。ですから、新しい移民を利用してムスリムは同化できないものだということを示そうとしているのです。しかし、それは逆でなければならぬのです。つまり、既存のムスリム、この社会を理解しているムスリムが、新しい移民たちがより同化しヨーロッパの文化や風習を理解できるようにすべきなのです。以前から(ヨーロッパに)暮らしているムスリムたちは、その宗教に対しても別の理解の仕方を持っているので、そのプロセスを助けることができるのです。移民の話を使ってムスリムの存在を疑問視するというのが非常によく行われています。しかし、私たちはムスリムの存在を利用して、移民たちがよりうまく統合できるよう助けてもらうべきなのです。そこで、何を一体欲しているのか、その選択肢をはっきりさせなければなりません。まず、信頼を構築したいのか疑惑を育てたいのか、です。これは政治的な議論です。単なる単純さや無知によるものではありません。一部の人々はこれを利用してムスリムの存在に問題があると言おうとしています。ですから、これが3つ目のポイントです。そして、大多数のヨーロッパ系ムスリムにとって、ヨーロッパは今や彼らの母国であり、母国であり続けるということを理解するのは大変重要です。

では、第一のポイントです。ムスリムたちが批判的、自己批判的になり、新たな答えを出すべき問題のいくつかに焦点を当てたいと思います。これは不可欠なことです。まず、ある大陸にやって来た場合、自分が暮らしている社会の一員として認識しなければならないことが2つあります。1つは記憶です。2つ目は法的枠組みです。これは非常に重要なことです。この問題について私が書いた最初の本は『世俗社会の中のムスリム』でした。その本の副題は「責任と権利」で、最初に来るのは責任であり権利ではありません。責任の具体化ということ、すなわちある社会の中にいるということは、ある記憶と携わっているということを忘れてはいけないということです。この記

憶がアイデンティティと文化を形作るのです。これを否定することはできません。「いいえ、私にはこれはどうでもいいことです」と言うことはできないのです。必ずそれには携わらなければなりません。というのも、結局その社会の一員になりたいのであれば、その言語をマスターするだけではなく、記憶の感覚、その記憶から派生する集団心理も持たなければなりません。ですから、それは大変重要なことです。それはまた、制度というものを知り、法的枠組みも知ることです。法律があり司法があれば、それを尊重しなければなりません。

最初に私が明言するのは、必ずしも容易なことではありませんが、今では現実として異論なく認識されていることで、ヨーロッパの国々では法律の規則と民主主義的プロセスを尊重しなければならないということです。これが私たちの論議の出発点となります。つまり、ある国、ある民主国家、法律の規則に基づいた社会で暮らしている場合、その暮らしている社会の法的枠組みを尊重し法律に従うことは、ムスリムとしての義務の一環なのです。そして、これは本当に重要なことです。貴方の宗教の基本が尊重されている場合ですが、2つの主要な理念、すなわち良心の自由と信教の自由というものがあってこそ、宗教の基本が尊重されます。ヨーロッパのすべての憲法や法的枠組みを見ると、すべてのヨーロッパ諸国、またはカナダ、アメリカ、オーストラリアを含む西洋諸国、そしてここ日本においてでもですが、明らかことがあります。それは、信教の自由と良心の自由です。良心の自由は個人の権利で、信教の自由は集団としての権利です。そしてこれらは私たちの社会で保護されている権利であり、これら2つの基本的権利を得た場合には、自分が暮らしている国の法律を尊重しなければならないということの意味し、それは大変重要なことなのです。

2つ目はアイデンティティについて深く議論します。貴方のアイデンティティとは何ですか。「おまえのアイデンティティは何か」とムスリムたちは、何十年の間、

問われ続けています。「貴方はまず、第一に何なのですか」と。今でも例えばフランスでこの質問がされます。私は3日前イタリアでこの質問を受け、一昨日はオランダで「貴方はまず、第一に何なのですか。貴方の第一のアイデンティティは何ですか」という質問を人々が受けていました。多くのムスリムは、「私のアイデンティティは、ヨーロッパ人である前にムスリムであることです」と言っていました。質問の仕方によって、引っかけり易くなり得るものです。このアイデンティティの問題を理解することは本当に大切なことだと思います。このアイデンティティに対する強迫観念により、私が「アイデンティティの危機」と呼んでいるものが起こりつつあります。ヨーロッパで私たちの中にいまアイデンティティ危機が起こっています。私たちはどのように自分のアイデンティティを定義するのでしょうか。ところで、グローバリゼーションの時代に皆さんが日本人としてする話の中でも、自分たちのアイデンティティが何か、文化的アイデンティティとは、宗教的アイデンティティとは、と自問されているのだと思います。これは世界的な現象なのです。

私たちには自分のアイデンティティを単純化する2つの方法があります。私は単にムスリムだ、私は単に日本人だ、単にヨーロッパ人だ、または、私はまずムスリムで次にスイス人だとかです。これはとても危険だと思います。ムスリム・コミュニティが求められている主な課題の1つは、複数のアイデンティティで自らを定義できるようになることです。簡単なことではありません。本当に難しいことです。しかし、これはこの議論の出発点となっていることですが、今日のムスリムの大多数は、自分は完全にヨーロッパ人であると同時に完全にムスリムであると言うことができ、それには何の矛盾もありません。少なくともその2つの次元を受け入れてもらっているのです。しかし、それだけでは十分とは言えません。未来のためにはさらに前進しなければならず、それは難しい課題です。私は、インド人でノーベル平和賞受賞者、現在ハーバードとケンブリッジで教えてい





るアマーティア・センとこれについてギリシャで1度話し合ったことがあります。彼に、この「私はまずムスリムなのかスイス人なのか」と尋ねることのばからしさについて話したことがあります。というも、それは分野に依るからです。市民政治に携わる場合、私はスイス人です。また、理念や人生の意義について語るとき、私はムスリムですが、私のパスポートが私に人生の意義を与えてはくれません。セン氏自身、とても良い答えをお持ちでした。「その点について貴方とまったく同感です」と彼は言い、「ほら、人が菜食主義者の詩人であったとすれば、同時にその両方であり得るのです。食へに行くときは、自分が詩人であるということを言うときではありません。食えるときは、その人はまず菜食主義者なのです。しかし、詩人の集まりに参加するのであれば、そのときは自分が菜食主義者であると言うときではありません。詩人なのです」。ですから、人が何をしているかに依るのです。ひとつの分野では第一に、ある者であり、別の分野では第一に、別の者であるということが可能なのです。

私は自分のアイデンティティについて尋ねられますが、それはひとつのプロセスなのです。最初のステップとしては、ムスリム・コミュニティ内ではフランス人でありムスリムであることに矛盾はありません。英国人であれ、デンマーク人であれ、矛盾はありません。両方であって構わないのです。しかし、この複数アイデンティティという感覚を育てて行く必要があります。私は、国籍ではスイス、宗教ではムスリム、文化的にはヨーロッパ人、記憶または伝統ではエジプト人、理念としては普遍主義者、そして更に養子縁組によってモロッコ人でもあります。ですから、6つの異なる側面があるのです。これが何故そんなに重要かというと、これにより人は多元的な社会の一員になれるからです。アイデンティティを単純化してしまうこともできます。ムスリム・コミュニティ内から(複数のアイデンティティを促進すると)発言できるということも大切です。というも、人のアイデンティティを単純化し

てしまおうとする直解主義者のグループと伝統派のグループがあり、彼らは人に対して「貴方はこれだけです。この文化しか貴方にはありません」と言っているからです。先頃イスタンブールで、あるムスリム学者と話をしました。私が複数アイデンティティの話をしますと、彼は、「ちがう、ちがう、私たちの唯一の文化はイスラームだ」と言いました。それで私は、「これは非常に危険なことです」と言ったのです。何故だかお分かりですね。そのようなアイデンティティは、反発として生まれたアイデンティティであり、開花して行くアイデンティティではないからです。

では、それについて少し話を続けてみましょう。この問題から派生するもう1つのことがあると思います。忠誠心と帰属意識です。私はヨーロッパが私の母国であると感じていますが、帰属意識は法律を守るだけで得られるものではなく、母国と感ずることによって育まれるものであり、それは法的な統合や社会的な統合だけではなく、心理的な統合から得られるものです。例えば去年の7月、英国でのテロ攻撃に関与した若者らを考えてみてください。彼らは社会的には統合されていました。問題は知的小および心理的統合にあったのです。社会的には非常によく統合され教育も充分受けていました。彼らが無知だったわけではありません。社会の端のほうに存在していたわけではないのです。

しかし、例えば彼らがビデオで語っていることを聞くと、どこに問題があったかが分かります。それは心理的で個人的な統合の問題です。自分が母国に居ると感じる事ができなければ、彼らは同じ国民である英国人に対して「おまえらは私の兄弟たちを殺している」と言い、それは「私は貴方たちに属さない」ということなのです。貴方がいて、私がいる。我々に対して彼らがいるのです。この心理的統合は、帰属意識、つまりこれは自分の社会だということを構築することです。これは教育に関わることです。私たちは教育を何とかしなければなりません。西洋、いや、西洋だけでなくあらゆる所でのイスラーム教育を

改革する必要があります。それで、西洋では、国の文化を統合し、国の言語を統合し、ムスリムの存在を制度化するためには、将来的にはヨーロッパで育ち、ヨーロッパの制度を知り、それがどのように機能するかを知っているイマームがヨーロッパの文化を教えるようになるべきなのです。そしてこれは言語の問題ではないのです。例えばオランダでは、イマームがオランダ語を話すことについて大きな論争がありました。それはそれでいいのですが、それだけでは十分ではありません。それ以上のことがあります。言語を知るだけではないのです。それは心理をも知ることなのです。それは心の中からのことで、部外者の心を持ってオランダ語を話すということではないのです。これは非常に重要なことだと思いますが、難しい課題の1つでもあります。

ここでもまた問題となるのは忠誠心です。忠誠心の問題は非常に重要です。なぜなら、国に忠実なのか、ウンマ、つまりイスラームのウンマに忠実なのかということですから。このことに関しては、とても強い主張が必要です。人は人の理念に忠実であり、自国が正しいときは自国とともにあるべきなのです。ムスリムが間違っているときは、ムスリムと対立すべきなのです。実際、人は人の理念に帰属するものですから、これを構築して自国に対してノーと言えなければなりません。非常に重要なことです。真の忠誠とは、批判的忠誠です。盲目的忠誠ではありません。自国が正しかろうが間違っている方が支持するとか、ムスリムが正しかろうが間違っている方がそれを支持するという事ではないのです。ちがうのです。貴方が正しければ貴方を支持するし、貴方が間違っていれば貴方に反対するということなのです。それが真の忠誠です。私はこのことについて、今の英国人らと話し合いをしたいと思っています。私は急進化に対抗するためのタスクフォースで英国政府に協力しています。英国国民であるムスリムが政府に反逆するというのは、許されることだと理解する必要があります。真の国民としての権利の一部なのです。英

国に所属するということは、政府がイラクでしていることが気に入らないと政府に知らせることも含まれていますから。ここでは忠誠心が問われるべきではないのです。そのまったく反対です。英国人であるからこそ、国民であるからこそ、自分の政府に対して間違っていると言う権利があるのです。批判的忠誠心は、真の忠誠心なのです。

このことはムスリムに対してもまったく同様に当てはまります。批判的忠誠心の名のもと、同胞であるムスリムに対して、貴方に同意できないと言えなければなりません。正しかろうが間違っているがムスリムを支持するのではなく。例えば、自爆テロや罪のない人々を殺すことなどについてです。だめだ、それは間違っていると。宗教の名のもとに、私は「それはイスラーム的ではない、貴方がしていることは反イスラーム的だ」と言うことができるのです。この批判的な主張は大変重要です。この批判的精神、自己批判的精神、自己批判的なアプローチというのが、私たちの課題の1つです。ですから、これは非常に重要な点なのです。

統合することに固執するのではなく、更に進んで貢献という最高レベルに到達することです。結局、四世代経った今でも、統合しなければならないと言っていますが、英国やフランスでは、「もう充分だ、私たちはすでに統合されている」と言っている人たちがいるのです。これが私たちの国だ。私たちはフランス人だと。統合しろと執拗に要求するのは、むしろ状況の捉え方の問題です。私たちは統合されているけれど、心ではまだ統合されていない。貴方たちは知的レベルでは、まだうまく私たちを統合できていないと思うことです。しかし、すでに統合されている者も存在するというのも事実です。ムスリムの市民が理解するべきことは、最高のレベルにおける統合は貢献することにあるということです。貴方は社会に何を貢献していますか。私はいつもサッカーという、1つの簡単な例を挙げます。人が自分の社会に何か貢献すると、もはやどこ





の出身かとは尋ねられることはなくなります。その例としてジネディーヌ・ジダンがいます。彼がアルジェリア人であることを尋ねる人はもういません。彼は上手くやってくれている。チームを勝利に導いてくれる。それでいいのです。貢献してくれているからフランス人なのです。しかし、誰かが問題視された場合、まず質問されるのはその人がどこの出身かということになります。問題はその源とともに認識されます。その人がどこの出身かが知りたくなります。しかし、貢献した場合、その源は忘れ去られます。なぜなら、貢献はそれ自体で貢献だからです。この貢献ということは、非常に重要なことだと思います。繰り返しますが、単に宗教的な貢献を言っているわけではありません。社会の豊かさへの貢献であり、参加であり、献身なのです。

私はこの3年間にすべてのヨーロッパの国を訪れたと思います。草の根の部分を訪問しました。私の仕事は主に学术界においてですが、訪れたのは草の根の部分です。そこで私が言えるのは、主流での動きはその方向に進んでいますが、もちろん他の動きもあります。ムスリム・コミュニティ内でも色々な傾向があります。未だに、ここは自分たちの国ではないと言っている人たちがいます。直解主義者がいて、伝統主義者がいて、そのような人たちは社会に加わりたくないと思っています。無論、ヨーロッパをイスラーム伝統と対立するものとして定義する者たちが今もいます。しかし、主流の部分は前進していて、それが現実ではありますが、やはり気を付けなければなりません。主流の部分では、実践しているムスリムも、そんなには実践していないムスリムも、文化的にムスリムである人たちもいます。彼らはここに住んでいて、実際、彼らが言っていることに耳を傾けると、彼らは実践するムスリムとしてではなく、市民としてこの社会における自らのアイデンティティを構築しようとしているわけで、前述のプロセスの一部なのです。そして、彼らは自らを定義するのにイスラームに頼ることはありません。これも

また現実の一部であり、実際これが過半数のムスリムにおける傾向です。

また、イスラームを実践しているムスリムであるかどうかについても、注意する必要があります。というのも、それは程度の問題だからです。日々の祈りに関しては、全体の10%から12%のムスリムが行っています。ラマダンに関しては、例えばフランスの都市なら、またフランスだけでなく英国でもどこでもですが、60%から70%の人が断食をしています。それが宗教的な献身なのか、家族への献身なのか、文化への献身なのかは判断し難いですが、確かに献身しているのです。そして、そこには何か宗教的なものがあるのです。例えそれが文化的なものであっても、家族としてのものであったとしてもです。

社会的な問題について、いくつかの問題を手短かに挙げてみましょう。最初の問題は恐怖です。私たちは恐怖と不信に満ちた状態に直面しています。実際、人々や市民の間には不信感があふれており、この不信感の理由として3つのことが挙げられます。最初は恐怖心です。第二次世界大戦後と過去数十年、そしてこの20年の間に、ムスリムの存在が新たに顕著になって来ました。事実、何十年もの間、ムスリムたちは郊外にいましたし、貧民街に押し込められていました。そのためムスリムの一世たちはそれほどその存在が顕著ではありませんでした。しかし、二世や三世そしてそれ以降のムスリムが今や目立つようになり、彼らの存在がある種の恐怖を広めているのです。ムスリムの数は非常に急速に伸びているため、数はかなり不安を煽るものです。そして新たなムスリムの顕在というものがあります。公的な議論で示されていることと正反対です。彼らはコミュニティを成し、社会からは離れていると言われています。実際、親の世代は孤立していましたが、子供たちはより主流的空間、いわゆる公的分野で遥かに目立つようになっています。つまり、彼らの多くが大学に行き、雇用市場に参加し、かつての社会的貧民層から抜け出しつつあります。

彼らの存在がより顕著なのです。このため、新たなムスリムの顕在が問題なのです。

2つ目の問題ですが、これは否定できないものであり、ヨーロッパの現実です。移民問題です。移民は脅威であると同時に必然でもあります。これから先15年間に、ヨーロッパには1,100万人の労働者に来てもらう必要があると言われています。そのような人たちはどこから来るのでしょうか。以前は東欧からと思われていましたが、今日ではそれは現実ではなく、労働者は主に南からやって来ます。つまり、私たちには移民が必要なのですが、その数に恐れを抱いているのです。ですから、今日では非常に厳しい新しい法律があり、規則、セキュリティの規則がありますが、それでも脅威ではあります。そのように認識されているのです。統合の問題を話し合うときに移民に対する恐怖を利用する極右政党がいます。同じ問題ではないのですが、彼らは非常に巧みにこの2つを混同させるのです。

そして最後のポイントで、これもまた否定できないことですが、テロリズムの問題があります。テロリズムは現実であり、終わることはありません。テロリストによる脅威があり、私たちはそれに対処する必要があります。ここでもまたセキュリティです。したがって、今日のようにムスリムが新たに顕在化している場合、ムスリムが至るところにいると思われるとき、信頼を構築する必要があります。私はスイスのあるテレビ番組に出演していました。すると、極右政党の党首が「ムスリムたちは問題だ。彼らは至るところに存在し、至るところで目に付くからだ」と言いました。新たな顕在化です。2つ目の問題は移民問題で、私たちは自らを守らなければならないのです。そして、3つ目はテロリズムで、私たちは安全ではないのです。そしてこれらすべてを背景に私たちは恐怖と不信感を増大させており、それが問題なのです。知的エリートたちの間では、この恐怖が原因で、今朝の公開セッションで私たちが話した、自らの過去の単純化が今起こっています。

その顕在化に対する恐怖が原因で公の場面で起こっているのは、例えばあのローマ教皇の発言にしても主にこのことに言及したものだっただけです。フランスだけではなく英国でも、ヨーロッパの過去に関する本が出版されています。例えばフランスでは『フランス人である誇り』という本があります。著者であるマックス・ガロという有名なフランスの文化人が主に言っているのは、ヨーロッパのルーツはギリシア・ローマとユダヤ・キリスト教であることを忘れてはならないということです。つまり、ヨーロッパに移り住んで来るムスリムたちは、そのルーツの一部ではないということです。英国にも『ヨーロッパの主要な六つの価値観』という重要な本があります。第一にキリスト教で、イスラームではありません。お分かりですか。イスラームはこのことに関しては部外者であるという感覚です。ですから、実際、人は現在に怯えたと、過去を単純化します。真実ではない過去を築くのです。というのも、科学的に間違っている過去だからです。ヨーロッパの過去は、ユダヤ・キリスト教とイスラームなのですから。そして、私たちはこれに対処して行かなければならないのです。未来の多元性を築くために、過去の多元性に取組まなければならないのです。

私たちは主流となっている学校のカリキュラムの制度に対しても何かしなければならぬと思います。カリキュラムを見てみると、しばしば問題があるのに気付きます。包括的でないのです。排他的なのです。今でも私たちはヨーロッパを白人のものであるかのように、白人が元来の先住者であるかのように語ります。それは間違っていて、その解決は教育の中にあると思います。それをしなければ、記憶の葛藤という問題になり得ます。私たちに必要なのは、記憶の歴史、客観的な記憶の歴史を推進することであり、記憶の葛藤ではありません。しかし今、人々は何が一番だったかについて葛藤しているのです。私たちは英国およびフランスで、植民地化について大きな討論を行いました。植民地化は良かったの





か、悪かったのかということについてです。すべて悪かったという人もいますが、私たちは植民地化し文明化するために行ったのですから、そこには少し良いこともあったはずです。ですから、私たちは記憶について話し合いました。私たちが記憶の多元性を認めない限り、記憶間の葛藤が増大し、それは好ましくないことです。なぜなら、私たちは自分が正しくて正当であると感知しているだけの記憶のために葛藤しているだけだからです。

私たちが今、目の当たりにし体験している3つ目の問題ですが、それは私たち皆が話題にする世俗主義の問題です。私たちは法に従わなければならないと言います。しかし、今ヨーロッパで優勢となりつつある傾向を見てください。ヨーロッパにとって危険なことです。それは極右政党の台頭ではありません、そうではないのです。問題は主張の正常化です。昨日は極右政党だけが言っていたことを、今日は他の多くの政党が言っているのです。これが起こっているのは、伝統的な主張においてです。そして、特に当惑することは、私たちムスリムは、昨日は法律に従えと言われ「はい」と答え法律に従って来たのですが、今ではその法律が変えられているのです。これは問題です。例えば、フランスで話し合ったのですが、非宗教性(laïcité)の法律を守らなければならないと、かつて人々は言っていました。それには何も問題がありません。しかし、その法律が変更されてしまったのです。スイスでもその法律の変更を望む傾向があります。なぜでしょうか。なぜなら、それがムスリムにとって開放的すぎたからです。ですから、ムスリムから自らを守るためには、法律を変えなければならないということなのです。

宗教の自由とそれが尊重される可能性については、至るところで話し合いがなされていますが、この種の法律の変更が行われることは大変危険なことです。例えば英国でも同じ議論があります。安全という名のもと、この非宗教性に関する法律がより保安重視に変更されたのです。そして、この法律

で自分たちを脅威から守るべきだという意識がそこにはあります。同じく非常に重要なことを話させてください。法律を扱う場合、同じ文面であっても、異なる2つの解釈ができるということです。私の目の前にその文面があって貴方を市民として信頼しているとすると、その文面の規定範囲内で貴方を自分たちに統合しようという目的でそれを読むことができます。しかし、私の前に同じ文面があって貴方を信頼していないと、自分を貴方から守ることを目的にその文面を読むことができるのです。ですから、同じ文面でも(相手との)統合を目的に読むことも(相手に対する自分の)保護を目的に読むこともできるわけで、これがヨーロッパでは非常に頻繁に行われていることなのです。認識されている脅威に対して自らを守るために法律を読むという方法なのです。

4つ目の問題は、新たな人種差別の台頭に直面しているということで、これは事実です。繰り返しますが、私はイスラモフォビア(イスラーム恐怖症)という概念を簡単に使うことを好みません。これはとても微妙な概念であり、非常に気を付けなければなりません。というのも、ムスリムの中には、自分が批判されたり、ムスリムを批判している人がいたりすると、イスラモフォビアというこの言葉を使う者がいるからです。これはいけません。区別をするべきなのです。ムスリムの行いを批判することは正しいことです。ムスリムの価値観のいくつかについて批判あるいは質問するのも正しいことです。それは批判的な話し合いであり、許容されるべきです。しかし、ある種の人種差別となると別です。ですから、私たちは、人種差別的な発言と批判的かつ正当な質問を区別する必要があります。この緊張が高まっている時代には、一つ一つの違いが明白ではありません。英国の外相がニカブ、すなわち顔を覆うベールのことを尋ねたとき、彼は質問をしただけなのです。しかし、それはイスラモフォビアと見なされました。ですから、ムスリムの主導者たちに対して、

「それはいけない、貴方たちは被害者意識を育てようとしている」と言う必要があるのです。私たちは外相に反対しても構いませんが、少なくとも話し合うではありませんか。質問がされるたびに、攻撃とみなすのではいけないのです。ですから、私は注意を払っているのです。

しかし、反イスラーム的なものを育もうとしている議論が今日存在することもまた否定できません。これは否定できないことです。ムスリムであるから、そしてムスリムであるという理由だけで標的にされるのです。ですから、ウィーンの監視委員会によって定義されているように、これはムスリムに対する新たな人種差別です。古い習慣が今前面に出てきており、それはヨーロッパにとってとても危険なことです。ムスリムは、はぐらかしを言い、二重の忠誠心を持っている、そして、これが何らかの裏切りだと言われています。そのようなことを、この大陸で誰が誰にいつ言ったのでしょうか。1930年代と40年代には、ユダヤ人に対して発せられました。はぐらかしとは、貴方が何か言っても私たちは貴方を信頼できないということです。二重の忠誠心は、貴方はこちら側にいるけれど、あちら側にもいる。裏切りがあり、私たちに敵対する人々のネットワークがあり、それが国際的な陰謀なのだと。私たちが目にしているのは、昔からあったのと同じことなのです。古い慣習の再来を伴う、新たな人種差別なのです。これは本当に重要なことだと思います。

私たちが直面している最後の問題は本当に重要なことで、私たち皆がそれを認識しなければならないと思います。私はそれを問題の「イスラーム化」と呼んでいます。社会的問題があり、経済的問題、それに都市問題がありますが、それらは宗教とはまったく関係なく、社会政策に関係することです。ですから、例えば二流の学校があること、人が集まって暴動が起こること、失業の問題を取上げていること、社会政策に本当の統合がなされていないという問題に取組むこと、これらは宗教とは何ら関係のない

ことなのです。関係があるのは社会政策なのです。しかし、社会的な解答を持ち合わせていない政治家たちは、問題を一点にのみ絞ってしまうのです。つまり、彼らがムスリムであるからとか、彼らがアラブ人であるからとかにになってしまうのです。けれども、問題となっていることはこのようなこととはまったく関係がありません。時間がないので、例を1つだけ挙げますが、1年前にフランスの郊外で暴動がありました。宗教とはまったく関係のないものでした。暴動を起こしていたのは権利を求めた郊外の市民たちで、同等の市民として扱われていないと主張していました。彼らはフランスの二流市民だったのです。幸いな事に、関わった政治家の大多数は、「ああ、彼らがムスリムだからだ」という考えには甘んじませんでした。それに甘んじないことが主流の意見ではありましたが、知識人の中には「誤解してはいけない。これらの若者の共通点は、彼らがムスリムだということだ」と言っている者がいるのを耳にしました。これは一体何なのでしょう。この問題とムスリムであるということはまったく関係がありません。ですから、社会的政策を欠いているときに問題を「イスラーム化」することは、非常に危険です。というのも、問題を1点にのみ絞ってしまうことになるからで、非常に気を付けなければなりません。繰り返しますが、こういった考えは政治的な場面で生まれるものですが、ときとして、ムスリムたち自身から生まれることもあります。というのも、ムスリムの中には、まったくこのとおりのこと、すなわち、自分たちはムスリムなのでこの制度の犠牲者なのだと口を揃えていたがる者たちがいるからです。お分かりでしょうが、この犠牲者意識はとても危険なので、私たちはそれに反対し、社会的政策を求めて行くべきなのです。

では結論ですが、ムスリムには責任があり、また、社会によって提供されることがあり、社会によって成されなければならないことがあるということです。私が非常に重要だと思う3つの点を結論として述べたいと思います。第一点として、ムスリム・コミュニティ内



コメント・ディスカッション

司会 中田 考（同志社大学神学研究科教授・一神教学際研究センター幹事）

【司会】ありがとうございます。続きまして、一橋大学の内藤先生から10分間のコメントをいただきます。内藤先生はトルコのイスラームおよびヨーロッパのイスラームの専門家です。では、よろしくお願いします。

コメント：内藤 正典
（一橋大学大学院社会学研究科教授）

ラマダーン先生、非常に刺激的なお話で、多くの点では私も同感なのですが、同時に多分こういうことをおっしゃると、幾つかの国では大変危険な人物だと思われるだろうということもよく分かりました。

ラマダーン先生のお話は個々のヨーロッパの国をあまり分けないで話されましたので、私はもう少しヨーロッパ側から見ていくことにします。まず第一は、現在のヨーロッパ、とりわけEU諸国の状況が、EUがそもそも創設されたときの理念から外れて個々の加盟国が内向きになってきているということが、このイスラームにかかわる問題に大きな影響を及ぼしていると考えています。昨年のEU憲法条約の批准、国民投票をめぐる、フランスとオランダは否決しましたが、多くの国民が実際には憲法条約を読んでいなかったということは周知のことです。例えばオランダでもフランスでも、「EU憲法条約にノー、トルコにノー」というのが一緒にプラカードに掲げられていたことから分かるように、別にトルコをもってイスラームに対する嫌悪感の代表とは言いませんが、先ほどラマダーン先生も指摘されたような、ムスリムの移民が入ってくるということに対する嫌悪感の一部を代表しています。

それよりも問題なのが、ローマ教皇ベネディクト

16世の発言があり、あるいはつい先だって前イギリス外相のジャック・ストロー氏が、地元選挙区の問題で事務所に来たムスリムの女性と話をする際には「ヴェールを取ってください」としばしばお願いをしている、と発言したという話もそうですし、あるいは、これは直接イスラームとは何の関係もありませんけれども、フランスの国民議会がトルコにおけるアルメニアのジェノサイドを否定した場合には罰則規定を設けるということがあったように、EU諸国が自分たちの世界に壁を作りつつある。そして、どうもEUの加盟国の中でさえ、多様性を維持したままに統合に向かっていくというコンセンサスがすでに崩れてきているのではないかと見ております。

そこで、このヨーロッパのイスラームに直接関係することと言えば、ヨーロッパの諸国の中にイスラーム移民を受け入れた際、大雑把にいうと3つの類型があったらと思います。1つは、先ほど指摘があったように、イギリスやオランダのような多文化主義型です。あるいは文化多元主義型といってもいいと思います。要するに、ムスリムがそのまま自分の文化を維持することを基本的に認めるというものです。このタイプは従来、日本の社会学の間でも、異なる文化の共存には適しているとポジティブな見方をする人が多かったのです。しかし、私はヨーロッパの実状を見ていて、そうではないだろうと思っていました。なぜかという、相互不干渉で、お互いに「あんたのことは知らない」という原則のもとに立っているわけですから、別に相互の理解が進むはずがないのです。これが特に9.11の直後、オランダでムスリムに対する暴行事件が多発したときに現れてしまった。ドイツには申し訳ないのですが、私は9.11の後、ヨーロ

部からしなければならないことは、改革主義的アプローチを促進し、本当に重要なことを語ることです。今日ムスリムであるということは、原則に対して忠実でありながらも、それと同時に新たな挑戦に対して自ら答えを見出すということなのです。新たな答えを促すこと以外に方法はないのです。したがって、私たち内部から発生する改革主義的傾向です。私はすべてのムスリムの代表ではありません。ムスリムの中には、私を西洋人的すぎている人もいます。そして、西洋人の中には、私をムスリム的すぎている人もいます。しかし、私はそのことを受け入れます。この状況では避けられないことです。2つの世界の間にいれば、いずれの世界でも批判されるということを受け入れなければならないのです。しかし、「私はヨーロッパ人になるためにムスリムとして劣ったり、ムスリムになるためにヨーロッパ人として劣ったりすることは決してない。私は両方であることができる。しかし、私は原則には忠実であり、新しい挑戦に対しては新しい答えを出せなければならない」と言う必要があるのです。ですから、この文章と文脈を検討する、弁証論的プロセスは大切なことなのです。

このすべてに対して、私たち皆のための1つの要となるコンセプトがあります。日本でもまったく同じです。それは市民権です。市民権という観点に基づくことで、少数派云々に囚われないことです。結局のところ、私は市民であり、私たちの規則には少数派の市民権というものなどないのです。人は市民であるかないかしかないので、私を少数派の枠に入れてしまうことができなくなるのです。ですから、私が市民であるということは、私が多数派の一員、社会の一員であり、規則と貢献を念頭に置いて社会に携わって行かなければならないのです。いつも「ムスリムである貴方」と言われるのではなく、「市民としての私」なのです。

最後にこれを述べさせてください。私たちには共通の価値観と共通の土台があり、そして、最終的に

はこの市民権というものがあります。市民権とは、つまり私たちには共通の価値観があり、価値観を共有しているということを知っているということで、それは大変重要なことです。キリスト教徒もユダヤ教徒もムスリムも、共通の市民権、および異なる価値観もあるが共有している価値観もあるということ、また、共通の倫理観もあるということを言葉に表し、この共通の土台に立つべきだと思います。私が現在および未来のために提唱することは、つまり私たちが構築していかなければならないということ、しなければならないこと、そして地域レベルで行えないことは、新しい「私たち」を創り出すことです。そうです新しい「私たち」です。ここで言う「私たち」とは、貴方たちに向かって言っていることであり、私は市民権という観念と共通の価値観という観念を持っている人々に語りかけているわけで、私たちにはともに協力し合って物事を行えるということが分かっているのです。この新しい「私たち」を構築すること、つまり「私たちに対する彼ら」という観念やその少数派意識に囚われないということは、私たちの共通の市民権、共通の価値観、共通の未来に到達することなのです。そして、地域レベルでこれを行うことです。私たちは、共通、いえ、地域レベルでこの信頼を構築する必要があります。私たちが直面しているのは、恐怖という状態です。私たちに必要なのは、その恐怖を進化させることであり、また、信頼の革命が必要だと思います。これらのことは地域レベルで行うことができ、ヨーロッパの多くの都市で行われています。これが私たちの未来になるのだと思います。ありがとうございました。



ッパで何か起きるとしたらドイツかなと思っていたのですが、予想ははずれて、オランダでした。実際オランダの知識人もそれは意外だったと言っていました。オランダでは非常に生々しい形でムスリムに対する嫌悪というものが出た。オランダの場合、その後さらに状況は悪化していて、2004年に映画監督のテオ・ファン・ゴッホが急進派イスラーム主義者によって暗殺された事件も、そのような状況の中で起こりました。ところが、殺人の原因となった映画に描かれたムスリム女性の自伝は、うそだったということが後になってばれてしまうわけです。

さらに、2番目の類型はフランスです。文化的な統括力が強いタイプで、フランスの場合にはライシテ、つまり世俗主義の原則を持っていますから、これもムスリムの統合には向かなかった。特にヘッドスカーフの問題では、フランスは全面的に衝突してしまいますので、統合は難しいだろうと思います。

もう一つの類型は、類型と呼べるものではありませんが、ドイツのケースで、当初から異なる文化を持っている移民たちを、どうやって統合するのかというコンセプトがなかったわけです。これは別にムスリムだけではなくて、ドイツの場合は移民政策において、異なる人間とどういう社会を作るかということについてのコンセンサスは存在していない。例えばドイツの移民政策の中で、イミグレーションということは必ず言いますが、ではイミグレーションとは何かと聞いたときに、答えはせいぜいジャーマンスピーキングであるということと、しかるべき仕事をすることぐらいしか出てきません。

ヨーロッパ諸国の移民受け入れの型は、この3つのタイプのどれかに似ているのです。スイスはちょっと違いますけれども、いずれのケースでもムスリムの統合には失敗しました。しかもまずいことに、現在いずれのケースの場合にもターゲットがムスリムのヘッドスカーフになっているという、非常に奇妙な現象が起きています。フランスはもちろんスカーフを禁止する法案を出しました。ドイツはそもそもフランスのよう

に政教分離原則も世俗主義の原則もないのですが、現在九つの州で教員のヘッドスカーフの着用については禁止されていて、さらにベルリンとニーダーザクセンだと思いますが、多くの公共のサービスに従事する女性のヘッドスカーフも禁止です。

最後にもう一つ指摘しておきたいのは、イスラモフォビア(イスラーム恐怖症)をあまり雑に扱うなということです。あまり大雑把にイスラモフォビアの問題でくくるなということをラマダーン先生は言いましたけれども、ドイツのケースで見ていると、どうも、もともとあった外国人を嫌悪する感情(ゼノフォビア)が9・11以降、イスラモフォビアの形を取って現れることによって法の網をかいぐぐってしまっていることは事実ではないかと思います。これはほかの国にも見られます。

例えばどういうことかというと、ドイツで2004年に、先ほど言ったヘッドスカーフを禁止するかどうかということが議論になりました。これはその前にルディン裁判という裁判がありました。ルディンさんというのはアフガニスタンの女性です。裁判の結果、彼女がヘッドスカーフを着けることは認めるけれども、この問題については法律がない、明文化された規定がない。したがって、民主的な立法者としての州はこの問題について立法できるということを憲法裁判所が判決で示しました。その後ばたばたと、禁止する、規制するという州ごとの決定がなされるのです。問題は、そのことが議論されているさなかに、実はテレビや新聞にそのことが報道され、報道された翌日には何の悪意もなくスカーフをかぶっている女性たちが、つばを吐かれて罵声を浴びることなのです。これは私はベルリンでもケルンでも、何度もフィールドワークの中で聞きました。

問題はそちらなのです。知識人が議論しているイスラモフォビアだったら、それは知識人同士で議論なさったらいい。しかし、普通にスカーフをかぶってただ路上を歩いているだけで「おまえは原理主義者だろう」と言われる人は、明らかにどこの国でも増えている。これはイギリスでもそうでしたし、オ

ランダでもそうですし、デンマークでもそうですし、フランスでもそうですし、ドイツでもそうです。テロの問題にもつながってくるのは、そういう社会の基盤にいる人々が浴びている敵意の問題であって、観念的なレベルのイスラモフォビアの問題ではない。最後の点は、若干ラマダーン先生の話に対して批判的なコメントであります。これで終わります。

ディスカッション

【司会】 それではディスカッションに移りたいと思うのですが、非常に今日は盛りだくさんのお話でありまして、また内藤先生のほうからもコメントがございましたので、最初に事実関係にかかわる質問がございましたら、そちらから始めたいと思います。質問がありましたら、そちらから始めまして、その後でディスカッションに入りたいと思います。特に事実関係に対する質問がなければ、フリーディスカッションに入りたいと思います。

それでは、自由はディスカッションに入りたいと思いますので、どなたからでもけっこうです。はい、それでは、宮澤先生、ご質問をよろしくお願いします。

【宮澤】 先ほど、ヨーロッパ人であるとともにムスリムであるという形を伺ったのですが、私はかつてイギリスのユダヤ人について調べていたときに、2つのタイプに出会いました。それは、共通してイギリス国籍を持ちながら「イギリスに居住するユダヤ人」と「いや、ユダヤ系のイギリス人」だとする人々ですが、さらに「私はイギリスに住むユダヤ人だが、ユダヤ教徒ではない」という人にもお会いしました。つまり、同じイギリスに住むユダヤ人でも「ユダヤ人」だとの認識の濃い人と「イギリス人」にウエイトを置いている人とがありました。そこで、「イギリスに住むムスリム」と「パキスタン系のイギリス人」というような、さらには「パキスタン系のイギリス人であってムスリムではない」というような形態があるのでしょうか。



【司会】 ラマダーン先生にお答えいただきたいと思います。

【ラマダーン】 はい、誰かがこのような発言をするのを聞くことはあり得るでしょう。また、英国で暮らしているユダヤ人と感じているユダヤ人、または、自らを英国人、ユダヤ系英国人、英国系ユダヤ人という風に思っているユダヤ人にも出会うことがあるのと同じです。また、ムスリム、たとえイスラームを実践していないムスリムであっても、自分たちが英国人とは思っていないでしょうし、ヨーロッパ人とも感じていません。これは、ある種のアイデンティティ構築(の例)かもしれませんが、今では、私たちは英国人であると同時にムスリムであり、何が最も大切かを問わないで欲しいということです。これはまた、哲学的なレベルでは、まず、ムスリムであり、社会的レベル、国民としては、英国人なのであるという話に戻ります。ですから、ここでもまた、主流となっている議論と、今、構築されつつあるものとを区別することが大切ですし、また、ムスリムとしては決して受け入れられないだろうと感じている人々がいて、ムスリムであるから英国人としては決して受け入れられないだろうと感じている人々がいるという議論も確かに存在するのです。そのように考えている人々を見つけることはできます。しかし、私たちはそのような人々が多数派にならないよう奮闘しているわけです。

【司会】 内藤先生からもお願いいたします。

【内藤】 ヨーロッパのいろいろな国に住んでいるトルコ出身の人のケースでちょっと申し上げたいのですが、トルコの場合、母国が非常に厳格な世俗主義を採っているために、移民としてヨーロッパに行ったあとも、ムスリムとしてのアイデンティティを強く出さない人が非常に多いです。しかもトルコの国内で、イスラーム的な人と、ヨーロッパ志向の人との間に



は長い間、かなり厳しい対立がありました。したがって、ヨーロッパに行ったトルコ人の中にはかなりイスラームに対して敵対的な発言をする人もいます。特に政治で活躍している人の中にはそういう人も出てきます。ただ、本人が積極的にイスラームを捨てたかといえ、そうではなくて、行動様式が非常に世俗化しているというレベルの人が大変多いのではないかと思います。

【司会】 クリストファーセン先生に今の質問に対するコメントをいただきまして、その後、フリーディスカッションに移る前に、先ほどの内藤先生のコメントに対するラマダーン先生のレスポンスをお聞きしまして、それからフリーディスカッションに移りたいと思います。よろしくお願いします。

【クリストファーセン】 ラマダーン先生に質問があります。先生は、パスポートだけでは英国人になれない、英国人になるためには、記憶や価値観、そして、共通の市民権の構築が必要だということを言われたと理解してよろしいのでしょうか。デンマーク人の観点から、そのご意見は大変重要なものだと思ひます。

これに関連して、デンマークのテレビで放映された、4人の宗教主導者とのインタビュー・シリーズについてお話したいと思ひます。1人はルーテル教会の監督、1人はラビ、1人はイマームで、1人はカトリックの司教でした。かれらは、それぞれの宗教に関連した都市はどこかと尋ねられました。ラビはコペンハーゲンとエルサレムを紹介しました。彼は自らをデンマーク系ユダヤ人と称しました。2つのアイデンティティを持つ1人の人間であるという自己紹介を具体的に表す例として、彼は自分が書籍を保管している場所を見せていました。彼のオフィスには、ユダヤの書籍があり、同じ階にある居間には、デンマーク語の書籍が置いてありあした。カトリックの司教は、もちろん、ローマを私たちに紹介しまし

たが、彼もまたコペンハーゲン在住で、コペンハーゲンについて話をしていました。ラビは1人の人間の中にはっきりと区別された2つのアイデンティティがあることを示しましたが、このカトリック司教にもまた2つのアイデンティティがあり、そのアイデンティティのいずれかを選択する必要がある場合について語っていました。トルコ出身のイマームは、対立し合うことも、また協調し合うこともあり得る複数のアイデンティティがあり、自らをどのように称すればよいのか分からないということでした。そして、ルーテル教会の監督の場合は、デンマーク以外で彼が紹介できる町はないとし、田舎にある彼の生まれ故郷を紹介しました。彼は、宗教的なアイデンティティと国民としてのアイデンティティが常に、1つの共通のアイデンティティとして組み合わせられ、宗教的な部分と、国民として、また、個人としての記憶の部分とを区別することができない生き方について語りました。

私の理解する限りでは、目標とすべきことは、これらの宗教的主導者4名全員に、常に組み合わせることのできる複数の生き方があり、それには、パスポート以上のものがあるということです。ですから、ラマダーン先生が記憶、価値観、構築についてお話しされましたが、それをこのように理解してよろしいのでしょうか。

【司会】 ありがとうございます。では、ラマダーン先生のほうから、先ほどの内藤先生のコメントに対するレスポンスを伺いましてから、会場のフリーディスカッションにしたいと思います。まずラマダーン先生からお願いいたします。

【ラマダーン】 まず、クリストファーセン先生にお答えします。そうです、私が言ったことは、そのとおりです。それは、私が言った、帰属しているという感覚のことで、帰属している感覚というのは、パスポートだけではなく、それ以上であるということです。それは記憶であり、また、貴方が言われたことすべてで

す。しかし、抜けていることもあります。双方向からのプロセスであるということを理解せずして、帰属する、帰属している感覚を構築または築き上げることはできないのです。私たちが述べたことすべてが必要ではありますが、共に生活している人々の認識というものがあります。というのも、帰属感を培うことはできるかもしれませんが、最終的には多くのムスリムが私にこう言うのです。「そうですが、彼らが私たちを受け入れない場合はどうすればいいのですか。彼らが私たちに対して、私たちが帰属していないと感じさせる場合はどうなのですか」と。ですから、問題は、これが社会の主流の部分についての双方向に作用するプロセスであるということです。より包括的で、オープンで、現実を受け入れる議論が必要で、ムスリムの存在を問題としてだけではなく、それが財産であり豊かさなのであるという議論が必要ですが、そのような議論は、現在、行なわれていないのです。

実際、いま、私たちは悪循環に陥っています。なぜなら、私たちは、自分たちのアイデンティティを何かに対立する形で定義しようとしていて、共同のおよび包括的に定義しようとしていないからです。これでは効果がないと思ひます。ですから、周りの社会が自分たちを帰属させようとしていないという認識を持ち、そのような肯定的な帰属感を構築するのが難しいと感じている多くのヨーロッパ国民、またはムスリムのヨーロッパ人が居ます。そういうことから、私はその帰属感を構築するための共通の責任について語る必要があると思ひます。これはパスポートの問題ではなく、認識の問題です。そしてまた、確かに、貴方がセッション1で言われた認識の衝突の問題であると思ひます。認識の衝突というのは、法的な枠組みとは何ら関係なく、互いに信頼し合えない認識ということの問題なのです。

内藤先生が言われたことについてですが、私たちが賛同し合えない点は何もないと思ひます。貴方が言われたことを私が完全に理解できているか

どうかは分かりません。しかし、貴方が主に言われたことに関する私の認識は、私と同じように理解されているということです。貴方は日本にいらっしゃる方なので、ヨーロッパ人に対しては厳しいです。もし貴方がヨーロッパにいらしてそれらの言葉を使われたら、その評価は多少厳しいものであると見なされたでしょう。ですから、ここに私たちが来て、厳しいアプローチをする人を見つけることは、ときには良いことなのです。ありがとうございます。

【司会】 ありがとうございます。それでは自由ディスカッションに入りたいと思ひます。では、手島先生、ボザルスラン先生、小原先生、ソーテンドルプ先生の順番にコメントをお願いいたします。

【手島】 ラマダーン先生のお話をうかがえて嬉しく思ひます。先生がユダヤ人ではなく、ムスリムであるということを忘れてしまいそうでした。というのも、先生が報告された主張や経験はすべて19世紀のユダヤ人、若いユダヤ人らが主張し、彼らがそのために戦ったことだったからです。従って、ちょっと難しい質問をさせていただきたいと思ひます。ユダヤ人は、自分たちが解放され、居住している国で市民権を得たいと考えましたが、それは長い間拒否され、その間に彼らは自分たちを法的に解放するために「エマンシペーション」(解放)という言葉を用いるようになりました。貴方が言われたことは、そのコンセプトにほぼ即したものです。同時に、エマンシペーションの後には、例えばエンライトウンメント(啓蒙)が続くわけです。そこで、ラマダーン先生、貴方は、モーゼズ・メンデルスゾーンか誰かのような方ですね。というのも、貴方が言われていることのほとんどは、別の角度からのこと、つまり新たなムスリムまたはイスラームの創出、或いは、新たに適応されたイスラームであるように聞こえるからです。モーゼズ・メンデルスゾーンは、エマニュエル・カントによる攻撃に敏感に反応し、彼は、ユダヤ教は自律的な宗教





ではなく、他律的な宗教であるとしてしました。他律的ということは、自主的に決断することができないということで、人が何をすべきかは上から決定されるのです。そして、自律的であるということは、自分にとって何が正しいかを理解し、決断することができるということです。それで、キリスト教は自分たちは自律的な宗教であるとしていますが、ユダヤ教はそうではなく、ある意味、イスラームはユダヤ教のほうに近いのです。つまり、それは律法の宗教であり、信条の宗教ではないということです。ですから、ここで問題は、あるときはイスラームまたはムスリムの観点から自分にとって何が正しいかを判断して決断し、また、あるときは市民の観点から貴方たちムスリムにとって何が正しいかを決断しているということではないのでしょうか。その疑問や奮闘において、ある意味、完全に自律的な性質のものを行使し実施していると私には思えます。ですから、私の質問は、そうすることによって、貴方はイスラームのまさに根本を揺るがしているのではないかということです。貴方はご自身の立場を、進歩的なムスリムと思ってらっしゃるのでしょうか。それとも、正統なムスリムであるとお考えなのでしょうか。

【司会】今の手島先生のご質問にも、一応、先ほどの4人のかたの質問が終わりましてからラマダーン先生にお答えいただきたいと思います。とりあえず次はボザルスラン先生の質問に移りたいと思います。

【ボザルスラン】はい、少しクリストファーセン先生とラマダーン先生の討論についての話に戻り、その後、貴方のコメントに移りたいと思います。私は、今日のヨーロッパで問題となっていることの1つは、社会が危機にあるということと、そして、その危機にはたくさんの理由があるということだと思います。社会統合のためのメカニズムの失敗または脆弱化があり、また、上および下からの課題もあります。下からというのは、移民団体やムスリムの団体だけでなく、

多くの自治団体があり、地域構築という課題があります。また、上からはヨーロッパの構築という課題があります。そして、ヨーロッパの構築は、困難であり危機を避けては通れないでしょう。今日、ヨーロッパの各社会に帰属するということは、どういうことなのでしょう。少なくとも、3種類(の帰属)が挙げられます。ある国家社会、フランス社会、デンマーク社会などに帰属すること、ムスリムだけでなく、あらゆる宗教的コミュニティ、信仰のコミュニティ、ディアスポラ(離散者)のコミュニティに帰属すること、そして、それと同時に、新たな存在としてヨーロッパに帰属するということです。

これら3種類の帰属には、重なる部分もありますが、たくさんの対立や緊張もあります。例えば、ヨーロッパ社会に属すということ、イスラームに属すということは、その社会を再定義すること、ヨーロッパを再定義し、イスラームを再定義することを意味します。既存の存在に加わるのとは違い、ある国家またはヨーロッパに入ることでその存在の状態や本質を定義し直すわけですから、すでに既存のイスラーム、既存のフランス社会、既存のヨーロッパは存在しないのです。今日の状況を、20年、25年前と比較すると、国家やヨーロッパおよびムスリムの基本的特徴が全面的に変化しました。私たちは、今後数年、おそらく、数十年もの間、この緊張のすべてを受け入れなければならないでしょう。しかし、それもまたヨーロッパ構築の一部となって行くことでしょう。

そして、トルコ移民やヨーロッパ内のトルコ人社会に関して、彼らはもはや移住者のコミュニティではないと言えると思います。それに加えて、トルコの場合、複雑なのは、それがイスラームの問題ではなく、国家、トルコ国家とトルコの国粋主義にあるということです。トルコの国というのは脆弱な国家です。というのも、その過去、そのつい最近の歴史が非常に複雑なものであり、アルメニアの大量虐殺やアナトリアの向こうのギリシアでの問題もあったのです。イスラーム的であるということと、トルコ的である

ということは混ぜ合わさっており、分離することはできません。「よいトルコ人」であるためには、トルコ人であり、ムスリムであり、世俗主義者でなければなりません。クルド人に対するトルコ人、他のキリスト教団体に対するムスリム、そして、イスラーム主義者に対する世俗主義者です。このことは、トルコ社会に重要な緊張を生み出し、それが今日トルコにおけるたくさん弊害の原因となっているのです。

【司会】ありがとうございました。それでは、ボザルスラン先生の今のコメントの一部には、クリストファーセン先生にもそれに対するレスポンスがあると思います。しかし、これはむしろ明日のセッションの話題になると思いますので、それは明日に回していただきまして、次の質問を小原先生のほうにお願いします。

【小原】ラマダーン先生が話されたヨーロッパ・ムスリムという概念についてお尋ねしたいと思います。このことを聞くために、少し簡単なストーリーを話したいのですが、半年ほど前に、ロンドンからタミーミー先生をお呼びして講演会をいたしました。タミーミー先生とかなり長いディスカッションをして、その中で、実はラマダーン先生の名前も度々出てきました。

ヨーロッパ・アイデンティティとムスリム・アイデンティティが調和するというのが理想的だと思うのですが、タミーミー先生は必ずしもそうは考えていなかったようでした。すなわち、反ヨーロッパ的なイスラームがいてもよいではないか、と彼は非常に強く主張していました。つまり、ヨーロッパ人でなければムスリムでいることができないのか、いや、そうではないということなのです。ですから、反ヨーロッパ的な感情を持ちながらイスラームであるということは可能ではないか。そういった考え方に対して、ラマダーン先生はどうお考えになるのでしょうか。

タミーミ先生の場合には、パレスチナ人であるということ、言い換えれば、パレスチナとの近さが非常に大事であるように思いました。ムスリムであると

いうことは、一方ではヨーロッパ的アイデンティティとの関係もありますけれども、他方ではトランスナショナルなイスラームとしてのアイデンティティもあるわけです。それを考えると、例えば中東のイスラームと連帯しようとするヨーロッパのムスリムにとっては、反西洋的あるいは反アメリカ的な強調点が強くなる場合もあり得ると思います。今ヨーロッパのムスリムの中に中東のムスリム、アラブ・ムスリムとの連帯感がどの程度強くあるのかということが、お聞きしたいもう一つのポイントです。

【司会】では、最後にソーテンドルプ先生のほうからの質問をお願いします。

【ソーテンドルプ】ありがとうございます。私はコメントに限らせてもらおうと思います。これはもちろん、私たちが体験している最中のダイナミズム、変化のことであり、グローバリゼーションと同時に、国家や国としての独自性への回帰も起こっているわけです。ですから、パスポートが非常に重要になるとき、それと同時に、世界、地球を人は認識するようになります。そして、あるユダヤ人が自らを定義するとしたら、自らを地球市民、人類の一員、新たな人類の一員であると呼ぶでしょう。ですから、そういった変化がすべて起こっていて、この変化の中におけるオランダの話に戻りたいと思います。というのも、オランダではここ数年たくさんのことが起こっているからです。例を挙げますと、たった15年前の1991年のことですが、火炎瓶があるモスクに投げ込まれ、ドア1枚だけが燃えたのですが、その出来事は私たちの多くに衝撃を与え、金曜日の祈りの前に政治家や宗教指導者たちがモスクに集まり、「ひとつのモスクが攻撃されたということは、私たち皆が攻撃されたのと同じだ」と言ったものです。しかし、以後、数年の間にあのような団結力はどうなってしまったのでしょうか。そして、私たちが集まったとき、私たちも感じていたことですが、内務大臣が語ったのは、何かポピュリズム





的なものが社会に浸透しつつあるということでした。ですから、火炎瓶は一例にすぎないということです。単にどこかの悪党が投げ込んだだけだったかもしれませんが、ある種の雰囲気は存在していたのです。

ですから、私はピム・フォルトアイン、および1人のカリスマ的人間が現れるその現象すべてについて考えてみたいと思います。右派の政党には幸運なことにカリスマ的人間がいないと私たちはいつも言うわけですが、カリスマ的な人物が一旦現れると、突然、議会に25人近くを占める政党が出現し、政治的構造をまったく変えてしまったのです。これは、ヨーロッパ、そして世界で最も古い民主国家のひとつで、安定している国家での出来事です。当時、何が徐々に浸透していたのでしょうか。私たちはそれに気がませんでしたし、色々な団体も活動を行ってはいませんでした。私が覚えているのは、15年前に1年間、私たちは様々な政党や宗教の人々と会合を持ったのです。というのも、社会の結束が必要だったからですが、1、2年すると、それは消えてなくなったということです。そこで、私たちは起こったこと、つまり、一見取るに足らないと思われることでも、それに触れないまましていると、それを把握しないまましていると、それが疫病のように蔓延するということを認識する必要があります。

では、個人としてその人に触れることがなかったという現象といえば、アヤーン・ヒルシ・アリという非常に世界的な人物が挙げられます。アヤーン・ヒルシ・アリは、難民としてオランダにやって来ましたが、あらゆる問題に直面しました。オランダは非常に厳しい法律のある厳しい国になっていて、彼女は入国することができず、偽名を使うことを余儀なくされました。そして、彼女が偽名を使ったため、そのことによって4、5年後にオランダ政府内に騒ぎが起り、政府さえもが崩れたのです。たった1人のためにです。そして、アヤーン・ヒルシ・アリはイスラームにおける特定の慣習を攻撃しました。彼女は自らを、イスラームを離れたムスリムと見なしています。私は、彼女がもは

やムスリムでないのかどうかも分かりません。彼女はソマリア出身ですが、少なくとも彼女の行為からは、ムスリムかどうか分かりません。そして、彼女は、例えばイスラーム地域によっては、女性が危険に晒されている場合や、家庭内暴力があったりする場合があるということに気付いたのです。それで、このテオ・ファン・ゴッホが制作した映画を通して、いかに女性に対する扱いが酷いものであるかを彼女は示そうとしました。そして、その映画中で、クルアーンの中の女性に敵対的な部分の文章が、裸の女体の上に示されます。もちろん、このことが表現の自由やその他すべての物議を醸し出しました。そのことからテオ・ファン・ゴッホは殺害されましたが、アヤーン・ヒルシ・アリは、今日に至るまで警護されているようです。私はたまたま彼女と同じドレッサーに行ったときがあったのですが、彼女は警備員に囲まれていました。彼女は今アメリカにいます。

私の立場ですが、アヤーン・ヒルシ・アリを支持し、彼女が完全に自由になるまでは彼女と討論しないと言いました。というのも、私には賛成できない面もあるわけで、例えば、彼女がそれらムスリムの慣習について語ったそのやり方ですが、鋭くイスラーム、イスラームの基本を非難したのです。しかし、これはイスラーム自体内部からの鋭い議論でもあり、地位が貶められていると感じ、ムスリムもまた解放され、自己批判的になるべきだと感じ、自己批判を求めている女性の議論です。ですから、私はこの難問を取上げたいわけで、このようなことについての論争は、イスラームの著名人がイスラームを非難することによって始められる場合があるのですが、ムスリムでない人々は、そのような場合、その表現の困難であるわけですが、これらの問題について公に対処できるほどムスリムは解放されているとも言えるわけです。私たちは、それらがまるで私たちの社会で大きくなった問題ではないかのようなふりをして、そのような問題を防ごうとすべきではないのです。そうすることは、最終的には私が悲劇と見

なしている結果になるからです。

ユダヤ人とムスリムは、互いに多くを学び合うことができます。そして、両者とも信条を持つのではなく、(その宗教は)律法の実践であり、賛否両論あるものの、布教のために大々的に外に出て行かないという類似性があります。ムスリムとユダヤ人は、ヨーロッパでは非常に小さな少数派ですが、長い間、この社会の完全な市民として暮らしてきているわけで、それと同時に、私がセッション1で言ったようにユダヤ人もムスリムもともに弱い立場にあります。反ユダヤ主義がユダヤ人の絶滅に繋がり、そのようなことは2度と繰り返されてはならないからです。

ユダヤ人とムスリムがなぜそのように近いのかというと、それはまた、続いている中東での紛争によるものです。ときには、ユダヤ人に対する風刺文が、私の友達、兄弟、姉妹によって表されることがありますが、ヨーロッパを正気の社会にするためには、私たちは互いを非常に必要としているのです。ある意味、私が思うのは、キリスト教は非常に長い間支配的立場にあるので、ユダヤ人がムスリムを信頼したり、ムスリムがユダヤ人を信頼したりするほど、キリスト教に対する信頼はないのです。にもかかわらず、私たちはこの必要とされている協力的関係にあるのではなく、日々互いに対立し得る危険な状態にあるのです。

【司会】ありがとうございました。それでは、ラマダーン先生のほうからお答えをお願いします。

【ラマダーン】私の話を聞いている間、私がユダヤ人でないのを不思議に感じたと手島先生は言われました。私はここに来て、貴方の観点から言われたことを聞いて不思議に感じたとと言えるでしょう。というのも、私がしようとしている仕事の基本はお分かりいただけたかと思いますが、つまり、次の著書、今度出版される私の本の副題は「倫理と解放」だからです。ですから、それは貴方が言われてい



たこととまったく同じ路線のもので、本の題名は『革新的改革』です。

しかし、私および私がしようとしている仕事にとって革新的改革は、私の思う基本に戻るることなのです。そして、その改革のプロセスは、イスラームの伝統の当初からある手段の一環です。イスラームは最初の2世紀の間は非常に創造的で、イジュティハード、つまり起源となる書物を批判的に読むという概念とともに、たくさんの新しい答えを出してきたのです。そして、ムスリム精神の歴史を通じて、ムスリムたちは自分たちが支配されていると感じていたために、他者からの脅威に対して自らを守るために、私たちはタクリット、すなわち創造性のない模倣を長い間繰り返し維持するようになったのです。私はただ、当初のそのエネルギー、精神的エネルギー、知的エネルギーに戻ろうとしているだけなのです。今、私たちにはもっと創造性が必要で、創造性というのは私の仕事の中心的な概念なのです。

ですから、これは新しいイスラームではなく、新たな知的エネルギーで再び活力を得て、世界を見ようとしているイスラームなのです。何年もの間、私はフィクフの問題に取り組んできました。ですから、私たちには律法としての答え、新しい答えが必要で、これについて今では20年取組んできたことになるのですが、イジュティハードの概念を使って1世紀以上取組んできても、まだ、あまりしっかりとした新しい答えに至っていないのです。私たちは、単に「そうだ、それが必要だ」ということを繰り返しているだけなのです。そして、私たちは律法的な分野では限界に達してしまっていると思います。実際、これは私がいま取組んでいて、仕事の中で表現しようとしていることなのですが、私たちにとって問題となっているのはフィクフの問題ではないということが現時点の直感です。それは、ウスूल・ル・フィクフの中、すなわち律法的原理と律法学者的分別にあるのです。つまり、文章に関する学者はいても、文脈に関する学者がいらないということで、私が言うの



は、イスラームの宗教分野における権威の中心が移行しなければならないということです。従って、私たちには、ウラマ・アル・ワーキウが必要なのです。つまり、文脈の学者が文章の学者と同じレベルでなければならないということで、これが実際、解放を獲得するため倫理となるものなのです。

しかし、これがそのプロセスであり、そのプロセスは私たちに必要なものだと思います。私はイスラーム戒律の伝統に見出すことのできるツールを利用すると同時に、それに対して異議も唱えているわけで、そうすることは良いことであり大切なことだと考えています。それで、これが進歩的なムスリムか、正統のムスリムかということになりますが、原則に対しては忠実であると同時に、異議に対しても目を向けることができるという意味において、正統のムスリムは進歩的ムスリムでもあると思います。そして、新たな異議に目を向けることができないのなら、それで終わりです。貴方がこれについて言われたことは、大変重要だと思います。それは非常に一般的なことです、キリストについて貴方が言われたことは、別のレベルのことです。私はそれにまったく同感です。

それでは、再定義について戻ります。再定義するとはどういうことなのでしょう。これはムスリムには受け入れられないことでしょうか、私たちには新しいイスラームが必要であるわけですが、では、ムスリムであるということとはどういうことなのか、そしてイスラームの伝統を参照するとはどういうことなのでしょう。今日では「ここにイスラームの参考がありますが、その中から、つまりイスラーム的枠組みの中から新たな答えに至ることができる」と言えることが遥かに重要であると私は思います。このことはまず、信仰者にとっては一貫性を維持するための唯一の方法であり、コミュニティにとってはそのプロセスに従って行く唯一の方法だからです。というのも、私たちが、そしてときに欧米によって、進歩的イスラームと見なされている陳述の多くは、多くのムスリムにとってイスラームではないイスラームだからです。

イスラームの原則のすべてを心に留めていて、例えばクルアーンの捕え方について言えば、それは信条の一部であり、まさに神の言葉なのです。では、文脈に合わせた取り組み方というのは可能なのでしょう。私は可能だと思いますが、それはなにも、文脈に合わせた取り組み方をするためには神の書であるという信条の一部を損なう必要があるという意味ではありません。そして、今、色々と発言している人々や学者はこのことを疑問にしているわけですが、イスラームの社会には、彼らに追従する人々がたくさんいるのです。彼らはエリートであり、掛け離れているので、私たちとしては、これ(文脈に合わせた取り組み方)をどのように促進するべきかについて自問する必要があるのです。

次に私がよく存じ上げているアザム・タミーミー氏との大変興味深いお話しがなされました。彼との深い話し合いがここで行なわれました。そして、その要点について理解して行きたいと思います。これは本当に基本的なことです。これが基本的であるのは、それが2つのレベル、2つの異なるレベルでのことだからです。最初のレベルでは、彼はムスリムであり、ヨーロッパで暮らしているパレスチナ人で、彼の主な関心事はパレスチナです。パレスチナをどのように守るか、防衛するかであり、それと同時にムスリムであり続けるかということで、それは私が全面的に尊重していることです。しかし、彼はムスリムの存在を代表しているわけではないのです。彼は代表的ではありません。彼には政治的な関心事があり、彼の葛藤の中心はそこにあります。そして、これに対しても私は敬意を表します。しかし、ヨーロッパにおけるムスリムの体験、またはヨーロッパ系ムスリムが体験していることを、そのように単純化することはできません

それで、彼が言われたことについてですが、それに関して彼を受け入れることは、私には難しいのです。なぜなら、彼は政治的な立場から発言しているのに対し、私はイスラームの伝統、宗教的立

場にあり、その2つは異なるのです。私たちは同じ観点に立っていません。しかし、互いが交じり合う点が1点あり、それについて私たちは話し合うべきなのです。ですから、ここで私が言いたいのは、確かに私たちはムスリムであり、ヨーロッパ人でもあり得ます。私たちはこのアイデンティティを構築し、法に従わなければならないということです。そして、私たちは政治的な論議に固執してはならないし、それによって方向性を誤ってもいけないのです。というのも、私たちに迫害されていると感じて欲しいと思っている人々がいるからです。彼らには、政治的なプロジェクトがあり政治的な議題があるのです。貴方たちは違うのだと(私たちに知らしめることです)。ですから、彼らはこの迫害されているという感覚を育てていて、私たちもまた自らその感覚を育てています。そして、これはとても危険なことだと思います。ですから、私たちの政治的なスタンスがどのようなものであれ、市民権というものに至ろうではありませんか。私は、文化的にはヨーロッパ人ですし、帰属感もあります。そして、それを社会とともに築くという気持ちもあります。

では、政治的紛争やスタンスということについてですが、これはアザム・タミーミー氏や、彼が政治的に代表しているその他の人々と私たちが話し合う際に、基本となることです。例えば「そうです、貴方はウンマの一部であり、ムスリムとしてウンマを守る義務がある」と言ったとすると、そこで、ウンマとは何なのかを定義する必要があるということです。すると、相手は「貴方はムスリムの社会に属しているムスリムなのだから、中東、例えばパレスチナで抑圧されているムスリムに対して、関心を示し支持すべきだ」と言うでしょう。その通りだと思います。問題は、ウンマの概念をどのように定義するかなのです。そして、以前私たちは、大変温かくまた熱気溢れる話し合いをしたことがあります。私は、「私のウンマに対する帰属意識は精神的なものだ。それは精神的な交わりであり、精神的なコミュニティな

のだ」と言いました。つまり、ムスリムの人間に私がどこで出会おうと、そこには精神的な交わりが生じることです。しかし、政治的な立場ということになると、私のこのウンマに対する帰属意識は、貴方または私がムスリムであるという事実だけに基づいたものではなくなります。その場合、貴方と私の間で促進しようとしているのは正義なのです。ですから、正義の名のもとで、貴方がムスリムであり私がムスリムであっても、貴方が間違ったことをしていると、私は、イスラームの名のもとに貴方と対立します。ですから、その精神的コミュニティに対する私の帰属意識は、相手が間違っているのなら、不当であるなら、私の同胞であるムスリムとの対立もあり得るのです。それがイスラームの教えだからです。イスラームの教えとは、兄弟が正しいときも間違っているときも、助けなさいというものです。同伴者の1人が「兄弟が間違っているときに、どのように助けることができるのか」と尋ねました。「彼が間違ったことを行なわないようにしなさい」。それが預言者の答えでした。ですから、これは批判的な考えに基づいた取り組み方であって、無条件にムスリムを支持するというものではないのです。

ですから、精神的コミュニティがあるが故に私たちは、政治的なレベルで物事を見極めることができるようになるのです。私が兄弟、私のムスリムの兄弟または姉妹を支持するのは、彼女または彼がムスリムであるからなのか、彼女または彼が正しいからなのかということです。ですから、政治的な場面では正義の問題となります。

それで、ヨーロッパ人として、私は中東危機に携わっています。私はパレスチナ人を支持していますが、それは彼らがムスリムだからなのか、それとも彼らが不当に扱われているからなのか。私が彼らを支持するのは、彼らが不当に扱われているからであって、彼らがムスリムであるからだけではありません。従って、例えばチベット人が抑圧されれば、また、いかなる社会でも抑圧されている者があれば、





私はその味方となります。ですから、私は、普遍主義に向かっているわけですが、タミー氏の言われるコミュニティやウンマの感覚が私のイスラームとの繋がりですし、特定のコミュニティに帰属する以前に、私の原則に帰属しているのです。

私が持っているイスラームとの精神的コミュニティの意識は、私に「そうだ、私はスイス人だ」と言わせます。私の社会が正しいとき、スイス政府が正しいことをしているときは、私はスイス政府の側に立ちます。もし、スイス政府が間違った決定をしようとしているのなら、私の批判的忠誠心の名において、自分の政府に対して異議を唱えるでしょう。ですから、パレスチナ紛争に対する私の関わり方ですが、それは私がムスリムであるということを理由とせず、私はパレスチナ人の側に付くことになります。私がその立場になるのはそこに抑圧者が存在し、彼らが抑圧されている人々だからです。パレスチナであってもどこであっても、私は抑圧された人々の名のもとに戦います。私がいかに市民権と私の帰属意識を定義しているかお分かりでしょうか。そして、この点に関してタミー氏には問題があります。彼はパレスチナ人と深く繋がりを持っているので、これ(パレスチナ人を支持すること)を促進するには、自身の国には馴染みのない方法を取るしか仕方ありませんが、私が支持する立場は、英国では、英国民がすべきことは、問題に対する政府の対応を改めさせるために自国内の選挙に投票するという方法を取るということです。ですから、角度がまったく違うことをお分かりいただけるでしょうか。

しかし、タミー氏はヨーロッパにおいて例外的存在であり、一般的な人物ではないと思います。今、実現されようとしているのは、新しい市民権であり、その市民権を持つことによって、私は中東と繋がり、南アメリカと繋がり、アフリカと繋がり、不当に対する正義のためにムスリムと、そして非ムスリムにも繋がっているのです。そして、そうなることによって、私は真の市民となるのです。私は自分の倫理観に忠実

であり、そのため偏狭的にひとつのコミュニティに属することから私は解放されているのです。私はあらゆる所のムスリムに従うということはしません。というのも、現在の英国に関しても、私はあの被害者意識を促進しようとしている主導者たちに対しては批判的だからです。そして、これが、アザム・タミー氏に対して私が思う問題点でもあります。「貴方は、この被害者意識、つまり、(自分たちは)好かれず、助けてもらえない被害者なのだ、少数派なのだ、という意識を育てようとしているのではないか」と言いたいのです。これでは未来がありません。これは過去のことです。これは、ヨーロッパへの私たちの帰属を構築するのに役立たないことです。とはいえ、彼の意見は興味深いと思います。彼とは賛成できないこの点で、私は彼と論争になるわけですが、彼が私に賛成できないこと、また、そのことについて彼が反対意見であったことは理解できます。

そして、最後の点、すなわちソーテンドルプ先生が言われていたポピュリズムのことでありますが、私はヒルシ・アリを知っています。彼女と何度も会っています。ビデオ会議で会いましたし、最近では、ストックホルムでも会いました。私が問題にしているのは、そして貴方に分かっていたきたいのは、イスラームに対して批判的であることは正しいことであるということ。ある考え方、ある差別に対して批判的であるということは正しいということです。しかし、特定のムスリムの行為ではなく、クルアーンに書かれていることが問題だと誰かが言ったとすると、それは問題です。そして、彼女が携わっていたのはポピュリストだったのです。テオ・ファン・ゴッホを殺害するということは間違っていますし、非難されるべきことです。極右政党の主導者が殺害されるというのは間違ったことです。彼はポピュリストであり、カリスマ的な人物でもありました。

彼、あるいはテオ・ファン・ゴッホに対して行われたいかなる暴力も非難されるべきです。しかし、ある1点に関しては「しかし」はないのです。私たちは、

ある1点に関する政治的主張に対しては批判的でなければならないのです。その政治的主張というのはポピュリズムであり、その標的がムスリムである一般の人々となったのです。それは、かつてユダヤ人であるが故に標的となったのと同じです。

ここでの問題は、ヒルシ・アリがしていることです。最初、彼女は「私はムスリムだった。今は、もはやムスリムではない」と言いました。それは構いません。彼女にはその権利があります。「私は無神論者だ」でも問題はありません。言論の自由があるからです。しかし、自分がかつてムスリムであったからといって、ムスリムに関する問題がムスリムにあるのではなくクルアーン自体にある、クルアーンが嫌悪の書であり、差別の書であると言うには、その責任を負う必要があります。クルアーンに問題があるという考え方に対してです。それについて私が「問題は、貴方が人種差別を促そうとしているポピュリストであることだ」と言うことは正当なことのはずです。貴方がムスリムかそうでないかは、私には関係ないことです。私はただ貴方の言い分を聞いているだけです。私はストックホルムで彼女と話し合いました。彼女は「はい、申し訳ないが、一部のムスリムはその文献の中でクルアーンに問題があるとしている」と語り始めました。では、それを言って、それについて話そうではありませんか。事実、それが行なわれ、それは彼女が行なっていることなのです。彼女が言っているのは、イスラーム自体が西洋の価値観と対立するものだということです。ですから、その議論とは、ムスリムは真のヨーロッパ人にはなり得ないということです。これは大変危険です。そして、彼女がかつてムスリムだったが故に、更に危険なのです。彼女は、その立場から話をしているからです。ですから、少なくとも、彼女が言っていることは正確にはどのようなことなのかを話し合おうではありませんか。これはコミュニティ内の議論ではありません。違います。それはイスラーム内部からの議論ではないのです。かつてムスリムだった人間が、反

イスラーム的感情や議論を促そうとしているもので、それをはっきりと正しく捕える必要があるのです。

では、彼女には言いたいことを言う自由が許されるべきなのでしょうか。答えはイエスです。彼女がオランダに留まることが許されるべきでしょうか。イエスです。彼女が、ボディーガードに囲まれているのは正しいことなのでしょうか。ノーです。これらすべてについて私も同意見です。彼女は自由であるべきです。しかし、言論の自由の名のもとに、彼女が言っていることを、それがまるでイスラームの意見のひとつであるかのように、簡単に受け入れることはできないのです。それ以上のものがあります。それはそれ以上に危険なもので、私にとって大変不安なことです。ですから、コミュニティ内の対話に耽るのであれば、彼女は、とても危険なことを言っていて、それを促そうとしているのです。

彼女はアメリカにいます。彼女は、2週間前にある会合に出席して、アメリカ人の前で「イスラームは西洋の価値観とは相容れないものだ」と言っていました。これ自体に反対です。これは何なのですか。何をしようとしているのですか。単に、分裂を促進しようとしているだけです。そして、彼女の言うことに耳が傾けられるのは、彼女にはイスラームのバックグラウンドがあり、「私は知っている」と言っているからです。ですから、「私は、知っている」と言い、それから「分裂がある」と言うと、それで対話が終わってしまうのです。故に、この議論は危険なのです。ですから、表面的に、これは宗教内の話だとは言わないで下さい。なぜなら、彼女は外部の人間だからです。彼女は自分が部外者だと言っています。ですから、私は彼女との話し合いを受け入れますが、彼女に自分の言っていることをはっきりさせて欲しいのです。また、貴方にも、その違いがどこにあるかを聞いて欲しいのです。

【司会】コメンテーターの内藤先生のほうから今のソーテンドルプ先生の質問に対するコメントがあるそ





うなので、それをまず質問していただきましてから、もう一度新しく皆さんのコメントをいただくときに、ボザルスラン先生とセット先生に最初に質問していただきまして、あらためて質問・コメントを取ります。それでは内藤先生、お願いします。

【内藤】ソーテンドルプ先生が指摘され、今ラマダーン先生がお話になったアヤーン・ヒルシ・アリの件で私も一言、言いたいのです。彼女は不必要な対立をあおりすぎました。しかも、アヤーン・ヒルシ・アリの名前はしばしばヨーロッパではフェミニズムの闘士として知られていますし、イスラーム社会での女性の人権抑圧に対して戦うシンボルとして扱われていました。彼女の経歴が結局うそだったということが後にドキュメンタリーで暴露されますが、彼女はそれを否定しませんでした。そうすると、まずテオ・ファン・ゴッホの死は何であったのか。彼女はその死に責任を負うべきです。つまり、彼女の偽りのストーリーで映画が作られてしまったのです。このことはあまり知られていませんでしたが、私はオランダのドキュメンタリーを見ましたので、彼女が否定していないことは分かりました。

彼女を批判することが目的で今のお話をしたわけではありません。実は彼女は自由民主党という政党(VVD)の国会議員でした。この政党は通常、政党のメンバー自身はリベラルと名乗っていますが、これは恐らく、例えば日本やアメリカで言っているリベラルの意味ではない。むしろリバタリアンと言ったほうがいいでしょう。要するに他者からの干渉を受けたくない、宗教的な勢力の干渉も受けたくない、あるいはソーシャリズムの干渉も受けたくない、イデオロジカルな干渉も受けたくない。オランダには、確かにそういうリベラルが一つの勢力として存在する伝統がありました。そのこと自体はオランダの社会にとって、私はネガティブなことではないと思うのです。問題は今日の現状で、そのリバタリアンの勢力が最もアンチ・イスラミックな言動をしてしま

うことなのです。なぜそうなるかというと、リバタリアンの理解では、イスラームというのは大変押し付けがましい宗教である、人に規範を押し付けようとする、だから我々は嫌うのだというロジックを展開します。不幸にしてヒルシ・アリは、そのロジックを強化することに貢献してしまったのです。

もともとオランダの社会は、彼らにとってのトレードマークのように、寛容ということと言い続けてきました。この寛容も、先ほど私も少し言いましたように、相互に干渉しないということが前提になっている寛容です。

このことで一つ指摘しなければならないのは、オランダにいるムスリムの中で、大きなコミュニティのトルコ系のムスリムがいます。トルコの人たちは、寛容という言葉の意味を理解していなかった、あるいは間違っていて理解していたのです。トルコ語ではホシュギョル(hoşVgörü)といいますけれども、彼らはその言葉で理解していました。ホシュギョルと言った場合には、温かく見るという意味が入ってしまうのです。しかし、オランダ人が言っている寛容には全くそういう意味は含まれていませんでした。いてもいい、耐えられるという意味であって、別に相手を温かく見るということは最初から含意されていません。

それでもなお、相互不干渉の原則が成り立っている限りは、オランダの場合、確かに対立は起きにくかったのです。少なくとも私の知る限り、1990年代の前半までは、目立った対立は起きていなかった。しかしその後、徐々に、特に9.11以降、衝突がひどくなってきますが、リバタリアンの人たちはもともと寛容を評価しているのです。お互いに干渉しない自由というものを評価しているのですが、その人たちがもっともアンチ・イスラミックな方向に傾斜してしまったということは、オランダにとって、私は深刻な事態だと見ています。

もう1点だけ付け加えますが、オランダの場合には、リベラルと称する人の間に最も反イスラーム的な動きが強まってしまふ。そして、ほかの国の場合、特に

ドイツの場合に、今また同じことが起きています。ドイツの連邦議会の緑の党(グリュネン)の議員、これはトルコ出身の議員ですけれども、彼女がムスリムの女性のヘッドスカーフに対して批判的な発言をしたために、イスラーム主義者から脅迫を受けている。ドイツでもこのことが議論されています。これはちょうどヒルシ・アリがイスラームに対して攻撃していたときに、彼女が脅迫を受けていたのと同じような構造がドイツでもいま起きているわけです。そうすると、ドイツの中では「ほら見る」と。やはりムスリムというのは不寛容で、そういう発言に対して攻撃的になるのではないかと言っていますが。この場合も注意しなければなりません。ドイツでそういう発言をする彼女は、トルコ人なので一応はムスリムなのですから、属しているのは概して左派の政党なのです。緑の党であったり、あるいはSPD(社会民主党)である場合なのです。気をつけるべきは、ヨーロッパの政治勢力の中で、概してキリスト教政党は、あまり正面からイスラームに対して攻撃的なことを言わないのに、左派の政党のほうが割と安易に言ってしまう傾向があるのです。それはなぜかということ、もともとイスラームが人権あるいは特に女性の人権とは対立するものだという前提に立ってしまうと、人権を擁護するということを自称している政治勢力ほど、イスラームに対しては非常に厳しい敵対的な意見を述べてくることがあるからです。

この点については、両者の間の対立を激しくしてしまうという懸念があることを、私からのコメントとして申し上げておきたいと思います。

【司会】ありがとうございました。それでは、ボザルスラン先生とセット先生のほうから、手が挙がっていますけれども、ほかにもう一人くらいコメントがありましたら、それをお聞きしてからラマダーン先生にお答えいただきたいと思います。どなたかございますか。クリストファーセン先生ですね。ではそのお三方に今の順序で質問、コメントをお願いします。

【ボザルスラン】私は、誤解を晴らすために、非常に短くコメントしたいと思います。私の意図は、ムスリムに新しいイスラーム、または更に新しいイスラームを作り出すよう促すことではありません。もちろん、その起源に立ち返り、書を読むという権利が彼らにはあります。しかし、真正性に回帰するということもまた、解釈の問題であると思うのです。それも解釈の作業なのです。文脈(状況)によって、真正性の源と呼んでいるものを、違う観点からもう1度読むことができますし、また、そうする必要があるのです。ですから、私はただ、この誤解を晴らしたいのです。私の意図は、ムスリムがより新しいイスラームを作り出したり、キリスト教信者がより新しいキリスト教義を作り出したりする必要があるということではありません。そのような作業は、私の能力および権限を遥かに越えていることから。

【司会】次にセット先生お願いいたします。

【セット】議長、ありがとうございます。質問はありませんが、いくつかコメントしたいことがありますので、皆さん、ご辛抱ください。まず、私は、まさに文字通り多数宗教国家であるインドの出身です。私の国は多言語で多文化国家です。そしてまた、私は多人種、多宗教の家族の出身です。ですから、少しでも私が失礼なことを言った場合、私の話に出てくるすべての宗教、およびすべての感情に対して非常に深い敬意を表しながら語っているとご理解ください。

まず、挑戦的な意見として、キリスト教のことを語る場合にそれをヨーロッパや西洋と同一視するのは、この偉大な宗教の創設者に対して不当なことであると言わせてください。私たちがよく知っているように、その創設者はアジアの一部である今日のパレスチナで生まれました。彼はヨーロッパのいかなる言語も話しませんでした。私たちが知っているとおり、彼はアラム語を話しましたが、それはセム語





の言語で、アラブ語およびヘブロン語の伝統に属するものです。私は、今でもシリアで唯一アラム語が話されている村に行き、レバノン人の司祭が主の祈りをアラム語で言うのを耳にしたことがあります。

エルサレムも訪れ、ラダマーン先生が言われていた抑圧の一部を見たことがあります。また、サリー・ヌセイベの家族の奇跡を見たことがあります。このスンニ派ムスリムの家族は、500年以上もの間キリストが埋葬されていると信じられているホーリー・セパルカーの教会の鍵を保管しているのです。それで、彼らがこの鍵を持っているのは、この教会内には皆さんもご存知のように、キリスト教各宗派、つまりアルメニア、ロシア、ギリシア正教などのための、専用の場所が設けられているからです。

ですから、私たちは、キリスト教が生まれた文脈にも目を向けなければなりません。もちろん、キリスト教はユダヤの文脈の中で生まれたわけですが、それはまた、ずっと初期のグローバル化という文脈の中で生まれたのもあって、そのグローバル化は2,500年前に起こったもので、それが私の国から広まって間違いなくイランまで、もしくはそれ以西にまで広がったのです。バーミヤン仏教のブッダの像は、それがヒマラヤ山脈を遙かに越えて、東は日本まで広まって行ったことの証です。

ですから、キリストの教えのいくつかを見るとき、特に哀れみと非暴力主義に関することについては、キリストがその教えを説いた仏教的背景に、非常に寛大な目を向けるべきではないのでしょうか。私たちが語っているのは、アイデンティティについてです。ラマダーン先生は、私が不遜なコメントをしたので笑っていますね。私たちは、文脈、少数派、そしてアイデンティティについて語っているのです。

私は、最近、オーストラリアとニュージーランドを訪れました。それらの国では、移民に関する問題は、状況が反対です。たった200年前にやって来た白人の移民たちは、今やそれらの領土の元来の居住者たちに対して、自分たちが行なった不平等と不当

を自ら認めようとしつつあります。オーストラリア人が、博物館でアボリジニの歴史をどう扱っているかを見てみてください。ニュージーランド人がマオリ族の歴史をどう扱っているかを見てください。それは、和解に向かおうとする試みであり、この(白人の)移住によってもたらされた不平等をもとに戻そうという試みがあり、ここでの移住者(問題)とは、白人が非白人の領土に行くという逆方向のもので、基本的に白人の領土に非白人が移住するのとは異なります。

貴方は、トルコで起こっている抗争についてもお話しになりました。そして、トルコの世俗主義がイスラームとの緊張の原因だと言われました。そのとおりです。私が委員をしている文化議会の会合に出席しました。この議会は、ヨルダンのハッサン王子と、トルコのビルケント大学の学長であるドグラマチ氏によって設立されたものです。トルコの前大統領スレイマン・デミレル氏も出席していました。同氏は、スカーフを被った女性はサウジアラビアに行くべきだというコメントをした2日後に、この会議に出席していたのです。このコメントは非常に無礼であり、逆の意味である種の宗教と化している激しい世俗主義に基づいたものでした。そして、スレイマン・デミレル氏の隣に座っていたのが、トルコの外相であるグル氏でした。この外相は首相と同様に、公式な行事には夫人を連れて行くことができないのですが、それは、お二人の夫人がベールを被っているからです。しかし、ここで忘れてはいけないのは、トルコが最近まで「アジアの病人」ではなく、「ヨーロッパの病人」と呼ばれていたことです。ですから、ラマダーン先生が言われたように、イスラームは人が記憶している以前からヨーロッパの一部であったのです。トルコが「ヨーロッパの病人」と呼ばれていたとき、確かに、イスラームはヨーロッパに存在していたのです。

文書が文脈に合うよう変更されるということについて、私が良く知っている2つの事例についてお話しさせてください。ひとつは、イスラームの信条、戒

律、または信仰が、ヒンズーの考え方に適合されたという、私自身の母国でのことです。そうしたことから、折衷的で非常に許容範囲の広いスーフィーの伝統がインドで繁栄しました。そして、それは偉大なムガル帝国の君主アクバルによって、国の政策の一部に採用されたのです。この君主アクバルは、皆さんも知っているように、先ほどソーテンドルプ先生が非常に重要だと言われていた仏教的議論の伝統に従ったのです。これは非常に仏教的な伝統です。仏教の繁栄に大きく貢献したアショカ王は、敬意ある議論の大切さを強調しました。この国では聖徳太子が1,500年前に民主的な憲法を公布し、その中で、皆に議論と話し合いの必要性を命じたのです。ですから、議論と話し合い、それにコンセンサスから生まれるという考えは、非常にアジア的な伝統で、非常に古いアジア的な伝統なのです。

アクバル王は、彼の宮廷の宗教人らを促して、ディーネ・エッラーヒー(Din-e-Ilahi)という決して長くは続かなかった神の宗教を創設しました。そして、彼の孫息子であるダーラー・シコーは、より正統派のアウラंगゼーブに追放されるまで、その宗教を広めるのに大きく尽力しました。また、最高のインド哲学の真髄であるウパニシャッドをペルシア語に翻訳したのも、このダーラー・シコーでした。そして、それがペルシアからヨーロッパに渡り、皆さんもご存知のとおり、18世紀の偉大なドイツの思想家であるマックス・ミュラーや、アジア・ソサエティーを創設したウィリアム・ジョーンズ、およびその他偉大なサンスクリットの学者たちに、大きな影響を与えたのです。ですから、このような折衷主義の歴史の事例、つまり、一神教が多神教的背景に適應して行った事例に、私たちは目を向けるべきだと思います。インドネシアでも、このようなことを目にしました。後に、インドネシア大統領となったアブドゥル・ラフマン・ワヒドは、ナフダドル・ウラマー運動の主導者でした。この運動は、数多くの適應、つまり文脈への適應、ジャワという背景への適應を果たし、その結果、その文脈の中でイス

ラームが繁栄し、今も繁栄しています。彼らは、その文脈に合わせて、非常に多くを適應させてきました。ですから、アブドゥル・ラフマン・ワヒド氏のように、ラーマーヤナからの引用を非常に幅広く用いることのできるような人物がいるわけです。というのも、彼は生まれ育ったジャワ中部で、ラーマーヤナが演じられるのを見て育っているからです。

ですから、一神教がその文脈に合わせて適應して行った例を、私たちはこのように見てきたわけです。これらの素晴らしい事例から、オスマン帝国で実施されたミレット制度のような冷淡な相互許容の方法だけでなく、偉大なムガル帝国君主アクバルが実践した温かみのある許容方法からも、何を学べるかを私たちは検討するのです。ありがとうございました。

【司会】 それでは、クリストファーセン先生から、その次に森先生の質問を受けまして、それからラマダーン先生のお答えをいただきたいと思います。では、クリストファーセン先生、お願いします。

【クリストファーセン】 ヨーロッパの政治制度や様々な政治団体を分析する際に、近代化と啓蒙主義を実現しようとした団体の一種としてリバタリアンに焦点を当てると、内藤先生の方法は非常に適切だと思います。しかし、貴方の分析を私が理解する限りにおいて、貴方はリバタリアンを反イスラームと見なしているようです。ですが、私の印象では、リバタリアンは、より一般的な考え方、つまり反宗教主義とも言える考え方を背景に見なされるべきではないかということです。反宗教主義をより肯定的に捕えると、それは、宗教、特に一神教の宗教に対して、ヒルシ・アリおよびテオ・ファン・ゴッホが提起したのと同じ質問に答えるよう求めるというものでもあります。それはまた、ラビであるソーテンドルプ先生が、この前のコメントで触れられた同じ質問でもあります。私はこの『サブミション』という映画を観ました。この映画が提起している問いは、「妻





を虐待することを正当化するのに、なぜムスリムの男性がイスラームを引き合いに出して許されるのか」ということです。映画の中の女性は、信仰深いムスリムの女性として描かれています。彼女は神に祈り、求めました。イスラーム、クルアーン、クルアーンの記事が、彼女を虐待するのに利用されたとき、どうすべきなのかを神に尋ねました。そして、クルアーンの名のもと、イスラームの名のもと、神の名のもとに殴られた彼女の身体の部分に、それらの文章が映し出されました。リバタリアン、近代化主義者、啓蒙主義者の人々が、私の国でも提起していることは次のとおりです。「一神教のみなさん、基本的人権、特に女性の権利に関連した人権に対する貴方の答えは何なのか」です。

【司会】では、森先生、お願いいたします。

【森】ラマダーン先生がヨーロッパ・ムスリムの条件についてお話しになったことを非常に興味深く聴きました。先生は記憶と法的枠組みという二つの条件をおっしゃったのですけれども、私の専門がアメリカの宗教の歴史ですので、それとパラレルにして考えてみると、先生がいま問題にされている「ヨーロッパ・ムスリム」というものが、アメリカの場合には、ちょうど今から100年前の「アメリカン・カトリック」が置かれていた状況とよく似ていると思います。100年前にはアメリカでは、カトリックは全く外国の宗教だと思われていましたし、忠誠心の問題では、アメリカ大統領ではなく教皇に忠誠心を持っている人だと考えられていたという点で、非常によく似ていると思います。

ただ、アメリカン・カトリックがその後どうなったかという、1960年にジョン・F・ケネディが大統領に選ばれたように、完全に市民権を持ったものとして認定されたのです。先生が市民権にグレードはないのだとおっしゃっているのは、まさにそのとおりで、ではどうしてアメリカのカトリックが市民権を得たの

だろうかということを考えてみると、ラマダーン先生が考えておられる条件よりも、完全な市民権を得るためには、もうちょっと実はハードルが高いのではないかという気がするのです。それは何かというと、世論だと思います。例えばヨーロッパ・ムスリムを完全なヨーロッパのものとして、市民権を持ったものとして認めるかどうかというときに、世論が重要になってくる。アメリカン・カトリックの場合には、どういう条件を満たせばアメリカのものになるのかということが、当時は割合はっきりしていたと思うのです。

ところが、今の議論の中で分かってきているように、いわゆるヨーロッパとは一体何なのかという条件がはっきりしないために、世論を納得させるのはどうしたらいいのかということが、かなり難しくなっている。アメリカのカトリックの場合、アメリカのものになる条件は何であったかという、一つは、愛国心だと思います。愛国心の在り方は、ラマダーン先生がおっしゃるように、完全に現在のあり方を認めるだけではなくて、それを批判していくというのも愛国心であると思いますが、アメリカのカトリックの場合には少なくとも、アメリカの運命を自分の運命として受けとめていったのではないかと思うのです。

もう一つは何かというと、宗教の在り方として、アメリカ的原理である民主制というものを受け入れていった。ですから、アメリカのカトリックの在り方は、バチカンの在り方や他の国のカトリックの在り方とは随分違った形で、自らの行動は自らが決定するというものになってきています。例えば一例を挙げると、人口妊娠中絶と避妊についての世論調査をすると、プロテスタントとカトリックの差は全くない。これがアメリカのカトリックです。それはどうしてかというと、バチカンの考え方とは別に、自分たちで自分たちのあり方を決定していったということなのです。そのように考えると、ヨーロッパ・ムスリムが世論に認められるには、もう少し高いハードルが必要になってくるのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

【司会】ありがとうございました。それでは、ラマダーン先生と、特にクリストファーセン先生のコメントに対しては、内藤先生からもよろしくお願いいたします。

【ラマダーン】セッ先生に言われたことでひとつ、私が大切だと思うことがあります。それは、お話の中で言われた世界観です。私が笑っていたのは、ふざけていると思ったからではなく、仏教の観点から見てとても面白いと思ったからです。それがどこであっても、どのようであっても、キリスト教の伝統を、仏教の教えによって育みながら唱えて行くことは良いことだと思います。そして、インドにおけるムスリムの実態を考える際に、それは考慮に入れなければならないものだと思います。そして、仏教との関係についても、ムハメド・ハミドゥッラーのような、ヨーロッパに非常に長く暮らしたインド人のイスラーム学者のような、本当に非常に深い考えを持った学者であり思想家は、仏教の伝統によるものすべてを、神の教えによるものとして認識し取組むべきであるかもしれないという意見で、それは私たちの知らない預言者のものであるのですが、すべて同時に、私たちは仏教の伝統からも学ばなければならないというその総合的なアプローチはとても興味深いと思いました。私たちが自らを3つのアブラハム宗教から離れた立場に置くこともときには大切で、私たちの取組み方には、横断的な側面があっても良いのではないのでしょうか。私はそれが重要なことだと思います。

貴方は、文脈への適応とディーネ・イッラーヒーについてお話しになりました。よく私を理解していただきたいのです。再び、私にはお話をする準備ができています。それで、ヒルシ・アリが提起した問題の多くやその他は、本当に重要なものだと思います。しかし、良い問題を提起したからといって、人の立場や哲学的な考え方全体が正しいというわけではありません。それで、彼女が書いたり言ったりしていること、つまり人種差別的で反イスラーム的

なことは、それが本来のイスラームであると彼女が言っている限り、彼女は間違っているわけで、それが問題なのです。ですから、彼女の言葉を引用しても構いませんし、彼女が正しい疑問を投げかけていることもあります。また、私は彼女がイスラームから離脱し、イスラームを非難していることを問題視しているわけではありません。それは私が言おうとしていることではありません。私が問題としているのは、彼女が「ムスリムの人間は、イスラームであるが故にヨーロッパ人にはなれない、西洋的な価値観を受け入れることができない」と言うことによって促そうとしている政治的な考え方です。これが彼女の基本的な主張であり、これがその実態なのです。ですから、彼女が何であれ、彼女の判断がどうであれ、それは(すべて政治的な)レベルのことなのだと思います。ですから、私が彼女によってショックを受けているとか、彼女のことを良く思っていないとかという問題ではないのです。それはこのこととまったく関係はありません。テオ・ファン・ゴッホについてですが、例えば、彼を殺害するということはひどく非難されるべきことですが、彼がイスラームについて言っていたことも非難されるべきことです。というのも、彼の見解はとても乱暴で非常に表面的であり、時にはとても人種差別的でした。しかし、もう1度言いますが、彼はムスリムに対してだけそうであったわけではありません。キリスト教徒に対してもそうでしたし、ユダヤ教徒に対してもそうでした。もちろん、彼は言いたいことを言う権利はありますが、彼の言うことに対して私たちは批判的でなければならのです。

ですから、また、彼女が提起していた問題のいくつか、女性に対する差別や女性の権利についての問題は本当に重要なことです。しかし、彼女のその問題提起の仕方が私にとって問題なのです。更に、話し合う機会があっても、彼女は相手の言っていることは意味を成さないと最後には言います。つまり、彼女は疑いの気持ちを植え付けようとしている





ようです。疑いを促すことによって彼女が言いたがっているのは、まさに、唯一正しい質問をしているのは自分の側からだけだということです。それで、もしこちらが答えを提示して、例えば、私たちは批判的でなければならず、自己批判的であるのも良いのではないかとすると、彼女は、気を付けろ、その発言は意味を成さない、ムスリムであると同時に自己批判的であるということはありません。この発言は大変危険なことです。本当に危険なことです。ヨーロッパや西洋では、このような発言はしないよう、よく注意しなければなりません。というのも、このような言葉は非生産的だからです。本当の対話に役立ちません。たとえ、彼女や他の人たちが提起している深い問題は、私たちも(解決のために)助力できる問題だと捉える必要があるとしても、あのやり方ではいけないのです。

森先生がコメントされたことで、実に重要なことがあります。それは、帰属意識、人が社会の中のプロセスに受け入れられ、その一部になったと感じるのは世論に依るというものです。それは、本当に、正にそのとおりです。

ある時点で、ヨーロッパ系ムスリムになるプロセスで理解することとして耳にしたのは、法律を受け入れること、法律に従うことであり、これは事実であり基本です。そして今、私たちが気付いたのは、それだけでは不十分だということです。この(ヨーロッパ系ムスリムを実現するという)難問には、何か不可解な要素があります。本当に貴方は正しいと思います。それは不可解ではありますが、それが不可解であるのは政治的な理由からだけではありません。それが不可解なのは、貴方が言ったとおりです。つまり、私たちが対処しようとしているのは、この社会内で起こっている危機的状況だからです。それは社会自体にとっても不可解なことなのです。

市民から見ても、「ヨーロッパとは何か」という事実がどこにあるか不可解なのです。ですから、明示されていないことなので、(その対処は)とても難し

くなると思います。認識されていないことなのです。でも、それは確かに存在するのです。私たちは、何かが欠けていると感じているのです。そして、私たちが危機や恐怖を増大させている場合には、真の市民になるためや受け入れられるために何が必要かということが更に不可解なものになって行くのです。ですから、この危機的状態では、それが地域や国家レベルで明確な社会意識を持った市民による社会への現実のまたは真の「参加」、つまり、文化的、芸術的、美的、政治的など、すべての分野に参加することでそれが実現できるということを理解することは、本当に重要なことだと思います。私たちが携わっているのは政治です。そして、それはこれが根元にある権力闘争にも関わっています。例えば、フランス人の若者たちが投票をしていて、彼らの票も考慮しなければなりません。そして彼らは将来、政治制度の一部となって行くわけで、それも現実です。

私は、郊外に住むあるフランス人の若者に深く感銘を受けました。彼は市長に会いに行って、「私たちに對する貴方の政策は間違っている。貴方は二重基準を築こうとしているが、それはうまく行かない」と言ったのです。ついに市長は腹を立てて、「君はいったい何を欲しているのか」と尋ねたのです。すると、彼は市長のほうを見て「貴方の地位です。私は貴方の地位が欲しい。市長になりたいんです」と言いました。これは本当に重要なことです。これもまた政治的な側面で、そこに暮らし、投票することができ、選挙で選べることができると感じるができるということなのです。ある時点で、人はムスリムやアラブの単なる形だけの存在はなく、(真の)フランス人となり、政治的プロセスに参加するわけです。これは重要なことだと私は思います。

もうひとつ、誤解や好ましくない認識を招いている問題があります。それは、ヨーロッパの政策と中東と世界情勢の関係です。というのも、いま中東のため、パレスチナとイスラエルの紛争のために、何

かしなければならない、また、去年の夏のレバノンでの危機的事態のために何かしなければ、という認識がヨーロッパにあります。今日のヨーロッパ内から巻き起こっているこの認識は、イスラーム世界との新しい関わり方で、これは中心が変化したこと、重心の変化であるように思います。調査が示す新しい数値は、本当に興味深いものです。1967年には、ヨーロッパ人の73%がイスラエルを支持していました。現在では、パレスチナのほうをより支持している人が67%です。物事が変化しつつあるという新たな認識が内側から出ているのです。そして、私たちは、ヨーロッパというレベルでは、自分たちがどこに位置し、国際的には何を支持しているのかということを感じ取ることができるのです。それは文化だけの問題ではありません。私たちはそれほど単純ではありません。これは文化や帰属意識の問題だけではないのです。政治や政策の問題でもあるのです。そして、私たちが政治的なレベルで国際問題に取り組まなければ、文化のおよび宗教的レベルでの亀裂を促すことになります。ですから、私たちはこれに関して率直でなければなりません。貴方の言われた最後の点についてお話しするのを忘れていました。結論の部分で申し上げます。

はい、私たちは分かち合わなければならないと思います。私たちには、分かち合うべきものがたくさんあり、中東紛争を避けるようなふりをしないということは、本当に重要だと思います。私たちは同じヨーロッパの国民なのですから、互いに信頼し合い、また、非常に熱心な政治的議論を通してそれについて話し合い、互いに耳を傾け合うことができるはずです。ですから、政治的には異議があったとしても、それは、ヨーロッパをともに構築して行くことができるという価値観を共有していないということではないのです。しかし、その点に関して今日の問題があるのだと思います。

私自身の体験についてお話しさせてください。新反ユダヤ主義は、アラブ人やムスリムから現れて

きていると言っているヨーロッパの知識人がいます。彼らに対して私は気をつけるようにと言います。というのも、ひとつのコミュニティを保護しているとき、もうひとつのコミュニティを標的にしていることになり、亀裂を生じさせているからです。ひとつの議論ではあるかもしれませんが、例えば反ユダヤ主義はムスリムに依るものだという度に、それは反イスラームになるのです。これはイスラームとはまったく関係ないことです。反ユダヤ主義とかイスラーム恐怖症とかと非難されることなく、サウジアラビア政府を批判するように、イスラエル政府を批判できるべきなのです。しかし、問題は、ヨーロッパの国によっては、このような主張をするのが難しいということです。なぜ難しいかというと、ムスリムとしてイスラエル政府を批判すると、反ユダヤ主義的な何かを隠していると認識されるからです。これは間違いです。これは、政治的な問題についての話しですが、今日では、とても難しいことです。しかし、将来的には、例えば「はい、私はパレスチナの人々を支持します。本当に彼らは抑圧されていると思いますが、どのような議論であっても、反ユダヤ主義的なことをほんの少しも容認するつもりはありません」と言えるようになるでしょう。しかし、これは政治的な話し合いであり、ユダヤの伝統出身のヨーロッパ国民として、私たちはお互いから学ばなければならず、この大陸でユダヤ人にとってかつて現実であった、古い人種差別に戻ってはならないのです。また、ときに、ユダヤ人の知識人が支持しているように、「イスラエルを非難するということは、イスラエルを破壊したいということだ」ということに戻る必要はないのです。ちがうのです。私たちが求めているのは、ヨーロッパから派生する、中東問題の解決となるものです。彼らの義務と権利を理解することです。この議論は非常に重要だと考えます。

宗教間対話で問題であるのは、互いに友好的であろうとするために、議論を避けていることです。それではうまく行きません。専門家による宗教間対





話では、それでもうまく行くかもしれませんが、草の根の部分では人々が私たちに賛同してくれることはないでしょう。人々は、貴方たちは、話し合いのふりをしているが深い問題を避けている、と言うでしょう。そして、これは私たちの責任だと思うのです。それで、貴方がこのことをセッション1で言われているのを聞いて、私たちはこのことについてまったく同じ見解だと思うのです。とにかく、これは本当に重要な問題だと思います。色々なご意見に対して私が言いたかったのは、これだけです。

【司会】内藤先生、お願いいたします。

【内藤】私も『サブミッション(服従)』という映画は見ました。今のご指摘で、イスラーム社会の中での人権、特に女性の人権に関する議論をしなければならないこと、場合によっては、それに対する批判をしなければならないことは当然のことで、それは何も問題はないです。

ただ、私が少なくとも『サブミッション』という映画を見た限りでは、全く不必要な表現が一つある。つまり、もしそこで語られていることが真実で、自分がいかに子供時代にひどい扱いを受けたか、あるいは無理やり結婚させられたか。そういうことが、かりに真実であったとしても、なぜシースルーの女性に語らせる必要があったかです。あれをごらんになった方はお分かりになりますけれども、裸が見えてしまうのです。もしそういう家族の中に押し込められていたのだ、閉じ込められていたのだということを表現したいのならば、普通に黒いドレスを着て、その状態でしゃべればよかったのです。なぜ我々視聴者から見たときに、乳房や性器が見えるような形で表現しなければならなかったか。あれは明らかに挑発的な表現です。全く不必要な表現だと思います。

もしあれが普通の格好をした女性がモノローグとして自分の人生を語るのであれば、いまクリストフ

ァーセン先生が言われたように、ムスリムの女性の人権に関する議論のもとになりえたでしょう。あの表現方法では挑発したと見られてもしかたがない。

確かにムスリムの人権については議論すべきです。しかし、議論するのだったら、少なくとも、ああいう無用な表現、挑発的な表現を避けたところでやるべきです。

それからもう1点、逆のことについて最後にちょっと指摘させてください。今日はあまりその問題は出てきませんでしたけれども、先ほど私のコメントの中で言いましたように、女性のヘッドスカーフやヴェールの問題は各国でいま、ターゲットになっています。この間、イギリスの前外相ジャック・ストローが「ヴェールを取って下さい」と言ったときに、ちょうど私はBBCテレビで見ていたのですが、あるムスリムの女性が「あれは服を脱げと言っているように聞こえる。大臣だろうと何だろうと、私に服を脱げと言う権利はないだろう」というふうに反応している。これはごくノーマルなムスリムの女性たちの反応なのです。もちろんそれがポリティカルなシンボルであるとか、ファンダメンタリズムのシンボルであるとか、女性に対する抑圧のシンボルであるというケースがあることは私も知っています。しかし、自分の意思でかぶっている人もいるわけで、その人たちにとっては羞恥心の対象になっているわけですから、それを取れといわれることがセクシャル・ハラスメントに当たるという想像が、なぜヨーロッパ諸国でできないのか。

前にフランスの国際会議で、これは権力によるセクシャル・ハラスメントではないかと言ったら猛烈に反発されました。「極東から来たおまえに言われる筋合いはない」と言われました。そう言われるとどうしようもありません。しかし、私はあえてそのことを言いたい。もし、ヘッドスカーフが女性の人権に対する問題であるならば、どうしてかぶっているのかを、まず相手に聞くべきでしょう。それが抑圧によるものであれば、当然、抑圧について我々は議論しなければならない。しかし、自分の意思であるならば、

それを取れと言うことがハラスメントに当たることを認識しなければならない。しかし、その仕分けが現在のヨーロッパではだんだんできなくなっているというところに問題があらうかと思います。

【司会】それでは、ほかにどなたかご意見、ご質問はございますか。先ほどから質問、コメントのかたが重なっていますけれども、ほかのかたはいらっしゃいませんか。なければ、セット先生とクリストファーセン先生にお願いします。

【セット】ありがとうございます。森先生が言われたことに短いコメントがあるだけです。市民権の問題ですが、ラマダーン先生も市民権および世論による受け入れについて話されました。両先生はまったく正しいと思います。ケネディだけが、アメリカの大統領の中でWASPではない大統領でしたが、Pの部分だけは違っていました。彼は白人でしたが、プロテスタントではありませんでした。彼だけです。アメリカ人は、戦時中、日系人から市民権を法的ではないにしろ実質上剥奪し、彼らをキャンプに収容したわけですが、それは、ケネディが大統領になったときから数えてそれほど遠い昔のことではありませんでした。たった25年前のことでした。

市民権とは何を意味するのでしょうか。アメリカという文脈においては、市民権は正確に捉えられていると思います。しかし、アメリカの対極にある多言語、多文化のインドの文脈ではどうでしょう。今日、最も力のあるインド人について、ちょっと考えてみてください。彼女は大統領ではありません。首相でもありません。彼女はインドを統治している24政党から成る連立政権の主導者です。彼女はその連立政権を2004年5月に勝利に導きました。彼女は首相になり得たのですが、権利の放棄というインドの伝統に従ったのです。というのも、彼女はインドのパラモン系の一家、というよりパラモン人であり、パーシ人であり、ペルシア人である一家に嫁ぎ、その家

族の出身ということを理由に、彼女はその地位を放棄し、もうひとつの少数派の一員、すなわちインドの全人口の2%に当たる2,500万人のコミュニティ出身のシーク人にその地位を譲ったのです。

では、この最も力のある女性是谁なのでしょう。彼女はカトリック教徒で、生まれもそうですし、カトリック信仰を実践もしていて、17年前まで、彼女はミラノで生まれたイタリア国民でした。彼女がインド人になったのは、たった17年前にもかかわらず、彼女は2年前に首相になり得たのです。それが、市民権によって与えられることなのです。

【ラマダーン】インドでは、です。

【セット】私の文章の最後を言ってくださり、ありがとうございます。

【司会】では、クリストファーセン先生、お願いします。

【クリストファーセン】私の質問は、ヒルシ・アリについてではありません。私の質問は、一神教の中で女性の人権をどのように扱うかであり、それが『サブミッション』という映画のポイントでもありました。内藤先生は、映画の中に出てきた女性の裸体について話されました。それについては、非常に長時間に渡り話し合うことができますが、私が観る限りあの裸体は、クルアーンの名のもとに、いかに彼女が暴力を受けていたかを表すために使用されたのだと思います。映画の中の女性は夫に虐待されていたのです。彼はクルアーンを引用して自らを正当化したのです。彼女の体の、そのまさに暴力を受けた部分にその引用を映し出すことによって、芸術的にこのことが示されたのです。ポイントは、女性に対する暴力に聖典が間違って使用されているということを単に示すことだったのです。それは他の一神教でも見受けられることで、(聖典の)間違った使い方です。少なくともキリスト教に関するその問題は、芸術的に表



現されたことがこれまでにあります。

従って、あの映画の本当の問題は、神への冒涇ではないのです。映画『サブミッション』に関する本当の争点は、実世界で、一神教の聖典が女性に対する肉体的虐待に使用されるという現実がある中、一神教の中でどのように女性の人権を扱うかという問題なのです。それが話し合われるべきことなのです。

【司会】 それでは、今のご質問にラマダーン先生から、内藤先生もでしょうか、それからソーテンドルフ先生のコメントはその後をお願いします。まずラマダーン先生からお答えいただいて、それからソーテンドルフ先生の質問をお願いします。

【ラマダーン】 私は、クリストファーセン先生の発言が質問だと理解していませんでした。私は、ヒルシ・アリと彼女による問題提起の仕方について、貴方が言われたのだと理解していました。私が言ったように、彼女が提起している多くの問題は、一神教の伝統、今日では特にイスラームのコミュニティ内やイスラームが過半数の国々に関する事で、それは正当なわけで、私たちはそのことに取組まなければならないのです。

私にとってその出発点となるのは、その問題を正しく提示し、誤って挑発的に提示しないということだと言えます。内藤先生が言われたことは本当に重要だと思います。慎重を要する時代に、慎重な方法によってです。文学では、形式と内容を区別します。これが文学の出発点です。形式があり、内容があります。慎重を要する時代には、形式は内容の一部となります。というのも、質問の仕方に注意をする必要があるからです。

では、文章内の現実に関してですが、つまり、例えばクルアーンや預言者の伝統ですが、文章の内容は解釈に依りますし、それは差別に繋がり得るものです。これは明白なことです。クルアーンの文中から何らかの節を取上げて、それを文字通り読

む、または特定の伝統に従って読む場合ですが、ムスリムが過半数の国々や西洋のムスリム・コミュニティの場合以外にも、明らかな差別に繋がっています。そして、それは世界各地で見ることのできる2つの理由によるものです。

最初の理由は、節を逐語的に読むことです。2つ目は、文化と理念を混同することです。ですから、よいムスリムであるには、パキスタンやモロッコでのムスリムのようにすることです。本来はイスラーム的ではない家父長制度的な伝統を導入しているわけで、ここで私たちは、最初の理由に対する非常に強い批判的議論を用いる必要があるのです。このような解釈、および起源となる文化とイスラーム理念の区別です。そして、私が提唱しているのは、イスラームの名のもとに行われる女性解放を、文化的差別や直解主義的差別に対抗させるということです。例えば、結婚の強要はイスラーム的ではない、女性の割礼はイスラーム的ではない、家庭内暴力はイスラーム的ではないと言うことができます。ムスリムが過半数の国々で今日行われている、いかなる条件をも無視した一夫多妻制への対応もしかりです。このような批判的な議論がすべて必要で、女性がこれを言えるようにする必要があるのです。

しかし、また、女性が頭にスカーフを巻いていると、それは差別であるというような過度に単純化した議論にも対処する必要があります。内藤先生はそう言われませんでしたか。私は分かりませんでしたが、質問をしている人々に対して質問するだけでなく、キリスト教の伝統からであれユダヤ教の伝統からであれ、「ほら、私たちの伝統では批判的でなければならないが、自分が女性に選んで欲しいと思っていることを、ある女性が選んでいないからといって、それ故に、彼女が差別されていると主張するのは過度に単純化された議論であり、そのような議論は否定しなければならない」と言えなければならないのです。本当に重要なことに関する発言を私たちはあまり耳にしません。アブラハムの伝統を持つ宗教の兄弟や

姉妹らが、例えば、フランスでフランスの人々に対して発言しているのを聞いたことがありません。例えば、頭にスカーフを巻いているからといって、それ自体で差別されていることにはなりません。そうです、差別されている女性もいますが、ときには、自ら頭にスカーフを巻いている女性もいます。例えば、私はニカブには反対です。顔を隠すというのは、ムスリムでも少数派です。しかし、それは存在するのです。そして、私たちは、女性が自らの権利を知ることができるよう、奮闘して行かなければならないのです。しかし、私たちはこのような話し合いにおいて協力的でなければならない、イスラームのことに話しが及んだときのみ、相手に「では、質問させてください」と言わせるだけではないのです。そして、例えば、キリスト教やユダヤ教のことになると、ときに、ムスリムは沈黙してしまうのです。

これは、真の対話が非常に重要な問題、深い問題に至ったときのことでありますが、また、私は、色々な伝統を持つより多くの人々の話を聞き、ただ1つのことを言いたいと思うのです。それは、頭にスカーフを巻くように女性に強要するのは、イスラームに反しています。しかし、同様に、女性にそれを取るように強要するのは、人権に反しています。それは自由選択です。これが主な点です。これが中心的なことです。これは言論の自由であり、選択の自由です。そして、私たちはときどき沈黙しすぎていると思います。というのも、特定の問題に関しては沈黙しているほうが便利だからです。ですから、批判的になろうではありませんか。私は問題のいくつかに対しては、まったく賛成ですが、ときには、共に批判的になり、自分たちの立場を強く持たないといけないのです。

【内藤】 今日のこのセッションはヨーロッパのムスリムのことから、ヨーロッパに即して言います。ヨーロッパの場合、ヨーロッパにいるムスリムの間の信仰の実践の程度にはかなり多様性がありますね。非常に敬虔な人たちの場合には、イマームやイスラ

ームの組織が人権に関することも扱いますし、そういうところにちゃんと女性の組織もありますので、彼らは彼らで人権について扱えると思います。逆に世俗的な人たちは、自分が居住している国にも、もちろん女性の人権組織がありますので、そういうところすでに、十分ではないですけれども取り扱ってはいます。よく考えてみればお分かりだだと思いますけれども、ヨーロッパにいて、孤立してひどい人権抑圧の状態で閉じこもっていると思うほうが、あまりリアリティがないと思います。それはほかの地域では起こりうることですけれども、今日のセッションでのテーマのヨーロッパに関して言えば、扱う可能性と場はいろいろあるだろうと思います。

【司会】 それではソーテンドルフ先生、ボザルスラン先生、お二人の質問、コメントをお受けいたします。まずソーテンドルフ先生からお願いします。

【ソーテンドルフ】 では、皆さんといっしょに、今日という日がどのような日かを感じていただきたいと思います。今日は安息日です。暗くなり始めたとき、安息日が過ぎて行こうとしているとき、安息日の最後に私たちが何をするかというと、ワインを飲みます。そして、いっしょに色々な蠟燭を点します。それは色々な精神的伝統を意味します。世界の中の色々な光です。それから、私たちは唄います。救世主の時代が来るかもしれません。光を点す者が現れ、世界は平和の世界になるのです。

ですから、今、私は皆さんにこれを唄っているのです。皆さんと共に唄っています。そして、二言三言を言わせてください。まず、ラマダーン先生と私は、またここに共に居ます。京都が私たちをここに集まらせてくれました。ヨーロッパからは長い旅路が必要で、私たちが必要とされている和解に向かって協力し合えることを強く望んでいます。なぜなら、抑圧が行われることは間違っていることで、パレスチナ人に対して不当なことが行われているから



です。不当なことはイスラエル人に対しても行われているわけで、正しい者と正しい者の間で争いが起きると、ときには力関係の変化に人間が貢献できることができて、信頼し合う人間が貢献できるということに気付く必要があるのです。というのも、これは信頼の問題だからです。

私はまた、東洋的なものの見方を取上げてくださったことを嬉しく思います。ここ数年、東洋で偉大な精神的革命が起きていることをますます確信するようになりました。そして、神道、仏教、ヒンズー教も実際に対話に参加するようになっていきます。私たちがここにいるのもそれ故です。私たちは対話をもたらしたのです。これは小さな出来事ではありません。これは進行している人類的グローバリズムの真の表れです。しかしまた、これはその良い世界を実現するための方法の一端にしか過ぎません。良い世界とはもちろん、女性がその地位を持ったことで、それは人権を手にすることだけではなく、女性が参加することであり、大半が男性である私たちの中で重要な場所を女性が取得するということなのです。平和のための女性、パレスチナ人の女性やイスラエル人の女性がこのような役割を果たし、その役割となることが許されなければならないのです。そして最後に、昨日、手島先生がここから一時間ほどの京都のある場所に連れて行ってくださいました。まだ、京都府内です。森の中で、名前は覚えていませんが、光厳天皇が600年前に亡くなった場所です。どこのことかお分かりですか。

そこには僧侶がいらして、光栄にも参拝にご一緒してくださいました。そして、皆さんの伝統により、参拝は短くなくてはならず、非常に短時間の参拝でした。しかし、非常に豊かなものでした。そして、はるばるやって来た京都で私はその僧侶から、「文明の発祥の地であり、アジアの一部であると同時にアフリカの一部であり、世界の中心であるエルサレムの街で、なぜあのように平和を求めて模索しているのか。なぜ、アブラハムの子供たちが戦争で対立して

いるのか」、「手短かに教えてください」と言われました。それで、お茶をいただきながら、皆さんの芸術と文化で私に差し出された素晴らしいお茶でしたが、それを飲んでいて、私はそのお茶を飲むこと、そして答える前に考えることがいかに重要かということに気付いたのです。そして、ユダヤの神秘主義の意味は何かという問いがありました。「それは皆が一緒に座り、互いに面と向かい、互いの目を見つめ合う、そうすると、相手の目の中で神に出会うことができ、何もかもが可能になるということです。そうすれば、雨のないうちに雨が降ります。平和が訪れます」。このように私が言うと、その僧侶は少し間を置き、ある表情を浮かべ、「紅海が自由に向けて開いたとき、それを開いたのは神とモーゼでした」と言い、彼は涙を流しました。それから、彼は、「不可能なことはありませんし、貴方たち」、すなわちこれは私たち皆のことですが、「貴方たちには海を開き、この平和をもたらす責任があります」と言いました。そして、京都という、私をラマダーン先生と再会させ、皆さんと会うことのできた京都(という街)の山のこの高貴な僧侶の涙、そして地域は異なるけれど同じ世界の別の場所から、ヨーロッパに居る私たちが助けられるということ、私は心に留めます。神は私たちにこの世界の市民になることを望んでいるのです。そして、安息日の終わりに、救世主が少しずつ近づいてきてくれていると感じ、感謝しています。

【司会】ありがとうございます。では、ボザルスラン先生から質問あるいはコメントをいただきまして、それに対してラマダーン先生からお答えをいただきたいと思います。

【ボザルスラン】では、女性の人権の問題についての話に戻りたいと思います。少し範囲を広げたほうがよいのではないかと思います。なぜなら、3つの一神教における暴力と制約にも関わる問題だからです。それで、解決策はなんなのでしょう。解

決策が何なのか、私には分かりませんし、宗教の内側からそのことについて私が話すことは許されません。では、それぞれの宗教は、宗教に言及して発せられる暴力を規制するために、どのような選択肢を実際に選んでいるのでしょうか。セッション1で、ソーテンドルフ先生がユダヤ教では、言うことを聞かない子供たちには石を投げつける必要があるという話をなさいました。しかし、この罰則を単純に適用することはできません。従って、子供は12歳9ヶ月になるまで子供とは認められず、13歳を超すともはや子供ではなくなるとされています。そして、その間でも、ラビが指摘されたように、21人の判事による許可が必要とされています。イスラームも同じ状態です。同じ問題に直面しています。問題の1つは「新ムスリム思想家」(new Muslim thinkers)と呼ばれている人々の間で審議されていることで、「奴隷に対して良い態度を取れ」というクルアーンの一節に関することです。多くのムスリムの思想家たちは、現代人としてまたムスリムとして、奴隷を持つということは良心的に考えて不可能だという意見です。それで、彼らの議論は次のようなものです。「では、この一節に関してどうすればよいのか。これは神の言葉であり、あれは神の書であるので、この一節を無効にしてしまうことはできない。しかし、また同時に、奴隷に対して良い態度を取れという正式な教えが記されている」。では、その解決策はどういうものかと言うと、この一節が歴史的に古い時代遅れの一節であると宣言することです。つまり、クルアーンを歴史化することが必要なのです。ですから、歴史的な文脈に当てはめることができる節や時代遅れと定めることのできる節、そして、完全に精神的な事項から切り離すことができる節を抜き出す必要があるのです。そして、このことは、奴隷に関する節に限らず、その他の節、クルアーン全体に適用すべきこととしています。ユダヤ教、キリスト教、イスラームは、同じ問題に直面していると思います。いずれも精神的なものを放棄することは許

されません。これは神の言葉ではないと言うことは許されませんし、それと同時に、いずれの宗教も新たな状況を受け入れ、選択的であるよう努めることが求められているのです。

この問題を片付ける2つ目の方法は、解釈学によるものです。そして、新しいイスラームの思想家の間では解釈学が非常に広く用いられていますが、私たちにとってそれは、カーフィルまたはカーフル(不信心者)の概念なのです。多くの今日の思想家たちは、この概念が必ずしも「不信心者」または「非ムスリム」を意味するものではなく、これが非常に多義的な概念であるということを示唆しています。そして、クルアーンを多義的に解釈学のツールを用いて再解釈すると、違う結論に到達するわけです。今日の3大一神教では、その聖典を歴史化するか、またはより大々的に解釈学を適用するかのいずれかをしなければならないと思います。しかし、申し上げたとおり、これは私の意見ではありません。これは、今日の宗教界において私が観察したことにとすぎません。

【司会】ありがとうございます。そろそろ時間も迫っておりますので、ラマダーン先生に最後のお答えをいただきまして、このセッションを終わりにしたいと思います。

【ラマダーン】今うかがったことについて1点。文章の解釈ということに関して成されてきたことに目を向けることは本当に重要だと思います。そして、例えば、「カーフィル」という、以前は不信心者または異教徒と訳していた概念についてもしかりです。そして、私たちはこの方法でいま努力をしていて、新しいものが現れつつあると思います。

ここに来て、この日本からヨーロッパについて話し合いができることについてですが、色々な角度からの意見を聞くことは本当に大切なことです。私たち皆が、ヨーロッパの話し合いの中心になること





第2セッション

ムスリムにとってのヨーロッパ

は良いことです。セッション1でも言いましたが、これはまた未来でもあります。このような話し合いは、日本の現実や東洋の現実にとっては遠い話として捉えるのではなく、私たちのできる方法で捉えて行かなければならないのです。なぜなら、語られていることの多くはユダヤ教徒、ムスリム、そして、アブラハム宗教3つすべてに関する古い認識に基づいたものだからです。

私たちのアプローチの間に橋を渡し、非常に限られた地域での現実について、世界的な話し合いをすることは本当に重要だと思います。というのも、そうすることによって、私たちは互いを助け合うことができ、そしてこれはセッション1ではあまり言わなかったことですが、ヨーロッパにおいても、西ヨーロッパ的な議論には異議を唱え、人々に東ヨーロッパの現実があることを知ってもらう必要があるのです。私たちは耳を傾けなければなりません。私たちは東ヨーロッパで起こっていることから学ばなければなりません。なぜなら、数年前の危機のときに知られていて認識されていたバルカン諸国のことを、私たちは忘れつつあるからです。西ヨーロッパよりも均等でよりうまく統合を果たすことのできる東ヨーロッパの持つ多様性の活力は、私たちの傲慢で自己中心的な面を軽減させ、私たちの理解を深めて行く助けとなるのです。そして、ここでの話し合いには、東ヨーロッパだけではなく、東洋からのインプットがあるわけで、このような話し合いの場を持つことは本当に重要なことだと私は思います。

ですから、セッ先生からの質問に私たちが耳を傾けることができる方法を見出そうとすることは本当に大切だと思います。今日、西洋そして世界でどのようにそれを構築して行くかについて世界的な話し合いが行われることが必要で、それに貴方の立場からのインプットがあることが大切なのです。実際、例えば、ヨーロッパ人がインドのような、経済的には落ち着いていないと見なされている国に耳を傾けることは良いことです。そして、「ほら、多様性へ

の対応、政治的そして文化的多様性への対応として(インドで)行われていることを見て、私たちは学ぶべきことがあるかもしれない」とヨーロッパ人が言えるようになることは良いことなのです。私たちが直面している問題は、簡単には解決しないと思います。私たちは、大変困難な時代に直面しています。そして、楽観的である私でも、ヨーロッパで簡単な解決策が実現されつつあるとは思いません。大変困難なことになるとと思っています。それで、どんな知的なインプット、知的な助け、または知的なアプローチであっても、私たちにとって有益なものになり得るのです。なぜなら、政治的な場面での極右的な議論の高まりが当然のことのよう受け止められている事実、今、私たちは直面しているからです。これは本当に問題です。そしてこれが最後の点となりますが、学問の世界にいる皆さんは、メディアで建設的な意見を壊している数人の者たちに取り付かれたい、間違った方向に導かれたりしないでください。彼らは、水面下で起こっていることを代表している者たちではありません。水面下は、ずっと静かで深いものです。メディアでは、声の高い不快な少数派がよく取上げられますが、私たちもまた声なき大衆になることは大変重要なことなのです。

学問の世界にいる私たちが自らの責任を理解することは大変重要です。そして、私たちはその義務を果たしていないと思います。しばしば、私たちはメディアの報道を追っているだけですが、そのようなときに、私たちは草の根の意見や声なき大衆とより深く繋がった、報道されているのとは異なる議論を提示しなければならないのです。ありがとうございました。

【司会】これで第2セッションを終わらせていただきたいと思います。ターリク・ラマダーン先生、内藤先生、ありがとうございました(拍手)。

国際ワークショップ 第3セッション

「ヨーロッパにとっての反ユダヤ主義」

司 会:手島 勲 矢 (同志社大学大学院神学研究科教授)

発 表

アブラハム・ソーテンドルフ

(進歩的ユダヤ教世界連合〈ヨーロッパ地域〉)

「ヨーロッパにおける反ユダヤ主義—治癒可能な病か?」

コメンテーター:菅 野 賢 治(東京都立大学人文学部助教授)

コメント・ディスカッション



ヨーロッパにおける反ユダヤ主義 — 治癒可能な病か？

進歩的ユダヤ教世界連合 ヨーロッパ地域会長

アブラハム・ソーテンドルプ

Auraham Soetendorp

おはようございます。手島先生がイザヤ書を引用して下さり、またそれ以上に皆さんの友情に感謝します。とてもくつろいだ気分です。

ご列席の皆様、私はこの講演について考えれば考えるほど、ヨーロッパの反ユダヤ主義を見過ぎてしたくない気持ちです。深刻な事実を無視したくはありません。邪悪に対する抵抗、そして希望について、希望を抱き続ける、見込みのない希望を抱き続けるユダヤ人の不屈のパワーについて、「ティクバ・ラムロット・ハコル」(すべての出来事にもかかわらず“希望”すること[希望には希望を])についてお話ししたいと思います。この点について—ユングの足跡に従えば一つまり偶然の一致があるとあなたが認識した瞬間に、また、常に存在しているにもかかわらず、私たちがほとんど気づくことのない宇宙の秩序についての認識も与えられるのです。

昨日も申し上げましたように、同志社大学一神教学際研究センターと関係があるシリアの伝説的なイスラーム指導者であるシャイフ・アフマド・クフタロウ師と私はつながりがあるため、1990年に私たちは岡山にいました。私が初めて彼に会ったのは1990年1月に宗教指導者ならびに議会指導者、エコノミスト、生態学者が一堂に会し、モスクワで会議が開かれた時です。その時の主な講演者の1人はアル・ゴアでした。ゴア氏は気候変動についての話をしました。現在、彼の発言は予言者的なものとなり、トニー・ブレアをはじめ世界の指導者たちが耳を傾けています。クレムリンでミハイル・ゴルバチョフの列席の下、祈りの言葉が唱えられました。クレ

ムリンのなかでユダヤ教の礼拝が行なわれたのはこの時が初めてでした。

この会議の数日前に、私が幹部メンバーを務める会の会合が開かれ、その会合を主催したグループの新しい共同議長である、シャイフ・アフマド・クフタロウ師がその会合にやってきました。その会合は通常どおりに始まり、続けられており、彼は遅れてやってきました。弱々しい様子の彼は医師に支えられていました。部屋の奥に座っていた私は立ち上がるべきかどうか迷いました。誰も立ち上がりません。私が立って、ラビとして彼を歓迎すべきなのか。それではやり過ぎで、芝居じみてみえるだろうか。私は亡き母に心のなかで問いかけました。母の答は「自分の心の命じるままに行動しなさい」でした。そこで私は立ち上がりました。私は不器用な人間なので、椅子を倒し、音を立ててしまいました。彼が腰をおろす直前に彼の所までたどり着き、「アブラハム・ソーテンドルプと申します。オランダから来たラビです。この幹部会議で一緒にできることを光栄に存じます」と挨拶しました。「バル・ハバー」(来る者、汝に祝福あれ!)。すると彼は私の手を取り、礼を言ってくれました。私たちはこうして良き友人になりました。ずっと後になって、岡山から東京までの新幹線のなかで、彼のアシスタントは私に、「多くの人が師と会おうとしてきたけれど、シリアのイスラーム指導者とユダヤ人が会うのは非常に多くの問題があって大変です。だけど、貴方は席を立てて師を迎えたので何の問題もなく師に会えます」と言いました。

私はこのことを自慢話としてお話しているのではありません。普通の人が普通の状況のなかで、自分の心に耳を傾け、行動した場合、時として素晴らしい「ブレイクスルー」が起きるということを皆さんに説明しているのです。こうした偶然は続きます。今日ここにこうしていることと、安息日である金曜日の夜に神社でシャイフ・アフマド・クフタロウ師と私が過ごしていたことは符号していると思うからです。その時、私たちはパンを分け合いました。私は彼に向かって、そしてそこにいた皆に向かって歌を唄いました。

シャローム・アレイヘン・マラヘイ・ハシャレット・マラヘイ・エリヨン・ミメレフ・マラヘイ・メラヒーム・カード・シュ・バルーフ(あなた方の上に平安あれ、いと高きものに仕える天使が、王の王なるお方の許よりやって来る)。私が差し出したパンをシャイフ・クフタロウが受け取った瞬間を私は思い出します。

私は、だから、私たちが近くエルサレムに平和をもたらすであろうと未だ考えていますし、ここで今日、このCISMORで皆さんが働いている時、皆さんはクフタロウ師の夢を運んでいると私は信じています。

彼の夢はダマスカスで一神教の会議を開くことでした。彼の夢は、ダマスカスとエルサレムから全世界に向けて思いやりを持とうと呼びかけることでした。その夢が実現する前に彼は亡くなりました。そして今、私たちは彼の夢を実現しようとしています。私たちの意志を他者が引き継いで実現してくれることによって私たちが生き続けることができるように、彼の意思を私たちが引き継ぐことによって彼は生き続けます。では、私が与えることができる教訓とは何なのか。最も大切な教訓は暗闇からの教訓です。そうです。暗い地下室へと降りていくことは、光を求めて外に出ようとすると同じくらい難しいことです。

私は1943年生まれです。私の両親が私という子供を持ったことは奇跡でした。父は具体的にではありませんが、恐ろしい未来が待ち受けていることを知っていました。未来に死が待っていることを知

っていたのです。にもかかわらず、両親は子供を持つ決心をしたのです。何故なのか。一縷の望みをかけたのです。愛は闇を征するからです。私が生まれた時、父は私をシャローム・アブラハムと名付けました。アブラハムと名付けられたのは、祖父がアブラハムという名だったからです。伝統的な名付け方です。戸籍係の人から父は「シャロームと名付けられないほうがよい。ユダヤの名前を付けるな」と言われました。私の父は「息子はシャロームと名付ける。平和となるように」と応じました。私の父はそういう人でした。しかし、私が3ヶ月になった時、両親は赤ん坊と自分たちが隠れる場所を見つけることができませんでした。非常に危険な状態にありました。それでも両親は私を手放すことができませんでした。母は私を手放したくなかったのです。そしてゲシュタポとそれに加担するオランダ警察が私たちの家に押し入ってきました。外は混乱状態でした。荷台つきのトラックに人々が投げ込まれて家々から立ち去り、悲鳴と叫び声やがむことはありませんでした。父は既にスーツケースを準備していました。ゲシュタポたちが家を出ようとした時、ゲシュタポのリーダーが赤ん坊の私を見ました。彼はなんて可哀想なユダヤの子だ、と言いました。父は立ち上がり、「この子は幸せだ。ユダヤの子供であって幸せだ。殺人者の息子として成長しなくて済むのだから」と言い返しました。ゲシュタポの1人が父を殴り、大声をあげ、「汚いユダヤ人め!」と叫びました。ゲシュタポのリーダーは「お前はあまりに汚い。だから今日はお前を処分することはできない。明日、もう一度来る」と言いました。父は後年、いつも言っていました。「あのゲシュタポのリーダーは涙ぐんでいた」と。その涙が私たちの命を救ってくれたのです。何故なら、その夜、その涙は私に抵抗する力を与えてくれ、そして彼らは去って行き、それから、私たちは2年半後に生きて再会できました。そして、父はオランダにおけるユダヤ社会の創始者となり、私が今ここにいます。漆黒の暗闇のなか、恐怖の



夜に、心が憎しみで一杯になった時でも、しかし、赤ん坊の凝視、子供の凝視が心を動かすというチャンスは未だにあります。こうしたことが起き得る限り、それは教訓となり、子供がそうした心を動かす限り、光はあるのです。

昨年、紛争地域で活動し、平和を推進しようとしているNGOであるSearch for Common Groundから要請を受けました。この組織は人々に記事を書くことを依頼し、時として中東、西アジアと呼ばれる場所における記事と交換しています。私はその組織から記事を書くようにと頼まれました。私はその記事を書くのを先延ばしにしていました。或る日の早朝、私はイスラエルの港町カエサレアで机に向かい、自問しました。私はパレスチナの同胞に向けて、この世界において未来が与えられるという権利を持っている子供たちに向けて書こうとしている。私はイスラエルに向けて書こうとしている。ユダヤ人の生活再建に向けて書いている。イスラエルなしには私の未来はない。私はこの教訓からしか記事を書き始めることはできない。そしてたった今ここで皆さんにお話したことを書きました。1943年のことについて、またホロコストの教訓について書きました。

勿論、私は彼らが私の記事を掲載しないことを知っていました。パレスチナ人から「ホロコストの責任を何故自分たちが負わなければいけないのだ。ホロコストはヨーロッパで起きたのに、それに対するユダヤ人の仕返しの結果として我々が苦しめられている」という声があがるからです。しかし、結論を言うと、私の記事に対する反応はありました。レバノンのDaily Starに掲載されました。この夏に戦争が勃発したばかりのレバノンの新聞に転載されたのです。またヨルダン、エジプトでも転載されました。パレスチナ自治政府も私の記事を読みました。本物の生活が提示され、共有されれば、逆に違いは生まれないと思います。そのため、昨日、偉大な文化の国であるインドからの新しい友人、そして日

本の新しい友人を得て、私は非常に幸せです。偉大な平和の使徒の1人であるヨルダン王国のハッサン王子が個人的な会話のなかで私に言われたように、私は地球市民でありたいと思っています。平和のために努力している私たちが必要としているのは、苦しみを共有することができ、歴史の重荷を下ろすことのできる場所、センターです。私たちは歴史を変えることはできませんが、私たちに対して行なわれた不正を共有することで歴史の影響を変えることはできます。ご存知のように、思いやりという言葉の定義には、他者に与えられた不当な苦しみに心を動かされる能力という意味が含まれています。そのように心を動かされても、苦しみを共有していない場合、私たちは私たちの眼を、手を、心をクリーンに保つことはできません。ここ日本には、時として自分が何者であるかを100%表現することを妨げるという歴史がありますが、互いに自らの正当性を主張し、相手を不正と決め付けてきた歴史によって子供や孫たちが受ける苦しみを共有し、彼らが希望を持てるようにすることができます。

私は不屈の精神についてお話しています。私の妻サイラの話を経ずしてこのことをお話することはできません。聖書にあるとおり、妻は私の支えであり、私のパートナーです。何故なら、私は希望について話をしたいだけであるにもかかわらず、常に反ユダヤ主義が私の生活につきまとっているからです。かなり前、具体的に言うと1979年ですが、私は非常な困難に直面していました。そうした困難はその時が初めてではありませんでしたが。1970年12月のクリスマスの時と同様に私は生命について話をしていました。生のラジオ番組のなかです。私はユダヤ人にとってのクリスマスの意味について話していました。そして、イエスは私のユダヤの兄弟であり、マルティン・ルーバーは「私の偉大なるユダヤの兄弟」と言っているとその番組で言いました。しかし、どういうわけか、キリスト教世界でも歴史の一部として、反キリスト教的パターン、反ユダヤ教的

パターン、反ユダヤ的パターンが起きたと述べました。ジュール・イザークとレオン・ポリアコフが述べているように。私は菅野先生がその翻訳者であることを知っています。この場にポリアコフを日本語に翻訳された方がおられるのは非常に嬉しいことです。確かに、司教たちは神の子を殺害したユダヤ人が天で罰せられるということと、人間はこの殺害を永続させないということを区別しています。しかし、大衆はこの微妙な違いを理解していませんでした。このため、キリスト教の名においてユダヤ人に悪魔のイメージが付与されてきました。

次に、こうした様々な時に、私たちは互いを愛さなければならないと言って、私の話を終えました。その後、突然、テレックスによるメッセージが来ました。今では皆さん、名前をご存知ないでしょうが、ムチェンコとフェドロフからでした。2人とも反体制派として戦い、ユダヤ人のために戦い、死刑の宣告を受けたレジスタンスの人たちです。私はそのテレックスを取り上げ、「1945から25年が経過し、ユダヤ人であるからという理由で死刑が執行されることを受け入れることはできない」と言いました。

1979年に生のテレビ番組で私の向かい側に座っていた、偉大なレジスタンス闘士の1人であり、オランダの偉大な闘士の1人でもあるアントン・コンスタンスが「イスラエル人はシオニストだ。シオニストは中東のナチスだ」と発言しました。私は「貴方は私にとっては英雄です。なのに、貴方は反ユダヤ主義のわなに落ちてしまっています」と言いました。私たちがタクシーに同乗した時、彼は私に謝罪しました。しかし、手遅れでした。その夜、翌日、そして翌週と私は人々に脅迫されました。私が公の立場から退かないのであれば、そして、イスラエルについて話し続けるのであれば、私、私の妻、そして私の子供たちを殺すと脅されました。彼らはたどたどしい英語で、言い方は様々でしたが、「お前は穏健派だから、我々にとって危険だ。我々は狂信的な人物には対処できるが、穏健派にはできない」というようなことを

言いました。そのとき、私は妻と一緒に森に行き、妻に「サイラ、どうしようか。彼らは子供たちがどこの学校に行っているかを知っていた。彼らは子供たちが昨日どんな服を着ていたかを知っていた。警察が私たちを守ってくれているが、私はインタビューを続けることができるだろうか。自分の子供を危険にさらしてまでインタビューを続けることができるだろうか。教えてくれ。君は母なのだから。君が止めろと言うなら私は止める。私の人生のビジョンが永久に壊れようとも私は止める」と言いました。妻は一瞬たりとも躊躇しませんでした。そして「私たちは子供時代、隠れていました(妻もナチスの時代、やはり隠れていましたから)。もう隠れるのは止めましょう」と言いました。これこそ勇気です。私は止めないで活動続けました。でも何も起きませんでした。こうした時、勇気ある人は断固たる態度を取ります。私が現在まで活動が続けられたのは妻のおかげです。子供が危険にさらされているときに「私たちはもう隠れないでおきましょう」と言うことができるイスラエルの1人の母親のおかげです。それが私のメッセージです。イスラエルに限らず、世界のどこにいても私たちユダヤ人はもはや隠れません。私たちはこの希望の光をもたらしします。

次に反ユダヤ主義についてお話します。私は人種差別主義や不寛容に反対する欧州委員会、人種差別主義と排外主義に反対する欧州センター、サイモン・ウィゼンタール・センター、アンチ・デファメーション・リーグ(ADL＝侮辱行為排斥同盟)についての報告書を読んだことがあります。そこに書かれている数字、人種主義や排外主義に絡む事件の発生件数を見たことがあります。異様でした。報告書によるとヨーロッパではこうした深刻な事件は2005年に406件発生し、その前の年には501件発生しています。私はその数字の厳密さに驚嘆します。しかし、皆さんは分析ができる人たちです。データの詳細部分に注目されます。私たちは学究的な生活とその他の生活分野を知っています。私たちは2つの英





知を融合させます。つまり、直観により分析した知識と情緒による直観的知識を融合させます。私たちは気づかなければなりません。『アウシュビッツの医師たち』(The Doctors of Auschiz)を書いたリフトンによって私たちは、科学に直観的な思いやりのある知識が欠けている場合、科学は破壊的なものとなり得ることを知っています。アウシュビッツの医師は知識、時として最も素晴らしい科学的知識と人々に対する思いやりを切り離して殺人者となり、日曜日には教会に行き、月曜日には子供を殺します。それは人間が持つ危険の1つです。

そのため、ユダヤ教では注釈のなかで神が「人間を再創造しよう」と言いますが、何故、神は「Let us」と複数で言っているのか。神はあらゆるものを創造できます。物事の出発点であれ原子であれ、そして地面の草であれ遥かかなたの宇宙であれ、あらゆるものを創造できるはずです。しかし、人間を創造する場面になると、神は神と一緒に人間を創り出すための人間を必要としたのです。なぜなら人間には破壊する能力があるからです。イラン、北朝鮮、シリア、その他この宇宙を破壊できる原子爆弾を保有する国々は、人類を破壊させることも可能です。しかし、人間には善の力もあります。それは慈悲の持つ穏やかな力であり、それが科学的ノウハウや物質の持つ強さと結びつくとき最悪の事態を阻止することができます。私たち自身の心の中にも善と悪との葛藤があります。そうした細かいことを考慮しながら、何らかの方法で排外主義に対する教会指導者たちの言葉や人々の言葉を監視していくことは役に立つのではないかと私は期待しています。そうしたことはまた教育を通して実現することが可能です。ここで再び、前に述べたことに戻りたいと思います。

私のこの講演のタイトルは「ヨーロッパにおける反ユダヤ主義—治癒可能な病か?」と疑問形になっています。病気の場合、ウィルスはどのように退治されるのか。有機体では体そのものが退治します。体自体に解毒作用があり、医薬品によって体内の解毒

作用を強くすることができます。有機体がつまり教育に相当します。教育は人間の内部における永久的な学習です。ヨーロッパでは反ユダヤ主義の傾向があり、私の友人であるターリク・ラマダーンが昨日語ったように、人々の67%がパレスチナ人に好ましい感情を持ち、パレスチナのほうが善であると考えています。しかし、イスラエルに対する反感との相関によってそうした感情を抱いていることも多いのです。これについては後で再び触れることにします。

今は有機体についてお話します。このため、私は皆さんがご自分でも調べることができるように資料を提示しています。ご紹介した3冊のうち、1冊はオリナーの『利他的人格』(The Altruistic Personality)です。この本は基本的には次のことと相通じる内容となっています。

第二次大戦の時に迫害が行なわれましたが、今また、ルワンダのツチ族とフツ族の間で迫害が行なわれ、セルビアでも行なわれ、セルビア人による迫害も行なわれ、最も激しい戦争が行なわれているコンゴでも現在、迫害が見られ、ダルフルでも私たちは大量虐殺を目の当たりにしています。迫害が行なわれる場合、基本的には人々を3つのグループに分けることができます。大多数は消極的です。消極的である大多数の人たちは、少数派が迫害されていても、ドアや窓を閉めて見て見ぬ振りをします。

私はバービーヤールを訪れたことがあります。キエフ近くの森のなかにあるその場所で、1941年9月29日から30日にかけて約10万人がライフルで立て続けに殺害されました。その大半がユダヤ人でした。私は常々、その場所は人里離れた所なのだろうと思っていました。バービーヤールは大きな穴で、人里離れた奥地なのだろうと思っていたのです。車で行って、もうすぐバービーヤールだと教えられた時、私は車から降りました。人々が森まで歩かされた同じ道を私も歩きました。左側にも右側にも家が見えました。虐殺が行なわれた時、そこに住む人たちがどのように家を閉ざしていたかを感じること

ができました。彼らはベッドのなかにいたにちがいありません。彼らは頭から毛布を被っていたにちがいありません。しかし、彼らの耳にはずっと聞こえていたのです。でも彼らは家から出てこなかった。大多数は消極的です。大多数は自分の命を救おうとします。一方で、迫害者に加担する人たちも少数ですが存在します。そして少数ではありますが、自分の命の危険を冒してまで、迫害される少数者を救おうとする人たちがいます。

その違いは何なのか。違いはどこから来るのでしょうか。こうした人たちについての調査やその他の調査によって、極めて簡単なことから違いが生じることがわかっています。人は道徳を家庭で学びますが、家庭の次に人が形成される、人格が形成される基本的な場として学校が次第に重要になってきています。危険であるにもかかわらず、勇気があり、人を救うために家から出ていく少数派となるか、消極的な多数派となるかは、教室で少なくとも何度か、教師から連帯感情について教えられたことがあるかどうか、自分の命を他者と関連づけることができるかどうかによって違ってきます。大学についても同じことが言えます。学校は思いやりのある機関となる必要があります。学生、教師、スクールバスの運転手、校長、その他全ての人たちが優しさ、共感、他者を心配する姿勢を持っていることがわかるような教育機関となる必要があります。教育機関に携わる人たちは、一緒に勉強し、一緒に楽しみ、親密な関係を築き、成功や苦労を共有する機会を持つ必要があります。学生もまた、公正、配慮、社会的に関心のある問題に関連する広く普遍的な原則について考える機会を持つことが必要です。

必要なことは、現在、学問的業績に注がれているのと同じ真剣さで支援的関係を促進する構造を制度化する以外にありません。救助者は方向性を示しています。救助者は普通の人たちでしたし、現在も普通の人たちです。農夫、教師、起業家、工

場労働者、金持ち、貧乏な人、子供を持っている人、単身者、プロテスタント、カトリックでした。大半の人たちは世間に対して特別なことはしてこなかったし、迫害という特別な罪に対して多くのことはしていません。

結局のところ、私たちが下された審判のとおり自分の立場を明確にし続け、人間の性質が贖いを超えたものとなり、社会的制度が改革を超えたものとなるならば、私たちはこの見解の確認を厳然と進めていく未来を創らなければなりません。救済者はその国にとって全ての証拠が揃っているとしても、ユダヤ人を罪人、希望のない人たち、どうしようもない人間とみることを拒否します。救済者は、社会的秩序が非常に乱れていて、それぞれの人の命には価値があり、意味があることを繰り返し否定する社会状況のなかでも、一人ひとりの命の価値と意味を肯定することを選択しました。こうした方法しかありません。

エヴァ・フォゲルマンはその著書の最後で再度、救済者について触れていますが、私は寛容と思います。価値観は、人を関与させ、価値観を実際に使い、利他的な衝動が良き意図へと広がる方法がない真空状態では存在しません。想像力に富んだ勇気づけによって、人々はロバート・リフトンが「種の意識」(species selves)と呼んだものとなることができ、国籍や人種を越え、他者を抱擁できる人になることができます。

ジョナサン・グラバーは『20世紀の道徳史』(A Moral History of the 20th Century)の著者です。この本の題名は美しくもあり恐ろしくもあります。何故なら、20世紀の道徳の歴史は流血の歴史であり、失望の歴史だからです。この本のなかでグラバーは非常に簡単な説明にたどり着き、「私たちの多くにとって、カタストロフィーは日常生活とは無縁である。子供の道徳教育で、強制収容所の所長にならない方法をメインテーマとすることはばかげている。しかし





幸いなことに、残虐行為を防ぐための倫理教育は日常の倫理教育の延長線上にある」と述べています。一例を挙げてみましょう。スーパーマーケットで、人々は障害者専用の駐車スペースに駐車しません。障害者の尊厳を傷つけないし、購入した食品雑貨を運ぶために障害者を四苦八苦させるようなことはしたくないからです。自分が障害者用駐車スペースに駐車したために、購入した品を車まで運ぶのに障害者が苦労することを想像できれば、そうしたことをしないようになります。そうした思いやりある想像力が生まれ、強く育っていくようにしなければなりません。そうすれば、障害者を困らせるような卑劣な人間や残酷な人間にはなりたくないと思うようになります。ここで言う道徳的な素質は、緊急事態に必要とされる道徳的素質と同じです。そうした緊急事態で卑劣にならない方法について知り、そうならないようにするという問題と同じです。

私は世界各地の学校で思いやりを教えようとしてきました。私は現在の新しい世代に失望したことはありません。新世代は失われた世代ではありません。皆さんもそのことをご存知だと思います。皆さんは学生をご存知です。ここにいる学生をご存知です。私はオランダ、英国、米国の学生を知っています。学生たちが皆さんにとっていかに重要であり、だからこそ皆さんはまともな人間として生き続けることができるということを学生に十分に伝えることができるかどうかは、学生が教訓をどのように受け取り、道徳にかなった生活をするなかで自らの決断をどのように下すかにかかっています。その時、障壁はなくなります。そして若い人たちは常に皆さんと一緒に歩んでいくようになります。

10年、15年、20年にわたって私は多くの経験をしてきましたが、そのなかの1つについてお話したいと思います。大きなホールに約300人の生徒が集まっていました。1人の生徒が立ち上がりました。14歳か15歳くらいです。暖かいにもかかわらず、彼はコートを着ていました。彼は「ラビ、貴方はナチス

について話されました。ナチスは私のように身体に障害がある人間のことをどのように思っていたのですか。私は片腕しかありません」と言いました。私は衝撃を受けました。私は排外主義については考えてきました。しかし、私は障害がある人たちに対する憎しみや受容、障害者を受容しないということについては考えたことがありませんでした。勿論、私は、ナチスは障害のある人たちを役に立たないとして社会の辺縁に追いやったという事実について話しました。しかし、私はその時、彼を見て「この学校では貴方はどのように感じているのですか」と訊きました。彼は黙っていました。彼に訊くべきではなかったと私は思いました。彼が「問題ありません」と答えた時に、安堵しました。次に彼は「でも、別の学校では問題がありました」と言いました。その日、その少年は私の所に来て、「貴方は自分が人間として半分しかないということがどういうことはおわかりになりますか。やあい、片腕なし、と言われることがどういうことか」と言いました。それは傷つくことです。非常に傷つくことです。私は「そのような時、君はなんて言うの」と訊きました。少年は「僕に何が言えるというのですか」と訊きかえしてきました。私は「これは教訓です。そうしたことを言った少年は恐らく、軽い言葉で君を傷つけたかったのでしょう。その少年にとってはその瞬間だけ、その日だけのことなのでしょう。しかし、君は一生、その言葉を忘れない。私たちはこのことを決して忘れない。しかし、君はそのことを私たちと共有してくれた。そこに慰めがあることを私は期待します」と言いました。その時、300人もの扱いにくい若者たちが一斉に立ち上がりました。誰からも起立するようには言われないのに。彼らは立ち上がり、拍手し始めました。少年の勇気に対して拍手し続けました。思いやりは遺伝的に引き継がれるものではありません。私たちは思いやりの遺伝子を持っているわけではありません。思いやりは共有し教えることができるものであり、共有し教えなければなりません。

1ヶ月ほど前のことですが、私は同僚と一緒に1つの教え方を実現することができました。昨日、菅野賢治先生が私のところに来て嬉しいことに「the day of respect」（尊敬の日）とは何ですか。いつが『尊敬の日』ですか」と訊かれました。そして「インターネットで検索すれば、見つかると教えてくれましたが、オランダ語でした。私はオランダ語を理解できません」と言われました。私は地球市民なので、オランダに帰ったら早速、大切なことから、翻訳しようと言おうと思っています。「尊敬の日」とは何なのか。「尊敬の日」とは、オランダで起こっていることを読み取るための私の手段です。昨日お話ししたように、半世紀以上前の民主主義のゆりかごにおいては、ユダヤ人コミュニティと長年の結びつきがある王族のはたらきや、少数派による勇ましい抵抗にもかかわらず、80%のユダヤ人は拘束されました。大多数は消極的であり、少数の加担者がいますが、有難いことにもう1つの少数派がいて、彼らは、ユダヤ人の安全のために命の犠牲を払う心構えがあったのです。オランダではアムステルダムの通りでムスリムについてその尊厳を傷つけるような言葉で話していると、突然、ヒューマニスト（人民主義者）が現れ、人々の心を捉えることがあります。昨日、オランダに住まっていたことのある内藤先生がオランダについて話されましたが、私が言い続けているように、オランダはグローバルなコミュニティでグローバルな人間性があると言われました。こうしたことがオランダで見られるのであれば、別の国についてもそのことに気づくべきです。幸い、私たちはそれに対して非常に繊細です。

私はピム・フォルタイン（オランダの極右政治家）を知っています。偉大な英雄となったピム・フォルタインは2002年に銃で撃たれて亡くなりました。彼の死は、政治的指導者が殺されるという稀なケースの1つです。オラニエ公ウィレムはオランダの王政が始まった16世紀に殺されました。ピム・フォルタインは非科学的な言い方をしますが、難しい人でした。

彼は素晴らしい人物でした。しかし、彼は職務を遂行しませんでした。彼は大学に居続けることができませんでした。少しだけですが、物議をかもし人物だったからです。突如として彼は自分の不満の原因を見つけるという人物でした。

その1年後にテオ・ヴァン・ゴッホが殺害されました。ユダヤ人、ムスリム、その他に対して非常に不満を募らせていた人で、人気の番組を持っていた才能溢れる人物でしたが、同時に周囲や周囲の人々と相容れることができない不幸な人でした。彼は恐ろしい方法で殺害されました。こうした憎しみの感情、ムスリムを非難する感情については既にお話しました。ですから、私はラマダーン先生がアヤーン・ヒルシ・アリについてここで話したことを理解できます。唯一残念なことはアリがこの場にはいないことです。しかし、私が明確にしたいのは、生命を脅かすようなあらゆることに直面しているにもかかわらず、アリはそのヒロイズムで微笑み、仕事をし、詩を書いているということです。

残念ながら、これは昨日思ったことですが、こうしたことを告白すると奇妙に思われるでしょうが、昨日私は再び、アリと一緒にいなければならないと思いました。私は時々、彼女に会います。その時、彼女は不満を口にします。何故なら、人はアヤーン・ヒルシ・アリに対して公に「貴方は大変な苦しみを経てきたから、トラウマになっている」と言うからです。彼女は非常に憤慨しています。彼女が怒るのはもっともです。人々の言うことが真実ではないという意味ではありません。私たちは苦しい経験を経ても、それを心に抱き続けたいと思っているということにはなりません。

ところで、昨年ダボスでの世界経済フォーラムに私は聖職者の1人として招待されました。ビジネス界の人たちと一緒に解決策を探るためです。解決策を見つけることは非常に難しいです。そこで私はアリに会いました。私たちは並んで座り、妻のことを彼女に話しました。彼女に、先程私が皆さんにお話したこと、





私たちの生命が脅かされた時のことを話しました。しかし、ムスリムの非難は私をうんざりさせること、反ユダヤ主義と同じように不快な気持ちになると発言しました。驚いたことにその数ヶ月後の昨年1月か2月に、私は「ヘラルド・トリビューン」と「ニューヨークタイムズ」の論説委員からインタビューを受けました。私に関する非常に簡単な記述を中心とした小記事が掲載されました。それはムスリムへの嫌悪に対する非難でした。反ユダヤ主義の特徴の1つが私を憂鬱な気分させます。私は解説者に「このことが何故、そんなに重要なのですか。それは私が考えていることをきわめて普通に表出しただけであり、私は貴方にアピールしただけです」と言いました。

極めて明白なことを言い、説明しなければなりません。規範は繰り返し設定されなければならないからです。そこで私は政治家の所に行きました。首相やその他政治家の所に赴きました。私が要人だからではありません。私が首相と話をすることができたのは、私が63歳と高齢であること、また私の子供たちが首相など政治家と同じ学校に通っていたことがあるからです。また、私が隠れてはいなかったからでもあります。閣僚たちは方法を模索していました。彼らはオランダで初めて、そのための会合を開きました。私たちは民主主義国オランダの中心部にある大きなホールで会合しました。政治家、閣僚、首相、宗教組織、宗教集団、社会集団の代表が一堂に会しました。

彼らはオランダ政府に対して非常に批判的でしたが、私は私たちが一致団結して協力しないことに対して批判的でした。私たちは自分自身を表現する方法を見つけていません。今日の宗教指導者たちは非常に臆病です。現在、偉大な指導者はいるのでしょうか。例えば、法王を見てみましょう。法王がどんな人物であれ、法王としてのリーダーシップを感じることはできません。ダライ・ラマはできます。東方の人たちのほうが、はるかにリーダーシップを感じることはできます。しかし、西欧ではイザヤとエ

レミヤを取り上げている聖書の歴史に由来する偉大な人物たちは「私たちは怒りに燃える炎だ。ダルフルの人々が殺害されている限り、私たちはハンガーストライキを続ける」と言います。子供が飢えているときに、様々な宗教のリーダーたちのハンガーストライキなんて見ることができますか。

2月に私はオランダの教育相と同席しました。その時突然、私は「尊敬の日」を設けてはどうかということをおもいつきました。全ての学校、オランダの多くの学校で1日、政治やスポーツ、ジャーナリズム、学問などの分野から講演者をゲストとして招き、それらの人たちが道徳にかなった人間となるために、また人を尊敬するためにどのような努力をしているかを語ってもらうのです。失敗談と成功談を語ってもらうのです。特に失敗談は時として成功談よりはるかに大切です。「尊敬の日」を思いついたわずか半年後に、同僚の素晴らしい努力のおかげで、オランダ各地の約200の学校で「尊敬の日」を開設することができました。首相、閣僚が教師であり、実業界の人たち、スポーツ関係者が教師です。私も参加しました。想像できないでしょうが、私たちが最初に対象としたのは11歳から12歳の子供たちでした。そして年々、対象とする年齢層を拡大していき、大学を含めて全ての年齢層を対象としていく予定です。生徒たちは驚くほど熱心でした。私が耳にし、また参加した「尊敬の日」の逸話の1つをご紹介します。60人の子供たちがいて、後ろのほうに座っていた1人の少年が突然、極めて静かに「僕は時々、夜なかに目が覚めて、自分が存在していることにとっても感謝することがあります。自分が自分であることをとても有難く思います」と発言しました。想像できますか。わずか11歳の少年ですよ。別の11歳の少女は突然、教師と私のところに来て、「先生たちが私に与えてくださったことに感謝します」と言ったのです。「私が君に何を与えたの」と訊くと、「希望を与えてもらいました」と答えたのです。オランダの小さな場所アトリエで11歳の少女がそう

言ったのです。私は非常に嬉しくなりました。2006年は10月5日が「尊敬の日」でした。来年(2007年)は11月3日で、すでに300を越える学校が開設にむけて協力しています。少なくとも「尊敬の日」には私たちは違いを祝うことができ、違いのある人たちを尊敬できるようになります。

貴方は大衆文化について話されました。U2のボノについて話されました。ボノは何百万という人たちを引きつける人々の1人です。彼は私に祈りを唱えるように依頼してきたことがあります。皆さんはボノが何をしている人かご存知でしたか。皆さんはLive 8を持っている人たちが何をしているかご存知です。彼らは今日の預言者です。宗教における預言者ではありません。大衆文化における預言者です。コンサートの最中は騒々しいU2の音楽が演奏されます。私はそうした音楽に自分を順応させることができません。恐らく年を取りすぎているからでしょう。しかし、そうした音楽には、10万人の人々には、憎しみはありません。ある種の団結を感じます。途中でボノは突然コンサートを中断し、世界人権宣言を声に出して読み始めます。その時、出てくる言葉はまるで光のようです。

私はパートナーシップを信じています。この講演で私に与えられた時間がなくなりつつあります。この後、活発な討論ができることを期待していますが、その前に、ヨーロッパやその他の場所における反ユダヤ主義と排外主義を解毒する作用があるその他の要素についてお話したいと思います。例えば、ポーランドにYedwabneという都市があります。ポーランドには昔から多くのユダヤ人がいます。ご存知でしょうが、ユダヤ人はポーランドをヘブライ語で「Polin、即ち、平和に生きることができる場所」と呼んでいました。ユダヤ人はYedwabneに行きました。ユダヤ人の歴史は反ユダヤ主義の歴史というだけでなく、共同生活の歴史でもあります。

Yedwabneでは1941年7月10日に2,000人もの人々が、隣人であるポーランド人によって殺害され

ました。そのうち1,600人はユダヤ人の男女と子供でした。そのため、本書は『隣人』(Neighbors)となっています。この本が発見されるとポーランドは大騒ぎになりました。私はクラクフにいた時に初めてアウシュビッツに行きました。会議があったのです。キリスト教の神学におけるユダヤ人大虐殺の影響についての学術会議がありました。司教たちがいました。私は何をしようかわかりませんでした。私は恐怖の場所にいました。ユダヤ人の命が継続的に奪われた場所です。私は同僚の言葉に耳を傾けました。耐えられませんでした。彼らはエルサレムであればできるような講義をしていました。私が今いる場所であればできるような講義をしていました。しかし、アウシュビッツの近くではできない講義です。ポーランドではできません。私は震えながらマイクの所まで行き、「私は今、ポーランドの汚れた地面の上に立っていると感じています」と述べました。私に対して怒りが向けられました。「どうしてそんなことが言えるのか。私たちポーランド人が苦しめたというのか」。その時、若い人たちが私の所に来て、「一緒にコーヒーを飲みに行きましょう。貴方と同じことを私たちも感じています」と言ってくれました。現在、ポーランドではこのラップポルトの彫像がある場所に大博物館を建設するために人々が協力しています。その彫像は、ワルシャワにおける悪と崩壊に抵抗したヒロイズムを象徴するものです。非常に言いにくいことを言いたいと思います。ご存知のように、ウィリー・ブラントはそこを訪れた時、跪きました。彼がワシントンにいた時に私は祈りの言葉を唱える特権を与えられました。私は彼に言いました。「御心に従ってくださったことに対して心から貴方に感謝します」。彼は私にも言いましたが、跪くつもりはなかったそうです。でも彼は跪きました。ですから、とても言いにくいのですが、ベネディクト法王がアウシュビッツを訪れた時、私は熱が出ていました。特別な理由ではなく、病気で熱が出ていただけですが。私はテレビでその様子を見ていま





した。大目に見ていただきたいのですが、私はその時、少し熱がありましたが、法王が泣き出し、読んでいる紙を落とし、言葉がないと言うのを待っていました。法王は言葉がないと言いましたが、私は法王にお辞儀してほしかったのです。しかし、人に泣くことを強要することはできないし、そうしたことを法王に強要することはできません。逆にベネディクト法王がアウシュビッツのその場で泣き崩れたなら、私たちはそのことを生涯忘れることはなく、覚えていることでしょう。私は法王と直接、話ができたと思っています。ですから、それについては書かないことに決めました。例外としたのに、何故、この場で、皆さんの前でそれを言うのかわかりません。恐らく、皆さんなら助けてくださることができるからだと思います。皆さんなら私が法王に会う手助けができるからだと思います。何故なら、法王が知ることは重要だからです。法王が教育について知ることは大事だからです。神学について話すのではなく、正直になって人々の前で裸の自分になれること、弱い自分を見せることについての話だからです。ラビが「最もためになる祈りは傷ついた心から生まれる」と言ったように。

さて、この博物館はワルシャワの傷ついた心が刻まれているのと同じ場所に建設されます。それはポーランドにおけるユダヤ人の歴史を語るものとなるでしょう。ポーランドでどのくらい古くから反ユダヤ主義的風刺が行われ、キリストを殺害したのはユダヤ人であるという事実がどうなのか、人々が「彼の血を私たち、そして私たちの子供が引き継いでいる」と叫んでいると思われる新約聖書の概念はどうだったのかを語るものとなるでしょう。そうした記述がいかに人々の心に悪影響を与えてきたかを語るものとなるでしょう。このテキストとエレミヤ書のテキストを併せて勉強し、文脈から解釈することを認識することがいかに重要であるか。私はラマダーンさんと同じ意見です。「物事には文脈があり、歴史的状況がある。注釈のないテキストはない」と言

うあらゆる人に同意します。

神は語るでしょうか。神はこれまで簡単な言葉で語ったことがあるのか。神は私たちが理解できる方法で語ります。しかし、私たちが分析による知識と直観による知識の両方を駆使する場合に限って、神の言葉を理解することができます。この博物館が歴史博物館だけでなく、過去の歴史、警告の歴史を刻み、排外主義、反ユダヤ主義に反対する欧州の研究センターとなることを望んでいます。皆さんが自国政府に働きかけて資金拠出を呼びかけることができるなら、そうしたことは簡単なことだと思いますので、是非働きかけてください。必要性があり、そのための努力がなされているからです。時間はかかりますが、実現していくでしょう。ポーランド政府は同意しています。

新しい反ユダヤ主義とはどのようなものなのか。ムスリムに見られる反ユダヤ主義とはどのようなものなのか。ムスリムだけではありませんが。イスラエルに向けられる反ユダヤ主義とはどのようなものなのか。イスラエルについての正当な批判と、イスラエル自体における、イスラエルの新聞における批判との相違点は何か。イスラエルほど激しい批判が行なわれている国はないと言ってもいいでしょう。日本の新聞がどのようなものであるのか、私にはわかりませんが、「アルツ」(Arutz)のような新聞では、日々、繰り返し、イスラエル政府のやり方、兵士に対する批判が展開されています。私自身Rabbis for Human Rights(人権のためのラビ)のメンバーです。守らなければいけないはずの警官が若者を困らせているような場合、私たちはそこに立って批判します。私たちは最も非人間的な状況に置かれている人たちを助けようとします。例えば最近、パレスチナの女性が封鎖されている道路に立ち入っていたことがありました。19歳の若い兵士が彼女の所まで行き、「どうしたのか」と訊きました。その女性は赤ん坊を抱き、自分の体に爆弾の導火線を巻きつけていたのです。非人間的な状況に置かれた場合、人間ら

しさを保つことは難しいです。それでも人間であり続けなければなりません。イスラエルについての批判は当然ですが、それと反ユダヤ主義は別です。ある人の例を挙げてみましょう。その男性はテレビでイスラエル人は中東のナチスだと言いました。私がラマダーン先生にこのことを個人的に言った時、このことを実際に今、私はここで言っているわけですが、彼は「それは反ユダヤ主義だ」と言いました。

人々が持っているシンボルやイメージは、反ユダヤ主義の主張、ユダヤ人がキリストを殺害したという主張、あるいはユダヤはキリスト教の子供を殺してその血を使って過越しの祝いの種なしパン、11のパンとワインを作るという血の中傷と関連しています。そうしたことは依然として流布しています。語り継がれています。新聞などでも見受けられます。イスラエル政府がしていることに対する責任を全てのユダヤ人に取らせようとする、戦わなければなりません。しかし、そのことだけを強調したいとは思いません。その理由は、アモス・オズと私は同じ意見だからです。私たちユダヤ人、私たちイスラエル人は、他の人たちが私たちユダヤ人について言うことよりも、自分自身について考えることのほうがはるかに大切です。これは私たちの心を試すものです。そのため、私たちは批判的な論争を歓迎します。イスラエルに関するこうした論争にタブーはありません。こうしたことはユダヤ人に役立ちます。最後にまだ言わなければならないことは沢山ありますが、時間の関係上、少ししかお話することができません。

当然のことながら、排外主義と戦う方法の1つは真に地球市民になることです。私は地球憲章の作成に携われたことを非常に嬉しく思っています。地球憲章は世俗主義者、宗教家、長老が力を合わせ、努力した成果です。5年間にわたり、世界各地の人たちが双方向に作用し、一緒に地球憲章を案出しました。皆様に大学に持って行っていただきたいと思います。地球憲章について勉強してコメントしてください。地球憲章はコメントを必要としていま

す。地球憲章について少しだけお話しします。それで引用してみましょう。「私たちは地球の歴史上の重要な時期にいる。人類は選択しなければならない時期にさしかかっている。世界がますます相互依存を強め、他からの影響を受けやすくなっている今、未来には危険と同時に希望がある。真にグローバルなパートナーシップを構築し、地球を、そして互いを守る道を選ぶのか、それとも、人類や生命の多様性を危うくして破壊への道を選ぶのか。人類の経験は私たちに教えてくれる。真の意味での人類の発展とは、基本的ニーズが満たされていれば、より多くを所有するのではなく、人間的により大きくなることである」と。

1ヶ月前、ダルフルに困惑していた私は宣言書を書き、オランダの宗教組織、政治家、大勢の人々がそれに署名しました。私は自分自身のためではなく、発生した大量虐殺に対する私たちの責任の一環として自分が見た事実、私たちがクリスマスを祝っている時に、国連軍の派遣が認められず、保護も受けられず、見守る人もいない状態で非常な危険に直面している男女、子供について書きました。

第二次世界大戦後に、大量虐殺を防止する目的で国連が設立されました。2005年に国連は、国家は自国民を守る主要義務があり、いずれかの国の政府が自国民を保護することを拒んだ場合、国際社会は行動する責任があるとの結論を下しました。今こそ、行動する時です。私たちは共同責任と人道主義の約束を果たすことによって生きる覚悟をしているでしょうか。再び、消極的になることを自分自身に許し、スーダン政府の頑固さや一連のデモによる主張に屈するのでしょうか。1日1日が重要です。

スーダン政府に対しては「頑なになってはいけません。国連軍に国民保護の職務を委ねなさい。それだけで、人の命が救われるのです」と言うべきです。

国連安全保障理事会に対しては、「数日中、数週間中に、救助者としての役目を果たす各国連合を





召集して危険に直面している男女のために道を空けさせなさい」と言うべきです。

私たち自身に対しては、「非人道的な行為に対しては大声をあげて抵抗しろ」と言うべきです。預言者イザヤは、はるかかなたの自分、そして近くの自分に向かって平和を叫びました。

ダルフルの人たちに対しては、「貴方たちは私たちにとって限りなく大切な存在です。苦しんで欲しくないし、死なないで欲しい。生きていて欲しい」と伝えるべきです。

後2分残っています。50分間にわたってお話してきました。後残りわずか2分です。

最後に次のことを皆さんと共有したいと思います。杉原千畝は偉大な日本人です。英雄です。第二次世界大戦の最中にカウナスに赴任し、ビザを

発給し続けて1万人を超えるユダヤ人の命を救いました。日本政府は彼にビザ発給を止めるように指示しました。しかし、彼は発給し続けました。何故なのか。杉原についてのヒレル・レビンの書物を読むと、杉原は普通の人であったことがわかります。杉原について唯一言えることは、彼は「悪は病気と同様に感染する。しかし、有難いことに善もまた感染する」と言うことができる人だったということです。

最後に地球憲章の最後の部分を引用させていただきます。「私たちの時代を、生命に対する新たな敬意に目覚め、持続可能性を実現する決意を固め、正義と平和を確立する努力を加速させ、生きることを喜び、祝福する時代として私たちが想起し、また想起されるような時代にしようではないか」。ご静聴ありがとうございました。

コメント・ディスカッション

司会 手島 勲 矢（同志社大学大学院神学研究科教授）

【司会】 それでは、さっそく後半のフリーディスカッションを始めたいと思います。はじめに、最近ポリアコフの『反ユダヤ主義の歴史』という大著をお訳になった菅野先生よりコメントをいただきます。そしてそのあと、菅野先生のコメントに恐らく連結した形で中田先生、内藤先生にコメントをお願いしておりますので、続けて質問をお願いいたします。それではよろしくお願いします。

コメント：菅野 賢治

（東京都立大学人文学部助教授）

私はコメンテーターという立場でここに参加しておりますが、先程のソーテンドルプ先生の講演についてはとてもコメントはできません。論文、著書、インターネットから窺い知るしかないことを直に聞かせ

ていただいたと思います。

ソーテンドルプ先生には、昨日の全体セッションでは「The straggle for identity」、今日のセッションでは「Anti-Semitism in Europe」というお話をいただきました。いずれも、ユダヤ教のラビとしてのお立場、またこれまで七つの海をまたにかけて、宗教を通じての相互理解というものに従事されていらした活動の人、まさにman of actionの立場からのお話として、なかなか我々は日本にいて、直に聞く機会のない非常に貴重な話でした。感謝申し上げます。

さて、これからディスカッションに入るに当たって、コメンテーターとして、昨日と今日のソーテンドルプ先生のお話の中から、幾つかキーポイントと思われるところを取り上げて整理し、それぞれのポイントについて、日頃、私自身の研究上の関心と重なると

思われる部分を述べ、さらに、後のディスカッションの中でより具体的にお話を伺うことができればと思うところを幾つか申し上げたいと思います。

申し遅れました。私は東京のある大学でフランス語フランス文学を講じながら、100年ほど前にフランスで起きましたドレフュス事件を出発点として、フランスにおける反ユダヤ主義の歴史を研究してきました。ご紹介いただきましたように、現在、ロシア出身でフランス語表現の歴史家であるレオン・ポリアコフの『反ユダヤ主義の歴史』全5巻を日本語に訳しているところです。その第5巻の中に、フィロ・プレヒステンというオランダ人の共著者が、オランダの反ユダヤ主義についての1章を設けています。間もなく刊行されますが、これが恐らく、日本においてオランダの反ユダヤ主義を論じた文献として初めてのものになるのではないかと思います。そのプレヒステンによる1章を訳しながら、私も初めてオランダの反ユダヤ主義の歴史と、オランダのユダヤ人コミュニティ、あるいは非ユダヤ人の組織が繰り広げてきた反ユダヤ主義根絶のための運動の歴史を知りました。その意味で、今回、その歴史をまさに直に生きてこられたソーテンドルプ先生のお話を伺うことができ、とても嬉しく思うと同時に、その重さを痛切に感じております。

昨日と今日のソーテンドルプ先生のお話の中から、私なりにキーワードを四つ取り出すとしますと、以下ようになります。1つめは「普遍性と市民性」。2つめは今日の世界で3つの「アブラハムの宗教」が果たすべき重要な役割。3つめは「歴史の教訓」とそれを子供たちに伝えていくことの重要性。4つめ、これはソーテンドルプ先生の言葉でなく私の言葉ですが、「Anti-Semitismという言葉の倒錯性」です。この Anti-Semitismという言葉の捻れた性格から発して、それをさらにもう一度捻ってやるのが、今日のヨーロッパの自己理解を考え直すためのヒントにならないだろうか、という点について最後にお話したいと思います。

一つめの「普遍性と市民性」という点については、

昨日の全体セッションの中で、ソーテンドルプ先生が最初に述べておられたことでした。「人は、自らの個別のアイデンティティを保ちながら、同時に、語の十全な意味において市民であることは可能である」。日ごろ、フランスの、あるいはフランス語表現のユダヤ人の作家を読む機会が多い私は、このソーテンドルプ先生の言葉の中に、19世紀から20世紀のフランス・ユダヤ人作家たちの実に多くに共通する視点を見いだす思いがしました。その中から一人だけ例を挙げますと、20世紀初頭に没したベルナール・ラザールという著述家があります。彼の言葉に、《Etant juif, tu as moins de peine pour être homme》（ユダヤ人である分だけ、あなたは人間であるための苦労が少なくて済む）という言葉があります。この文章をもって、「ユダヤ人だけが人間であるための苦労が少なくて済むなんておかしいじゃないか」とか、「これはユダヤのethnocentrism(自民族中心主義)ではないか」などと解釈するのではなく、私は、その「ユダヤ人」という言葉を「クリスチャン」と置き替えても「ムスリム」と置き替えてもいいのではないかと、いうふうに読みたいと思います。つまり「クリスチャンである分だけ人間であるための苦労が少なくて済む」、「ムスリムである分だけ人間であるための苦労が少なくて済む」、あるいは「日本人である分だけ人間である苦労が少なくて済む」というふうに、言葉を置き替えて読めるというところに、私個人は、この文章の美しさを見出しています。

2つめのポイント、「アブラハムの宗教」が果たすべき役割については、ソーテンドルプ先生が、昨日も、また先ほどのお話の中でも強調なさったとおりです。とりわけ昨日のお話の中で、ソーテンドルプ先生は、3つの「アブラハムの宗教」が、ヨーロッパ憲法の草案の中で、広い視野に立った宗教の概念を導入する作業に共同して当たることに失敗したということの責任を重く受け止めていらっしやるように感じました。私のような非ヨーロッパ人には、正直申し上げて、その作業の困難さは、まさに想像を絶するところとしか



言いようがないのですが、その困難にもかかわらず、ソーテンドルフ先生が、「普遍性」の視野に立ち、希望を捨てずに地道な努力を続けていかなければならないとおっしゃっていたこと、そして、これは昨日の講演の中のお言葉でしたが、「クリティカルなテキストほど一緒に読んでいかななくてはならない」とおっしゃっていたことが非常に印象に残りました。

第三の、「歴史の教訓とそれを次世代に伝えること」ですが、これについて、ソーテンドルフ先生が今年の2月にオランダ政府に提案なさって、ちょうどこの10月から実施されることになった一つの取り組みがあるそうです。学校での「敬意の日」「尊敬の日」と言いましょうか、オランダ語でDag van respect、英語でDay of respectと呼ばれるものです。事前に調べようと思ったのですが、残念ながらオランダ語のインターネット・サイトが読めなかったので詳しいことは分かりません。特に小学校において、ある一日、日頃からさまざまな場で活動なさっている方々が子供たちのもとを訪れて、宗教・民族の相違、人間の尊厳について自由に語って聞かせるという取り組みのようです。この取り組みについて、今日のディスカッションの中で、もう少し詳しくお話を伺えたらと思っています。

教育の領域で反ユダヤ主義の過去の教訓を生かすという話になりますと、私はフランスを研究しているのですがどうしてもフランスのことばかり考えてしまいがちですが、先ほどソーテンドルフ先生もお名前を掲げていたジュール・イザークという歴史家がいます。また、フランス領アルジェリア生まれで、のちにエルサレムの副市長までなされたアンドレ・シュラキの努力の例もあります。前者のジュール・イザークという歴史家は、キリスト教会のカテキズムにおけるユダヤ人の描き方にこめられた「蔑視の教育」を批判して、ローマ教皇に謁見してその改訂を進言し、最終的には「ノストラ・エターテ」におけるカテキズムの見直しにまでこぎつけました。その時、その場ではいかに困難と思われることであっても、長い時間

と努力によって乗り越え可能である、ということを示す最良の例ではないかと思います。まさに昨日のディスカッションの中でソーテンドルフ先生がおっしゃっていた「Nothing is impossible」ということではないでしょうか。

フランスでは、永らく政教分離の原則、公教育における非宗教性の原則によって、公教育の場に宗教が入り込む余地というものがなかったわけですが、昨日、レセプションでボザルスラン先生とも少しお話しましたが、最近になって、フランスでも、やはり世界中の宗教についてそれぞれの基礎知識を子供たちに教えることが共和国市民の形成には欠かせないのではないか、という見方に変わってきたようです。先日、東京にあるフランス語専門の本屋に行きまして、子供用の教科書コーナーを見ておりましたら、写真と図版がたくさん入った、とてもきれいな宗教史の教科書がありました。タイトルに掲げられた「宗教」という言葉は、もちろん複数形で書かれています。思わず買ってしまったのですが、この点については日本ではまだまだ議論も遅れているな、という印象が否めません。いずれにせよ、宗教に関する教育を推進するためには、一見逆説的に見えようとも実は全く逆説的ではなくて、まず世俗性に関するきちんとした議論・認識があることが条件なのかもしれないと思います。オランダでDay of respectという取り組みが可能になっているのは、ある意味でしっかりとしたsecularismに関する認識が成り立っていることの証拠なのかな、という気もしました。

最後の4つめの点ですが、反ユダヤ主義という言葉についてです。昨日の全体セッションにおけるソーテンドルフ先生のお話のなかに、「一人の人間を殺すことは、ほかのすべての人間を殺すことになる。一人の人間を救うことは、ほかのすべての人間を救うことになる」という一節がありました。私は、この先生のお言葉をうかがいながら、やや強引かもしれませんが、それをanti-Semitismという単語

の意味を考え直すヒントにすることはできないだろうかと考えました。ご存じの方も多いと思いますが、Antisemitismusという言葉は、1880年ごろ、ドイツのヴィルヘルム・マルというジャーナリストがはやらせた言葉です。そのターゲットは専らユダヤ人だったのですが、マルは、みずからの思想を宗教的なanti-Judaismとは区別し、それをある意味でsecularな、racialなものとして提示するためにanti-Semitismという言葉を作り出したのです。しかしこれも皆さんご存知のとおり、Semites(セム人)として分類される人間集団の中には、ユダヤ人のほかに、なかんずくアラブ人もいます。しかし、ヴィルヘルム・マルはその点を一切視野に入れず、全く恣意的にanti-Semitismという言葉を作ってしまった。その出発点からして、anti-Semitismは不正確で、きわめて倒錯的な言葉だったということです。しかし、さらに逆説的なことに、19世紀のヨーロッパ人のメンタリティにおいて、ジュデオフォビア(ユダヤ人恐怖症)は、さらに深いところで、漠然としたイスラムフォビア(イスラーム恐怖症)を抱え込んでいたように私には思われます。例えば、19世紀フランスの最大のセム語学者にエルネスト・ルナンという人がいますが、彼はキリスト教西洋の過去と未来を語りながら、キリスト教西洋が歩んできた道のりは、イエス・キリストと聖パウロから出発して、いかにJudaismの伝統から遠ざかることができるかというチャレンジの歴史だった、というふうに描き出します。そして、結論の部分では、いかにも唐突に、「これからヨーロッパがやらなくてはいけないことはイスラームの破壊である」とはっきり述べているのです。ルナンは晩年になってこの見方を修正しますが、こうした見解が、当時、権威あるコレージュ・ド・フランスの教壇の高みからなされていたという、今から思えば信じがたいことが歴史的な事実であるわけです。

ここで再びレオン・ポリアコフの『反ユダヤ主義の歴史』に話を戻しますが、フランスの一部の論者からの批判として、「反ユダヤ主義の歴史を書くことは、

ユダヤ人だけを特別視することになるのではないか」という批判がなされたことがありました。この日本でも、ポリアコフの翻訳書について、「過去と現在において、ユダヤ人ばかりではなく、ほかに多くの民族、人間集団がジェノサイドと迫害の犠牲になっているのに、なぜ、今、anti-Semitismの歴史を全5巻などという大掛かりな本として出すのか」と言われることがあります。これに対する私の答えは決まっています。いつも「Easy to say, hard to write」と言うことにしています。つまり、「それならば、ほかの人間集団に対するフォビアの歴史も書けばいいじゃないですか」と答える以外にないのです。この意味で、ソーテンドルフ先生のお言葉も使わせていただいて、「一つの民の迫害の歴史を考えることは、ほかのすべての民の迫害の歴史を考えることである」というふうに視点を引っ繰り返したいと思うわけです。

anti-Semitismという言葉は、そもそも倒錯的なものでした。反ユダヤ主義、anti-Semitismの歴史はネガティブなものでした。しかし、その倒錯をさらに倒錯させるといいましょうか、ネガティビティのネガティビティというものをポジティビティにしていけることは可能なのかもしれない。それならば、history of anti-Semitismをhistory of anti-Islam、history of anti-Arab、history of anti-Japan、その他すべてのために役立てていく方向に考えることもできるのではないか。そして、history of anti-Semitism、history of anti-Islam、history of anti-Arabなどを考えることが、そのまま単純にanti-occidental(反西洋)、anti-Europe、anti-Christianismにならないようにする。そうではなくて逆に、Occident、Europe、Christianismをよりよく考えていくための材料にすることはできる、いや、しなくてはならないと考えているところです。

私の話はどうしても紙のにおいがして(笑)、先生の生きたお話のわきではピラピラと音を立てそうになるくらいなのですが、以上をもってコメントにします。ありがとうございました。



【司会】菅野先生、ありがとうございました。それでは、中田先生、内藤先生、最後に出ましたanti-Semitismの定義について、連結した形でさらにコメントを続けていただきたいと思います。それでは中田先生、内藤先生の順番でお願いします。

【中田】今日のソーテンドルプ先生のお話は、素晴らしく、感動的で、特に私は最初にソーテンドルプ先生が名前を挙げられた、亡くなられましたシェイフ・アフマド・クフターローの晩年の弟子と私自身は思っています。向こうはあまり思っていらっしゃらないかもしれませんが、非常に感動的に聞きました。

それはそれとして、幾つか今日の先生のお話に対してコメントをさせていただきたいと思います。まず、anti-Semitismのお話です。昨日からこの言葉を注意深く聞いていたのですが、菅野先生が今ご指摘されたとおりです。これは反ユダヤ主義の意味で使われていて、今回のソーテンドルプ先生のお話もそうだったように思います。実際に日本では、これはそのままカタカナ書きで「アンチセミティズム」と書くか、あるいは「反ユダヤ主義」と訳されています。「反ユダヤ主義」と訳すほうが実態に合っていると思います。今、菅野先生もご指摘されましたが、ヨーロッパでは基本的にはこれはユダヤ人のことを考えて使っている言葉です。ただしそれにはイスラームフォビアが含まれていて、ルナンの話もイスラーム研究の中では非常に有名な話で、彼とジャマー・ルッディーン・アフガーニーという人が論争して、ルナンはイスラーム世界では反イスラームの学者として知られている人なのです。

ですから、そのanti-Semitismという言葉にイスラームが含まれているというのは、イスラーム世界のほうでは常識的に考えられています。ところが現在のanti-Semitismは、ムスリムのanti-Semitismという言葉が使われているくらいで、これは完全に自己矛盾というか、語義矛盾だと考えています。この問題は非常に奥が深いのではないかと考えています。

これには二つ対応があって、一つは非常に表面的ですが、anti-Semitismという言葉自体を実態に合わせて「反ユダヤ主義」に変えるほうがいいのではないかというものです。もちろん、そう使われてきたという歴史自体は否定できませんが、現在の文脈で、特にムスリムのanti-Semitismという言葉が出てくるところでは、やはり言葉を変えないといけないのではないかというのが一つの対応だと思っています。

ただ、もう少し深いところで考えていくと、そうではなくて、もう一度anti-Semitismという言葉の由来から考えて、単なる反ユダヤ主義と考えるのではなくて、もう少し深いところで考えていこうという方向性もあるような気がします。これは、この場にはおりませんが、同志社大学の先生で柿本昭人さんというかたがいらっしゃいます。このかたが日本語で『アウシュビッツの回教徒』という本を書かれています。回教徒という言葉は、「ムーズルマン(Muselmann)」（死にかけた囚人に対する、アウシュビッツ・ナチ強制収容所のスラング。足を折り曲げられて詰め込まれた光景から派生したといわれている。）という言葉の日本語訳語として使っています。回教徒というのは、かなり日本語で軽蔑的なニュアンスがある言葉なのですが、その意味を含めて、あえてアウシュビッツの回教徒という言い方をしています。これは何かというと、アウシュビッツでムーズルマンと呼ばれた人々がいて、これは実際のムスリムではありません。そうではなくて、アウシュビッツに収容されたユダヤ人に対して、ナチスの看守も、あるいはユダヤ人と同じく捕まっていた人たちも使っていた言葉らしいのです。要するに、生きる希望を失ってしまって、人間性を失ってしまったという意味で、この人間はもう生きる価値がないというふうにナチスの看守からも言われ、同じく捕まったユダヤ人からも「我々は彼らのようにはなっていない。彼らはもう生きる希望をなくしてしまって生きる価値がなくなった人間だ」と言われていました。

ここでの問題は、それがムーズルマンという言葉で呼ばれているということなのです。飽くまでこれはコンセプトの問題、コンセプションの問題なのですが、ユダヤ人よりもさらに低いところにムーズルマンという存在があり、アウシュビッツのようなところですら、まさにねじれにねじれた差別があったということまで含めて、もともとセムという言葉が人種概念、民族概念として使われていたということで、もちろんこれも、もともとはそういう言葉では全くなくて、単にセム語族という、ただの言葉の話だったのです。それが人種化され、民族化され、そういう当時のヨーロッパの認識論まで根を探って、もう一度anti-Semitismという言葉を考えてみるという方向性もあるような気がします。

それが私の提案として、anti-Semitismという言葉、現在の用語としては使うのをやめてしまって、単に反ユダヤ主義として使うか、あるいはそこまで深めて使っていくかというどちらかの選択肢があるのではないかと思います。特にイスラーム世界において、人種的な意味での反ユダヤ主義というのは存在しておりません。最近それに近いものがヨーロッパの影響で入ってきていますが、基本的にはそれはないわけですから、特にそれは使うべきではないというふうに考えています。

もう一点、ちょっとこの話からはずれるのですが、今日の話の中で、核の脅威ということを言われたときに、北朝鮮とイランとシリアを挙げられていました。これも揚げ足取りのようで私たちも不本意なのですが、ここにイスラエルが入っていません。ここにはアラブのかたはいませんけれども、いればそれだけでこのセッションが潰れてしまうぐらいになってしまいますので、一応そういうことがあるということだけ指摘したいと思います。ありがとうございました。

【司会】ありがとうございました。それでは内藤先生。

【内藤】私は、昨日に続いてanti-Semitismとその

現代のイスラームフォビアとの関係についてコメントします。先ほど菅野先生のほうからも、anti-Semitismという言葉自体が、ジャーナリストがまいな形で使ったのが最初だったというご指摘がありましたし、セムと言ってもアラブ人を含意しておらず、もっぱらユダヤ人に対する敵意であると。今のイスラームに対する敵意をanti-Islamと言おうがイスラームフォビアと言おうが同じなのですが、似ている構造だと思います。例えばヨーロッパにいるムスリムといってもいろいろなところから来ていますし、信仰実践の程度には相当な幅がありますが、嫌われるときは十把一からげにしてまとめて嫌われています。その人がsecularなのか、かなり信仰実践をきちんとする人なのかということは、差別されるときにはほとんど問題になっていないという点があります。この点をよくトルコ人がクレームするのですが、自分たちはsecularなのに、なぜいっしょくたにされるのだという批判をしているところから見ると、かなりそれがあるのだと思います。

もう一つ、もちろん今日の世界において、反ユダヤ主義の意味でのanti-Semitismを決して軽視することはできませんが、一つ私が長いことドイツでトルコ人の移民たちに同じ質問をしてきたことがあります。それは、「第二次大戦後、ドイツは変わったと思うか」ということです。これに対して、ほとんどのトルコ人といいますか、いわゆる大学で高等教育を受けたようなインテレクチュアルは、変わったと言うのですが、そうではない一般の移民の人たちは、ドイツが変わったとは全く思っていないと答えているのです。これは、少なからずショックングなことでした。

日本では、第二次大戦後の補償、あるいは戦争に対する責任問題で、ドイツと比較することがよくあります。この際、日本の知識人たちの多くはドイツの方をポジティブに取っているのですが、そういう論調があることをどう思うかというふうにベルリンやケルンで聞きますと、「まさか」という答えが返ってくるのです。その「まさか」の意味は、もしドイツが戦後変わっ



たのなら、あるいはanti-Semitismを払拭したのなら、なぜ今、自分たちがこれだけの差別を受けるのかという意味です。もちろんその差別の内容は個々にかなり幅があることですが、anti-Semitismとは別なのか、同じなのか、共通するものがあるのか、これは今後議論しなくてはならないと思います。

私のコメントの最後は、どうしてヨーロッパに行くと、人を憎むことによって自己規定をしなければならなくなるのかということです。これはひょっとすると一神教の問題なのか。あるいは一神教がヨーロッパに行った結果、そうになっていったのか。とても遠大な問いで簡単に答えが出るとは思えませんけれども、そういう疑問を今、抱いています。

【司会】 ありがとうございます。これからソーテンドルプ先生にレスポンスをいただいたあとで、フリーディスカッションに入りたいと思います。セッ先生、クリストファーセン先生、ボザルスラン先生、この順序で発言をお願いします。

ソーテンドルプ先生のレスポンスの後で発言をお願いします。

【ソーテンドルプ】 ありがとうございます。昨日、疑問共有のソクラテス的可能性について貴方が示してくださった方法、答えるための質問ではなくて、一緒に考えるという方法に大いに楽しませていただきました。菅野先生、素晴らしいコメントをありがとうございました。私は、「ノストラ・エターテ」はカトリック教会が反ユダヤ感情に対応するために取るべき非常に重要なステップであることだけを強調しておきたいと思います。「ノストラ・エターテ」が反ムスリムについてそのように言っていることは皆様ご存知ですが、それはムスリムも含むものであり、彼らを兄弟姉妹と呼んでインクルージョン(内包主義)の方向に変化しています。

宗教の自由はもっとも重要であり、つねに保護されていなければなりません。私が度重なる改宗の

モラトリアム、すなわち能動的な改宗努力の一時的な中断を訴えているのは、自分が持つ真実こそが唯一の真実であるという信念は、神を信じない人々、あるいは異なる神を信じる人々の魂を救うという押し付けになり、また異教間対話に弊害をもたらすものである。という前提に基づいています。異教間および異文化間の対話は、私たちの社会の団結にとって非常に重要であり、隠された課題など存在しないと理解して、はじめて効を奏し得るのです。私たちが唯一持っているのは、共有された公正な課題、すなわち、違いをものともせず、個々のアイデンティティで質が高められたまともな社会に向けて力を合わせていくことです。私たちは、隠された課題を持つことなく、異教徒間の衝突を相互信頼に向けていくようにしなければなりません。

私はここでヘブライ大学の教授であり、優れた人物の1人であるアヴィシャイ・マルガリートの「私たちは何を目指しているのか。私たちは公正な社会を目指しているのか?」という言葉を引用したいと思います。そうです。これは素晴らしい目的です。しかし、公正な社会を実現する道のりで、まずは「まともな」社会を築きましょう。では「まともな」社会とはどのような社会なのか。「まともな」社会とは貶められる人がいない社会です。こうした社会を築くためにはあらゆる宗教信仰が一致団結して努力していかなければなりません。そうした社会を確立するための方法の1つが、宗教、人道主義、様々な宗教と人道主義、様々な精神的伝統を学校レベルで教えることであり、私はそうした教育を呼びかけたいと思います。私たちはこうした素晴らしい機会を持っています。ヨーロッパには多くのムスリム、多くのヒンドゥー教徒、多くの仏教徒がいます。彼らの存在を脅威ではなく、機会として捉え、私はこうした教育を呼びかけました。ほぼ全ての村や町に多様な人がいます。それらの人たちが学校に行き、「こうした理由で私はヒンドゥー教徒なのです」、「私が仏教徒なのはこうした理由からです」、「このために、私はムスリムなのです」、

「私がユダヤ教徒である理由はこれです」と伝える、この機会を作ることです。そのとき、生徒がその生涯において、信仰と倫理についての正に生きた経験に一度でも触れることができるのです。

私はそれが非常に重要であると思います。これはぜひいたくなことではありません。教師が数学を教えるのと同じように、1年に1回であっても教師が生徒に自分はどのような人間であり、どのような人間として数学を教えているかを語ることが非常に重要です。事実や数字を教える良心を意識することなく数学を教えるなら、あなたは科学と道徳とを分離するのに加担しているのです。

さて、これまでの皆様のコメントのいくつかについて述べたいと思います。まず強制収容所の「ムーズルマン」(Muselmann)について中田先生がお話されたことに非常に強い衝撃を受けました。何故なら、私はそのことを考えたことがなかったからです。ムーズルマンというか、ムスリムについて私は全く考えていませんでした。何故なら、ムーズルマンは恐ろしい言葉の1つであり、その言葉の支配者はナチスだったからです。もし何かに言葉または概念のようなものを与えるなら、その瞬間に、それは存在するのです。

ご存知のゴキブリですが、ゴキブリが異常発生した場合、1匹を生かせば、その1匹は再び繁殖を始めます。ユダヤ人をゴキブリと呼ぶのであれば、彼らは私を赤ん坊のように殺さなければなりません。この概念(言葉)が1つの概念(思考)となったのです。貴方はそれを言葉にします。言葉について明確にしてみましょう。ご存知でしょうが、それはロゴスに、新約聖書に、哲学に、ヘブライのダバールに書かれています。幸いにもヘブライのダバールには2つの意味があります。1つは言葉であり、もう1つは物です。

私の父、私の優しい父は講話を終えた後に帰宅すると、時々「今晚は石を持っていった」と言っていました。父は話をしただけですが、非常に重い石がありました。だから、それ(言葉の用い方)は極めて危険です。書物を燃やすことは人を焼くことの

始まりとなります。そのため、ムーズルマンがムスリムのことではないとしても、ナチの心のなかには当時、ムスリムが最下級層であるという概念があったという貴方の考えは正しいと思います。

さて、次にフォビアについてですが、ムスリムフォビアとanti-Semitismについて、またこの言葉の用法についてですが、それは言説を可能にするものだと思います。何故なら、申し上げましたように、ムスリムに恐怖の烙印を押す場合、私はムスリムフォビアという語を使用したことはありません。恐怖の烙印を押すという言葉は、人々に対立するものとして使用されるものだからです。そのため、ムスリムフォビアという言葉はanti-Semitismと同様、胃がむかつくような不快感を私に与えます。ムスリムフォビアという語を人々はすぐに使い始めました。しかし、anti-Semitismの語源は様々であるため、そうした使用法は正しくありません。それはムスリムの絶滅ではなく、どのように使用できるかです。そのことは重要ではありません。私にとっては重要ではありません。論議はあるでしょうが、核心ではありません。重要なのは、私達が認識しなければならないということです。それについて語り始めると、すぐにドイツのことになってしまいます。内藤先生が言われたことに非常に感謝します。では、ドイツは変わったのでしょうか。

皆様をご存知だと思って、経緯をお話していないことを思い出しました。私は或る時期、ニュルンベルグにいたことがあります。1979年から1981年にかけてです。私がドイツに行ったのはその時が初めてではありませんでした。以前にも行ったことがあります。ドイツに滞在することは私にとって非常に辛いことです。私はドイツでは眠ることができません。日本でも眠れないみたいですが。不眠は私の存在の一部となっています。しかし、その時、急に大きな会議に参加することになりました。25年ほど前のことです。ユダヤ教徒とキリスト教徒の対話についての大会で、1万人が出席していました。大きな会議でした。誰かが私に「お話になりますか」



と訊いてきました。優れた教授であるマッカート先生でした。マッカート教授は極めて自己批判的に、私の心を開かせるように話されました。そこで私は前に出て「非常に簡単にしかお話することはできませんが」と述べ、「私がニュルンベルグに来るために家を出るとき、私の娘がパパ、どこに行くの、と訊いてきました。スイスに行くのだよ、と私は答えました。私は自分の秘書に、娘からラビはどこにいるの、と訊かれたら、ジュネーヴに行ったと答えるようにと指示しました。私が無事に帰宅できた時にはじめて、ニュルンベルグに滞在していたと娘に言うことができます」と話しました。このことがずっと後になって私の心を大いに動かすことになるとは、その時の私にはわかっていませんでした。兎に角、私はニュルンベルグにいました。そして「これからは秘書に、ニュルンベルグで、シナゴークに集まった同胞たちに話をするができる。ドイツは変わったから、と言うことができる」と発言しました。

その会議で話をした後、大きな反応がありました。突然、壇上に人々、若い人たちが上がってきました。左からも右からもといった感じでした。左か右かはどちらでもいいですが、「ドイツは変わったのだと貴方の同胞に伝えてください」と云う人もいれば、「残念ながら、貴方は会衆に、ドイツは変わったと言うこととはできない。この会場の外にはネオナチたちがプラカードを持って集まっている」と云う人もいました。反ムスリム、反外国人、反トルコ人の恐ろしいウィルスがドイツの通りに持ち込まれたのです。東ドイツには非常に複雑な経緯があります。私たちはそのことを真剣に受け止めなければなりません。突然、私はユダヤ人のことを、ドイツにやって来たユダヤ人のことを考えました。彼らは旧ソ連や東欧からやって来ました。私たちはさらに結束力を強化しなければなりません。何故なら、彼らの扱い方をみると、何かが変わっていないと言える危険性があり、危険な概念があるからです。

そこで用語についてですが、私たちは言説のな

かで討論しなければなりません。確実にこの恐怖の烙印を組み込み、それに対応し、既に申し上げたようにそれをウィルスであるとして対応しなければなりません。私達はこうしたことを例えば教育によって行なわなければなりません。

さて最後に、中田先生は、私がイスラエルとその核兵器に触れなかったと指摘されました。非常に興味あるコメントだと思います。何故なら、私は実際のところ、イスラエルの核兵器を脅威とは考えていないからです。イスラエルの核兵器はイスラエルの歴史の一部です。何故なら、とんでもないことですが、イランが核兵器を持っているならば、私は夜、眠れません。これはあくまで私個人についての話ですが。他の人たちは、イスラエルならびにイスラエルに住むユダヤ人、ムスリム、パレスチナ人を全滅させるためにイランが核を使用することはないと考えていますから。

ここ何年かにわたり、私はイランの人たちと会う機会がありました。彼らは私に、イランの核保有は非常に危険だと言います。彼らはイランの圧制者と戦っている人たちです。数ヶ月前にもオーストラリアで私はイラン人と会いました。公にもよく知られた重要人物であり、科学者であり、石油関係の人です。彼は「自分は生き残れないと思う」と言っていました。非常に危険な状態にあります。

私としては、安全な世界であればイスラエルはその核兵器を解体すべきだと思います。しかし、今は安全な世界ではありません。現在、私は北朝鮮の言うことに耳を傾けるつもりでいます。安全を脅かされるのではないかと懸念して核を保有したいと考える他のすべての国の言うことに耳を傾けるつもりでいます。しかし、これも非常に大切な言説だと思います。最終的には、核のない世界であるべきです。これが中田先生の質問に対する回答といったものです。

【司会】ありがとうございました。

ディスカッション

【司会】 それではこれよりオープン・ディスカッション、フリー・ディスカッションにしたいと思います。セツト先生、クリストファー先生、ボザルスラン先生の順番でお願いします。

【セツト】 議長、ありがとうございます。著名で学識のあるラビが指摘された3つのポイントについて簡単にコメントしたいと思います。

第一に、新しいanti-Semitismですが、これは或る意味、イスラームフォビアの別の側面です。次にラビは地球市民について話され、地球憲章について話されました。私は自分の言葉ではなく、他の人々の言葉を引用して、ラビの素晴らしい言説の3つの側面についてコメントしたいと思います。

私が引用する第一の人物は、平和と非暴力の偉大な使徒であるマハトマ・ガンジーが生まれたグジャラート出身のインド人、ピク・パレクです。ピク・パレクはイングランド在住で、貴族院議員で、偉大な哲学者であり教授です。2003年に彼はサー・アイザiah・バーリン賞を受賞しました。彼はハッサン王子に講義をし、40年前にオックスフォード大学で私もその講義と一緒に受けたことがあります。私が引用しようとしているのは、世界の問題を暴力によって解決しようとする人物であるウサーマ・ビン・ラーディンとマハトマ・ガンジーがもし手紙をやり取りしたら、どのような内容のものとなったかをピク・パレクが想像で書いたものです。非常に長いやり取りとなっているので、ここではごく一部を抜粋します。ウサーマ・ビン・ラーディンが言ったことについては引用しませんが、ガンジーによる往信から、皆様はウサーマ・ビン・ラーディンの言ったことを想定し、理解することができると思います。まず、ガンジーは「ムスリム社会は退歩していませんと貴方は言うが、それに対する貴方の説明は間違っています。ムスリム社会は退歩しています。何故なら、ムスリム社会は静止しており、不平等で、家長主義的で、変化に逆らい、科学的な問いかけをする精神、個人の自由、団結して協力する能力を欠

いているからです」と言います。

「これらの分野では、西側から私達が学習することは多いです。私自身、西欧のリベラルな伝統、キリスト教的伝統、社会主義的伝統から多くを学ぶことができ、それらをインドの生活様式や考えに適切に融合できることを有難いと思っています」。

「フランスの友人から共産党とフランスにおけるその統合的な影響について聞いたことがあります」。そうです。ガンジーも社会主義的伝統に大いに影響を受けました。

「西欧は精神的には空っぽであり、その市民は不信心だと貴方は言われます。ムスリムだけが精神性があると考えるのは間違っています。精神性があるかどうかは、どのくらい頻繁に、あるいはどのくらい速く祈りを捧げ、どのくらいの頻度でモスクを訪れるかで決まるのではなく、同胞である人間に奉仕し、謙虚さ、慈恵、寛容さ、普遍的愛といった素晴らしい徳によって生きているかどうかによって決まるのです。しかし、貴方のなかに、そうした徳があるという証拠はほとんど見られません」。

「イスラームは完璧であると貴方は信じているように思われます。しかし、あらゆる宗教には真実と同時に間違いが含まれています」等等。

「貴方はアメリカ人を繰り返し攻撃する一方で、ユダヤ人に対しても攻撃を続けており、しばしば反シオニストであることを表明するだけでなく、攻撃的な反ユダヤ主義声明を出しています」。

イスラエルとシオニズム、そして反ユダヤ主義についての批評的な言及についてはここまでにしておきましょう。

「私はこれ以上、争うことはできません。貴方と違って、私はユダヤ人と共に生き、協力してきました。ユダヤ人の知的で道徳的な資質に敬服しており、彼らのこと、そして彼らの歴史を知っています。南アフリカの一部のユダヤ人は私の最も親しい友人となりました。そして彼らの1人は私たちが共同生活で都市の経験をするために設立した農場を購





入してくれました」。「私はユダヤ人を『キリスト教の不可触民』と呼んでいます」。

不可触民とは、インドのカースト制度の最下層であるハリジャンで、ガンジーが神の人々と呼んだ人たちのことであり、インドのカースト制度の最下層民のことです。

「キリスト教の不可触民は、ユダヤ教とキリスト教の伝統には不可欠な人々であるにもかかわらず、何世紀にもわたってキリスト教によって排斥され、遠ざけられ、屈辱を受け、自尊心が傷つけられるまで服従させられてきた人たちです。なかでもナチの残虐行為は最も恐ろしい例です」。

そして彼は続けます。「貴方がイスラエル人を脅かし続けたため、節度あるイスラエル人を過激な武装国家へと追いやってしまいました」。

「思慮深いイスラエル人は、自分たちがアラブ社会の真ん中で生きていかなければならないこと、アラブ社会は永久に逆行し続けなければならないことを知っています」。

さて、以上がマハトマ・ガンジーとウサーマ・ビン・ラーディンとの間でやり取りされた手紙の内容です。そして、貴方は地球市民、そして人間の存在に対して普遍主義的にアプローチすることの必要性について話されました。ここで私は私の大学での講演におけるラビンドラナート・タゴールの言葉を引用したいと思います。タゴールは1916年6月に東京の慶応大学で講演しました。京都の大谷大学でも講演しました。

これは昨日の私のコメントで触れたアジア的意識についての観念です。「私はできないが、当時のことを思い出してみてください。ビルマから日本まで東アジア全体が国家間に存在し得る唯一の自然の絆、最も親密な友情でインドと結束していた当時のことを。意思の疎通があり、心が通い合っていました。神経系が進化し、私たちの間に最も必要なのは人道主義であるというメッセージがその神経系を通して伝わっていました。私たちの関係は、自己利益や自己分析、互いのポケットのなかを略奪する関係では

ありませんでした。アイデアと理想を交換し合っていました。最高の愛という贈り物が差し出され、受け取られました。私達の芸術や文化は、結ばれた心という陽光の下で育つ新しい葉や花のように開化しました。異なる土地に住み、異なる言語を話し、異なる歴史をもつ様々な人が、人類としての最高の結びつきと深い愛の絆を認識していました」。最後に、地球憲章についての貴方の考え方、アル・ゴアをはじめ多くの思慮深い人たちが語っている自然を尊重する必要性についての貴方の考え方についてですが、ここでもやはり、すべての自然、人間、非人間を統治する生命力を尊重することの必要性に関するタゴールの言葉を引用させてください。「私の血管を日夜流れているものと同じ生命の流れが世界に流れ、リズムカルに鼓動している。その生命は埃や土地を通して草の無数の葉身に嬉々として入り込み、葉や花を大きくそよがせるのと同じ生命である」。ご静聴、ありがとうございます。

【司会】ありがとうございます。時間が押しておりますので、なるべくポイントだけを短くお願いいたします。

【セット】皆さんがこれを耳にされたことはないと思ったので、大急ぎでこの崇高な考え方をお伝えしました。お許してください。

【司会】セット先生が美しい詩をご紹介くださったことに感謝します。詩を引用してくださってありがとうございます。

【クリストファーセン】私は午後にお話することになっていますので、その場で、ラビが語ってくださったことについてコメントできると思いますので、ここでは質問するだけにさせていただきます。

私たち全員がコメントしたDay of Respect(尊敬の日)ですが、尊敬の日に参加したのはどのような団体、グループ、宗派、コミュニティ、人なのかを教

えてください。何故、この質問をするかという、誰が誰を尊敬するのかがわからないからです。

【ボザルスラン】私も2つの点について簡単にコメントします。

第一は用語についてです。貴方は核心をつかれたと思います。何故なら、私たちは恐らく、anti-Semitismよりanti-Judaismの概念を使用する必要があると思うからです。これには2つの基本的な理由があります。

第一に、ヨーロッパにおけるル・ペンなど極右メンバーを例としてみると、実際には彼らはanti-Islamではありません。ル・ペンは最後までイラク体制を支持していました。ル・ペンはフランスにおけるイスラームの存在に対しては批判的ですが、イスラームの国々におけるイスラームに対しては批判的ではありません。しかしながら、彼は反ユダヤ(anti-Judaic)で、その言葉の最たる意味において、どこにしようと彼はそうなのです。この点が非常に重要です。だからこそ、この2つの概念を混同することはできないと思います。

そして第二の概念についてですが、私の意見は中田先生と少し違っています。イスラーム世界では特に20世紀にもanti-Judaismがあり、このanti-Judaismは単なる神学的なanti-Judaismではなく、非常にキリスト教に似た、後付けの目的論的(post-teleological)なanti-Judaismです。それはシリアにおいて極めて明らかなです。また、エジプト、トルコでもそうしたanti-Judaismがみられます。このanti-Semitismが20世紀初めに起こり、ヨーロッパの考え方が輸出されて現地で発展したと考えることは意外ではありません。私はそれをanti-Semitismと定義することはできません。それは用語的にはばかげています。それは極めて反ユダヤ的です。

第二のポイントは教育に関するものです。お二人が教育について言われたことに私は非常に注目しました。現在、多くのヨーロッパ諸国で宗教や宗教

の歴史が教えられ、それと並行して宗教の歴史を比較して教えていることを喜ばしく嬉しく思います。これは非常に重要なポイントです。意味は複数あること、矛盾する意味もあることを私たちは当然のこととして認める必要があります。私たちはそうした相違を攻撃すべきではありません。矛盾を当然のこととして認めることは、同時に敵意や悪意を禁じることにもなり、あらゆる種類の敵意や悪意と戦うことができます。同時に、意味の相反、理解の相反、推定の相反、統合の相反を促すことにもなります。何故なら、私たちは皆、相反するものが統合されている存在だからです。

【司会】今、ボザルスラン先生が最後に教育についても触れられました。ソーテンドルプ先生の提議したクエスチョンは「incurable or curable」ですが、このポイントにもこれから注目していきたいと思います。もしコメントがあるようでしたら、ぜひ教育、記憶、歴史のようなことについてもコメントいただければ嬉しいです。

【ソーテンドルプ】コメントありがとうございます。また、私の敬愛する友人であるセット大使になり代わりまして御礼を申し上げます。この思いと私が敬愛するアイザイア・バーリンについて聞くことは大切です。私は一度、晩年の氏とご一緒する機会がありました。私は真実のために、あらゆる意味での真実のために戦うつもりです。そうした戦いに自分の身を置いてきました。ユダヤ教典『ピルケ・アボット』が教えるすばらしいことは、「あなた自身を他者の立場に置くようにせよ」ということで、これが、私たちがやろうとしていることであり、私は会話に、ガンジーであったら答えたであろう方法で耳を傾けてきました。私はここにいるラマダーン先生のように座ろうと努力してきました。そして、イスラームについてのガンジーの発言のいくつかは、限定されない場合、恐怖の烙印を押すような印象を与えます。



言われていることを人がどのように聞き、どのように感じているかに繊細であろうとすることが非常に重要です。この点で、ユダヤ人とムスリムは繊細であると思います。彼らは互いに言っていることに対する互いの繊細さを理解することができます。そして、中東へと話が飛びますが、イスラエル人とパレスチナ人以上に良き隣人や同輩はいません。これはギリシア語で言えば悲劇ですが、私はギリシア語を信じません。モイラ、即ち、運命のせいで自分の家族を殺した時に神に盲目にされたギリシア悲劇のアイアースの聖歌隊(Choirs)を信じません。

ユダヤ教、イスラーム、キリスト教といった一神教ではご存知のように神は唯一神です。そのため、私たちは苦勞します。その唯一神は問いかけます。「お前たちはどこにいるのか」と。それに対して私たちは訊きます。「貴方はどこにおられるのですか」。すると神は問われます。「お前たち人間はどこにいるのか」。イスラエル人として、パレスチナ人として、またユダヤ人、ムスリムとして私たちはどこにいますでしょうか。私たちは繰り返し、この問いに答えなければなりません。

次にDay of Respect(尊敬の日)に関するご質問についてですが。誰に敬意を払うのかというご質問です。子供たちの場合は、レベルが異なっても、互いを尊重することが非常に大切です。学校における例を挙げますと、或る子供、11才か12才くらいの子供が突然、手を挙げて、言いました。「この前、ここにいた男の子が大声をあげ、叫んだの。そしてお前は癌みたいだと言ったのです。その言葉で私は傷つきました。だってお祖父さんは癌で亡くなったから」。その時、別の手が挙がりました。私は「君は何が言いたいの」と訊ねました。その少年は「それを言ったのは僕です」と言いました。あまりに突然でした。彼は泣き始め、「ごめんなさい。ごめんなさい。でも」と言います。私が「でも、何?」と訊くと、「あの子が氷のかけらを投げて、それで僕は眼を怪我したから」。それは正に気持ちの発現です。

こうしたことが起きるのです。こうしたことが起き、最初にすべきことはそうしたことを見ることです。

次に、私は或る少年のことを思い出します。先ほどの例より後に起きたことですが。彼は「僕が家に帰ると、柵に『汚いAnti-Semite』と書かれていました。どうして、このようなことが書かれているのか僕は知っていました。僕はトルコから来たので、ムスリムだと思われています。でも僕はクリスチャンなのです。だけれど、彼らは僕がムスリムだと思っているので、自然に僕は反ユダヤだと思われているのです」。これは素晴らしい説明です。こうしたことが起きるのです。これは混同です。これこそ、Day of Respectの第一歩です。第二に教会の組織があります。イスラームでは学校に行くとイマームがいます。ユダヤでは学校に行くとラビがいます。それが変わり、発展し、様々な国で「生命を記念する祝典」が開かれれば素晴らしいでしょう。皆が同じことをしなければならないという意味ではありません。あらゆる国が同じことをする必要はありません。しかし、地球市民としてのグローバルな意識で、互いが孤立することなく、セツト大使がタゴールのこの素晴らしい生命の春と同じ流れと、引用されたように何かを一緒にするのです。

次に、「尊敬の日」について貴方が言われたことです。

【クリストファーセン】教会組織も参加しているということですか。

【ソーテンドルプ】そうです。教会組織もそうです。来年からはさらに増えることを私たちは期待しています。次に貴方が言われたことですが、そうです、それは恐ろしいということです。日本には非常に多くのユダヤ人がいることを私は知っています。にもかかわらず日本には文学、anti-Semitic文学があります。それはあたかも輸入されたかのようです。anti-Semitismが存在したことの無い国でanti-

Semitic文学がみられるのです。貴方はトルコを引用されましたが、トルコこそはユダヤの迫害が行なわれたことの無い国です。だからあなたがトルコを欧州連合に加えたくないというとき、あなたは自国の歴史について注意を払うべきです。しかし、トルコにおいてさえ現在、anti-Semitismの始まりがみられます。輸入されているからです。

次にエジプトですが、私はエジプトが好きです。私はカイロにいたことがあります。(司会者に向かって)簡単に述べますから。とにかく、テレビではBlood Libelがシリーズで放映されています。血のためにキリスト教徒を殺害したとして告訴されているユダヤ人の話です。そうです。anti-Judaism, anti-Semitismについては貴方が言われたことに私も同意します。非常に難しいことです。用語については依然として、恐らく、貴方の解釈を採用しなければならないでしょう。そうですね、この部分をどのように冗談で終わらせることができるかを考えているのですが。

【司会】簡単に。簡単をお願いします。

【ソーテンドルプ】わかりました。経験からの冗談ですが。1970年代後期のことでした。ビジネス倫理に関する会議がありました。当時、それは新しいものでした。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム、そして仏教。その会議の度にビジネスマンと宗教関係者は一堂に会して話をします。食事と一緒にでした。ムスリムとユダヤ人が同じテーブルで食事をし、大いに楽しんでいました。笑い合いながら。そこにイエズス会士であるキリスト教徒の教授がやって来ました。その教授は「何が可笑しくて笑っているのですか。仲間に入れてくださいよ」と言ってきました。そこで私の相手であったムスリムが「貴方はanti-Semiteだから、理解できませんよ」と言いました。

単なる冗談です。皆が一緒にいる時の冗談でしかありません。前後関係からそこだけを取り出せば、一体何を言っているのだ、ということになります。言

説が必要です。食べて、踊って、唄って、一緒に生活しなければなりません。

【司会】もう12時半が迫っておりまして、ランチが待っていますので、このジョークを私たちはキャリーオンしたいと思います。しかし最後にコメントを四戸先生、森先生、小原先生、中田先生、金先生、そして最後にシーゲル先生に。これでこのセッションの最後のコメントとしたいと思います。どうぞ短くお願いします。

【四戸】ちょっとお聞きしたいのは、ソーテンドルプ先生はアフマド・クフタロウ師を高く評価していて、交流もあり、秘書だったアクビークさんというかたと新幹線で話したということですが、そのときになぜ、対話が可能であるかというイスラームの根拠、教義の中の根拠について尋ねたかということを確認したいのです。つまり、対話は皆アクセプトするわけですが、でもイスラームのほうからいうと、対話をするムスリムというのは、対話を重視して教義をおろそかにするという一般的な雰囲気があります。信仰篤いムスリムが対話に熱心であるということは、義務でも何でも無いわけです。そのような中でアフマド・クフタロウ師は対話を推進し、「対話の人」とまで呼ばれていた人で、ソビエトに行っても共産主義者との対話を推進した人でした。ですから「彼の対話」の思想は、単に懐が深い人ということだけではなく、シリア国家法判断者の立場から対話を推進したわけですから、そのためのイスラームの根拠を尋ねたかどうかをお聞きしたい。

【司会】ラビ、一言でお願いします。イエスカノーかだけで。対話の神学的根拠について訊ねられましたか。どうぞ。

【ソーテンドルプ】私たちはそれについて簡単に討論しました。彼は私に、対話は自分にとって必須だと言いました。従って晩年にはできる限り対話をす



ることが彼にとっては非常に大切でした。

【司会】ありがとうございます。それでは、先ほどの順番でお願いいたします。森先生、小原先生、中田先生。

【森】このセッションで、ホロコースト、anti-Semitismを扱うというのは、ヨーロッパのアイデンティティにとってどういう意味があるかということですから、そういう点から発言してみたいと思います。

いわゆるホロコーストと並んでたくさんのホロコーストがあるという議論がありました。そして先生は、「イスラムフォビア」という言葉は使われませんでした、その内容についてはムカムカするというふうにおっしゃいました。それは個人的な、良心的な発言としては非常に共感します。ところが、制度として、あるいは法律として、どのようにそれを実現するかということが問題だと思うのです。これはイラクのアフマディネジャド大統領が指摘していることとも共通すると思うのですが、ホロコーストについての法律はあるけれども、それ以外のタブーに関する法律はないということですね。結局は、個人レベルでの良心的発言としてはあるけれども、それが制度として実現しないという大きな問題があるのではないと思うのです。

これはキリスト教のアイデンティティでも全く同じであって、ティリッヒが亡くなる一週間前でしょうか、キリストの十字架以外にも啓示はあると、彼の個人的発言として言ったのです。しかしそれはそれ以降、全然、神学にはなっていないのです。結局、キリスト教のアイデンティティとしては、キリストの十字架が他の啓示よりも優位だということは今日も変わっていないと思うのです。ヨーロッパのアイデンティティの中でいろいろなホロコーストは認めるけれども、結局はユダヤ人迫害というホロコーストが、他のものよりも重要な形になっている。これは先生の個人的な判断ではなくて、制度としてそうなっているのでは

ないか。これを変えていかななくてはいけないのではないかと思います。

【司会】それでは小原先生、お願いします。

【小原】今、森先生に重なる質問をしようとしたのですが、少しずらして、教育との関係で質問をしてみたいと思います。今、たくさんのホロコーストという話がありましたし、菅野先生は、anti-Semitismを他のanti-somebody、anti-somethingに一般化することに関心があるということを言われました。これは私もよく理解できます。

私はドイツの神学者について大学の授業で教えていますので、その関係でナチスのこと、ホロコーストのことを学生に説明します。そこで学生から、なぜホロコーストやanti-Semitismのことだけがそれだけ特殊化されるのかという質問が出てくる場合もあります。その理由は、ユダヤ人に対するリアリティが日本社会の中で少ないことによると思います。ですから、他にも民族の虐殺、ジェノサイドがあるのに、なぜユダヤ人の虐殺だけを特別扱いするのかという問いに対して、教育的にはきちんと答える必要があるわけです。

いろいろな虐殺に対する教訓としてホロコーストを一般化する意味については理解できますが、私の質問は、ホロコーストを素直に一般化してよいのか、ということです。あるいはソーテンドルフ先生の立場からするならば、やはりホロコーストには一般化できない何かがあるのか。もし、他のジェノサイドと比べ、相対化してはいけないものがホロコーストの中にあるとすれば、それは何なのかということをお聞かせいただければと思います。

【司会】中田先生、お願いします。

【中田】今の森先生のお話ともかかわるのですが、倫理のレベル、宗教のレベル、個人のレベルでお互い知り合うということを越えて、その制度の問題

ということで考えていかなければいけないということもあると思います。パレスチナとアラブの問題で、日本では少なくともインテリの間では非常に親パレスチナ的である、親アラブ的だということ知られているのだと思います。

これは私よりもむしろ臼杵先生のほうがご専門だと思うのですが、我々の先生の板垣先生の教育の賜物だと思いますが、もともと板垣先生自身はパレスチナ、ユダヤの紛争はヨーロッパの問題であるというのです。ヨーロッパがユダヤ人に対しての迫害を行った。もちろん当時のアウシュビッツの直接の被害者はユダヤ人ですが、それによって間接的にこれが対決として中東に押し付けられた、だからユダヤ人もアラブ人もどちらも、宗教ではなくてヨーロッパの人種差別主義の被害者である、これは制度的な問題であって個人のレベルでの問題ではないという視点があるのですが、それが矮小化されて、パレスチナ問題にってしまうとどうしても親パレスチナ、親アラブというふうに見られてしまうのです。しかしそうではなくて、根底にあるのはむしろヨーロッパの人種差別主義であると批判しなければいけないということであって、そこまでなかなか今回の議論が届かなかったような気がするのですが、感想です。

【司会】それでは金先生、そして最後にシーゲル先生、お願いします。

【金】ソーテンドルフ先生のお話の中で、グローバル・コンシャスネスを教えるための教育の重要性ということが強調されていると思いますが、それはだれも否定できない事実であり、教育の現場では重要なことは幾ら強調してもいいと思うのです。しかしながら、場合によっては、教育というのは、時にはある特定のイデオロギーを生産するための場としても利用されるのではないかと、つまり啓蒙よりはむしろ誤解を生産するために教育という現場が利用されるのではないかという懸念もあると思います。身近な経

験ですが、私は大学で神学を教えていましたが、そこでいわゆるキリスト教中心的な考え方などを克服することがどれほど難しいかということ、自分の能力の足りなさもあるのですが、少なくとも私が知っている限りでは、他の神学校においても事情はほぼ一緒であると思われますが、他の宗教や文化に対する寛容的な教育などはあまりにもされていない、ということです。先生は特に普遍的教育ということ、をなさっているということで、先生のご活動やご経験から、普遍的教育のために何が重要なのかどうかということをお一言教えていただければ幸いです。

【司会】ありがとうございます。シーゲル先生。

【シーゲル】私は社会ダーウィン主義とホロコーストの関係についてコメントしたいと思います。キリスト教の歴史全体にわたってanti-Semitismまたはanti-Judaismが明らかに見られます。しかし、ナチスのその言葉を調べてみると、言語に顕著な類似性があります。例えば、その言葉は20世紀の後期および今世紀初頭におけるオーストラリアでは、原住民であるアボリジニと関連づけて使用されていました。オーストラリアではアボリジニの扱い方について何人かの歴史家が論争していますが、一部の人は絶滅を提唱していたように思われます。社会ダーウィン主義が、アボリジニはいずれ絶滅すると私たちに断言したため、こうした試みは停止された可能性があります。しかし、オーストラリアには「盗まれた世代」と呼ばれる世代が存在しています。これは強制的あるいは反強制的に、家族やアボリジニコミュニティから引き離された混血家系の子供たちのことです。この政策の裏には、白系オーストラリア人に、これらの子供たちは西洋の白人文化のなかで育てられたほうがよいと信じさせるような社会的優位性や文化的優位性といった意味がなかったことが明白となりました。目的はむしろ、社会的ダーウィン主義、その時代の優生学的考え方と関係があります。目的は、アボ



リジニコミュニティから混血家系のこれら子供を引き離し、純潔のアボリジニの子孫が生まれていないことを確認することにより、アボリジニ族を完全に絶滅させることでした。言うまでもないことですが、これは引き離された子供たちや家族を非常に苦しめることになりました。政策の背後にある言語は、社会ダーウィン主義言語であり、優生学的言語です。これはナチスの言語と全く同じです。

さらに、ドイツの強制収容所についてですが、強制収容所のシステムは実際のところ、世界大戦中の南アフリカにおいて英国が始めたものです。重要な点は、ドイツではそれが極端に行なわれたことですが、他に例がないことではありませんでした。これについて皆さんのコメントをお願いします。

【司会】今日のこのセッションの時間は12時半までですので、私たちのここで一つの問題を、チェアマンの私が整理をする形でお許しいただきたいと思います。やはり私たちは学者としての一人一人の良心をもってここに臨み、それぞれの意見を開陳してまいりましたが、今回のこのシンポジウムは、ヨーロッパのアイデンティティについて論じている上で、どうしても個人の良心レベルでは収まらない政治システム、体制との関係の点において、ユダヤ人のホロコーストを持ち上げることが一般化できるのか、それともこれには固有性があるのか。また教育というものがある意味、解決法の処方箋の一端ではあるけれども、しかしこのとき生み出されるナラティブは、どのようなナラティブであるのか。これらは全て今後未来のヨーロッパ・アイデンティティにつながる、直結する問題だと思います。

このような問題を、「ヨーロッパはなおキリスト教世界なのか」の議論の中でさらに深めてまいりたいと思います。

それではソーテンドルフ先生、そして皆様、コメントをいただいた菅野先生、ありがとうございます（拍手）。

【ソーテンドルフ】貴方の意見に同意しないというわけではありません。素晴らしい要約でした。しかし、後2分だけ今、論評したいのですが。

【司会】わかりました。では1分だけお願いします。

【ソーテンドルフ】えーと。私はそうは思わないので…。お訊ねしますが、今は12時半ですか。違いますか。現在12時半なので、もう5分あればと思うのですが、可能ですか。私はそうは思わないので。

【司会】わかりました。3分でいいですか。

【ソーテンドルフ】3分では駄目です。

【司会】では5分で。

【ソーテンドルフ】次のセッションでも討論し、この話題に戻ることに私は合意します。しかし、まず、私自身の要約を考えました。これが最後なので、私の要約という形で反応したいと思います。

ホロコーストは残念ながら他に類のないものです。高度な科学の開発によってナチスドイツは600万人の男女、子供をザイクロンガスによって科学的に殺害することができたからです。そのため、これは他に類のないものであり、永久的に他に類のないものであり続けて欲しいと思っています。しかし、起こったあらゆることのなかに、私は大多数の消極性が見られると述べました。集団が反応する方法においては一般化が必要です。この点で、これまでも言いましたように、ツチ族とフツ族が大量虐殺を行ったルワンダでラジオ番組を流そうとするグループの議長を私は務めています。そのラジオ番組とは、再び隣人となる方法を広く伝えるために主婦向けのお昼の番組のようなものです。ユダヤ人は苦しみの教訓があるため、中心になってその活動を行なっています。引き出された教訓とは、人間

が絶滅種に入れられることを許してはならないということだと思います。

私たちはユニークである一方で、あらゆる人にとって大切な教訓を持っています。

キリスト教とキリスト教世界であるヨーロッパについてですが、私はモルトマンの研究をしてきました。私は十字架を希望の徴として理解しようとしてきました。十字架は私にとっては苦しみの徴だからです。私は友人であるレオナルド・ボフや他の人たちのリベラルな神学に拍手喝采します。キリスト教世界のなかには多数派支配を免れ、学識ある人となり、ヨーロッパにおいて新たな方法で責任分担するために必要な内的探求があると思います。非常に素晴らしい機会であり責任であると思います。

教育についてお話したいと思います。教育は非常に難しいです。教育については再び議論することになると思いますが、どのように啓発し、どのように人々を導くか、ということは非常に難しい問題です。ラビである私は時々、学生から、クリスマスにクリスマスの制度について話してくれるようにとの依頼を受けます。そうしたこと自体が既に画期的なことです。教師がそうした依頼をしてこない時に、学生のほうが依頼してきます。シーゲル先生、貴方もご存知ですが、私が委員を務めている地球憲章委員会の私の友人であるポーリン・タンジオラはマオリ族の酋長の1人です。急に会合が開かれ、その会合で私が祈禱をするように頼まれた時、私は彼女を前へと連れていき、「手に手を取って祈りましょう。何故なら、何らかの方法で私たちは歴史を共有しているからです」と言いました。それからは、私たちが同じ会合に出ている時は必ず、ポーラが私のところにやってきました。ポーラは侮りがたい女性です。一度、彼女は私を抱き、持ち上げました。彼女は私を運ぶことができるほどの力を持っています。学習においても繊細さにおいても非常に強みだと思います。

争点、つまり、パレスチナ問題の政治的な争点ですが、私は次の2つのことを簡単に付け加えた

と思います。その1つですが、パレスチナの女性と私がいつか廊下で一緒になり、2人だけになったことがありました。私たちは、彼女がパレスチナ人であること、私がユダヤ人であること以外は互いに何も知りませんでした。こうした居心地の悪い沈黙のなかで、彼女は「貴方たちは私の夢を奪った」と言いました。私は非常に腹が立ちました。しかし幸いにも、私は怒りを抑え、彼女の苦しみの物語に耳を傾けました。彼女はオスロ合意の提唱者の1人でした。彼女は「貴方たちは浪費した。貴方たちはあらゆるものを浪費した」と言うのです。共有に対する非難だと思いましたが、彼女がテロリストだと思われたために、空港でどのように服を脱がされたかという説明に耳を傾けました。してあげられることは何もないと感じました。同情しましたが、それを言葉にすることはできませんでした。そこで私は再び、私の母に、亡き母に心のなかで問いかけました。「彼女に手を差し出さない」という声が聞こえました。私は彼女に手を差し出しました。皆さんは自分に向かって叫んでいる人に手を差し出そうとしたことはありますか。非常に難しいことです。しかし、握手することによって私たちは生涯の友人となりました。彼女はパレスチナ自治政府の指導者の1人となっています。

同情と握手だけでは物事は解決されません。しかし、私が言いたいのは、こうしたことで私の指針となる人たちは、大切な人を失った私たち家族、パレスチナ人、イスラエル人が平和実現に向けて協力することを願っているということです。私にそのような勇気があるかどうかはわかりません。しかし、彼らはそうします。彼らは私のやる気をかき立てます。私たちは一緒に解決策を見つけなければいけないのだと、やる気をかき立ててくれます。

最後に、皆様のお国の人である杉原氏についての言葉、「命を愛することだけ」、杉原を支えたものは命を愛することだったと述べたヒレル・レビンについて述べたいと思います。私が言ってきたように、





第3セッション

ヨーロッパにとっての反ユダヤ主義

杉原の人生から私は命を愛するということを学びました。私は敵意と失望は紙一重だと思っています。このことから皆さんは何を学ばれるのか。誰が生命への愛について私たちに語る必要があるのか。必要ありません。私たちは十分に実践しています。ありがとうございます。

私たちは自己中心的な快樂や好き勝手の個人主義と、生命の愛を混同してはなりません。しかし、私が探求を続けている人である杉原は、全ての人に対して、私が予想していた以上に思いやりがある、好ましい人です。彼は温かい人です。英雄としてではなく、殉教者としてでもなく、自分を表現した人です。普通であろうとする杉原の姿勢が、彼の物語を並外れたものとしているのでしょう。普通の人がいかに非凡な行動を成し遂げることができるかを私達に示してくれます。彼は私たち皆にパワーを与えてくれます。より敏感に反応し、責任をもつべきだと教えてくれました。

偉業を成し遂げ、考え、苦しむことのできる国に

いることを感謝します。特に今日は、普通の人を生み出した国にいて、人としてのアイデンティティを超えた人たちの模範であり、グローバルな方法で意識的な自己となった模範である杉原を生み出した国にいて感謝します。anti-Semitismが治療不可能な病であるように思われるにもかかわらず、私たちが一緒に反人類的で反未来的であるこのウィルスによる病気を治し、その脅威を機会へと変えていけると信じています。ご静聴、ありがとうございました。

【司会】ありがとうございました。ソーテンドルフ先生のお話は、「人間はパンのみに生きるにあらず、神の言葉に生きる」という一節を思い起こさせるような最後の締めくくりでしたが、私たちはやはり食べなければいけません。これから昼食の時間をとりたいと思います。それでは、ありがとうございました（拍手）。

国際ワークショップ 第4セッション

「ヨーロッパはなおキリスト教世界なのか？」

司 会：小 原 克 博（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター幹事）

発 表

1. リズベット・クリストファーセン
（コペンハーゲン大学）
「複数の公共宗教 — 複雑に絡み合う
聖・俗政治とヨーロッパの未来」

2. ハミット・ボザルスラン
（イスラーム・イスラーム社会研究所〈フランス〉）
「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」

コメンテーター：中 田 考
（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター幹事）

コメント・ディスカッション



複数の公共宗教―複雑に絡み合う 聖・俗政治とヨーロッパの未来

コペンハーゲン大学
リズベット・クリストファーセン
Lisbet Christffersen

私は今回のシンポジウムに招かれた際、「ヨーロッパは依然としてキリスト教世界であるか」という問いに答えるように言われました。この発表で、「21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であるということはどういうことか」という問いに答えようと思います。その問いに対する私の答えは、この見出しに含まれています。すなわち、「それは、複雑に絡み合うヨーロッパの聖・俗政治の未来において複数の公共宗教」をもつ社会で生きることです。以下、私の発表で、あなた方の問いからその答えに至る過程を説明したいと思います。

では、21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であるとは、どういうことでしょうか。

21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であることは、まず、ヨーロッパの記憶の一部であるだけでなく所有者でもあること、その観念、物語、歴史の所有者であるということです。その観念によって、私は宗教と反宗教の区別を考えたり、その物語と歴史によって、暦、ヨーロッパの過去の勝敗のことを考えたりします。

暦を例にとると、ヨーロッパの暦はキリスト教の祝日の上に成り立っています。今週末、このシンポジウムが行われていますが、すべてのヨーロッパ人にとっては祝日です。今週の日曜日は諸聖人の日曜日からです。ですから、今週末、ヨーロッパの空港ではヨーロッパ中の人々があちこち旅行しているのが見られるでしょう。このように、ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、ヨーロッパの記憶の所有者であることですが、必ずしもその記憶について知っているわけ

はありません。物語は全部が全部、よく知られているわけではありません。昨年、私がウィーンで6週間過ごしてからコペンハーゲンへ戻るとき、金曜日の朝に空港へ行きましたが、空港は人で溢れていました。5月末の金曜日の朝でした。この会場でもヨーロッパからの出席者は事の次第が分かっているの、すぐにうなずいていらっしゃいますが、それは聖霊降臨祭前の金曜日だったのです。ヨーロッパの一部の国では、デンマークもそうですが、その日曜日の次の月曜日も休みで、この短い連休中に旅行をする人がたくさんいます。ウィーンの空港で、身なりのきちんとした60歳くらいの中産階級の女性に出会いました。彼女はひどく腹を立てていました。どうしてこんなに人が多いのか、どうしてこんなに待たされるのかと。私は言いました。「聖霊降臨祭だからですよ。そう思いませんか」すると彼女が言いました。「あら、思いつかなかったけど、そうかもしれないわね。でも、聖霊降臨祭のことなど、子供のころから考えたこともなかったわ」と。彼女は身なりがきちんとしており、中産階級で、教養もある人だったと思いますが、それでも、「それでわかったわ」と言ったのです。イギリスでは、その月曜日を「バンク・ホリデイ」と呼んでいるからです。それは、月に1度の定期的な休日に対する新しい名前です。多文化主義の名の下に、クリスマスの後、復活祭の後、聖霊降臨祭の後の月曜日は現在、銀行が休みという意味の「バンク・ホリデイ」と呼ばれています。それが彼女の記憶であり、彼女はある記憶の所有者ですが、その背景となる理由は知らなかったのです。

このように、21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であることは、実際には知られていない記憶と物語、よくある話として理解され、忘れられてしまった記憶と物語の所有者であるということです。クリスマスの歌を聖歌から「ホワイト・クリスマス」に変えなければならないことや、少数民族の誰一人の迷惑にならないようにと意図的に消されてしまう話のことです。「メリー・クリスマス」ではなく「ハッピー・シーズン」となるのです。

IKEAはスウェーデンの卸売店で、日本にもあると思いますが、テーブル、椅子などを売っています。デンマークでは、伝統的に職場で全従業員のためにクリスマスパーティを開きます。そこではニシンを食べ、ブランデーを少し飲んだりします。通常、IKEAの店でも社員のためにそうしたクリスマスパーティがありました。ところが、彼らはやめてしまいました。キリストやキリスト教の中身とは関係がない飲み会である、このクリスマスパーティをやめたのは、「クリスマス・ランチ」という名前のせいで、いかなる少数派も差別しないためでした。しかし、宗教的少数派の社員たちはクリスマスパーティを今までどおりやりたいと思っていました。そういう受け入れられ方を望んではいなかったのです。

このように、21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であることは、もう知る人もいない知識や物語、たとえキリスト教的内容を含んでいなくても、誰にも迷惑をかけないようにと削除された知識や物語の所有者であることです。

こうしたことから、ヨーロッパ・キリスト教徒は、かつて彼ら一人ひとりが考えた以上に責任を負うことになります。このような状況のため、ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、個人的にも公的にも、21世紀社会に関連があると思われる物語や観念を再編成する責任を個人として負うことです。

そのため、個人としてのヨーロッパ・キリスト教徒は、普通のヨーロッパ人、普通のデンマーク人であることをやめ、自分自身そう見えるかもしれない、あるいは

そう見えないかもしれない被疑者、信者に変わります。その結果、自分の理解や自己認識が信心深い人へと変わり、これまでは一般社会、学問の世界、自分の仕事には何ら関連のない個人の問題と考えていたアイデンティティへと変わるのです。

21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であることのこうした側面は、生徒が学校で学ぶことになっている事柄とも関係があります。ヨーロッパのカトリック教国の学校では賢信礼のための授業があり、国費によりまかなわれていながら、内容と教師は教団が決定しており、これらの国では信教の自由として当然のことと考えられています。北欧諸国では、キリスト教という教科があります。実際、その教科の内容は様々な宗教の歴史であり、宗教を外からの視点で教えています。なぜならば、キリスト教の枠内で教えることはできず、まずキリスト教について、それからユダヤ教、イスラーム、仏教、ヒンズー教など他の宗教について教えることになっているからです。これは、北欧諸国では最良慣行と見なされていますが、それが意味するところは、宗教やキリスト教的物語の内面的特質は数々のヨーロッパ的観念、歴史、記憶の基礎となり、それらを形成していますが、ヨーロッパ南部のように学校の授業としてではなく、個人的責任において新世代に教えなければならないということなのです。

つまり、21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であるということは、ヨーロッパのアイデンティティの中心である知られざる記憶の所有者であるということです。

第二に、ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、社会学的のみならず、規範的、政治的、法律的にヨーロッパの国家確立に貢献してきた歴史的教会と歴史を共有することです。そのことに関する歴史的背景については、今回のシンポジウムの最初の発表で説明しました。ヨーロッパ諸国の憲法の一部は大変古く、中でもノルウェー、デンマーク、ギリシアの憲法は古くからあるものです。こうした憲法は20世紀に改正されることはなく、小さな修正はあり



ましたが、宗教の法律に関連する箇所や、基本となる原型への改正はありませんでした。また、ヨーロッパ人権法に関しても改正はなく、人権に対するヨーロッパ的観念の枠組み内で原型が受け入れられていることを意味しています。

ヨーロッパ諸国における教会国家制度は様々で、聖俗の区別という概念に関しても、みんな違います。カトリックの原型は、2領域モデルです。一方には神聖な領域があり、他方には世俗的な領域があります。こうした領域それぞれに独自の操縦機能、法的アイデンティティ、リーダーシップがあります。神聖な領域は、合法的教会、カトリック教会、聖職と見なされています。世俗的領域は最初から、ローマ体制（およびローマ法）と各国王による体制（および各国の様々な法規）との組み合わせにより支配された領域でした。現代のヨーロッパ国家において、教皇庁（バチカン市国に位置する）としてのカトリック教会は、国内カトリック教会の存在と、それぞれの国における教会の状況について各国と国際条約を結び、こうした条約はコンコルダート（政教条約）と呼ばれます。この2領域モデルは、教会組織が教会法に基づいて神聖な領域を支配し、国家が国内法や国際法に基づいて世俗的な領域を支配するという理解に基づいています。もちろん、このモデルにも問題はあり、例えば、何が世俗的で、何が神聖かという内容についての問題があります。妊娠中絶する権利や学校での宗教教育に関する規則など、聖俗いずれと見なすべきでしょうか。今日、ヨーロッパでは、国家が中絶問題の規制を進めています。抵抗制度がコンコルダートに盛り込まれ、論争が生じています。

正統派モデルは、1つのモデルの中にあるモデルと見なすことができ、それは、人形が大きいものから一番小さなものまで順番に入れ子に収まっているロシア人形のようなものです。ドームを有する正教会は、国家全体を覆う天井と考えられます。教会の礼拝に出席する老母が1人と儀式を行う司祭が1人い

る限り、その国は神聖な領域内で、かの天井に覆われているのです。教会の外は世俗的な領域ですが、神聖な領域の一部でもあります。なぜなら、礼拝に出席しているおばあさんと儀式を行っている司祭がドームの外へ出ると、キリスト教の物語や世界の福音書で言われるように、彼らは「塩」となり、「闇の中の光」となって広がるからです。この理解により、正教会は共産主義体制という闇の時代も生き抜いてきました。正教会が国教会であるヨーロッパ諸国では、教会と国家との緊密なつながりを回復し、国内の闇をなくそうとしています。法律に関して言えば、正教会は大変古い教会法で治められ、独自の指導力をもっていますが、国家とのつながりは、北欧ルター派国家の場合と同じくらい緊密です。

改革派の考えとは、例えばオランダのモデルのように、あらゆる世界の中で最良の世界、すなわち、「丘の上の町」、私たちの国で強く支持される伝統と理解の基礎である「新エルサレム」の確立を目指して努力することです。この考え方において、正当な教会列席者にとって聖俗の真の区別はありません。しかし、必ず議論となるのは、正当な教会列席者とはどんな人かという問題です。これは、信者たち自身の間で言い争いになるのですが、改革派の考えでは正当な教会メンバーの定義に国家が関与すべきではなく、このように理解することが、オランダや米国における教会分化や、教会機構からの国家除外の背後にある規範的現実です。

一方、改革派とルター派はともに、教会を国の福祉に役立たせることは国の任務だと考えています。こうした教会の公的な任務と多元主義の組み合わせにより、改革派を主とする国の多くや、基本的に（プロテスタントとカトリックの）2教会体制であるドイツでは、一方では明確な政教分離を掲げる多元的モデルが生まれ、その一方で、教会が自由に引き受けることのできる任務を調整する社会の中で、さきほどと同じ国家と教会との国内協定が生まれました。

基本的に、ルター派モデルとは、社会の中で領

域を分けることにより、聖俗を区別することです。皆さんの中で、sectorizing sociologyのニクラス・ルーマンの研究をご存知であれば、彼がルター派であったことがわかるでしょう。宗教的分野は、法律、政治、メディア、福祉制度などがそうであるように、共通社会の一部門です。宗教的分野は民営化されず、社会の長ではなく、「国家の中」の社会の一部門です。したがって、信教の自由とは社会の中での自由で、社会が決めた境界線で限定されています。境界線は教会自身が決めたのでもなければ、国際的協定や国内協定によって決められたものでもなく、教会メンバーは、ルター派が考えるような社会構成員ではないかのようです。こうしたルター派モデルは北欧諸国の国教会で最も分かりやすく存在しており、そうした教会の一部（特にデンマーク）は独自の運営委員会をもちません。つまり、教会の人々とは国民のことなので、社会の中の異なる部門を区別するためだけに運営団体を別にする必要はないという考え方に基づいています。このように社会の中で教会が他の部門と並列関係にあるとする見方を少し変えて、他の宗教の信者に信教の自由を保証することが必要になりました。しかし、無信仰者たちは自分たちの立場も人口多数派のために宗教的分野を支えていることを認めなければなりませんし、他の宗教の信者たちは自分たちの立場が人口多数派のために宗教的分野を支えていることを認めなければなりません。

したがって、ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、北欧諸国の一部でそうであるように、国教会のメンバーであることに必ずしも関係はなくとも、この社会で無意識の、ごく普通のこととして、歴史的教会と歴史を共有することです。そのようなモデルで、やや厳しいモデルとしてデンマーク憲法をみてみましょう。デンマークの憲法は、ナポレオン戦争後の市民革命の一環として、1849年に最初に制定されました。それはベルギー憲法から発想を得ています。これまでに5回改正され、最後の改正は1953年に

行われました。その改正の目的は、第2次世界大戦後のデンマークがNATOやEUなどの超国家組織の加盟国となれるようにすることと、王に息子がなく娘しかいなかったために女性王位継承を保証することでした。そこで憲法が改正され、娘が王位を継承できるようになり、現在の女王マルグレーテ2世となりました。

憲法の第1部は4つのパラグラフからなり、デンマーク王国の4つの基軸を示しています。第1パラグラフは、憲法が適用される王国の領土をデンマーク、フェロー諸島、グリーンランドと定めています。憲法の2番目の基軸は君主制です。3番目の基軸は三権分立、すなわち立法（議会と国王）、行政（政府、地方自治体など）、司法（地方裁判所、地域裁判所、高等裁判所）を定めています。デンマーク憲法の4番目の基軸は、憲法の基礎となる憲法序章のうちの第4パラグラフで、デンマークの福音ルーテル教会です。公式翻訳では、それは国教会とされますが、それは憲法の理念をどこか変えてしまう翻訳です。デンマーク語から直訳すれば、「デンマーク国民の教会」となり、もはや国王の教会ではなく（ただし、君主は教会のメンバーであることが義務付けられています）、国家の教会でもなく（ただし、国家は憲法により、政治的に、そして結局は経済的にも教会を支援することを義務付けられています）、国民の教会であると同時に、福音ルーテル教会であるという意味です。

こうした4つの基軸、地勢、君主制、三権分立とその内容、宗教的事項が憲法後半の各章で扱われ、宗教に関する章は憲法第7章です。

憲法の第67パラグラフでは、憲法制定直後から、すべての国民とあらゆる市民グループの信教の自由を示唆しています。その意味で、1849年当時、この憲法は大変近代的なものでした。ユダヤ教徒もカトリック教徒も1人残らず。そしてカトリック教徒は1849年には大問題と見なされていました。なぜならば、デンマークは1536年以来ルター派であり、カトリック



は外交官を除いて、ほぼ300年にわたり禁止されていたからです。ところが、この憲法制定直後からカトリック教徒にも信教の自由が与えられたのです。

憲法の理念は記録に値するものです。例えば、第69パラグラフの理念によれば、福音ルーテル教会ではない宗教団体は、国教に「反対する」宗教団体という共通概念の元に置かれます。ですから、デンマーク憲法によれば、ルーテル教会が基軸であるということになります。ルーテル教会のメンバーではないデンマーク人は、憲法の観点では反対者と見なされます。また、ルーテル教会は公共システムの執行担当部門であり、公法に従うものであるという意味もあります。それ以外の宗教団体はすべて、私法により私法団体として治められます。

経済的に見ると、ルーテル教会は、国がルーテル教会会員(会員のみに)から集めた資金と、国による経済支援とによりまかなわれています。他の宗教組織や団体は民間からの資金で運営されています。会員は民間組織からの寄付(または海外から、例えば諸外国からデンマークのイスラーム共同体へ、バチカンからカトリック教会への寄付)など、自分たちで資金を集めなければならず、非国教派の団体は国から何の経済的援助も受けていません。

このように、憲法はデンマーク・ルーテル教会と、いわゆる非国教派とを非常に明確に区別しているにもかかわらず、基本的観念では依然として、あらゆる人、あらゆる宗教団体は憲法に直接基づいて信教の自由を有するということになっています。登録制度のようなものはなく、尋ねる人もいません。宗教団体が課税免除の請求や、結婚を執り行うときに用いる確認システムはありますが、基本的には、組織が宗教の領域内で活動している限り、そのシステムは大変自由です。ただし、各宗教が平等な待遇を受けるわけではなく、ルーテル教会は特別扱いです。

しかし、宗教分野以外ではデンマーク社会は、宗教的属性によらない平等な待遇を基本としており、憲法の第70パラグラフには「いかなる者も、そ

の信念や出自を理由として、市民権および政治的権利の完全な享受を得る機会を奪われないものとする」と記載されています。

このパラグラフの主旨は、宗教というのは宗教の領域外で使えるカードではなく、公的あるいは私的な仕事の話になったときなど、宗教を考慮に入れることは禁じられているということです。この考え方は1849年当時としては大変近代的で、今日のヨーロッパ宗教関連法における論議の焦点となっています。

このパラグラフについては、1849年憲法制定会議の2人のメンバーの間で論争がありました。1人はルーテル派聖職者でこのパラグラフに賛成でしたが、もう1人は当時最も影響力をもった法律家で反対意見でした。その法律家は、そのパラグラフを入れれば、ユダヤ教徒が最高裁判所の裁判官になったり、カトリック教徒がコペンハーゲンの通りで行進したりするからと反対したのです。彼は、ルーテル派以外の宗教がデンマークの公共生活の一部となるのを嫌がったのです。しかし、ルーテル派聖職者はその規定に賛成しました。なぜなら、宗教の領域内では誰にでも信教の自由があることを望み、その一方で、雇用者と被雇用者の関係に話が及ぶときには宗教を脇に置くことを望んだからです。結果として、宗教の領域外での平等な待遇が規定されました。

今日、デンマークにおいて宗教が宗教の領域外では政治的にも無関係であるという理解はさらに意味が広がり、国教会が支持されると同時に、とてもフランス的な方法で、人々の宗教論議は個人の問題にとどめるべきとされるようになりました。

ここでも2つのことを意味しています。つまり、少数派宗教は社会で疎外感を感じ、多数派教会の会員も社会で疎外感を感じ始めているということです。なぜならば、少数派宗教への反応から、自分たちが普通よりずっと宗教的であると見られていることに突然気づくからです。

従って、ヨーロッパ・キリスト教徒であるということは、いかなる宗教的属性も考えていないが、社会

における歴史的教会の構成機能には関連しているという社会の自然構成員から、多数派の中での少数派へと、本当の少数派からも多数派からも気づかれもせず、瞬時に変わることです。

第三に、今日、ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、つねにその規模について議論するように迫られるグループの一員であることです。ムスリムが等しく信心深いわけではないことはよく知られています。他の人々より忠実な人もいます。ラマダーン先生によれば、ヨーロッパのムスリムの約1割は祈りを毎日行っているそうです。しかし、ヨーロッパのムスリムの大半は、年1回のラマダーン(断食月)を行うだけの信者であると、ラマダーン先生は言っていました。「ラマダーン・ムスリム」と呼んでも良いのではないのでしょうか。つまり、ヨーロッパのムスリムの大半は、祈りを1日5回行っているわけではなく、ラマダーンを行っていますが、おそらく断食ではなく、少なくとも祭りの部分を行い、その一方で当然ムスリムと呼ばれています。彼らはどれだけ忠実であるかに関係なく、自分たちのことをムスリムと認めています。ですから、宗教社会学者は彼らをムスリムと見なします。どれほど忠実であるかに関係なく。

しかし、ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、アメリカの刺激を受けた宗教社会学者と議論することを常に迫られることです。つまり、社会学者が当然と考えるほど頻繁には教会の礼拝に出席していない人たちを本当にキリスト教徒といえるかどうか、また、ヨーロッパのキリスト教徒が実際に何人いるかについての論議を求められるのです。例えば、ヨーロッパ的価値観の研究による数字ではいつも、ヨーロッパ、特に北欧諸国、中でもデンマーク人はキリスト教徒ではないと結論付けられています。デンマーク人のうち、毎週教会の礼拝に出席する人は3%に満たないため、社会学者は、キリスト教徒はデンマーク人の3%だけであると結論付けます。しかし、数字をさらに注意深く見てみると、デンマーク人の別の9%は月に1回教会の礼拝に出席していることがわかり

ます。デンマークでは月に1回教会に行けば、それはきわめて定期的に教会へ行く人だと言えます。そこで、これら2つのグループを1つにまとめ、デンマーク人の12%が定期的に教会へ通うと私は考え、この考えに同意する人は多いと思います。

しかし、このことからデンマーク人のキリスト教徒は12%しかいないというわけではありません。なぜなら、残りのデンマーク人のうち45%は時々教会へ行くからです。「時々」とはどういうことでしょうか。それは、毎年ラマダーンのときに、あるいは毎年クリスマスイブのときに、という意味です。ヨーロッパのムスリムがラマダーン・ムスリムであるように、デンマークの人口の半数近くは、クリスマス・キリスト教徒です。ヨーロッパのムスリムの場合と同じなのに、なぜクリスマス・キリスト教徒であることについては議論する必要があるのでしょうか。デンマーク人は、クリスマスイブ、子どもに洗礼を授けるとき、教会で結婚するとき、埋葬されるとき、そして、家族や友人が子どもに洗礼を授けるとき、結婚するとき、埋葬されるときに教会へ行きます。実際は子どもに洗礼を授ける人は少なくなっていますので、教会の会員になる人の数は減り、その結果、教会の結婚式に参列する人も減っていますが、それでも、専用墓地を持つ他宗教のメンバーを除くすべてのデンマーク人は、埋葬のために教会を利用することができます。

つまり、デンマーク人の60%は定期的あるいは時々教会を利用し、「時々」とは、子どもの洗礼式で家族や友人とそろって教会へ行くことも意味します。それでも、たった60%です。これは驚くべき数字です。なぜなら、デンマーク人の83%は国教会の会員だからです。4%がムスリム、若干のユダヤ教徒とカトリック教徒、そして、デンマーク人の10%がまさに世俗的な無神論者、俗人のようです。しかし、残りのデンマーク人は教会の会員なのです。また、確信的な無神論者、カトリック、イスラームなどのいずれでもないデンマーク人もまた、教会の会員です。ところが、教会の会員の3分の2は定期的または時々教会



を利用し、3分の1は教会へまったく行きません。なぜなのでしょう。デンマーク、スウェーデン、ノルウェーなど北欧の教会は、北欧諸国の社会や国家の形成の柱であったことから、歴史的に北欧諸国福祉制度の一部と見なされています。

北欧諸国の福祉制度は、必要に応じて利用することのできるシステムと考えられています。ところが、私たちは決して必要とならないようにと願っています。教会について言えば、教会を使わなくてすむように、死なないことを願っているのです。理解していただきたいのですが、これはヨーロッパという大きな部分を考える際のほんの一部に過ぎません。もちろん、子どもたちが洗礼を受けなくなって割合は下がれば、事態は変わり、北欧諸国ほどではないにしても、ヨーロッパの他の地域でも起こっていることです。

4番目に、ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、少なくともプロテスタントの国において、そして、カトリックの国においてはなおのこと、すべての信者の聖職性(priesthood of all believers)を認識した個人であるということです。それは、ヨーロッパ・キリスト教徒は、自分たちがどの規則に従っているのか、誰の声を聞いているのかについて、そして宗教的な事柄についても自分自身で対応したいと思っているということです。また、ヨーロッパ・キリスト教徒であるということは、新しい時代、東洋宗教、特に仏教の刺激を受けると同時に、デンマーク人として、あるいは伝統の一部としてのキリスト教徒であるという考えを持続けることです。

ほんの3年前、グレース・デーヴィーは『ヨーロッパ―例外的な事例』という本を出版し、その中で、教会へ通う人と無信仰な人の区別、忠実な信者と忠実でない信者の区別などから、ヨーロッパの状況を判断することはできないと指摘しました。ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、「身代わりの教会」に依存すること、そして、彼らがクリスマスイブに来るか、孫を連れてくるまで代わりに教会の世話をして

くれる熱心な礼拝出席者や牧師に頼ることです。そして、彼らがそうして教会を訪れるときには、門戸が開放されていなければなりません。さもないと、当局にクレームが来るからです。

従って、ヨーロッパ・キリスト教徒であるということは、社会の構成員である個人に対する規則や法律に優先して、教会や宗教が決定を下すのを容認することとはまったく違います。ヨーロッパ人であるということは、法的分野の範囲内、法的規範の範囲内では宗教規範は関係がないと判断することであると考えるヨーロッパ・キリスト教徒は多いと思います。彼らは、法的規範に対する宗教的要求は非ヨーロッパ的であるとして排除しようとするでしょう。

ここでも例を1つ紹介しましょう。デンマークでユダヤ教が受け入れられ、認められたとき(1813年、デンマークでユダヤ教徒として、特定区域以外なら許可を求めなくても暮らすことが可能になった)、ユダヤ教徒たちは、遺産や結婚に関する独自の決まりを放棄し、法律に規定されるデンマークの一般的規則に従わなければならませんでした。彼らは他の信徒団体と同様、一信徒団体に過ぎず、立法者ではないと認識しなければならなかったからです。ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、立法と宗教の非常に明白な区別を念頭に置くことなのです。

これはユダヤ教徒を受け入れないことは関係がなく、ヨーロッパ諸国のモデルと関係があります。このことを理解することは、ヨーロッパの議論を理解するために大変重要です。ここでの議論の核心は、共通の立法、行政、司法を維持したいという強い気持ちです。市民の宗教的属性の違いから分割されることのない、三権共有です。

ただし大変興味深いことに、このことはカトリック教会にとってはあまり重要ではありません。教会法の範囲内では、カトリック教会は独自の法廷を持ち、今まではそうでしたが、それを信教の自由と見なし、異論を挟む人はいません。カトリック教徒がこうした法廷の裁定に同意できない場合、その人は

教会を出て行くしかないので。

ユダヤ教団体も独自の法制のようなものをもってしています。ただし、それは制度として規定されるものと思われていました。人々はそれを受け入れています。それがどのくらい重要なのか、というのが人々の反応だからです。

しかし、ヨーロッパ人が求めていること、それは、オスマン帝国に由来するミット制度を再導入することです。1922年までヨーロッパのバルカン地域で行われていたその制度において、世俗法は宗教的なものであり、世俗法の問題が生じるとオスマン帝国の市民はすべて、各宗教法(戒律)に基づいてアルメニア教会、正教会、ユダヤ教ラビ、イスラーム指導者のいずれかに支配されていました。しかし、今日のヨーロッパ人は私法に関する問題においても平等な市民権を求めます。人々は宗教に基づく世俗法、特に宗教に基づく刑法を伴う市民権は求めています。このことがヨーロッパにおけるムスリムとの議論の背景にあります。そして、そういうわけで、「ヨーロッパのムスリムはヨーロッパの法制、法の支配を受け入れなければならない」とするターリク・ラマダーン先生の意見が重要なのです。

ここで言うておくべきことがいくつかあります。1つには、この意味の深さを理解しなければならないということです。それは、聖俗の区別に関することです。その一方で、実際の私たちの法制は聖なる区別に基づいていますが、その区別は区別として意識されていません。

また、私たちはとてもフランス的な立場にも直面しています。つまり、議会が作った法律が唯一正当な法源であるという立場です。北欧諸国からすると、フランス的観点は、立法者を中心とするトップダウン的な見方です。ドイツ・ローマ的観点からすると、議会に由来するものより多くの法源が存在し、法の内容を決定するためには法的議論が必要であり、その際、教授が中心となって法的理解を系統立てます。イギリス的観点は、裁判官を中心とする

判例に基づきます。北欧諸国の法的理解は、この3つの観点を組み合わせたものであり、法の内容の討論と協議に一層の重点を置いています。ローマ法は国の法体制としての線を動かしたことはなく、法源として触発するだけでしたので、ヨーロッパ概念のうちローマ式構造次元の特徴は、北欧諸国ではあまり見られません。

たとえばヨーロッパ・キリスト教徒が「聖俗を区別すべきである、立法能力は宗教に関係のないものである」と考えても、現実には、ヨーロッパのユダヤ教徒、ムスリム、カトリック教徒はそれぞれの程度まで、独自の規範を用いて法的問題を解決しています。こうした宗教的(法的)規範が社会の規範と合わせて協議されることもあり、そうでない場合もあります。信者個人がどの規範に従うかを自分で決めるよう求められることもあれば、宗教団体がその固有規則の遵守を求めることもあります。ヨーロッパ・キリスト教徒、特にプロテスタントが宗教と法律の分離をどれほど要求しても、そして宗教的議論に基づいて要求しても、それがヨーロッパ社会の現実です。

どうすればよいのでしょうか。ユダヤ教、イスラーム、カトリックの規範を非合法として禁止することは不可能だけではなく、並列的な法的機関を有する並列社会を容認することと同じではありません。逆に、私はこう提案します。その国の法的機関(特に共通法廷)は国の法制と公式法源を考慮するだけではなく、係争当事者の規範的拠り所を取り入れ、これらの源を織り交ぜ、宗教的規範を公式言語としている人々も受け入れられる解決を目指すのです。

5番目に、21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であることは、宗教が公的領域の一部であると主張することです。この伝統は、聖パウロが古代アテネ人と議論したとき、それが町の真ん中で、公然と、広場で、非公式ではなく、密室で影響力を及ぼそうとすることなく行われたことに遡ります。キリスト教は公的なものなのです。私が知る限りで、宗教を公的なものと見なすことが、イスラームとキリスト教の





共通点です。その一方で、ロイヤルシアターの非常に有名なデンマーク作品「壁の内側で」から学べることがあります。その作品には、100年前のコペンハーゲン在住のユダヤ人中産階級家族が登場しますが、ユダヤ教は壁の内側で考慮すべき家族的な事柄であることが示されています。社会ではユダヤ教徒として、少なくともディアスポラ(離散したユダヤ人)であるときは、宗教を持ち込むことなく社会的規範に従わなければなりません。

今日、問題となることは、私たちはすべてディアスポラなのか、ということです。私たちが切望する状況とは、自分たちの宗教が危険にさらされ、規則を定めてから素顔を見せて歩み出ることでしょうか。それとも、ディアスポラと新エルサレムが一体となった状況にいて、正統派の人間の義務として燭台のろうそくに火を灯し、私たちの正体を明かし、公の議論の場で私たちの姿を見せることでしょうか。そして、そうした議論の場で宗教的規範も示され、私たちが社会で政治討論を始めたときに、そうした規範が考慮に入れられ、表に出せるようにすることでしょうか。古くからのドイツ人マルクス主義者であるハーバーマスでさえ、後者を主張します。すなわち、宗教議論を公的領域に持ち出し、そこで実証させようという考えです。

私は政治討論における宗教の役割という問題を、欧州連合に関連して、欧州憲法設立を目指す条約草案に焦点をあててお話しします。

ご存知のように、欧州憲法は一部の欧州諸国が承認していないため、まだ発効していません。しかし、そこには、欧州連合の政治的領域における宗教論議の理解について興味深いことが記載されており、関連性があるので見てみようと思います。まず第1部、タイトルVI「連合の民主主義的生命」、第I-52条「教会の地位」をご覧ください。EUは加盟国内の教会、宗教団体、教団の国法に基づく地位を尊重するとともに、偏見により損害を与えることはない、と書かれています。この記述は必要です。

なぜなら、1996年のアムステルダム条約に伴い、連合の条約には新しく第13条が加わり、それは現在、EU法となっていますが(憲法草案、第2部、タイトルIII、第II-81条、6ページ「無差別」にも反映)、次のように記載されています。「性別、人種、肌の色、民族や社会的出自、遺伝的特徴、言語、宗教、信仰などを根拠とする差別はいかなるものも禁ずる」。欧州連合が宗教に基づく差別を禁止すべきであると決定したとき、教会、そして、おそらくユダヤ教団体とイスラーム団体も門番として反応し、次のように主張しました。「もちろん、宗教がそのように社会での差別として利用されることは望まないが、一方で、欧州連合が私たちの内面の問題に関して決定を下すことも望んでおらず、教団のメンバーを決めるなどの場合、すなわち、宗教に基づく選別を行うときに限り、自分たちで決定したいと思っている」と。

そこで、今、ご覧になっている第I-52条は条約に合わせて修正されました。それはデンマーク人とフランス人の反対で、条約には盛り込まれませんでした。彼らは、欧州連合が宗教について一切議論できないようにすることができると考えていました。この反差別条項が入ってきたとき、彼らは反対する理由がなくなり、この条項は入れられ、継続することになりました。

法では以下の通りです。例えば、労働市場などにおいて、一般の人々に関しては、宗教を問題とすることは決して許されません。私が信心深い人物であるかどうか、例えば研究資金集めの際にどんな宗教の人々に資金提供を求めているかが問題となつてはいけません。EUの労働市場などでの現状では、第70パラグラフで見たとおりデンマークの規則と似ており、宗教は宗教分野以外で問題となりません。

教会や宗教団体に関して、第I-52条(そして、前回の修正)の規定によれば、宗教団体は自分たちの団体を管理する際に宗教に配慮して、ある程度まで(法律的詳細についてはここでは触れません)独自の規則をつくることができます。重要な点は、

労働市場などで宗教は排除されますが、宗教に関する労働市場では宗教を基準の1つとして認めるという点です。

しかし、EUは国家の政教に関する協定に介入しないと規定しています。こうした協定は国の伝統の一部です。この論文の初めのほうで、カトリック、正教、改革派、多元的、ルター派のそれぞれのモデルに着目しましたが、ヨーロッパには政教一体モデルがEU加盟国の数と同じくらい存在しており、人権に関する理解の範囲内であればEUはこうした国の伝統に介入しないということも言うておくのが公平でしょう。

例えば、トルコは国内のイスラーム多数派を操縦する国家政権を維持するために、認識の範囲を大幅に拡大しています。EUは、世俗主義とは何かというトルコの理解に介入することを望んでいません。また、世俗主義に関連してベールをかぶることは禁じられているのか、あるいは、ヨーロッパの多数のオブザーバーが言うように信教の自由の一部なのかという問題について介入することも望んでいません。信教の自由があり、トルコで国家体制の支配に従うことを望まないムスリムが脱退し、独自のムスリム団体を設立することができる(現時点では不可能)限り、さらに、ムスリムでない人々も自由に宗教団体に入ることができる(最近、トルコで合法化)限り、EUと欧州人権裁判所は介入を望んでいません。

ご存知のようにヨーロッパでは、キリスト教の伝統、キリスト教的価値、または少なくともキリスト教的遺産の固守のような記述を欧州憲法の前文に入れるかどうかをめぐって、広く議論が行われてきました。その結果、この憲法制定の合意に権限を有するヨーロッパ諸国の指導者たちは、第一に「ヨーロッパの文化的、宗教的、人間的な遺産からインスピレーションを受ける」と記述されています。前文で神に関しては、それだけです。

しかし、私に言わせれば、それは十分以上のものです。なぜなら、タイトルXI、第I-52(3)条をもう1

度見てみると、「連合は、加盟国内のこうした教会と宗教団体やコミュニティのアイデンティティとそれらに特有の貢献を認識し、それらとの間で開かれた透明な対話を定期的に続けるものとする」とあります。

EUは、とりわけヨーロッパの宗教的な遺産を認識し、記憶し、そこからインスピレーションを得るため、ヨーロッパの教会、ユダヤ教団体、イスラーム団体と定期的に透明かつ開かれた対話を続けるということです。

つまり、教会の内情に影響する可能性のある宗教的事柄の自由の規制だけではなく、教会や宗教団体の社会での状況に影響する規制の場合にも宗教的規範が考慮されているのです。しかもそれだけではありません。教会と宗教団体は、関連のある確固たるヨーロッパ的価値の器と見なされ、そうした価値とは、教会自体に影響のない分野でも新しい規制の協議では必ず考慮されなければならないもの、つまり、教会や宗教団体から政治に取り込まれる民族的な声です。ここで重要なことは、対話をもち、ヨーロッパの宗教的多元性を取り上げることです。

従って、21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であるということは、公的な政治議論の中での公的な宗教議論、すなわち複雑に絡み合う議論に賛成することです。

結論に入ります。

これまで述べたように、今日のヨーロッパでキリスト教徒であるということは、そのアイデンティティが論争の対象となっているということで、論争には自分自身や所属教会だけではなく、外部も加わり、数(例えば、デンマーク人の3%、12%、45%、60%、82%)、アイデンティティ、社会における役割が争点となっています。今日、ヨーロッパ・キリスト教徒であることは、多数派からも根拠のある少数派からも認識されていませんが、多数派の中での少数派としての役割をますます受け入れることです。聖俗の区別を保つことです。世俗的な信仰者または宗教的な俗人であることです。教会という構造の外側





にある社会の構造を支えることです。他の宗教も同様に、社会を宗教とは異なるものとして支えるべきだと主張することです。ヨーロッパの真の俗人とヨーロッパの真の信仰者の間の争いは多かれ少なかれ、両グループどちらにもプラスになる状況であると主張することです。それは両グループどちらにも有利な状況ではありますが、ヨーロッパ人の多数派、宗教的な俗人、二重または複合アイデンティティをもつヨーロッパ人に、戦場を生み出しています。

21世紀のヨーロッパ・キリスト教徒であることは、複雑に絡み合ったアイデンティティが許されるべきで、それが大半のヨーロッパ人にとっての現実であるかもしれないと主張することです。今日のヨーロッパ・キリスト教徒であることは、進むべき道は戦争ではなく、対話と相互認知であると主張することです。ありがとうございました。

「ヨーロッパ」という自己理解と一神教

イスラーム・イスラーム社会研究所(フランス)

ハミット・ボザルスラン

Hamit Bozarslan

ご紹介ありがとうございます。もう時間も遅いので45分足らずで終わりにしたいと思います。

「ヨーロッパはなおキリスト教世界なのか？」というテーマについて、歴史的社会的な視点を提示したいと思います。

この問題の重要性については欧州憲法に関する議論の中でクリストファーセン先生がすでに強調していらっしゃいます。ご存知のように、欧州憲法はフランスとオランダによって否決されています。主な問題の1つは、ヨーロッパのキリスト教の遺産の重要性を憲法の中で明示的に認めるべきかどうかということです。ヨーロッパはまだキリスト教の国あるいは世界なのでしょう。

この問題は極めて妥当な問題だと思います。中心的な問題ですが同時に非常に複雑なため、3つの小問題に分けて考察してみようと思います。

1つ目は、「ヨーロッパは過去において排他的キリスト教世界だったのか」という問題です。

2つ目は、「キリスト教圏としてのヨーロッパのアイデンティティを明確にできるのか」、そして「キリスト教圏としてのヨーロッパのアイデンティティを明確にするべきか」という問題です。

そして3つ目は、「今のヨーロッパでキリスト教は何を意味するのか」という問題です。

1つ目の質問、「ヨーロッパは過去において排他的キリスト教世界だったのか」についてです。ここでは「世界」という概念が非常に重要だと思います。というのも「世界」とは「小宇宙」を意味するからです。「空間」や「圏」という言葉も使うことができ、その概

念は重要です。「ヨーロッパはキリスト教徒の土地である」というとヨーロッパを厳密に規定することになります。つまり、ヨーロッパの境界や1つのアイデンティティを定めてしまいます。ところが、「空間」や「圏」という概念は非常に流動的な状態を意味します。

私の認識では、過去にはヨーロッパは同時に3つの事柄を意味しました。まず、「大陸」であることは明らかです。それから「キリスト教の空間」と「地中海の空間」です。

大陸については、ヨーロッパはヨーロッパ大陸としてのその存在を十分に認識していました。この点については地理的歴史的知識によって証明されます。しかし、この大陸は必ずしも政治的な意味、政治的な内容を持っていませんでした。

少なくとも8世紀か9世紀からはヨーロッパは明らかにキリスト教圏でした。というのも、キリスト教の教理と正典がヨーロッパ全土に広まっていたからです。聖職者もそうです。ローマは宗教改革までは、ある程度は大きな影響力を持っていました。

しかし、ヨーロッパは地中海空間でもありました。空間として、時には紛争域として、あるいは流動性の領域としての地中海の概念を取り入れると、この場合はるかに複雑なヨーロッパの状態や描写になります。というのも、この地中海ヨーロッパは排他的なキリスト教世界ではないからです。それよりもはるかに複雑な世界です。同時にキリスト教徒、ムスリム、ユダヤ教徒の世界であったり、連続的世界であったりもしました。必ずしも断絶の世界ではありません。

この問題については豊富な文献がありますが、



そのうちのほんの一部を紹介します。例えば、アレクサンダー・ハミルトン、ジョスリーヌ・ダクリア、フランコ・カルディーニ、ジャック・ルゴフらの著書があります。彼らはみな、地中海圏は相補性と流動性の領域であると主張しています。

ジョスリーヌ・ダクリアが示しているように、地中海のリング・フランカ(共通語)は架空のものではありません。ペルベル人言語とスペイン語とイタリア語との混成言語でした。知識界があり、文学界があり、マナー社会、そう、文化的なマナーがありました。地中海圏中のエリート層をひとつにまとめる共通の文明が実際に存在したのです。

この史実を考慮に入れずにヨーロッパの形成を理解することは容易ではありません。

もう1つの要素ですが、歴史的に言うと国土回復運動にもかかわらず、スペインはデンマークやリトアニアよりもはるかにモロッコに近いということです。そして、言葉の問題はもちろんのこと植民地支配の歴史や交易上のつながりなどの多くの理由から、多くのムスリム諸国は歴史的にヨーロッパに近いのです。また別の例を挙げると、ベネチアの発展を考慮せずにオスマン帝国の発展を理解することはできません。そして、オスマン帝国の発展があったことを考慮しないと、ベネチア共和国の発展を理解することはできません。

さらに付け加えると、様々な形でのイスラームの存在がヨーロッパに見られます。改宗がありました。こうした改宗の多くは強制されたものだったと認めざるを得ませんが、すべての改宗が強制だったとは言えません。そして一部の国について言うと、例えばボスニアでは、18～19世紀のサラエボは州都にとどまらずヨーロッパの文化的首都の役割を果たしていました。

ジャック・ルゴフが序文を寄せている、フランスのイスラームに関するモハメッド・アルコアン近著では、「ムスリムのフランス」としてのフランスについて論じています。ムスリムのフランスとは、もちろんキ

リスト教徒のフランスではないという意味ではなく、イスラームも存在するフランスという意味です。

キリスト教世界について表現したのと全く同じ言い方をすれば、ムスリム世界はこれまで排他的にムスリムであったことはありません。もちろん、イスラームの支配はありましたし、非ムスリムを従属させたり、排斥したこともありました。もちろん、非ムスリムは「ジンミー」(被保護者)の身分に置かれています。そしてもちろん、権力はイスラームによって正当化されます。しかしそれと同時に、イスラームの領土内にはより大きなキリスト教徒やユダヤ教徒の存在が必ずありました。

コンスタンチノーブル、すなわち1914年以前のイスタンブールでは、非ムスリム人口は55%を占めていました。1914年にはイスタンブールの住民の55%がムスリムではなかったわけです。そして、重要なムスリム文化の中心地であったサロニカも、ヨーロッパ最大のユダヤ人社会の1つでした。

オスマン帝国には、排他的にムスリム国家であるとの自己認識はなかったことを付け加えておきたいと思います。オスマン帝国は、旧ムスリム帝国の後継者とも「第3のローマ」とも認識していませんでした。「第1のローマ」はもちろんローマですが、「第2のローマ」はビザンチン帝国のコンスタンチノーブル、「第3のローマ」はオスマン帝国支配下のコンスタンチノーブルです。「第3のローマ」の立場をめぐる争いがモスクワとコンスタンチノーブルの間でありました。「第3のローマ」であることは全世界の商業の中心地であることを意味します。

スレイマン大帝(壮麗帝)はフランス国王への書簡の中で自らを名乗るときに、「パーディシャー」、「スルタン」、「カイザー」の称号を用いました。もちろんペルシア人のパーディシャー(大王)ではありませんでしたが、トルコ人のスルタン(皇帝)でありキリスト教徒のカイザー(皇帝)でした。

では、以上お話したことは何を意味するのでしょうか。ヨーロッパがキリスト教圏であったかどうかと

いう問題については後ほどまた考察しますが、まとめとして、ヨーロッパはキリスト教徒だけにとどまらない、そしてムスリム世界はムスリムだけではないということ強調したいと思います。

2つ目の質問は、「キリスト教圏としてのヨーロッパのアイデンティティを明確にできるか」です。さらに、「ヨーロッパはキリスト教圏としてのヨーロッパのアイデンティティを必要としているか」という問題も付け加えたいと思います。

現在のヨーロッパは何によって定義づけることができるでしょうか。これは非常に難しい問題です。宗教があることは明らかです。自己定義としての、そして他者と区別する要素としてのキリスト教はヨーロッパのイメージの1つです。それは、過去そのものとは異なる、過去のイメージの一部です。過去の記憶を保持し解釈することは極めて重要で、未来のヨーロッパを思い描くうえで一助となります。そこにもやはり想像の部分があります。

そうは言っても、欧州連合や欧州建設として認識されているヨーロッパは、過去から受け継いだアイデンティティを持つべきではないと思います。ヨーロッパというものがいつか存在せざるを得ないのなら、それはプロジェクトであり経験であり、既定の事実ではないのです。もちろん、スペインとキプロスとエストニアを1つの統一体にまとめることはできますし、何も間違っていないと思います。結局のところ、政治的統一体の建設は意思の行為なのです。しかし、それを過去や歴史によって説明することはできません。共生し、何かを共に築き、その何かを未来に提示するという意思によってのみ説明できるのです。

そして、それがヨーロッパの存在条件なのです。ヨーロッパは自然にできたもの、つまり自然な歴史の産物だと言うのなら、ヨーロッパの建設はありえません。

ヨーロッパはプロジェクトであり、このプロジェクトはいくつかの原則に基づいています。まず、民主主義です。これが根本原則になると思います。それから、開かれた社会、これまたいへん重要です。

もちろん世俗主義があり人間の保護も大切です。それからジェンダーの問題をヨーロッパ建設の中心的な問題としてとらえるという神経の細やかさにも賛成です。民主主義は少数派ではなく多数派を保護する制度なので少数派の保護も加えます。それから、自由主義的な非国家社会主義経済。これらはみなヨーロッパ建設の柱となります。

これら列挙した原則のいずれも、キリスト教などの宗教ともキリスト教のアイデンティティともまったく関係ありません。だからといって、宗教が開かれた社会や世俗主義を経験していないと言っているわけではありません。3つの一神教には世俗主義的時期や段階があったと言えます。しかし、これらの原則は全般的にポスト神学、ポスト宗教の原則です。なぜなら、啓蒙主義や世俗主義の教義に対して批判的な人でも、これらの原則が啓蒙運動後に明確に形成され受容されてきたという事実を否定することはできないからです。

ヨーロッパがアイデンティティを持ちえない理由、過去から継承された共通のアイデンティティを持ちえない理由、そしてアイデンティティを持つべきではないと思われる理由はもう1つあります。それは、どの国も、そしてヨーロッパのような超自然的な統一体の場合はなおさら、単一のアイデンティティを持つことは不可能だということです。このアイデンティティ問題、複数のアイデンティティについてはすでに議論しています。私は複数のアイデンティティがあると思いますが、それらのアイデンティティは常に変化しているとも考えています。ヨーロッパに1つのアイデンティティを与え、固定することはできません。統一体をただ1つのアイデンティティで永遠に定義づけることはできないのです。

一例を挙げると、フランスのような国は絶えず複数のアイデンティティを持ち、常にアイデンティティの危機に直面しています。アイデンティティの危機があるのはいいことです。アイデンティティの危機がなければ、フランスのような国はおもしろくない国になっ



てしまうと思います。危機があるおかげでフランスは変革を続けることができるのです。

しかし、これ以外にも理由があります。過激急進主義のジャコバン派によるフランス革命の遺産を考慮せずにフランスのアイデンティティを理解することはできません。また、ホロコーストを考慮に入れないとドイツのアイデンティティは理解できません。ドイツは、ホロコーストもその歴史的アイデンティティの一部であることを公式に認めています。

東欧諸国のアイデンティティは、過去の独裁政治の影響を考慮しなければ理解できません。この独裁政治は国家のアイデンティティの形成にも影響を与えています。ヨーロッパの建設プロセスにおいては、このようなアイデンティティを無視するわけにはいきません。もしヨーロッパが起ころうのなら、それはこのようなアイデンティティのおかげではなく、そうしたアイデンティティにもかかわらずそれを克服することによって実現されるのです。

なぜ、このアイデンティティの問題、とくにキリスト教圏としてのヨーロッパのアイデンティティの問題はかくも活発な議論を呼ぶのでしょうか。主な理由は2つあると思います。1つには、もちろん「ポスト9.11」時代だということ。「9.11」は、心に、精神に、そして不安に、私たちの不安に、世界的不安に大きな変化をもたらしました。そのほかにも、テオ・ファン・ゴッホ暗殺事件やマドリッドやロンドンの爆破事件などが極めて深刻でもっともな不安をかき立てています。

アイデンティティの危機と不安がないまぜになって、多くの人々が既存のものに代わる新しいアイデンティティを模索しています。そして、代わりとなるアイデンティティというのはもちろん思い込みによるものです。ムスリム諸国においてはイスラームがある程度は錯覚のアイデンティティであるように、キリスト教は錯覚のアイデンティティとなっています。このため、イスラームと民主主義が本質的に相容れないものであるという考えや、キリスト教が民主主義と同じくらい中心的な要素であるという認識が生まれま

した。キリスト教は民主的な宗教であるという認識が広まってきています。宗教でないとしても少なくとも民主主義的な文明として、人権を基盤としている文明として認識されるようになっていきます。

マルセル・ゴーシェのような聡明な学者が「la religion de la sortie de la religion」(宗教から抜け出る宗教)と言うとき、まさにこのことを強調しています。この分析に間違いはありませんが、あまり極端に考えると、この場合は宗教間の分離を生じさせてしまうと思います。

2つ目の理由は、森先生がこの問題に強い関心をお持ちだと思いますが、トルコのEU加盟申請によって、ヨーロッパのプロジェクトに多くの問題が生じ、ヨーロッパのアイデンティティの危機が深刻化し、ヨーロッパの意思決定者とヨーロッパの世論との間に隔たりが生じているようだということです。

トルコの加盟申請は非常にやっかいな問題ですが、それはヨーロッパの世論が先験的に反対しているからではありません。トルコに多くの問題があるからなのです。アルメニア大虐殺の認知、クルド人問題、キプロス問題、政教分離の問題、軍の政治へ関わり、国の正式なイデオロギーとしてのケマル主義の存在などの多くの理由があります。

しかしながら、このような理由を超えてトルコの加盟に対して強力な反対があるとしたら、それはトルコがイスラーム国家とみなされているからです。偉大な歴史をもつイスラームの大国です。トルコとの統合は、敵対の過去や敵対の歴史との統合、そしておそらくは敵対国と統合することだと考えられているのです。また、トルコが加盟申請をしなければ、キリスト教のアイデンティティの問題もこれほど大きくなっていないかっただろうと思われます。この論争はヨーロッパでこれほど重要になっていなかったでしょう。

最後の質問は、「今日のヨーロッパでキリスト教は何を意味するか」です。これについてはすでにクリストファー・セン先生から答えとなるような情報についてお話しいただいていると思います。また、現在の

ヨーロッパにおいてキリスト教徒であることは、キリスト教徒の多数派の中の少数派になることを意味するともおっしゃいました。さらに、フランスのプロテスタント倫理委員会(Protestant Ethic Commission)を率いる学者のオリバー・アベルは、「事実上ヨーロッパはもはやキリスト教の土地ではなく、むしろポスト・キリスト教の土地となっている。もしトルコがヨーロッパに入りたいと考えているのなら、それはトルコがキリスト教国統合体ではなくポスト・キリスト教国統合体に加盟することを意味する」と論じています。

さらに私の考えを付け加えさせていただきますと、トルコ加盟の条件はトルコ自らがポスト・ムスリム国家になることだと思います。これはたいへん重要なポイントだと思います。というのも、声高に提唱されている「文明間の対話」という考えそのものが、各国または各社会で内なる葛藤や内なる緊張を持たなければならない、対話は各国内部で進めなければならないということを無視していると思うからです。

一方にムスリム社会があり他方にキリスト教社会があり、両者は対話をしなければならない、と言うことはできません。むしろ、「そうではなく、危機を経験しなければならない。内なる緊張を持ち、変容する必要がある」と言います。さもないと、世界を完全に硬直化させてしまい、そこにA文明とB文明、またはA宗教とB宗教があるということになります。ですから、オリバー・アベルの説は正しいと思います。トルコが欧州連合の加盟国になりたければ、ポスト・ムスリム国家になる必要があります。

では、ポスト・キリスト教とは何を意味するのでしょうか。ポスト・キリスト教は多くのことを意味します。もちろん、いくつかのキリスト教の根源の存在を意味します。また、世俗主義の経験によって古いキリスト教の根源に戻るのではなく改革へ向かったことも意味します。宗教改革によって国教が生まれたのは事実ですが、世俗主義の一段階を示したともいえます。

このほかに、ルネサンス、啓蒙運動、フランス革

命、そして最も可能性の高いものとして19世紀の出来事もあります。つまり、非宗教的な歴史的根源があるのです。ヨーロッパの形成はたいへん長い歴史的経験であり、この歴史的経験ゆえに、今日のヨーロッパはおおむねポスト・キリスト教であるとみなすことができるのです。

さらに、1968年の出来事があります。この年、フランスだけでなくヨーロッパ各地で学生による反体制運動が起こりました。これらの運動がヨーロッパの社会を大きく変容させたのだと思います。1968年以前のヨーロッパでは非婚カップルなど考えられませんでした。ところが現在では、フランスのカップルの約40～45%が非婚カップルで、もちろんムスリム同士のカップルもいればムスリムとキリスト教徒のカップルもいます。

1974年から1976年にかけてのヨーロッパ(ギリシア、スペイン、ポルトガル)の独裁政権の終焉も、ヨーロッパ社会に広がった世俗化に大きく貢献しました。1981年のフランソワ・ミッテラン大統領の選出も大きな衝撃を与えました。また、1989年には東欧の独裁政権が崩壊しました。こうしたすべての出来事がヨーロッパの世俗化へとつながりました。現在、ヨーロッパ社会はおしなべて世俗化されています。

ポスト・キリスト教のヨーロッパでは多文化性が見られます。ドイツやオランダでは多文化主義に対する批判の声が強いとはいえ、この多文化性は現実存在していて、少なくとも簡単に変わることはないでしょう。フランスのような国でも、事実上、複数のアイデンティティと多文化性が見られます。ムスリムとキリスト教徒の共存については多くの混成形態があります。ユダヤ教徒との共存についても同じだと思います。いくつかの混成家族像があります。現在のヨーロッパでは多くの家族がキリスト教徒世帯であると同時にムスリム世帯でもあります。そして、子供たちはキリスト教徒であると同時にムスリムでもあるのです。彼らがクリスマスを祝うのは、必ずしもキリスト教の行事としてではなく、何か文明的なものとして楽し



んでいます。これこそまさにヨーロッパを特徴づけているものです。ヨーロッパの一部なのです。

だからといってもちろん、キリスト教が消滅してしまったとか、消滅してしまうだろうと言っているわけではありません。それどころか、キリスト教は確かに存在します。ただし形を変えています。そして、キリスト教会や、デンマークの国民教会のような正式な教会に属しているということはキリスト教徒であることを意味しますが、その形は違います。

宗教はその意味もまた変えてきました。多くの人にとって宗教は信仰ですが、きわめて内面的な信仰です。この内面的な信仰が非常に混合主義的なものになりえます。それが新時代の信仰です。一人ひとりの経験を持つことができます。カトリックの信仰と福音を組み合わせることも可能ですし、アジ

アやアフロアメリカの経験から多くのものを取り入れることもできます。宗教は国家の記憶、社会集団の記憶といったものになりました。

最後にまとめとして、私がヨーロッパを定義づけたら、現在のヨーロッパはおおむねポスト・キリスト教圏であると言います。個人的に語っているキリスト教徒が社会学的なキリスト教徒になるにつれて、ヨーロッパは事実上のポスト・キリスト教圏になってきたと思います。

結論として、そして興味深いことに、このポスト・キリスト教のヨーロッパが甚だしく反イスラムのまたは偏狭になった場合もあれば、極めて寛大で開放的になった場合もあるということです。このような開放的で寛大なときのことも忘れてはならないのです。それではこれで終わりにします。

は、イスラームにもモスクのようなものがあるのですが、churchとstateといった場合のchurchのようなものは、イスラームには存在しません。イスラームに存在しないというか、ほかの宗教にも存在しなくて、むしろキリスト教に特殊なものだという気はします。日本の場合を考えても、特に前近代の仏教に関しては、寺受け制度というものがあって、基本的には一人の人間が一つの宗派に属するという形がありましたので、ある程度アナロジカルにとらえられると思います。しかし、もちろん現在の仏教もこれには当てはまりませんし、神道にはまったく当てはまらない概念です。それが、もちろんキリスト教がヨーロッパにおいて文化的には、主流だったので、おおむねうまくいくわけですが、ほかの宗教が入ってきたところで、それが通用するのかというと、キリスト教の側から見ると、それはキリスト教ではなくて飽くまでも文化だといっても、やはりその文化の中にキリスト教が入っているので、ほかの宗教をその中に組み込んでいくのは難しいのではないかと。宗教の自由といっても、イスラームの場合は宗教の中に法が入っているわけですので、それを無視して宗教の自由といわれてもまったく意味がない。逆にいうと、イスラームのほうでは内心の自由ということが非常に保証されているといえますか、それには干渉しないというのが当然の前提としてあるのですが、そこでいう内心の自由とは、飽くまでも内心です。一言でも口に出してしまえば、それはもう内心ではなくて、もはや行為ですから、それは自由ではありません。そのようなところもだいぶ違うという気がします。

宗教の自由ということで、広く取ってイスラーム的な意味で、法を含む場合にももちろん通用しませんし、狭く取って心の問題とした場合にも、イスラームの場合はまったく違った形になってしまうということです。それでお互いに議論をしてもかみ合わない。かみ合わないので妥協するしかないということになると思うのですが、とにかくかみ合わないということ

を改めて認識させられた気がします。

それと、そもそもキリスト教世界という概念について、それが何を意味するのかということで、ボザルラン先生からお話がありましたが、イスラームのほうでは、もともとイスラーム世界に当たるもの、もちろんイスラーム世界という言葉はありません。基本的に中世において、イスラームではDarul-Islam (abode of Islam)、イスラームの家という形でいわれるものですが、これはムスリムの排他的な空間ではありません。これは常識でして、どのような定義がされているかというと、基本的には一人のカリフという者がいて、それが公的なPublic Sphereにおいてはイスラームの公法(Public Law)がすべての人間に適用される。しかし、私的なスペース、プライベートなスペース、プライベートといっても個人ではありません。個人ではなく、イスラームの場合はあくまでもコミュニティベースで、すべての宗教共同体がそれぞれの宗教の法の自治を共有するという2本立てです。ですから、これもイスラームにおける公的な領域と私的な領域があるのですが、それもやはり範囲が違うわけです。ヨーロッパの人が考える公的な領域と私的な領域の範囲がだいぶ違うのですが、とにかくイスラームにはそういう二重の体系があって、その中で、そこに住むすべての人間、すべての共同体、つまりムスリムもほかの宗教共同体の人々もですが、これは初期には基本的にムスリムとユダヤ教徒とキリスト教徒とゾロアスター教徒だけでしたが、特にインドが組み入れられたあとには、無宗教も含めてすべての共同体に適用されます。そこに住むすべての人間の生命と財産と名誉を守られます。

そういう安全保障の秩序、空間であるといった形でイスラームの中で法的にイスラーム世界というものが定義されているわけですが、それがキリスト教のほうでは一体、伝統的にどうなっていたのか、そして現在神学的にどうなっているのか。これは、私はキリスト教の専門家ではないのでよく分からないので

コメント・ディスカッション

司会 小原 克博（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター幹事）

【司会】 それでは、第4セッションを再開いたします。中田先生、森先生にコメントをしていただきますが、お二人に続きまして、内藤先生にもコメントをしていただく予定です。新幹線の都合で、途中で退席される予定ですので、あらかじめ内藤先生にもコメントをいただきたいと考えています。この3人にコメントをいただき、それからお2人のプレゼンターの方に、コメントに対して応答していただきたいと思います。では中田先生、よろしくお願いします。

コメント：中田 考

（同志社大学大学院神学研究科教授・一神教学際研究センター幹事）

私の専門はイスラーム学になります。現在のイス

ラーム地域研究のようなことも扱っておりますが、基本的に私のディシプリンは古典学ですので、イスラームの古典研究をしている者としてのコメントをさせていただきますと思います。

まず、特に1人1人にコメントという形ではなく、一般的な形でコメントをさせていただきたいと思います。一つには、やはりイスラームの、特に古典研究をやっている者として、会話のベースになる言葉のレベルで、概念に非常に通訳性がないといえますか、共訳性がないといえますか、例えばreligionという言葉や法という言葉などが、まったくイスラームの場合と使い方が違うと感じました。あるいは、churchなどもそうです。例えばchurchという概念は、もちろん建物としてのchurch



すが、伝統的な教会のキリストの体という Christianity という概念、あるいはアウグストゥスという神の国という概念、それとヨーロッパというものが理念的にどの程度一つのものであるか。もちろん現実と理念が違うものであるということは当然知られていますが、天上のそういったものの写しとしてのヨーロッパのキリスト教世界といったものが法的にあったのかどうか、そして現在もそういう理念が続いているのかどうかについて、お伺いしたいと思います。

【司会】ありがとうございます。

【クリストファーセン】中田先生が「神の国」について話し始めた最後の部分で、「二王国論」について論じられていたと思いますが、もう少し詳しくお話ししていただけますか。

【中田】これはもう日本の普通の大学の教養レベルでも習っていることですが、キリスト教について、中世のキリスト教において、「キリストの体」としての教会という概念や、アウグストゥスの神の国という概念といったものは、もちろん比喩的な形で、そのままの形で地上に実現するものではないことはもちろん理解されていると思います。しかし、そういうものの地上における現れとしてのキリスト教世界という概念が、中世の一つのまとまりとしてのキリスト教世界に法的に存在したのでしょうか。それは法的な意味で、異教徒はそこでどういう扱いを受けていたのか。そしてそれが現在のキリスト教、かなり文化化された、文化としての、歴史としてのキリスト教というものの中で、どの程度理念として残っているのかということをお伺いしたいと思います。

【クリストファーセン】私の答えでもう少し説明したいと思います。ご質問をありがとうございます。

【司会】森先生、よろしくお願いします。

【森】お二人の発表を、とても関心を持って聞きました。というのは、お二人の研究の方法論が、私の方法論と非常に近いと思ったからです。ただ、私の研究対象は、アメリカ合衆国と宗教ですので、これから United States of America と United States of Europe を比較して話してみたいと思います。どこが共通でどこが違うのかということで、今後の議論の参考になるのではないかと思います。

クリストファーセン先生は、ヨーロッパ的価値の基礎 (Base of the European values) ということをおっしゃいました。これは非常に重要だと思います。これが何かということがよく分からないという問題があるわけで、そのことを考えていくために、アメリカと比較してみたいと思います。

ヨーロッパが EU を形成しようとしたことによって、だんだんアメリカに近くなっていったところがあると思います。EU は United States なのではないか。多様なものを一つに統合していく。それをどのように解決していくかという課題だと思うのです。

アメリカの場合、宗教の多様性も含めて、多様なものを認めていくことについての法的な基礎はどこにあるかというと、憲法です。憲法修正第1条 (The First Amendment of the American Constitution) では3つのことを言っているのですが、宗教に関係するところだけを申し上げたいと思います。最初は政教分離 (Separation of Church and State) です。憲法にはどう書いてあるかというと、Establishment of Religion、すなわち国教会を作ることをしてないという宣言です。もう一つは、Free Exercise of Religion です。これは宗教が自由に活動することを認めるということです。自由に活動する領域はどこかということ、私的領域においても、公的領域においても、宗教は自由に活動をしていいということです。

アメリカの場合には、この憲法によって多様性を認めるわけです。ところが、多様性を認めるだけではなくて、今度はその多様なものを統合しなければいけないという課題がアメリカにはあるのです。1つ

にするものは何かというと、American Values です。それに当たるもの、European Values とは何かということです。American Values が書かれているのは何かというと、それは独立宣言です。独立宣言に書いてある価値とは、啓蒙主義の理念です。それによって1つになるのだけれども、その描き方は、神が平等、自由を与えたという形で、God を持ち出すわけです。God は普通名詞の God ではなくて、固有名詞の God です。それは聖書の神です。聖書の神が啓蒙主義の理念を与えた。これを実現していくことで、アメリカは1つになっていくのだというシステムになっていると思います。

先ほどの EU 憲法を見ると、国教を否定すること、そして信教の自由を認めていくということは保証しているのですけれども、それではヨーロッパの場合、統合理念が書かれてあるアメリカの独立宣言に当たるものは何なのかということです。それがどこかに書かれているのか、あるいは合意として存在するのかという問題があるのではないかと思います。

それから、クリストファーセン先生の発表のタイトルが象徴的だと思うのですが、Public Religions と複数形になっているわけです。Public Religion、アメリカでは Civil Religion と言いますが、Public Religion of EU はないということです。ないのならば、何によって統合するのでしょうか。また、European Values の基礎は一体何か。こういう問題があるのではないかと思います。セッション4のタイトルは、Is Europe still with Christian world? ですが、アメリカに変えると、Is the United States of America still the Christian world? となります。どちらも答えはノーです。

【司会】では、続きまして内藤先生、よろしくお願いします。

【内藤】ヨーロッパ的価値、ヨーロッパ共通の価値は、ヨーロッパのムスリムの視点からすると、捕えどころ

がないように思います。そのことが、ヨーロッパ社会の更なる統合に関する問題、大変深刻な問題です。

例えば、ムスリムは主にヨーロッパへ来た移民であり、最初にヨーロッパ諸国に来たのは1960年代のことですが、彼らはそれほど信心深い人々ではありません。彼らはお金を稼ぐために来ただけです。しかし、その後、彼らはムスリムとして再び目覚めました。では、どういう過程で目覚めたのでしょうか。なぜ、こうした目覚めがムスリム移民の間で起きたのでしょうか。これが問題です。

私の知る限りにおいて、その理由は国によって実に様々です。フランスの場合、政教分離の原則と直面し、昨日、お話したとおり、頭につけるスカーフが、フランス社会およびフランス憲法原則と直接対立する問題となっています。

ドイツの場合、例えば、外国人嫌い (ドイツ語で言う Ausländerfeindlichkeit) など、1973年の石油危機以降、強まった外国人嫌いとは戦わなければなりません。

イギリスやオランダなどの併合文化社会の場合には、彼らは宗教的信仰や活動を楽しむことができます。あるトルコ人1世のムスリムがアムステルダムで私に言いました。「アムステルダムとその社会をどう思いますか。」「この社会は麻薬のようなものです。」「なぜですか。」「私たちの宗教であるイスラームで禁じられていたものがすべて手に入ります。アルコール、薬物にセックス。」

オランダで働いていた1世の男たちはおそらく、そうした禁断のものを経験したでしょう。ところが後の1973年以降、どのヨーロッパの国も移民の受け入れを停止し、彼らの家族は急いでオランダやドイツにやってきました。彼らの家族の入国が止められることを恐れたからです。

しかし、実はそうではなく、家族の再会は基本的権利、人権であるため、そうしようと思えば可能です。そして、妻子がやってきた途端、男たちはイスラ



ーム的価値を失うことをとても恐れるようになりました。この場合、多文化主義と信仰の自由のおかげで、オランダ人ムスリムたちは瞬く間に再び目覚めます。目覚めの理由はさまざまです。しかし、その結果、少なくとも1960年代と現在の状況を比較すると、現在のムスリム移民の大半はずっと信心深く、活動的であり、この傾向は2世や3世にも引き継がれています。そして、問題となるのは、ムスリムの若者が一般的なヨーロッパ的価値やヨーロッパ的アイデンティティなどに目を向けると、クリストファーセン先生が憲法を紹介してくれましたが、宗教に基づく差別も禁止されています。しかし、実際、ムハンマドの風刺画は禁じられる行為でしょうか、違うのでしょうか。表現の自由とイスラーム法、言論の自由とシャリーア、イスラーム法の制限の間で一致は、当然ありません。

また、トルコの欧州連合への加盟交渉についても、非常に明白な二重基準があります。例えば、アルメニア人大量虐殺やクルド人問題の認識は、加盟の前提条件ではありません。そして、トルコはコペンハーゲン基準を満たしたため、これらの問題をEU自体は認識しています。さもなければ、トルコがEUと加盟会談を始められないからです。そして、2004年、EUは承認決定を下し、トルコはこうした条件で信じられないほどの進展を見せ、それを受け入れました。そして、昨年10月、彼らは加盟交渉を開始しました。

もちろん、良心の問題は依然としてあり、アルメニア人大量虐殺、言論と表現の自由と人権に関するクルド人問題、性別問題は今も、トルコにとって課題となっています。もちろん、トルコ人がヨーロッパの一般的価値を共有できるか否かに関して、トルコのEU加盟を心配するヨーロッパ市民が多いことは理解できます。

しかし、これは明らかに別問題です。加盟交渉は良心の問題とは別ですが、もちろん、トルコ人移民やトルコのトルコ国民は、ヨーロッパの非常に複雑で込み入った非難に直面しています。つまり、あなた

たちは民主主義国家ではない。あなたたちには言論や表現の自由がないし、なぜアルメニア人大量虐殺を認めないのか、と。この場合、少なくとも国家間の協議と良心の問題は分けて考えるべきです。

しかし、現状からすると、ヨーロッパのメディアなどでそうした問題を分けることは大変困難です。多くのムスリムにとって、現在のヨーロッパ的価値は好ましいものです。あなたがおっしゃったヨーロッパ的価値はもちろん、受け入れ可能で、好ましく、望ましいものですが、実際はムスリムのためには実施されていません。このため、ヨーロッパ的価値は捕えどころがなく、時に二重基準として使われるものだと彼らは思っています。それが質問です。ありがとうございました。

ディスカッション

【司会】 それでは、3人のコメントに対して、クリストファーセン先生とボザルスラン先生にお答えいただきたいと思います。

まずクリストファーセン先生からレスポンスをお願いします

【クリストファーセン】 3人の方から、大変興味深く参考になるコメントと質問をいただき、ありがとうございます。ご存知のように、ヨーロッパ的価値とアメリカ的価値があり、アメリカ的価値は「分離の壁と非国教化条項」と「信教の自由および良心の自由の条項」に基づいています。宗教との関係、EUの価値は次の通りです。(1) 個人および集団の信教の自由。それは、各自の神学的観念に従って教会を組織化する自由または組織化しない自由をも意味します。(2) 区別の観念。宗教が関連しない分野では宗教に関する議論を行わないこと。(3) ヨーロッパの国教会については、EUの価値の一環として、国家の政教協定を純粋に国家のものと見なすこと。EUは

原則として、こうした関係に介入することはできません。基本的に3種類のモデルがあります(変種もあります)。その1つはヨーロッパの国教会のシステムで、今も認められていますが、以下の自由の保証を条件とします。すなわち、非国教会のメンバーにとっての信教の自由、国内で合法的に存在する自由。そして国教会のメンバーにとっては、単に組織的な理由で、すなわち、同じ信仰をもちながら、確立した制度には属していたくないために脱会して独自の教会を設立する自由です。

(4) 宗教に関するEUの価値を形に表すと、長方形のような形になります。4番目の部分は「共通の価値観」と呼ばれるものの存在です。それらは憲法草案の前文と第1-2条で言及されています。EUは尊厳、自由、民主主義、平等などの尊重という価値の上に成り立っています。

そして、森先生から質問がありました。アメリカ的価値は独立宣言に基づいているが、EUのこうした価値の根拠は何かと。私個人としては、私たちヨーロッパ人が前文をそれほどまでに議論する理由はそこだと思えます。ヨーロッパ人がもはや基本をあまり信じていないようだというのが理由かもしれません。

【内藤】 それは私たちが話し合っているテーマではありません。

【クリストファーセン】 続けさせてください。私にとっては関連のあるテーマなのです。というのも、ヨーロッパ人が根本をもつという観念をどういうわけか否定しているとき…

【内藤】 アメリカ国民の半数は根本主義を否定しています。

【クリストファーセン】 しかし、法律や政治に関して根本をもつというヨーロッパ的思想があります。この思想は、宗教・道徳と、政治・法律との分離、区別

の観念です。そして、この根本的思想のために、ヨーロッパ人は、他の根本が宗教的であるとか、哲学的であるとかいう場合に、それらに対してやや躊躇するのです。分離という根本的思想のせいで、ヨーロッパ人はとても実用主義的になり、根本をもたずに暮らしており、特に英国人は憲法さえありません。従って、多くのヨーロッパ人にとって憲法とは、より専門的なもので、社会の基本的機構の説明、それらが互いにどう関連しているか、市民の自由と権利、そしておそらく義務が記載されたものです。価値もそこに記載されるかもしれませんが、根本だけです。多くのヨーロッパ人はこう言うでしょう。「民主主義とは、そういう根本ではないでしょうか」と。

一方でヨーロッパ人は、非根本主義者であるという根本をもつ、この二重英知をどう利用すべきかをもう一度練り上げ、組み立て、考えなければならないと認識もしています。

私の分析では、憲法草案前文の焦点は、こうした決心のつかない状態を系統立てる試みです。前文に「ヨーロッパの文化的、宗教的、人間的な遺産からインスピレーションを引き出し、ヨーロッパが苦い経験を経て再統合したことを信じる」とありますが、それについてソーテンドルプ先生が私たちに言いました。「各国のアイデンティティを部分的に残しながら、ヨーロッパの人々は超越する決意なのだ」と確信する」などと。前文があのように組み立てられるとき、前文は1本の木、りんごの木を植え、その根を歴史の奥深くまで、文化的、宗教的、人間的な遺産の奥深くまで根付かせ、ヨーロッパ市民のためにおいしく新鮮な新種の果実を实らせようとしています。

宗教はヨーロッパプロジェクトの根幹の一部として、継承された価値の一部として、前文で言及されます。前文は特定の1つの宗教だけについては述べていません。キリスト教だけ、キリスト教のカトリックだけについて述べていませんし、もちろん、イスラームだけ、ユダヤ教だけでもないことを言うておかなければなりません。前文は「複数の宗教」につ



いて述べているのです。私が「複数の宗教」といった理由は、何らかの形でヨーロッパの基礎を形成しているこの継承が、啓蒙思潮だけではなく、ギリシア人の英知だけではなく、中世に由来し現在まで続いている文化だけではなく、ヨーロッパの複数の宗教でもあるからです。

そこで、ボザルスラン先生、あなたはこう言いました。私はあなたの意見をそのように理解したのですが、「啓蒙思潮は唯一のヨーロッパ的思想であり、ヨーロッパ的価値は『ポスト・クリスチャン(キリスト教以後のもの)』である」とおっしゃいました。さらに、あなたのおっしゃったことを引用すると、「ヨーロッパの原則は、キリスト教のアイデンティティとは関係ない」と言われました。これには、私は同意できないと言わねばなりません。私の意見は法的および政治的組み立てに関するもので、ここでもう一度憲法草案を参照しますが、草案はキリスト教など複数宗教を考慮に入れなければなりません。しかし、私は分析に基づいた同意もしません。私の言いたいことは、私たちが利用する概念と、私たちが世の中で見える現実とは関係があるに違いないということです。ですから、私たちがヨーロッパをポスト・クリスチャンと理解するなら、それは同時にヨーロッパのキリスト教徒はもはやヨーロッパの歴史の一部ではないと主張していることになります。

「ポスト・クリスチャン」という概念を使って、ヨーロッパ人は毎週日曜日に教会に行かないのだから、もはやキリスト教徒ではなく、ポスト・クリスチャンだと主張する場合、それに対する答えはヨーロッパ・キリスト教徒からの反発です。私たちがこういう考えに基づいて、彼らに対して次のように言うとしみす。「あなたたちは教会の会員かもしれない。でも、本当はそうではない。なぜなら、あまり忠実な信者ではないから」と。先ほど言いましたように、デンマーク人の12%は定期的に教会に通う人たちで、これには異論を挟む余地はありません。そして、デンマーク人の45%はクリスマスイブ、子供の洗礼など、

何か用事があるときに教会へ行く人たちですが、その12%+45%のデンマーク人がとてもはっきりと反発します。しかし、デンマーク人の25%、すなわち、教会には決して行きませんが、依然として教会の会員である人たちはさらにはっきりと反発します。なぜなら彼らははっきりと会員であるからです。そして、キリスト教会をヨーロッパ的(デンマーク的)価値の一部と見なしているからです。あなたは発表の最後のほうで、次のように問いかけてました。「こうしたポスト・クリスチャン社会が一部の例では非常に寛大であるのに、他の例では非常に反ムスリム的で、反ユダヤ的となりつつあるのはなぜか」と。私はここで、後半の反ムスリム的、反ユダヤ的という部分について意見を述べてみようと思います。

【ボザルスラン】私はそうは言っていません。

【クリストファーセン】そういうようなことです。なぜ、これが…

【ボザルスラン】違います。わたしはこう言いました。一部の例で非常に反ムスリム的になるのは、この広範囲にわたるポスト・クリスチャン世界ですが、他の場合には今も非常に寛大で…

【クリストファーセン】ここで、内藤先生、あなたが言ったことについてもコメントします。あなたはコメントの中で、ヨーロッパのムスリムの非世俗化の根源を大変うまく説明なさいました。彼らは今また、私たちヨーロッパ人の中でもとりわけ信心深くなってきました。というのも、家庭を築き、子どもや孫に彼らの宗教的根源を教える必要を認識しているからです。そして、あなたは昨日、自由意志論者についてお話されました。19世紀後半に、多数のヨーロッパ人が同じように信仰に忠実になったと言えます。それは、彼らの社会的変化の一部でした。彼らの宗教は、社会変化の大変厳しい時期に根源として

機能しました。それはよく理解できます。

19世紀後半のヨーロッパ非世俗化の時期が過ぎると、ヨーロッパ自由意志論者たちが反発し、再び現代性を取り入れました。啓蒙思想が再び練り上げられ、教会、敬虔な信者、宗教に忠実な信者、自由意志論者の間の闘争の場が再び出来上がりました。

どういうわけか、同じことが自由意志論者と宗教に忠実でない人たちの間の対立として起こっていますが、忠実な人たちとはムスリムのことです。そして、どうも私や多くのヨーロッパ人にはわからないのです。なぜ、ムスリムはヨーロッパ自由意志論者との議論を経験してはならないのでしょうか。かつてヨーロッパ・ユダヤ教徒がしたような議論(彼らの多くは自由意志論者となっています)、キリスト教徒がしたような議論(この場合も、リベラルな神学、聖俗ライフスタイルなどが生まれる結果となりました)を。

ここで、風刺画事件について論評することが妥当かもしれません。その事件について、私はデンマーク語の本を編集しました。風刺画の出版が危機的状況となったことには、数々の局面がありました。しかし、この論争、自由意志論者と信心深い人々との対立に関連して、わが国の首相は、言論の自由に制限はない、言論の自由は100%であるという(誤った)発言で、自由意志論者であるように見られました。もちろん、そうではありません。私たちの法律には、言論の自由には制限があると規定されています。しかし、一方で、冒涇に対する彼らの理解がそのまま、冒涇に対する合法的理解であるべきだという、ムスリム・グループの主張も誤りでした。彼らが訴訟を起こして、裁判所が具体的な絵や戯画を冒涇だと理解すれば、そのときに冒涇になるのだということを彼らは受け入れなければなりません。それは宗教的な決定ではありません。宗教規範が法制度の中で実施され、法制度が決定を下します。このことは、あらゆる宗教が自由意志論者との対立を通して学ばなければならなかったことで、ヨーロッパ・ムスリムも同じことを学ばなければなりません。

現状では、敬虔で信心深くなり、自分自身のものをもちたいと思っているムスリム・グループは、二重基準があると主張します。しかし、私たちはそのようには考えていません。彼らには社会の他のグループと同じ宗教的な自由があります。そして、一方で私たちの中には、私が前に述べたようなグループがいます。すなわち、決して教会へ行かないが、自分のことをキリスト教徒、国のアイデンティティの一部と見なしている25%のヨーロッパ人です。彼らは同じ疑問を抱きます。次は何が起こるのでしょうか。私たちは寛容でありたいので、歓迎しているのでしょうか。私たちは「他人」が基準を設けることを受け入れようとしているのでしょうか。私たちは国旗から十字を取らなければいけないのでしょうか。境界はどこにあるのでしょうか。

風刺画事件以前、普通の人々だけではなく、政治家の間でも疑問の声が上がっていました。「彼らは、私たちに国旗から十字を外すことも要求するだろうか」。いったん私たちの社会へ入ってきた人々を、どの程度まで歓迎しなければならないだろうか。しかし、大半の知識人はそうした疑問を笑い飛ばしました。ダナブローグは、十字のついたデンマーク国旗であり、トルコ国旗に星と月がついているのと同じことだと誰もが理解しなければいけないのだと私たちは思いました。

しかし、風刺画事件の一端として、デンマーク人は彼らが最も愛するデンマークの市民宗教シンボルがダマスカスの路上で燃やされるのを見ることになりました。国旗に十字がついているという理由で燃やされたのでした。ご存知の通り、デンマーク国民党に賛成しているデンマーク人の25%が彼らの言い分を主張しました。「私たちが恐れていた通りだ。とうとう、現実となった!」と。

今の状況は、一方のデンマーク国民党と、他方のムスリム・グループが互いに反論し合っており、中道を見出すことが必要です。そして、それはあなたの言ったことと関係があります。あなたのシャリーア



に関するコメントを理解する限りでは、通りの真ん中で国旗を燃やすことはシャリーア的生き方ではないからです。私が正しく理解していたとすれば、私はあなたの質問を大変うれしく思いました。

私の理解では、中田先生は神の国の概念と、この世の国の概念について尋ね、それらを一つの概念にまとめました。そして、あなたの質問はこうでした。その概念は中世で法的に支持されていたか。国民の立場はどうであったか。誰が他の宗教を信仰していたか。このように神に関して束ねた2本の刀という観念は今も通用するか。

ここで昨日の私の発表について触れなければなりません。歴史的に中世ヨーロッパはキリスト教の世界と見なされていました。それは、ユダヤ人が受け入れられることはあっても、実際に融合されることはない少数派であることを意味していました。同じ頃、ヨーロッパのムスリムとキリスト教徒は、長い戦争の時代を経て互いを敵視していました。宗教改革(16世紀ヨーロッパ)の間、キリスト教会はそれ自体のアイデンティティの中に多元性が確立されていることを認識しなければなりませんでした。そして、宗教戦争、ウェストファリアの和議へと繋がっていきました。その結果、「領主の宗教がその領地の宗教」、すなわち、キリスト教のどの宗派が国の宗教であるかを王が決め、市民はそれに従わなければならないという考えが生まれました。従わない者はよその国に行くことが許され、そこで自分の安住の宗教を見つけることができました。これが、ヨーロッパで最初の個人レベルでの信教の自由です。しかし、他の宗教を信仰する人たちの状況に関しては、啓蒙思潮までのヨーロッパについて大まかに言うと、ムスリムは敵視され、ユダヤ教徒はヨーロッパで振り回されていました。時には嫌悪され、時には受け入れられ、時には平和を保ちました。デンマークには「ピース・シティ(FREDERICIA)」と呼ばれる都市が複数ありますが、信教の自由に関する法に基づいてやって来たユダヤ人と改革派キリスト教徒

のために制定された都市です。しかし、ユダヤ人は戦争のおかげで、ヨーロッパのムスリムより良い状況にありました。

二王国論は今日でも妥当な概念なのでしょうかとはいえず、そうだと言えます。神の国と、王または皇帝の国。この二つの国の区分は、聖俗の区分です。カトリックの理解では、この区分はカトリック教会と国家の区分です。ルター派の理解では、国の内部での区分であり、教会と国家の区分ではなく、宗教論議と法律、宗教と政治の区分です。

区分という観念は、ごく基本的なヨーロッパ的思想です。このことは、昨日ラマダーン先生もおっしゃったように、ヨーロッパ・ムスリムにとって、シャリーアの支配による並列社会の確立に努めるか、ヨーロッパの法の支配を受け入れるかのいずれかを意味し、もしシャリーアがより強い影響力をもつことを望む場合には、ヨーロッパの法制を内側から聖俗の区分に基づいて変える努力が必要です。こうした聖俗の区別を甘んじて受け入るか、並列社会を築くことができるかのどちらかです。また、先の導入部で言ったことの繰り返しになりますが、多数派という意味でのヨーロッパ人は宗教に関する世俗法を望んでいません。彼らは、世俗法においても宗教と法律の区別を望んでいます。

あなたがおっしゃっている「ミット・システム」は、オスマン帝国の制度で、社会の中で市民を宗教によって4つのグループ(ユダヤ教団、アルメニア・キリスト教徒、東方正教会キリスト教徒、ムスリム)に分けました。これらのグループには独自の法的地位があり、様々な個人的事項を律する独自の法律がありました。もちろん、このことはこれら4グループ(カトリック教徒などは別です)の信教の自由として理解され得るもので、実際に理解されていました。しかし、今日、ヨーロッパだけではなくアメリカでも信教の自由の基本中の基本と考えられる「個人の」信教の自由はありませんでした。改宗する権利や無宗教でいる権利はなく、市民は生まれながらに宗

教的アイデンティティをもつものとされていました。それはまた、その領域内では非宗教的な法律をもつことができないということでもあり、宗教指導者が決定を下し、特に女性に関する事項はそうでした。ここで、女性がどう扱われるか、刑法はどうであるかといった重要ポイントが出てきます。ヨーロッパ人、ごく一般的な意味で言うヨーロッパ人のうち、宗教に基づく世俗法が一般原則として導入されるのを容認する人はいないでしょう。

トルコの福祉党に対する欧州人権裁判所の17対0の大法廷判決を見てみましょう。判決はもちろん、政党結社の自由に関するものでした。しかし、その中で持ち上がった問題は、宗教団体が宗教に基づく世俗法を制定すること、または、個人レベルで宗教に基づいた世俗法に従う権利を獲得することは、信教の自由の一環と言えるかということでした。そして、答えは17対0で「ノー」でした。

しかし、ヨーロッパの現実では、ユダヤ教徒、ムスリム、ヒンズー教徒はそれぞれの宗教的発想による規範を用いているため、ヨーロッパ人の法の概念とムスリムの法の概念が対立するか、私が「複雑な絡み合い」と呼ぶ共通の方法を探るかのいずれかです。この「複雑な絡み合い」で一般的に認められていることとして、私たちは共通の立法機関、共通の裁判制度、共通の行政制度をもち、私たち全員に関する事例で解決策を探る際の法的分析において、自分たちの宗教規範を持ち込みます。

つまり、私の知る限りでは、それこそがこうした法制度間の対立回避の可能性です。シャリーアの導入を議論するだけでは回避の可能性とはならず、ただ対立を生むだけです。ありがとうございました。

【ボザルスラン】手短に述べます。最初の点は私たちの意見の不一致に関する問題だと思います。これは重大な不一致です。現代主義も宗教的根源をもつことには否定しません。聖アウグスティヌスの例を挙げると、聖アウグスティヌスなくして現代主義、

キリスト教の現代主義、またはヨーロッパの現代主義は考えられません。

それでも、民主主義、開かれた社会、世俗主義、人間および今日の解釈での少数派の保護、国家社会主義ではない自由な経済、これらは「ポスト・クリスチャン」であり、「ポスト・レリジャス」であると、私はいつも思っています。

さらに進めます。それらは、現代主義そのものに対する批判に基づいてもいます。私は現代主義や啓蒙思潮を擁護しているという印象をもってもらいたくありません。こうした概念には非常に批判的ですが、過去40年間にヨーロッパで起こったことは、現代主義そのもの、啓蒙思潮そのものに対する深い批判でもありました。

ヨーロッパ民主主義が今日、役目がない、あるいは40年か50年前のヨーロッパ民主主義とは様変わりしているとすれば、その理由は、様々な事柄が変化し、現代主義そのものが批判の対象となってきたことによります。宗教の自由の再定義も、こうした現代主義への批判の結果です。

1968年、つまり、西ヨーロッパおよび東ヨーロッパの独裁政権の終結に私が言及したのはそういうわけです。それらは重要なポイントです。これらのポイントに触れなければ、ヨーロッパ社会の進化や、自由の新しい定義を理解することはできないでしょう。

2番目のポイントですが、おそらく100年前、ムスリムはムスリム世界を形成していることに気づいていませんでした。こうしたことは一度にまとめて与えられません。弁証的で対立的関係の中で与えられます。そしておそらく、それがヨーロッパ社会、つまり、ムスリムに強いて独自の文明を定義させた一部のヨーロッパ社会の事情であり、人類平等主義に反する状況でした。19世紀の文明の概念は、ムスリム伝統においては何の意味もありませんでした。

20世紀初頭、「私たちにも文明がある」という観念が現れました。なぜでしょうか。「ヨーロッパには文明があり、私たちはヨーロッパ文明に対抗する自



分たちの文明を定義するからです」。また、あなたは進化思想について言及されました。非常に重要な点ですが、例えば、20世紀初頭のムスリムの間で、進化思想はとても重要でした。なぜならば、ヨーロッパに由来しながらムスリムにより再解釈されているからです。

私が思うに、イスラーム世界は必ずしも何世代にもわたり存在したわけではなかったのです。イスラーム世界創出の時期があります。そして、これは本当のことですが、ムスリムが独自の典拠を発見し、再解釈しました。こうした典拠は同一方法で解釈されたものではありません。そのため、交流が非常に重要であったし、今もそうです。そのため、ダルル・イスラームおよびムスリム世界は同じものではないと言えると思います。

例えば、今日、パレスチナ問題などの諸問題は、主観主義において決定的な役割を果たしています。また、風刺画事件の経過についても、私はこうした風刺画を流布させる自由も含めて言論の自由に賛成の立場です。しかし、その反響を見てみると、反響はダルル・イスラームとは関係がなく、おそらく、西洋との一層激しい対立関係があります。

3番目の問題は、ヨーロッパの共通価値とは何かという質問です。大変重要な質問だと思います。それに対する答えはまだありません。唯一つ納得できる答えは、コペンハーゲンの基準やこうした基準には、民主主義、開かれた社会、開かれた経済、自由経済が含まれるということです。

こうした基準はヨーロッパを築くのには十分でしょうか。今日、その答えを出すことはできません。おそらく20年以内、20年後に「こうした基準はEUやヨーロッパ社会を形成するのに十分だった」と言えるかもしれません。しかし、あらゆる経験が崩壊する可能性もあります。答えを出すには時期があまりに早すぎます。

例えば、フランスとオランダが欧州憲法を拒否していることを見てみましょう。フランスの場合、拒否

の理由は国内に関するものです。それはおそらくフランス政府とフランス大統領に対する反発ですが、一方、オランダの場合、より反ヨーロッパ的態度が拒否につながったのだと思います。

ですから、ヨーロッパ全体の経験とは大変もろいものです。ヨーロッパ市民なくしてヨーロッパを築くことはできません。どの程度までヨーロッパ市民は関与し、こうした価値を評価し、再定義し、おそらく何か倫理的原則、倫理的基盤をこれらの価値に加えるでしょうか。その答えはおそらく、将来何が起こるか次第で、今はわかりません。

別の要素を付け加えます。あいにく内藤先生はもうこの場にいらっしゃいません。シャリーアとイスラーム伝統による法との間には根本的な区別があります。

ユダヤ教伝統に存在したような世俗主義の経験が、ムスリム世界に確かに存在しました。

キリスト教には世俗主義の独占はありません。少なくとも私が知っている3つの宗教には世俗主義の時期と、非世俗主義が非常に強かった時期が(法的に認められた時期を含めて)、ありました。

ヨーロッパのムスリム共同体について今日問題があるとすれば、それは必ずしも法的な問題ではなく、こうした共同体の脆弱化、信頼の不足、アイデンティティの断片化、政治的アイデンティティの断片化、横に広がる草の根団結の欠如でしょう。

例えば、1968年、北アフリカからの移民全員が1968年論争の一端でした。それから20年後、彼らの多くをモスクのコミュニティと称することができます。なぜでしょうか。1968年、彼らはパリの女の子、食べ物、アルコール、ドラッグに興味があっただけではなく、いいえ、実際はそうではなく、彼らは労働組合の一員であり、労働組合で動員されていました。1960年代のパリ最初のモスクは、企業の中の共産党が落成させたものでした。彼らは「私たちはみな兄弟、ともに歩み、資本主義システムを破壊していきますが、あなたたちはムスリムであり、独自の

信仰をもっており、私たちはそれを尊重します」と言ったのでした。市民権に基づいて、将来社会の定義に基づいて横に広がる草の根プログラムがないために、このような断片化したアイデンティティは、ますます狭量になりました。

【司会】 クリストファーセン先生、ボザルスラン先生ありがとうございます。それでは、手島先生、臼杵先生、市川先生、そして中田先生の順番で発言をお願いいたします。まず、手島先生お願いします。

【手島】 クリストファーセン先生への私の意見を述べます。先生の答えから、私たちが特殊な状況で議論していることを思い出しました。つまり、非西洋的な日本という状況です。私たち日本人が現在のヨーロッパはもはやキリスト教的ではないと言うのは簡単ですが、ヨーロッパの人々には簡単に受け入れることのできない発言です。ここで、ユダヤ人の事例に端を発した二重基準の問題を取り上げずにはられません。

イスラエル国が再生し、亡命状態が終焉するまで、ユダヤ人には帰る土地がありませんでした。今日、ユダヤ人はディアスポラの状態にありますが、現在のユダヤ人の政治的状況がナチス・ドイツの時のようになって、彼らにはイスラエルに逃げ場があるという意味のディアスポラです。反対に、19世紀のヨーロッパ・ユダヤ人は亡命の身で、たまたま居た土地に住む以外の選択肢はありませんでした。従って、彼らは自分たちを解放し(彼らの宗教的制限から自由になるという意味)、ヨーロッパ社会と一体とならざるを得なかったのです。

さて、ムスリム住民との対立に直面する現在のヨーロッパの状況について論じる上で、私たちは難しい疑問を自らに問いかけてみるべきです。つまり、現在のムスリム住民をディアスポラにある人々、それとも亡命中の人々と見なすべきかという疑問です。世界がだんだんと小さくなり、各国間の経済的距離

が狭まるにつれて、世界的な大規模な変化の影響を受けずにいられる地域はありません。私の考えでは、ヨーロッパ諸国の新たな移民に関する疑問や難しい課題は、突き詰めて言えば、イスラーム諸国にも提起すべきだと思います。なぜならば、イスラーム諸国も新たな移民に関して同じ状況にあるべきですし、そうになっていくと思われるからです。この意味で、ヨーロッパ人だけに努力を求めるとき、二重基準の問題になります。市民権の二重基準の問題は、ヨーロッパ的範疇に限定せずに、世界的な視点と哲学的な局面から話し合うべきだと思います。私たちは世界的な視点から問題を把握し、世界史を全体として考えなければならないと、常に自分に言い聞かせるべきだというのが私の愚見です。

【司会】 では、臼杵先生、次によろしくお願いします。

【臼杵】 このワークショップ全体のテーマはSelf-Understanding of 'Europe'ということで、ヨーロッパにクォーテーションがついているわけですが、これまでずっと議論を聞きながら、一体だれにとっての「セルフ」なのかがやはり問題になってくると感じました。つまり、Selfという以上、その対としての他者、つまりOtherがだれなのか、という設問が必要となってくる。つまり、ここでいう「ヨーロッパ」という「自己」のバウンダリー、つまり境界を、政治的、心理的、文化的、といった具合に、いろいろなレベルで設定できると思うのですが、このバウンダリーをどのように考えるべきなのかが問題になる。同時に、ヨーロッパにとっての「他者」とは誰なのか、という問いにも連動するわけです。例えばゴルバチョフがかつて、ロシアはヨーロッパの家に入る、と言ったときに、わざわざこのような言上げをする以上、ロシアがヨーロッパに入っていないことを前提に、わざわざロシアのヨーロッパ性を強調する。つまり、ゴルバチョフがロシアを果たしてヨーロッパと見なしているのかという疑問にもつながる。あるいはSelf-



Understandingということですから、ロシアが自身はヨーロッパであると言えば、それで自動的に承認されるのか。つまり、ロシアはヨーロッパに属することができるが前提となって議論されているのか、それともオーセンティックなヨーロッパというものがあり、その帰属の条件にかなわない場合はヨーロッパとは認めないという問題が、やはり大変気になったところで。

全体としてヨーロッパと言ったときに一貫してクォーテーションをつけているということで、ヨーロッパにおけるChristianityの位置づけの問題が出てきました。ヨーロッパのキリスト教的な性格が問題になるのであれば、ムスリムが「ヨーロッパになる」ことはできない。さらに、ユダヤ教徒も同じ立場なわけです。その場合、「ヨーロッパである」ことは確固たるバウンダリーをもつことになるわけです。例えば、東アジアの状況でいえば、前近代の話ですが、中華という概念は「中華になる」ということであって、たとえ周辺部の「蛮族」であっても中華の文明を受け入れれば、その人はもう中華の仲間を入りしたとみなされるということですが、そのような考え方が適用できるかなのです。そのあたりの理解が参加者の間でかなりずれがあったという印象です。果たしてヨーロッパに中華と共通するものがあるのかどうか。残念ながらヨーロッパは19世紀以降、Nation Stateのシステムを作り上げてきたという歴史的事実から、恐らく「ヨーロッパになる」という意味での近代ヨーロッパの辿ってきた道は、国民国家という地方化＝領域化という個別断片化の統合とは別の道を歩んできたのだらうと思います。

しかし、新たにEUというものができました。個別のNation Stateを超越する「ヨーロッパ」という統合的な政治空間が成立したわけですが、ボザルスラン先生の議論がその意味で非常に面白かったと思います。なぜかといいますと、ボスニア、バルカンを最初からヨーロッパに入れて議論を構成しているからです。バルカンはヨーロッパなのかという問題

は、ロシアはヨーロッパかというのと同じ問題です。ヨーロッパがたんに地理的なバウンダリーではないということは、参加者みんな承認しているように思われるわけですが、それをどう考えるのかということが、とりわけ今回、議論の中で欠如しているという感じがしました。

そしてクリストファーセン先生が、私などの第三者から見ると、なぜかヨーロッパを代弁しているディフェンダーのように思えたのは一体何なのだろうという問題です。やはりそのような議論の構図になってしまったこと自体に議論そのものの論点が表れているのではないかという気がします。そのあたりをどのように全体のテーマとして考えていくのかということが気になりました。これはコメントということです。

【司会】ありがとうございました。それでは市川先生、よろしくお願いします。

【市川】私は、ヨーロッパというのはどうしても歴史的に考えてしまいますので、今回ヨーロッパの基礎的な価値とは何かというところでお伺いしたいことがあります。

ヨーロッパはもともと8世紀ごろに、キリスト教のコミュニティとして始まったと考えるべきではないか。それは、スペインからのイスラームの侵略に対抗するために作られた、フランス、イタリア、ドイツを中心にしたシャルル・マーニュの帝国がキリスト教の共同体であった。その後、ビザンチン帝国がオスマン帝国に滅ぼされて、東ローマ帝国が滅びる。そこでキリスト教ヨーロッパは、カトリックの西ヨーロッパのみになった。それが、恐らくヨーロッパというときの最も基礎的な出発点ではないでしょうか。そこから考えて、キリスト教的な、あるいはヨーロッパのBasic Valuesは、どうしてもキリスト教的なものではないかと思っています。

今日の質問ですが、ボザルスラン先生の挙げてくださったPrinciples, democracy, open society、

secularisms, protection human beings and minorities liberal, non étatist economy、これらは、neither Christianity nor Christian identityとおっしゃっています。これは一つの意見だと思いますが、別の意見では、ヨーロッパの基礎にはキリスト教的な自由という概念があって、これがすべての原理の最も基礎であると主張する歴史家や哲学者、神学者がかなりいると思います。特に現在、東ヨーロッパが共産主義のあとになってEUに入るというのは、明らかに西ヨーロッパの価値に対して東ヨーロッパが参入するということであって、明らかにキリスト教的な価値を基礎にした社会に入っていくというはっきりとした意思表示だと思います。

特に共産主義との対決のときに、西ヨーロッパが守ろうとしたのは究極的な自由 (ultimate freedom) である。そしてそれは共産主義に勝った。だから自分たちの自慢というか名誉というか、ディグニティというか、それはキリスト教的な自由が勝利したという強い信念があるように思います。ですから、その点でボザルスラン先生はどのようにお考えであるかということの一つ質問として伺いたいと思います。

もう一つあるのですが、よろしいですか。これはクリストファーセン先生にです。今回はナショナル・アイデンティティの話が出ませんでした。恐らくヨーロッパのアイデンティティには二重性があると思います。一つは、中世のクリスチャン・アイデンティティ、その上に19世紀からのモダン・ソヴァレン・ステート(modern sovereign state)、そしてナショナル・アイデンティティが加わった。そして、むしろナショナル・アイデンティティのほうが強くなっていたのではないか。その統合という形でEUの憲章ができた。ですから、キリスト教的なものは残っていると思いますが、問題はナショナル・アイデンティティがかなり根強くあるのではないか。例えばユダヤ人が移民する場合に、その国の生活様式、あるいは共有する価値を学ばなければいけません。これがどうかという問題になったと思います。そういうヨーロッパにおける各国の固有のナ

ショナル・アイデンティティはどのように位置づけられるのかをお伺いしたいと思います。

【司会】まだ質問者が続きますが、問題が多岐にわたってきましたので、ここでいったんプレゼンターのお二人に回答していただきたいと思います。クリストファーセン先生とボザルスラン先生、よろしくお願いします。

【クリストファーセン】手島先生、今、私がヨーロッパの状況にいないことを思い出させてくださって、ありがとうございます。

ヨーロッパで提起されている課題はアラビア諸国の課題と同じだという考えには同感です。また、デンマークやヨーロッパの視点から見た風刺画事件には、デンマークには私たちが求めているより多くの二重基準があるのかもしれないという局面があったと言わなければなりません。そうかもしれません。しかし、考えてみてください。アラビア諸国での信教の自由の基準はどうでしょうか。デンマークでは、基本的に1849年憲法以来、万人に信教の自由があります。サウジアラビアではどうでしょうか。

あの問題、二重基準ですが、アラビア諸国の状況を考えると、そのアラビア諸国が、言論の自由と信教の自由に関する私たちの基準にそれほど反発したのは、なぜでしょうか。この疑問もデンマークの風刺画事件の一部であると言わねばなりません。

臼杵先生は、ヨーロッパの自己理解についてお尋ねになりましたが、その質問に答える私は誰なのでしょう。あなたは誰なのでしょう。私が言いたいのは、それは実に議論を呼ぶ質問だということです。しかし、ロシアについて尋ねるとき、あるいはボザルスラン先生が「リトアニア、キプロス、スペインが共有するものは何か」とおっしゃったことに関連するかもしれませんが。というのも、まさにこの3国が何かを共有していると思うからです。それは…

【ボザルスラン】私はそれに反対しません。それら



は一緒です。私は大変うれしく思っています。

【クリストファーセン】いいえ、そうではありません。そのことは理解しています。そのことは理解していますし、どなたかがおっしゃったように、EUを擁護しているわけではありません。ただ、申し上げておきたいのですが、名前を挙げた3国に実際に共通していることとは、十字の旗を持ったマルタ騎士団、市民の大半のための宗教であるカトリック教会です。こう言わなければならないのは大変残念ですが、これら3国も一緒になってユダヤ人迫害を行ってきました。では、ロシアはどうでしょうか。今日、ロシアはヨーロッパにガスを供給しており、私たちは宗教について話すことができ、国のアイデンティティや国旗やすべてのことについて話すことができます。ガスとお金は、今日の世界では一層重要なのです。

ヨーロッパの指導者たちがプーチンにマフィアのことを尋ねると、「マフィアという言葉はロシア語にはなかった。それはヨーロッパの言葉だ」と答えました。ロシアも少なくともヨーロッパ的側面において、深い正教的根源をもっており、私はここで、300年近い過去まで遡る東方教会と西方教会の深い、深い溝について触れますが、その溝によって新たな階層が生じています。では、バルカン半島についてはどうでしょうか。私には答えられません。ただ、質問の助けになればと思います。ご質問は、誰が「自己」で、「誰が他者に属しているか」でした。まさに同じ質問がヨーロッパでも上がっています。

ヨーロッパのアイデンティティと関連する国のアイデンティティについて尋ねたとき、「ある単一体の中でのグループの結合」という概念を使ってもよいでしょう。ここで発表したように、ヨーロッパの歴史は、ギリシアの合理性に教会法(カトリック教会)、ローマ体制、国家状態を組み合わせ、絡み合わせることで、統一性と多様性を結合させるヨーロッパ史です。こうした統一と複数性の観念を組み合わせること。私の知る限りにおいては、これはごく基本的なヨーロ

パ的思想です。ありがとうございました。

【ボザルスラン】手短に、3点述べたいと思います。まず、ムスリム世界は実際、ヨーロッパや世界の他の国々と同じ問題を抱えています。そして、私たちがどうしても必要としているのは、世界を読み取るための徹底的な批判理論であり、ムスリム世界もこの世界の一部だと思います。ムスリム世界がその伝統的な政治的危機と閉塞性を継続できないのは明らかです。ある程度まで、変質と変化によりグローバル世界の一部となるか、さもなければ暴力です。

2番目の質問に関して、何が境界でしょうか。ヨーロッパではこの質問を真剣に尋ねますが、それに対する答えはありません。

クルアーンの最終節に「今日、私はあなたの本を閉じた」とあります。それ以上はありません。ヨーロッパで、「私は今、最先端と境界を閉じ、それ以上は他にありません」などと言う時点があるとは考えられません。しかし、ヨーロッパが全世界を統一できないことや、たとえできても災難となるか、帝国となるかのいずれかであることも明らかです。

帝国になった場合、帝国を止めるのは別の帝国です。それは力関係や、おそらく非常に厳しい対立を意味しますが、境界が存在することが想像できますか。ところが、境界という観念は絶えず再定義を繰り返します。境界はとても流動的であり、団結、超国家的団結、輸送体としての団結、新しいあり方となり得ます。

しかし、ヨーロッパの経験は非常に浅いのです。経験は50年、政治的野心に関してはおそらく15年か20年程度でしょう。それは非常に浅くもろい経験です。

【クリストファーセン】1989年からです。

【ボザルスラン】1989年。ということは17年です。

1989年、そこから最後の質問に移ります。1989年に、ヨーロッパの拡大に東ヨーロッパ諸国もいつ

か含まれると誰が考えたでしょうか。1989年、私はポーランドでクーデターが起こるのではないかと大変恐れていました。皆さんに申し上げますが、グラスノスチ(情報公開)の全過程が停止するのではないかと恐れていました。モスクワで激しい逆行が起こりそうで、私は恐れていたのです。

今日、私たちはまったく異なる力関係の中にあります。しかし、それはどういう意味でしょう。東ヨーロッパはどんな意味をもつのでしょうか。東ヨーロッパという概念をそれほど容易に使うべきでしょうか。例えば60年か、70年前、定かではありませんが、こうした国々の多くは、ヨーロッパ諸国と見なされていたため…

【クリストファーセン】中央ヨーロッパです。

【ボザルスラン】中央ヨーロッパ諸国、あるいは、それが東ヨーロッパだったとして、東ヨーロッパという概念は政治的ではなく単に地理的國家を指していました。ポーランドはフランスに大変近かったのですが、ちなみにフランスは正教国ではなく、カトリック国です。チェコが存在するようになったのは、確か…

【クリストファーセン】1980年です。

【ボザルスラン】そうです。チェコスロバキアのうちチェコはカトリックで、オーストリアとあまり違いませんでした。その歴史は次々と明らかになってきています。歴史はみんなに一斉に与えられるのではありません。ヨーロッパで最強の正教国はギリシアで、西ヨーロッパにあり、少なくとも50年間は西ヨーロッパの一部です。そのため、もちろん私たちにはカテゴリーが必要であり、理想の型が必要であり、カテゴリーなしで世界を読み取ることはできないと言わねばならないのです。しかし、同時に私たちが使っているカテゴリーについてかなり懐疑的であるべきでしょう。そうしたカテゴリーは私たちがつくるもの

で、ある時点では意味があっても、それらを本質化することはできません。

そのことが、今日、私がEUに対して示す意味なのだと思います。私が挙げた価値、そして、ポスト・クリスチャン、民主主義、開かれた社会などと私が言った価値は、ポスト・ムスリム、ポスト・ユダヤ教ですが、キリスト教徒、ユダヤ教徒、ムスリムに受け入れられるものです。

今日、ほとんどすべてのヨーロッパ諸国において、ムスリム出身の代議員、ムスリム出身の市長がいるのはそういうわけです。ムスリム共同体のムスリムメンバーのすべてが、例えば、アル・カーイダのメンバーであるわけではないのです。逆に、様々な姿があります。

それらはキリスト教的価値ではないと思います。宗教的価値ではないのです。宗教後の価値であり、ポストモダンの価値でもあり、ポストモダニズムという意味ではなく、モダニズム(現代主義)の批判により確立された価値です。そして、それらは3つの宗教すべてのメンバーにとって受け入れられるものです。

【司会】4人、質問の手が挙がっておりますので順番にいきたいと思いますが、同時に時間もだいぶなくなってきました。先ほど申し上げましたように、お一人2分以内を目標として守っていただければ、4人発言していただいても10分以内で終わりますので、よろしくお願いします。中田先生、ソーテンドルフ先生、宮沢先生、内田さんの順番にいきたいと思います。では中田先生から。

【中田】簡単な質問です。先ほど森先生から、アメリカに置き換えた場合、アメリカはキリスト教世界ではないというお答えだったと思いますが、今回のテーマは、そもそもキリスト教世界という概念は存在するのか、あるいは存在したのかどうかを、まず確認したいと思います。その辺をクリストファーセン先生と、できればシーゲル先生にお願いしたいと思います。



もし存在したとした場合ですが、先ほどクリストファーセン先生から、中世においては、例えばユダヤ教徒は忍耐される存在であって、ムスリムは敵であるというものとして、キリスト教世界はヒストリカルにあった。現在においてはそうではなくて、それを見直したことによって、キリスト教世界というものを新しく神学的に変えて、現在は異教徒も含めて同じパートナーとしている。そういったものとしてキリスト教世界を再定義するのか、あるいはそもそもキリスト教世界という概念自体を宗教から排除して、そもそもキリスト教世界ではないと見ているのか、どちらなのかをお二人の先生にお聞きしたいと思います。

【司会】では、ソーテンドルフ先生、お願いします。

【ソーテンドルフ】ヨーロッパの自己理解と一神教というテーマの終盤に入り、私たちが議論してきたすべてに関わることですから、それほど短い時間で話すことは非常に難しいです。そこで、私は2、3点、別々のことを言いたいと思います。毎日、騒乱があり、発展があります。その通りです。例えば、レバノン危機において、7月以前、7月中、7月以降、反ユダヤ主義が見られるかどうか、私たちにはわかりませんでした。そして、境界線ですが、私は知りません。そして、私たちが知らないという事実と、私たちが受け入れなければならないという事実を認識することが重要です。しかし、1つははっきりしていることは、ヨーロッパ全体、またヨーロッパ域外にも国際的な危機が存在するということです。いかに気候変動に対処するか、南北それぞれの国々が補助金に抑圧を受けることなく自由貿易を進めるための方法は何か、各国のアイデンティティのもと安らぎを感じると同時に、地球市民に成長していくにはどうしたらよいか。知識が国境を越えることを阻止できません。知識は流れる水と同じなのですから。

さて、一神教から外へ目を向けます。1992年リオデジャネイロで行われた大規模な環境会議で、

気候変動の全容が明らかにされましたが、私はそこで言われたことを常に忘れないようにします。彼らが政治家の立場から私たちに言ったことは、次の通りです。「精神や宗教に関することで心を動かされる皆さん、もし、私たち人間と私たちの地球を守りたいのなら、私たちのような国家のメンバーを励まし続けて、たとえ国の利益と矛盾しても本質に関わる対策をとるように促してください」と。これは今日もなお私たちへの課題です。

そして、私は言いたいのですが、私の出身国、私の出身ユダヤ教徒コミュニティに、ちょうど先週オランダ女王がリベラル・ユダヤ教75周年祝典のために訪れました。過去40年の間に、私たちはたった30世帯から4000人までに成長しました。それは小さな奇跡です。そして、オランダ女王とオランダはそのことを認識するようになったのです。

私の出身国では、ユダヤ教への改宗を希望する人が非常に大勢います。あなたたちには想像できないでしょうが、私たちは彼らを受け入れることができません。そして、私たちは世界中の改宗を信じていません。しかし、それはどういう意味があるのでしょうか。

ここで、基本概念の話にして終わりたいと思います。ユダヤ教に関して、私たちはディアスポラについて述べ、亡命について述べ、それは本当です。ディアスポラに関しては、どの国でも私たちは積極的な同化を試みてきました。同化には消極的な同化と積極的な同化があります。そして、このことを私はムスリムの兄弟や姉妹たちにも言います。その点について、イスラエルがあり、イスラエルに行きたい人は誰でも行けるので、ある意味でディアスポラは終わったのだと私たちは知っています。

しかし、まだ亡命という概念もあります。そして、亡命の概念は私たち全員に、現代的な信仰と宗教、それらを超えたものについて語ります。人間が特権を与えられていない、自由でない、生きることができない亡命、そうした亡命は改善し、私たちのあらゆる

一神教の理念とそれを超えたものの中で解決しなければなりません。私たちは平和と正義の救い主の時という概念をもたなければなりません。

気候変動に触発されて私たちはこう言えるようになります。「もし、平和と正義を共有していると感じられないなら、私たちはそこに存在していないのかもしれない。だから、緊急を要することだ」と。一方の端には騒乱、不安、恐れがあり、反対側には希望と共通の目的があります。

【司会】では、宮沢先生、お願いします。

【宮澤】テーマが、ヨーロッパはなおなぜキリスト教なのかということですが、日本の高等学校でヨーロッパを教えるために、ヘブライズムとヘレニズムという二つのHということをよく言います。今日の論議の中では、確かにキリスト教ということではありますが、ヘレニズムというのがほとんどヨーロッパ理解の中に出てきていなかったと思います。たまたま、ある仏教学者の本で、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの三教は聖なる憎悪、つまり憎悪の宗教であると。その中で、キリスト教はルネッサンスによってヘブライズムの精神を再生することができた。そのことによって、キリスト教自体が再生できたし、憎悪というものをコントロールできるようになったと言っております。

今、このヘレニズムの再生ということで発言するようになったのですが、この仏教学者は、仏教徒は寛容であるために、三教に対して批判してこなかった。しかし自分はあえて鬼になって、この三教がいかに憎悪の宗教であったかということを批判した。そしてその三教が話し合っても、相手の欠点に対して寛容になるという程度であって、真の寛容は生み出せないのではないかと。私は鬼になって批判したけれども、三教がよってたかって私を批判してくれることによって、さらに上昇するのではないかと考えておられるのですが、ヘレニズムについて、先生がたはヨーロッパと結びつけてどうお考えになるかということをお

訊ねします。また、森先生に、こういう挑戦的な仏教学者を、こういう会にお招きしてお話を伺う機会も作っていただけたらと、ふと思いました。

【司会】では、内田さん、よろしくお願いします。

【内田】これまで私たちが話し合ってきた国家並列社会と断片化アイデンティティについて、簡単にコメントします。昨日から私たちが議論している通り、人にはたくさんのアイデンティティがあります。一人の人が同時にムスリムで、ヨーロッパ人で、環境保護活動家であることは可能で、特に、今日のヨーロッパの人々を見ると、そのように複数のアイデンティティをもっている人は大勢います。それでも、私は聞きたいのですが、そうした状況で彼らの忠誠とはどういうものでしょうか。

昨日、ラマダーン先生は、そうしたアイデンティティが衝突したとき、その人は自分の良心、自分にとって公正なことに従うものだとおっしゃいましたが、公正であることがそれほど明快であることはそう多くないと思います。そのとき何をするのでしょうか。特に、ラマダーン先生のような人であれば、善悪の区別がはっきり分かりますと思いますが、多くの、おそらく異論があると思いますが、多くの普通の人々はそのような考え方はできず、日々の生活に没頭するだけでしょう。

特に、例えば米国と比較してみると、アメリカ人にとって忠誠とは、同様にたくさんのアイデンティティをもっている、第一の忠誠はアメリカのためにアメリカ人であることです。彼らにとって愛国心が第一です。しかし、ヨーロッパ人にとって、この忠誠という問題は、自分の立場をまずヨーロッパ人とするか、フランス人とするかのように、どこか扱いにくい問題だと思います。また、ムスリムのように、先ほどラビがおっしゃったように、一部には同化もあることがわかりますが、最近では自分たちの文化や慣習を受入国で主張するムスリムや他の民族が大勢います。



ですから、私は先ほどの質問について、皆さんからコメントがあれば、議論したいと思います。ありがとうございました。

【司会】今4名のかたからいただきました質問に対して、再びお二人のかたに短く答えていただきたいと思います。それではまず、クリストファーセン先生。

【クリストファーセン】はい。参考になる質問をいただき、ありがとうございます。まず、宮澤先生の質問に答えたいと思います。

昨日の私の発表の初めに、ヨーロッパの概念はギリシアの合理性、ローマ体制、キリスト教の福音の集約と見なすことができると言いました。それがヨーロッパの概念に対する歴史的見方かもしれません。ルネッサンスは、そのうちのギリシア的要素が再び導入された時期で、私が思うには、それ以来、ギリシア的要素は常に現場にあり、特にフランスの視点で言うと、フランス哲学に存在し、すべての生徒が学校で学んでいます。他のヨーロッパ人はフランス人と同じ哲学の経験と知識を備えたいと願っています。ギリシア的観念、ギリシア作品、ギリシア物語も、ご存知のようにシェイクスピアの伝統に入っています。ギリシア哲学がヨーロッパ的思想の一部を成していることは疑いの余地がありません。

もう1つの問題は、ヨーロッパの概念がひとつの宗教的観念やアイデンティティ、すなわち、キリスト教、ユダヤ教、イスラームといった一神教の伝統を越えて、ギリシャ哲学または合理性とローマ体制の結合へ回帰するべきかという問題かと思います。そうした提案を、宗教後の観念に基づくヨーロッパという観念と組み合わせることも可能で、その観念は、残りの宗教および信心深い人々が受け入れられる考え方です。

しかし、その提案によれば、宗教は私的領域だけではなく、各個人の内面に対しても私生活中心主義になります。それは1つの解決法で、ヨーロッパで

は非常に鮮烈な解決法で、常に提案され、フランスの体験と組み合わせられることが非常に多いです。宗教を越えてギリシャ・ローマ結合に戻るという観念を、宗教の個別化、個人化という観念と組み合わせることが正しいかどうか分かりませんが、将来に向けた可能な解決策の1つではないかと思います。

中田先生、私の聞いた内容では、あなたのご質問の中で、また、あなたの最後のご質問の中で、次のように問いかけ、逆の解決策を提案なさいました。「しかし、ムスリム世界があるように、キリスト教世界のようなものはないのだろうか」とおっしゃったように思います。

答えはノーで、私はキリスト教世界のようなものはないと思いますし、また、ムスリム世界のようなものもないと思います。ウンマが存在することは知っていますし、キリスト教がユダヤ教と同様に国際的な宗教であることや、仏教も世界的な宗教であることも知っています。また、こうした宗教が別の宗教に影響力をもっていることも知っていますが、現在のウンマとアラビア諸国の1対1の組み合わせを何とかして解きほぐし、結束を解かなければならないと考えます。

あなたは、このようにウンマとアラビア諸国の1対1結合を解くという提案を個人として述べているのだと思います。つまり、私の理解が正しければ、あなたは日本に住むムスリムであり、そのウンマを代表しているのであって、あなたの言うムスリム世界にいるわけではありません。ムスリムのアイデンティティはありますが、それを世界の様々な領域、宗教、国々と組み合わせなければなりません。

文明の衝突というディスコースは、ムスリム世界とキリスト教世界の衝突は、アラブ世界とキリスト教西洋を結合させたウンマという概念に基づいています。それはもちろん、様々な宗教が独自に統治を行う領域を特定しようとする解決策であり、私はそのような解決策を信じていません。

もう1つの解決策は、人々が受け入れるかどうか

に関わらず、複数の宗教を世界の諸概念の一部と見なさないこと、宗教を政治、法の一部と見なさないこと、宗教を個人の私的生活の何らかの制限の中に抑えることというものです。それは、異なる宗教で世界を分割するという提案に沿った別の解決策です。しかしながら、私はその解決策にも賛成できません。危険な考え方だと思うだけです。私は基本的にこの考えは危険だと思います。それは、ムスリム世界やキリスト教世界の他の考え方が危険だと思うのと同じです。

私が必要だと思うことは、宗教がいかに社会に貢献するかを話し合う開かれた議論を行うことです。そして、内田さん、あなたの発言の中にもその考え方をお聞きして、私は大変うれしく思いました。あなたは第一の忠誠についておたずねになりました。宗教が第一の忠誠であるとする、それは危険なことかもしれない私たちは知っています。しかしながら、逆に、法と政治しかなくて、道徳や宗教論議がなくても、それも危険です。そして、私たちは人間が本質的に信心深いものだと思っています。メルボルン大学のキャロリン・エヴァンス教授が最近、『入り混じった恩恵』という大変興味深い本を出版し、その中で次のように東南アジアの女性の実態を分析しています。宗教と法は2大規範システムであるが、東南アジアなど世界の諸地域では男女ともに宗教的かつ法的局面の中で暮らし、規範に依存しているが、両方の局面からの圧力も際立っていると書かれています。

両方から恩恵を受けなければならないので、混じることはしないが、公共広場、公共の場では自由にお互いに話し合うことができるという絡み合いの概念を提案するのは、そういうわけです。私生活中心主義ではなく、公共化を提案したいと思います。

ソーテンドルフ先生、もし正しくなければ、あなたの考えを考慮に入れないのですが、あなたは次のようなことをおっしゃったのだと思います。「私たちは宗教を受け入れられるようにするだけではなく、宗

教的規範や感情や観念から刺激を受けなければならない。そして、その刺激を世界中の亡命者に活用して、より良い世界を実現しなければならない」。

【ボザルスラン】私には1分も残っていないようです。いいえ、私は宗教を私的な領域に封じ込めることに賛成したことはありません。逆に、宗教とは、その宗教の信者がそう決定したのなら、公に認知され、共同体主義の形態をとるべきものだと考えます。そういう理由から、イスラーム政党が社会的契約を受諾するという条件で、イスラーム政党の合法化を強く支持します。

2番目の質問ですが、アメリカの例で重要な点は、私がアメリカについて正しく理解していればの話ですが、この国には強い政治的文化があるということです。今日のヨーロッパに強い政治的文化があるとは思いません。おそらく、生き方、存在のあり方はあります。広い世俗化とは、ヨーロッパが政治文化、強い政治文化をもつという意味でしょうか。私にはまだ分かりません。そして、忠誠の問題です。現在、主な忠誠の対象は依然として国家です。

ヨーロッパに外務大臣職と本当の軍隊ができる日、国家に対する忠誠とヨーロッパに対する忠誠との衝突という問題が起こるでしょうが、ヨーロッパ市民がどんな答えを出すのか私には分かりません。しかし、その問題はある時点で出てくるでしょう。

亡命問題が非常に重要な問題であるという点で、ソーテンドルフ先生、私はあなたに同意します。私たちのうち、ますます多くの人々がベンヤミンやハンナ・アーレントが書いたようなパリアの状況で暮らすことになると思います。

最後の質問は、もちろんヘレニズムです。3つの宗教において、ヘレニズムには役割があります。キリスト教とユダヤ教における役割は皆さんご存知の通りです。イスラームにおいては、ムスリム哲学者たちがヘレニズムの出典を広く使ったことが知られています。

これ以外の憎悪と平和の問題に関して、3つの



一神教は非常に暴力的であると同時に大変平和的だと思います。すべては、そのテキストを誰が、どのように、なぜ読むのか次第です。

ビン・ラーディンがジハードは戦争であり、彼は「戦争の家」を破壊すると言うとき、それはある程度までは間違っていない。それはイスラームの中での話です。クルアーンの中での話です。

別のイマーム(導師)によれば、イスラームは平和の宗教で、宗教にはなんら制約はないということです。彼も正しいです。問題は、そのテキストには自律性がないことです。脈絡の外でテキストを理解することはできません。脈絡次第で、あなたはその中に憎悪を見つけることもあるし、平和と愛を見つけることもあるでしょう。

【司会】ありがとうございました。中田先生、シーゲル先生への質問ではなくて・・・。

【中田】いえ、キリスト教世界がそもそもあるのかということと、現在もヨーロッパがキリスト教世界であるかということに対して、カトリックの立場からの答えを聞きたいということです。

【司会】では、今の質問に対して、シーゲル先生、ごく短くお願いします。

【シーゲル】短い返事ができる質問ではありませんが、できるだけ試みます。返事がしにくい理由は、質問が何を意味しているかが少しあいまいだということです。キリスト教とは何かということをもまず考えなければなりませんね。

【司会】中田先生、カトリックということに限定していいですか。

【中田】はい。

【クリストファーセン】もし、質問がキリスト教は存在するかということでしたら、もちろん、キリスト教は存在します。質問を「何かキリスト教世界のようなものはあるか」と訳せば、それは別の話になります。

【シーゲル】では、「何かキリスト教世界のようなものがあるか」という質問でよろしいですか。それでも、あなたがキリスト教という言葉で何を意味するか、キリスト教的という形容詞が何に言及するかによって違ってきます。キリストが教えた精神を本当に反映する世界があるのかと尋ねたいのであれば、それは議論ができます。もし、「キリスト教世界」というフレーズで意図することがそれだとすれば、ヨーロッパがかつてキリスト教的であったかどうかを議論することができます。

それは議論する価値のあるポイントだと思います。なぜなら、キリスト教の特徴の1つとして、キリスト教は最初から、それが生まれた風土には存在したことがないからです。キリスト教はユダの農山村風土、正確にはガリラヤで始まりました。しかし、ペンテコステの日から、キリスト教に入信した最初の人々は、ディアスポラ出身のユダヤ人でした。この結果、キリスト教は農山村部から都会へ急速に移りました。それから文化変容を何度も繰り返し、多様な形態をとってきました。キリストが再びこの世にやって来たら、それだと認識できるでしょうか。どうでしょうか。

英語では、「The Christian World(キリスト教世界)」という表現は、キリスト教に属している人々のことを意味することがあります。その意味では、確かにそれは存在します。私はキリスト教世界の一部です。しかし、私がいかにキリスト教的かというのは別の問題です。これは、英語がそのようになり柔軟であるためです。しかし、キリスト教と結びつけることのできる特定文化や特定社会があり得るかどうか、それは実にあいまいな質問だと思います。そして、ヨーロッパはかつてキリスト教的であったことがあるかと尋ねるのはもっともかと思っています。私

は実はこのことを森先生に尋ねるつもりでした。なぜなら、先生が「ヨーロッパは依然としてキリスト教の地なのか」という質問を提起したからです。先生は、アメリカとヨーロッパの両方について、答えは「ノー」だと言いました。そこで私から、「それはかつてキリスト教的であったか」と先生に尋ねるとします。私が思うに、もちろん「ノー」がふさわしい答えです。また、今日私たちが本当に探さなければならないこと、今日のキリスト教に求められることは、キリスト教的アイデンティティをもつこととはまったく別の何かだと思っています。このアイデンティティ観については疑問を感じます。なぜならば、私たちが本当に必要なものは、私たちを全人類と一体化する1つのアイデンティティだと思うからです。キリスト教(そして、おそらく他のあらゆる宗教)が私たちにもたらすとされるものは、自分を他人と区別する独自性のような感覚ではなく、全人類との一体感だと思います。

それはつまり、キリスト教世界はあり得ないという感覚があることを意味すると思います。キリスト教世界がそれ自体をキリスト教的と定義し、他のすべての世界から区別される独特のアイデンティティを与えているとすれば、私たちは自分たちの共通アイデンティティを発見するのではなく、他人と比べた自分たちの違いを定義しているようなのだと思います。それは、キリストが意図したものに相応しいアイデンティティではないと思います。

【司会】ありがとうございました。

それでは時間がきましたので、これで第4セッションを終わりたいと思います。十分なまとめはできませんでしたが、さまざまな論点が出てきて、今後我々がどういうことを課題として、取り組みを継続していくべきかが見えてきたのではないかと思います。

それでは、これまでの2日間にわたるワークショップ全体を締めくくるメッセージを森先生からいただきたいと思います。

【森】2日間にわたって、非常に深い、そして意味のあるディスカッションができたと思います。特にヨーロッパから参加してくださいました4人の先生に心からお礼を申し上げたいと思います。

今、お話しするチャンスを与えてくださったので、まとめとして、今日の最終セッションの議論についての私の最終的な印象を語れということだと思っています。やはり一番心に残ったことは、ヨーロッパというアイデンティティと、Abrahmic Religions(中東生まれの三つの一神教)の関係だと思っています。

今日の話の中で、ヨーロッパのアイデンティティは非常に複雑で難しいということはよく分かりました。それがナショナル・アイデンティティであるのか、あるいは宗教的アイデンティティであるのか、あるいはEUアイデンティティであるのかは複雑に絡んでいますけれども、人類としてのアイデンティティやコスモポリタンとしてのアイデンティティは、ちょっと横へ置いておかなければいけないと思います。

我々は、やはり政治単位としてのNationを考えるのか、あるいはEUを考えるのか。そこでのアイデンティティはどうか。そしてNation Stateとしてのアイデンティティを超えて、EUというユニバーサルなアイデンティティを考えようと思うと、EUはボザルスラン先生がおっしゃった「理念の共和国」(Republic of Ideas)でしかないと思うのです。問題は、この理念をどういうふうに表示するかだと思います。これが結局、Abrahmic Religionsとの関係でいうと、キリスト教の用語で表現するのか、それともAbrahmic Religionsとしての用語で表現するのかということです。市川先生が指摘されたように、やはりシャルル・マーニュのヨーロッパが原型だと私は思います。それはキリスト教世界でした。しかし、今日なおキリスト教的用語で表現するのが適切なのかどうかという問題だと思います。これは世俗化の問題も含まれているわけです。

ボザルスラン先生がおっしゃるように、Post-Christian、Post-Islamということになると、それで

はそれはどういう表現になるのか。そのときはもう、宗教的表現は必要ではないのかという問題までいくのではないか。アメリカの場合はどうか。私が Christian Nation、Christian Worldではないと言ったのはそういう意味です。キリスト教的用語でアイデンティティを表現することは、今のアメリカには適切ではない。だから、キリストという言葉が大統領は使わない。しかしGodという言葉は使う。どうしてかというと、Godという言葉は、アメリカの人口の90%の人々がそれを受け入れられる、最大公約数的な、最も適切な表現だからです。

そういうものがヨーロッパの中にあるのか。ヨーロッパでは、それがやはり宗教的な表現を採らないほうがいいのか。これは何も理論の問題なのでは

なくて、一般民衆、世論がそれをどういうふうに受け止めるかということです。いちばん適切な表現は、どういう表現になるのかという問いを、我々は突きつけられているのではないかと思います。

課題はたくさん残ったと思いますが、非常に充実した国際ワークショップを持つことができました。改めて、特に4人の先生がたにもう一度、拍手を送りたいと思います(拍手)。

【司会】改めて、2日間通訳にかかわってくださった通訳の皆さんにも拍手をして終わりたいと思います(拍手)。

では、2日間、どうもありがとうございました。これで全プログラムを終わりたいと思います。

2006年度
事業推進担当者一覧

氏 名	所 属	専門分野
森 孝一(センター長)	同志社大学大学院神学研究科教授	アメリカ宗教史
小原 克博(幹事)	同志社大学大学院神学研究科教授	キリスト教思想
石川 立	同志社大学大学院神学研究科教授	新約聖書学
越後屋 朗	同志社大学大学院神学研究科教授	ヘブライ語聖書学
中田 考(幹事)	同志社大学大学院神学研究科教授	イスラーム政治思想
四戸 潤弥	同志社大学大学院神学研究科教授	イスラーム法
富田 健次	同志社大学大学院神学研究科教授	現代イラン研究
アダ・タガー・コヘン	同志社大学大学院神学研究科助教授	ユダヤ教研究
サミール・ヌーハ	同志社大学大学院神学研究科教授	比較文化研究
手島 勲矢	同志社大学大学院神学研究科教授	聖書学・ユダヤ思想
中山 善樹	同志社大学大学院文学研究科 (哲学および哲学史専攻)教授	西洋古代中世哲学
村田 晃嗣(幹事)	同志社大学大学院法学研究科(政治学専攻)教授	国際関係論
山本 雅昭	同志社大学言語文化教育研究センター教授	ユダヤ文学
細谷 正宏	同志社大学大学院アメリカ研究科 (アメリカ研究専攻)教授	安全保障論
バーバラ・ブラウン・ジクムンド	研究開発推進機構客員フェロー (Visiting LCI Institute Scholar, Catholic University of America)	アメリカ宗教史
臼杵 陽	研究開発推進機構客員フェロー (日本女子大学文学部教授)	パレスチナ／イスラエルを中心とする中東地域研究
三浦 伸夫	研究開発推進機構客員フェロー (神戸大学国際文化学部教授)	科学史
田原 牧	研究開発推進機構客員フェロー (東京新聞特報部記者)	中東地域研究
松永 泰行	研究開発推進機構客員フェロー	現代イスラーム政治論
ミシェル・モール	研究開発推進機構客員フェロー (同志社大学言語文化教育研究センター嘱託講師)	近世近代宗教思想史
オスマン・バカル	研究開発推進機構客員フェロー (マレーシア国際イスラーム大学啓示人文学部教授)	イスラーム科学史・宗教間対話

※所属・役職は2007年3月末現在

2006年度

部門研究1「一神教の再考と文明の対話」研究会 共同研究員一覧

氏 名	所 属	専門分野
芦名 定道	京都大学大学院文学研究科助教授	キリスト教学
檜垣 樹理	足利工業大学共通課程助教授	フランス宗教思想文学 ・宗教間対話
市川 裕	東京大学大学院人文社会系研究科教授	宗教史学・ユダヤ教
鎌田 繁	東京大学東洋文化研究所教授	イスラーム思想
菅野 賢治	東京都立大学人文学部助教授	フランス文学 ・反ユダヤ主義史
加藤 隆	千葉大学文学部教授	新約聖書学
勝又 悦子	同志社大学神学部嘱託講師	ユダヤ学
金 承哲	金城学院大学人間科学部教授	組織神学・宗教間対話
小林 春夫	東京学芸大学教育学部助教授	イスラーム哲学
栗林 輝夫	関西学院大学法学部教授	組織神学
中村明日香	在イラン日本国大使館専門調査員	イラン地域研究
中村 信博	同志社女子大学学芸学部教授	宗教学・旧約聖書学
中沢 新一	多摩美術大学美術学部教授	宗教学
奥田 敦	慶応義塾大学総合政策学部教授	イスラーム法
澤井 義次	天理大学人間学部教授	宗教学・インド学
塩尻 和子	筑波大学大学院人文社会科学研究科教授	イスラーム思想
マイケル・シーゲル	南山大学社会倫理研究所第一種研究所員	宣教学・キリスト教社会倫理 ・平和研究
東長 靖	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授	ユダヤ思想・イスラーム思想 ・スーフィズム
鳥巢 義文	南山大学人文学部教授	組織神学
月本 昭男	立教大学文学部教授	ヘブライ語聖書学
網島 郁子		マレーシア地域研究

※所属・役職は2007年3月末現在 アルファベット順

2006年度

部門研究2「アメリカのグローバル戦略と一神教世界」研究会 共同研究員一覧

氏 名	所 属	専門分野
会田 弘継	共同通信社編集委員室編集委員	米国政治・思想
伊奈 久喜	日本経済新聞論説委員	国際関係・外交政策
石川 卓	東洋英和女学院大学国際社会学部助教授	国際政治学・安全保障論
北澤 義之	京都産業大学外国語学部教授	国際関係・中東地域研究
李 愛俐娥	京都外国語大学非常勤講師	中央アジアの少数民族問題
見市 建	在シンガポール日本国大使館専門調査員	政治学・インドネシア
宮坂 直史	防衛大学校国際関係学科助教授	国際政治学
村山 裕三	同志社大学ビジネス研究科教授	経済安全保障
中村 寛	神戸大学国際文化学部助教授	国際政治・サウジアラビア
中西 寛	京都大学大学院法学研究科教授	国際政治学
中山 俊宏	津田塾大学学芸学部助教授	アメリカ政治・外交
小川 忠	国際交流基金企画部企画課長	国際文化交流政策・ 現代アジア文化
エルモスタファ・レズラーズィ	アジア・アラブ・メディア・ネットワーク東京代表	国際政治・国際問題
アフターブ・セット	慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所所長	国際関係論
内田 優香	民主党国際局主査	米国の対中東政策
山口 昇	陸上自衛隊研究本部 研究本部長（陸将）	安全保障問題

※所属・役職は2007年3月末現在 アルファベット順

2006年度

部門研究3「日本宗教から一神教への提言」研究会

共同研究員一覧

氏 名	所 属	専門分野
安藤 礼二	多摩美術大学美術学部助教授	文芸批評家
川瀬 貴也	京都府立大学文学部准教授	日韓近代宗教史
三宅 威仁	同志社大学大学院神学研究科助教授	宗教社会学・宗教哲学
岡村 康夫	山口大学教育学部教授	宗教学
マルティン・レップ	龍谷大学文学部教授	宗教学
ポール・スワンソン	南山宗教文化研究所所長	仏教学・宗教学
高田 信良	龍谷大学文学部教授	宗教学・宗教哲学、(仏教・真宗における)宗教の教学
徳永 道雄	京都女子大学文学部教授	仏教学・真宗学

※所属・役職は2007年3月末現在 アルファベット順

2006年度 特定研究プロジェクト共同研究員一覧

特定研究プロジェクト1「ヨーロッパにおける宗教政策の研究」

氏 名	所 属	専門分野
ドロン・コヘン	同志社大学大学院神学研究科博士後期課程	ユダヤ教の視点から見た日本のキリスト教
檜垣 樹理	足利工業大学共通課程助教授	フランス宗教思想文学・宗教間対話
石川 立	同志社大学大学院神学研究科教授	新約聖書学
小原 克博	同志社大学大学院神学研究科教授	キリスト教思想
水谷 誠	同志社大学大学院神学研究科教授	組織神学
ミシェル・モール	同志社大学言語文化教育研究センター嘱託講師	近世近代宗教思想史
山本 雅昭	同志社大学言語文化教育研究センター教授	ユダヤ文学
横田 徹	同志社大学大学院神学研究科博士後期課程	聖書学

※所属・役職は2006年3月末現在 アルファベット順

2006年度 特定研究プロジェクト共同研究員一覧

特定研究プロジェクト2「イラン・イスラーム体制における西欧理解」

氏 名	所 属	専門分野
加賀谷 寛	大阪外国語大学名誉教授	現代イラン研究
松永 泰行	同志社大学研究開発推進機構客員フェロー	現代イスラーム政治論
中村明日香	在イラン日本国大使館専門調査員	イラン地域研究
中田 考	同志社大学大学院神学研究科教授	イスラーム政治思想
サミール・ヌーハ	同志社大学大学院神学研究科教授	比較文化研究
嶋本 隆光	大阪外国語大学日本語日本文化教育センター教授	イスラーム思想
富田 健次	同志社大学大学院神学研究科教授	現代イラン研究
吉村慎太郎	広島大学大学院総合科学研究科助教授	イラン現代史・中東国際関係

※所属・役職は2007年3月末現在 アルファベット順

2006年度 特定研究プロジェクト共同研究員一覧

特定研究プロジェクト3「一神教における科学と近代化」

氏 名	所 属	専門分野
小原 克博	同志社大学大学院神学研究科教授	キリスト教思想
三浦 伸夫	神戸大学国際文化学部教授	科学史

※所属・役職は2007年3月末現在 アルファベット順

2006年度 特定研究プロジェクト共同研究員一覧

特定研究プロジェクト4「中東の教科書における非イスラーム宗教のイメージとその意味」

氏 名	所 属	専門分野
中田 考	同志社大学大学院神学研究科教授	イスラーム政治思想
サミール・ヌーハ	同志社大学大学院神学研究科教授	比較文化研究
エルモスタファ・レズラズィ	アジア・アラブ・メディア・ネットワーク東京・代表	国際政治・国際問題

※所属・役職は2007年3月末現在 アルファベット順

2006年度 特定研究プロジェクト共同研究員一覧

特定研究プロジェクト5「イスラームにおける他宗教との共存―伝統と現代への対応」

氏 名	所 属	専門分野
中田 考	同志社大学大学院神学研究科教授	イスラーム政治思想
下村佳州紀	元・在シリア日本国大使館専門調査員	中東地域研究・イスラーム学
四戸 潤弥	同志社大学大学院神学研究科教授	イスラーム法

※所属・役職は2007年3月末現在 アルファベット順

2006年度 特定研究プロジェクト共同研究員一覧

特定研究プロジェクト6「ヨーロッパの史的展開とイスラーム」

氏 名	所 属	専門分野
ダニシマズ・イディリス	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程	イスラーム神秘主義思想 (スーフィズム)
今松 泰	同志社大学神学部嘱託講師	オスマン帝国史
中田 考	同志社大学大学院神学研究科教授	イスラーム政治思想
澤江 史子	国立民族学博物館外来研究員	現代トルコ政治・ イスラーム地域研究
菅瀬 晶子	総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員	文化人類学・ 西アジア地域研究

※所属・役職は2007年3月末現在 アルファベット順

同志社大学21世紀COEプログラム

一神教の学際的研究

文明の共存と安全保障の視点から

2006年度CISMOR国際ワークショップ

「『ヨーロッパ』という自己理解と一神教」

2007年8月31日発行

発行所：同志社大学一神教学際研究センター

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL:075-251-3972 FAX:075-251-3092

e-mail:info@cismor.jp

印刷所：株式会社 図書印刷 同朋舎

〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町2